

# 上信越自動車道関係発掘調査報告書 XIX

## 下馬場遺跡・細田遺跡

2005

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 上信越自動車道関係発掘調査報告書 XIX

しもばば ほそだ  
下馬場遺跡・細田遺跡

2005

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

上信越自動車道は、首都圏と上越地方を結ぶ幹線道路として、群馬県藤岡インターチェンジから分岐し、長野県を経て新潟県上越市に至る全長203kmの高速自動車国道です。この路線は関越・磐越自動車道と並び、日本海側と太平洋側を結ぶ大動脈として、沿線地域の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

新潟県教育委員会は、昭和63年度から建設用地内の埋蔵文化財について調査を開始し、平成9年度には中郷インターチェンジへ上越ジャンクション間の発掘調査を終え、県内の現地発掘作業を終了しました。

本書は平成9年度に行った下馬場遺跡・細田遺跡の発掘調査報告書です。下馬場遺跡は弥生時代後期から終末期にかけての集落跡です。竪穴建物跡が14軒確認され、内部から弥生土器・石器などが出土しました。また、管玉などの玉作りに関係した遺物も出土しており、県内の弥生時代後期の玉作りの状況を知る貴重な資料となりました。細田遺跡では、主に弥生時代終末から古墳時代、奈良・平安時代の遺物が多く発見されました。また、少量ではありますが麗文時代や中世・近世の遺物も出土しており、長い期間にわたる遺跡周辺の土地利用の痕跡が明らかになりました。

今回の調査成果が、歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助を賜った上越市教育委員会、並びに地元の方々をはじめ、日本道路公団新潟建設局（現日本道路公団北陸支社）・同上越工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成17年8月

新潟県教育委員会

教育長 武藤 克己

## 例　　言

- 1 本報告書は、新潟県上越市大字下馬場字舗山836ほかに所在する下馬場遺跡と同市大字黒田字細田305番地1ほかに所在する細田遺跡の発掘調査記録である。
- 2 両遺跡の調査は上信越自動車道の建設に伴い、日本道路公团から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、発掘調査は調査主体である県教委が財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に委託し、実施した。下馬場遺跡は平成9年4月23日～11月14日、細田遺跡は平成9年4月14日～8月26日の期間で二次調査を実施した。
- 3 出土遺物および調査に関する各種資料は、一括して県教委が保管・管理している。
- 4 遺物の注記は、遺跡の略記号・出土地点・層位を統けて記した。註記の略記号は下馬場遺跡は「下パパ」、細田遺跡は「ホソダ」と記している。
- 5 遺物番号は下馬場遺跡では土器と石器・石製品・鉄製品の別にそれぞれ通し番号を付している。細田遺跡では、遺物の種別に関係なく通し番号を付した。本文・観察表・図版の番号はすべて一致している。
- 7 引用文献は著者および発行年（西暦）を中心に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第V章2下馬場遺跡の樹種同定と3細田遺跡の樹種同定については各節末に記した。
- 8 調査成果の一部は現地説明会・埋文事業団年報等で公表されているが、本報告書の記述をもって正式報告とする。
- 9 本報告書の作成にあたり、自然科学分析は以下の機関に委託した。
  - 1 下馬場遺跡出土炭化材の年代測定　　株式会社加速器分析研究所
  - 2 下馬場遺跡出土炭化材の樹種同定　　パリノサーヴェイ株式会社
  - 3 細田遺跡出土木製品の樹種同定　　株式会社古環境研究所
- 10 造構図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託して編集を行った。なお、図版作成・編集に係り、委託業者に支給した資料は以下のとおり。写真類はすべてデジタルデータを使用し、造構写真是ポジフィルムからデジタルデータ（フォトCD）化し、遺物写真是デジタルカメラ（ニコンD100）で撮影した。

本文・挿図：テキスト形式〔文字〕・Excel型式〔表〕、トレース原図、張り込み版下  
造構図面図版：原図（修正済）・仮レイアウト図・文字データ  
遺物写真図版：トレース図（個別）・拓影・仮レイアウト図  
写真図版：デジタルデータ（CD・MO）・仮レイアウト図
- 11 本報告書の執筆・編集は尾崎高宏（埋文事業団 班長）が担当した。ただし、第II章は県教委既刊報告書〔小池2000；山崎2004〕を改変して掲載した。また、細田遺跡出土墨書き土器の赤外線写真撮影と文字の判読は田中一穂（埋文事業団嘱託員）が行った。
- 12 発掘調査から本報告書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。

相田泰臣　赤澤徳明　甘粕健　伊藤秀和　小熊博史　金子拓男　小島幸雄  
笠澤正史　上越市教育委員会　閑雅之　高橋勉　竹之内耕　立木宏明　中野由紀子  
日本道路公团北陸支社　野田豊文　野水光子　橋本博文　秦繁治　馬場伸一郎　廣瀬時習

## 目 次

### 第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	2
A 一次調査	2
B 二次調査	3
3 整 理	4
4 調査体制	4
A 下馬場遺跡	4
B 細田遺跡	5
5 整理体制	5
A 細田遺跡木製品の整理と保存処理	5
B 報告書作成に係る整理作業	5

### 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	6
2 歴史的環境	7
A 縄文時代	7
B 弥生時代	7
C 古墳時代	9
D 古代	9
E 下馬場遺跡・下馬場古窯跡群について	9

### 第Ⅲ章 下馬場遺跡

1 調査の概要	11
A グリッドの設定	11
2 地形と基本層序	11
3 遺 構	12
A 概 要	12
B 遺構の計測・記述方法	12
C 遺構各説	13
1) 積穴建物	13
3) 木炭窯	16
2) 弥生時代の土坑・性格不明遺構・ピット	16
4) 縄文時代の土坑	17
4 遺 物	17
A 遺物の概要と記述の方法	17
B 弥生土器	17
1) 文様・調整・胎土	17
3) 分布状況	26
2) 分 類	19
4) 遺物各説	27
C 縄文・その他の時期の遺物	35

D 弥生時代の石器・石製品	36
1) 石    器	37
3) 石    製    品	43
E 包含層出土石器	44
1) 刃片石器	45
2) 磨    石    類	45
5 自然科学分析	46
A 下馬場遺跡出土炭化材の年代測定	46
B 下馬場遺跡出土炭化材の樹種同定	48
1) はじめに	48
3) 分析方法	48
5) 考    察	49
6 ま    と    め	52
A 出土土器の編年的位置付け	52
B 玉作関連資料について	55
1) 下馬場遺跡の菅玉製作工程	57
C 集落について	61
1) 穴穴建物の構造	61
2) 集落構造の変遷と遺跡の性格	62

## 第IV章 細田遺跡

1 調査の概要	64
A 遺跡の立地と周辺の地形	64
B グリッドの設定	64
2 基本層序	65
3 遺    構	65
A 概    要	65
B 遺構の計測方法と呼称	65
C 遺構各説	65
1) 弥生・古墳時代の遺構	65
3) 中世の遺構	68
2) 古代の遺構	67
4) 時期不明の遺構	68
4 遺    物	69
A 概要と記述の方法	69
B 縄文時代の遺物	69
1) 縄文時代の土器	69
2) 縄文時代の石器	69
C 弥生時代終末期～古墳時代前期の遺物	70
1) 概要と分類	70
2) 各    説	72
D 古墳後期の遺物	74
E 古代の遺物	75
1) 概    要	75
3) 遺物各説	78
2) 分    類	75
F 中・近世の遺物	81
G 木    製    品	82q
5 自然科学分析	83
A 細田遺跡出土木製品の樹種同定	83
1) はじめに	83
3) 方    法	83
5) 所    見	86
2) 試    料	83
4) 結    果	83

6 まとめ	90
A 弥生・古墳時代	90
B 古代	91
《要 約》	92
《引用参考文献》	94
《観察表》	97

### 挿図目次

第1図 上信越自動車道路線図と下馬場遺跡	
細田遺跡の位置	1
第2図 下馬場遺跡・細田遺跡一次調査範囲と トレンチ配置図	2
第3図 高平野原周辺の遺跡	8
第4図 下馬場古窯跡群表採資料	10
【下馬場遺跡】	
第5図 下馬場遺跡グリッド設定図	11
第6図 4D25・4E1付近基本順序	12
第7図 遺構形状の分類と呼称	12
第8図 土器の部位と名称	19
第9図 弥生土器分類図(1)	21
第10図 弥生土器分類図(2)	22
第11図 弥生土器分類図(3)	23
第12図 弥生土器分類図(4)	24
第13図 弥生土器分類図(5)	25
第14図 弥生土器出土量分布	26
第15図 繩文土器重量分布図	36
第16図 4Eグリッド出土鉄滓	44
第17図 下馬場遺跡出土炭化材顕微鏡写真	51
第18図 下馬場遺跡出土土器の変遷図	53
第19図 下馬場遺跡豎穴建物の変遷	56
第20図 管玉製作工程(鉄石英)	58
第21図 管玉製作工程(緑色凝灰岩)	59
第22図 管玉工程品法量分布グラフ	60
【細田遺跡】	
第23図 細田遺跡グリッド設定図	64
第24図 細田遺跡の順序	66
第25図 弥生・古墳前期の土器分類図(1)	71
第26図 弥生・古墳前期の土器分類図(2)	72
第27図 杯蓋・有台杯の重ね焼き分類	76
第28図 古代の土器分類図	77
第29図 細田遺跡の木材(1)	87
第30図 細田遺跡の木材(2)	88
第31図 細田遺跡の木材(3)	89

### 表目次

第1表 下馬場遺跡出土弥生土器口縁部・ 底部残存率集計表	26
第2表 1号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	27
第3表 2号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	27
第4表 3号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	28
第5表 4号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	28
第6表 5号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	29
第7表 6号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	29
第8表 7号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	30
第9表 8号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	30
第10表 9号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	31
第11表 10号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	31
第12表 11号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	32
第13表 12号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	32
第14表 13号豎穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	33

第15表	14号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表	33
第16表	SX5出土土器口縁部・底部残存率集計表	33
第17表	SX8出土土器口縁部・底部残存率集計表	34
第18表	遺物包含層出土土器口縁部・底部残存率集計表	34
第19表	時期・グリッド別縄文土器出土点数一覧	35
第20表	遺跡出土石器石材・種別一覧	37
第21表	遺構別管玉工程品集計表(1)	42
第22表	遺構別管玉工程品集計表(2)	43
第23表	放射性炭素年代測定結果一覧	47
第24表	樹種同定結果	49
第25表	下馬場遺跡竪穴建物出土土器の編年的位置 付け	55

## 図版目次

### 【下馬場遺跡 図面図版】

- 図版 1 下馬場遺跡 全体図
- 図版 2 1号竪穴実測図(1)
- 図版 3 1号竪穴実測図(2) 1号竪穴遺物出土位置図
- 図版 4 2号竪穴実測図(1) 2号竪穴遺物出土位置図
- 図版 5 2号竪穴実測図(2) 3号竪穴実測図(1)
- 図版 6 3号竪穴実測図(2) 3号竪穴遺物出土位置図
- 図版 7 4号竪穴実測図(1)
- 図版 8 4号竪穴実測図(2) 4号竪穴炭化材・遺物出土位置図
- 図版 9 5号竪穴実測図
- 図版 10 6号竪穴実測図 6号竪穴遺物出土位置図
- 図版 11 7号竪穴実測図(1)
- 図版 12 7号竪穴実測図(2) 7号竪穴遺物出土位置図
- 図版 13 8号竪穴実測図 9号竪穴実測図(1)
- 図版 14 9号竪穴実測図(2) 10号竪穴実測図
- 図版 15 11号竪穴実測図(1)
- 図版 16 11号竪穴実測図(2) 11号竪穴遺物出土位置図
- 図版 17 12号竪穴実測図(1)
- 図版 18 12号竪穴実測図(2) 13号竪穴実測図(1)
- 図版 19 13号竪穴実測図(2) 13号竪穴遺物出土位置図
- 図版 20 14号竪穴実測図
- 図版 21 弥生時代の土坑・その他(1)
- 図版 22 弥生時代の土坑・その他(2)
- 図版 23 弥生時代の土坑・その他(3)
- 図版 24 弥生時代の土坑・その他(4) 時期不明炭窯
- 図版 25 縄文時代の遺構(1)
- 図版 26 縄文時代の遺構(2)

- 図版 27 縄文時代の遺構(3)
- 図版 28 弥生時代の土器(1)
- 図版 29 弥生時代の土器(2)
- 図版 30 弥生時代の土器(3)
- 図版 31 弥生時代の土器(4)
- 図版 32 弥生時代の土器(5)
- 図版 33 弥生時代の土器(6)
- 図版 34 弥生時代の土器(7)
- 図版 35 弥生時代の土器(8)
- 図版 36 弥生時代の土器(9)
- 図版 37 弥生時代の土器(10)
- 図版 38 弥生時代の土器(11)
- 図版 39 弥生時代の土器(12)
- 図版 40 弥生時代の土器(13) 縄文土器・縄文時代の土器
- 図版 41 弥生時代の石器(1)
- 図版 42 弥生時代の石器(2)
- 図版 43 弥生時代の石器(3)
- 図版 44 弥生時代の石器(4)
- 図版 45 弥生時代の石器(5)
- 図版 46 弥生時代の石器(6)
- 図版 47 弥生時代の石器(7) その他
- 図版 48 玉作関連資料(鉄石英)(1)
- 図版 49 玉作関連資料(鉄石英)(2)
- 図版 50 玉作関連資料(緑色凝灰岩) ヒスイ関連資料
- 図版 51 石製品 鉄製品 遺物包含層出土石器(1)
- 図版 52 遺物包含層出土石器(2)
- 図版 53 遺物包含層出土石器(3)
- 図版 54 遺物包含層出土石器(4)

### 【細田遺跡 図面図版】

図版 55 細田遺跡 全体図

図版 56 遺構平面図（1）

図版 57 土層断面図（1）

図版 58 遺構平面図（2）

図版 59 挖立柱建物柱平面図

図版 60 遺構平面図（3）

図版 61 遺構平面図（4）

図版 62 土層断面図（2）

図版 63 遺構平面図（5） 土層断面図（3）

図版 63 遺構平面図（6） 土層断面図（4）

図版 65 遺構平面図（7）

図版 66 繩文時代の土器・石器

図版 67 弥生終末～古墳前期の土器（1）

図版 68 弥生終末～古墳前期の土器（2）

図版 69 弥生終末～古墳前期の土器（3）

図版 70 弥生終末～古墳前期の土器（4） 古墳中・後期の土器

図版 71 古代の遺構出土土器（1）

図版 72 古代の遺構出土土器（2）

図版 73 古代の遺構出土土器（3）

図版 74 古代の土器（1）

図版 75 古代の土器（2）

図版 76 古代の土器（3）

図版 77 中世の土器・陶磁器（1）

図版 78 中世の土器・陶磁器（2） 石製品 近世陶磁器

図版 79 木製品（1）

図版 80 木製品（2）

### 【下馬場遺跡 写真図版】

図版 81 下馬場遺跡 遺跡周辺の景観

図版 82 下馬場遺跡 遺跡全景（1）

図版 83 下馬場遺跡 遺跡全景（2）、4号戸

図版 84 下馬場遺跡 竪穴遺物、現況、層序、管玉制作関連遺物、続繩文土器

図版 85 下馬場遺跡 鉄製品、スタンプ文、刺突文、炭化米

図版 86 下馬場遺跡 1・2号竪穴建物完掘 全景

図版 87 下馬場遺跡 3・4号竪穴建物完掘 全景

図版 88 下馬場遺跡 5・6号竪穴建物完掘 全景

図版 89 下馬場遺跡 7・8号竪穴建物完掘 全景

図版 90 下馬場遺跡 9・10号竪穴建物完掘 全景

図版 91 下馬場遺跡 11・12号竪穴建物完掘 全景

図版 92 下馬場遺跡 13・14号竪穴建物完掘 全景

図版 93 下馬場遺跡 1・2・3号竪穴建物

図版 94 下馬場遺跡 3・4号竪穴建物

図版 95 下馬場遺跡 5・6・7号竪穴建物

図版 96 下馬場遺跡 7・8・9・10号竪穴建物

図版 97 下馬場遺跡 10・11・12号竪穴、13号竪穴（火葬場跡）

図版 98 下馬場遺跡 13・14号竪穴、竪穴群全景

図版 99 下馬場遺跡 SK1・2・3・4

図版 100 下馬場遺跡 SX5, SK6・7, SX8, SK9・10

図版 101 下馬場遺跡 SK12, SX13・17, SK18・19・20・22

図版 102 下馬場遺跡 岩窓1・2・3・4・5・6

図版 103 下馬場遺跡 岩窓7・8、竪穴状土坑列、JSK1

図版 104 下馬場遺跡 JSK2・3・4・5・6・7・8

図版 105 下馬場遺跡 JSK9・10・11・12・13・14・15・16

図版 106 弥生時代の土器（1）

図版 107 弥生時代の土器（2）

図版 108 弥生時代の土器（3）

図版 109 弥生時代の土器（4）

図版 110 弥生時代の土器（5）

図版 111 弥生時代の土器（6）

図版 112 弥生時代の土器（7）

図版 113 弥生時代の土器（8）

図版 114 弥生時代の土器（9） 古墳時代の土器 続繩文土器・縄文時代の土器

図版 115 弥生時代の石器（1）

図版 116 弥生時代の石器（2）

図版 117 弥生時代の石器（3） 玉作関連資料（1）

図版 118 玉作関連資料（2） ヒスイ関連資料 石製品 鉄製品 遺物包含層出土石器（1）

図版 119 遺物包含層出土石器（2）

### 【細田遺跡 写真図版】

図版 120 細田遺跡

図版 121 細田遺跡

図版 122 細田遺跡

図版 123 細田遺跡

図版 124 細田遺跡

図版 125 縄文時代の土器 弥生終末～古墳前期の土器（1）

図版 126 弥生終末～古墳前期の土器（2）

図版 127 古代の土器（1）

図版 128 古代の土器（2）

図版 129 古代の土器（3）

図版 130 古代の土器（4）

図版 131 木製品

図版 132 墨書き土器〔文字一覧〕（1）

図版 133 墨書き土器〔文字一覧〕（2）

# 第Ⅰ章 序 説

## 1 調査に至る経緯

上信越自動車道（以下、上信越道）は、群馬県藤岡ジャンクション～新潟県上越ジャンクション間の総延長203kmにわたる高速自動車国道であり、関越自動車道と北陸自動車道を結んでいる。

下馬場遺跡・細田遺跡に係る上信越道第11次施工命令区间（新潟県中郷村（現妙高市）～新潟県上越市）は、昭和48年に基本計画が、平成元年に整備計画がそれぞれ決定され、平成2年11月に施工命令が出された。施工命令に先立ち新潟県教育委員会（以下、県教委）は日本道路公团（以下、公团）の依頼を受けて平成2年4月に第11次施工命令区间にあたる三市町村（中郷村・新井市（現妙高市）・上越市）の踏査を実施し、周知の遺跡18か所、新発見遺跡10か所、遺跡推定地25か所について埋蔵文化財調査が必要である旨公團新潟建設局に通知している。

下馬場遺跡については、同一の尾根の続きに「下馬場古窯跡群」が周知されており、窯跡2基のほか、古墳1基、半埋没の住居跡4軒が上越市教育委員会の調査により報告されていた〔上越市教委1989〕。そのため尾根上16,300m<sup>2</sup>の範囲については遺跡推定地No.40明日ヶ原牧草地（下馬場遺跡）として一次調査が必要である旨を伝えた。

細田遺跡については、上信越道本線工事のために計画された工事用道路部分である。公團・県教委の事



第1図 上信越自動車道路線図と下馬場遺跡・細田遺跡の位置

前協議により、丘陵上～縁辺部にかけた場所のため遺跡が存在する可能性が高いこと、かつ深度1m前後の掘削を伴う工事であることから、4,750m<sup>2</sup>について一次調査が必要である旨を伝えた。

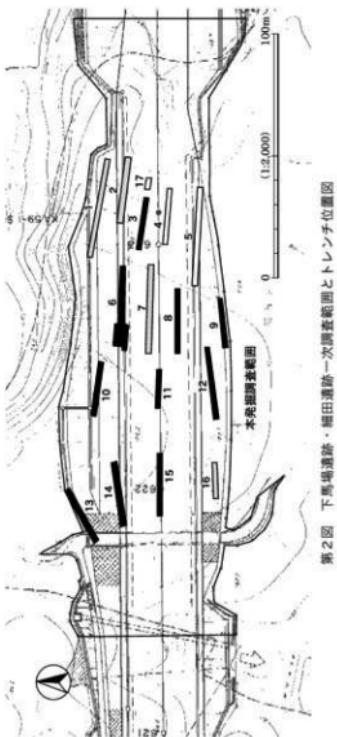
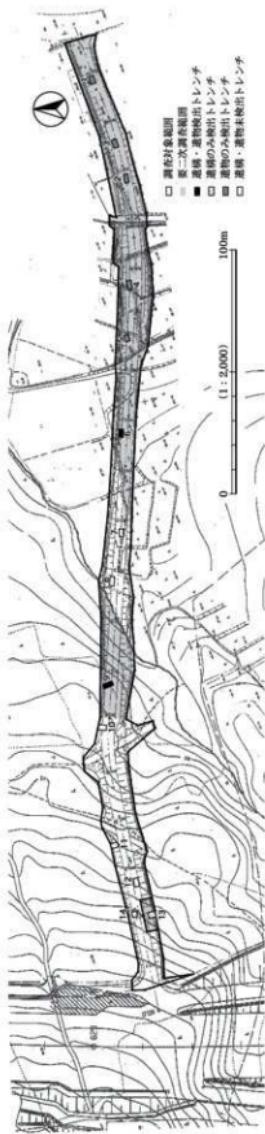
## 2 調査の方法と経過

### A 一次調査

#### 【下馬場遺跡】

平成8年度に16,300m<sup>2</sup>を対象に調査を実施した。対象地の地形および現況は、丘陵上（平坦面）の牧草地と南北縁辺部の雑木林に分けられる。

牧草地部分の対象地には任意の位置に合計17か所に試掘坑（トレンチ：合計面積860m<sup>2</sup>）を設定し、バックホーと人力により堆積土を薄く掘削、精査して遺構・遺物の有無、土層の堆積状況



第2図 下馬場遺跡、細田通路一次調査範囲とトレンチ位置図

を確認した。調査の結果、北側の裾部のトレンチ（1～5Tr）では遺物包含層に相当する層が検出されたが、それ以外のトレンチでは牧草地の造成により遺物包含層が削平されていた。遺構は竪穴建物跡3軒・土坑3・炭窯3基が検出された。遺物は縄文土器（縄文早期）・弥生土器・磨石等の遺物が出土した。

丘陵の南北縁辺部の雑木林の調査では、下草を刈り払い、地形の観察を行った。その結果、北側では、円形の落ち込み3か所（径1.5～3m）、断面L字形の段切りが存在した。南側では法線内に2基、法線外に1基の竪穴建物跡と考えられる落ち込み（宜み）を確認した。東方100mには、上越市教育委員会の調査〔上越市教委1989〕で確認されている半埋没状態の住居跡（4棟）が存在し、これらと酷似しているため、一連の遺跡である可能性が高くなつた。以上の結果から、 $16,300\text{m}^2$ について二次調査を行う必要があると判断した。

#### 【細田遺跡】

平成8年度に $4,750\text{m}^2$ を対象として調査を実施した。調査は対象地の任意の位置に合計13か所の試掘坑（トレンチ：合計面積 $98\text{m}^2$ ）を設定し、バックホーと人力により堆積土を薄く掘削、精査して遺構・遺物の有無、土層の堆積状況を確認した。

調査対象地の地形は、丘陵および丘陵斜面部、丘陵裾部～水田（低地）部分の2つに分けることができる。丘陵部分では、トレンチ9で竪穴建物と考えられる落ち込みを検出し、古代の土師器・須恵器・灰釉陶器などが出土している。トレンチ13では、黒田古墳群15号墳の周溝の一部と思われる落ち込み1基を検出した<sup>1)</sup>。

一方、水田部分では、間層（砂層）を挟み、上層で古代の須恵器・土師器が、下層で古墳時代前期の土器が多数出土した<sup>2)</sup>。

以上の結果から、黒田古墳群15号墳の周辺 $70\text{m}^2$ 、トレンチ9周辺 $500\text{m}^2$ 、トレンチ1～6周辺 $2,100\text{m}^2$ の合計 $2,670\text{m}^2$ について二次調査が必要であると判断した。

## B 二 次 調 査

#### 【下馬場遺跡】

二次調査は平成9年4月21日～11月14日の期間で実施した。

4月21日～25日に調査区を横断する道路北側について重機（バックホー）を使用して表土除去を行った。5月7日から作業員を投入し、一次調査の段階で半埋没住居を確認した道路南側の下草刈りと清掃を行い、現況の地形の落ち込みを記録した。道路北側については遺構確認を開始した。6月上旬には道路南側の表土掘削が終了し、引き続き遺構確認を開始し、竪穴建物のほか、土坑（炭窯を含む）・ピットと思われるプランを確認した。引き続いてプランの半蔵もしくはサブトレンチを掘削して遺構の状況の確認を行った。6月下旬にはバックホーにより南北斜面部の表土および遺物包含層の掘削を行った。遺物の出土がごく少量で遺構も検出されなかつたことから、この部分についての調査を終了した。7～9月にかけて竪穴建物跡の調査を進めた。玉關係資料の出土も確認されたため、剥片・削片などの微細遺物回収のため、掘削土を土嚢袋に全量回収し、調査に並行して水洗・選別を行つた。8月30日には現地説明会を実施し、230名の参加があった。9～10月には竪穴建物以外の弥生時代の遺構（土坑・ピット）、縄文時代の遺構

1) 丘陵及び丘陵斜面部（センター杭No.1～8）の $570\text{m}^2$ は、古墳の一部を含むことから黒田古墳群の範囲内とし、同遺跡の調査班が二次調査を実施した〔尾崎2002〕。

2) 丘陵裾部～水田部分（NO. 11～19付近）の $2,100\text{m}^2$ （上下層合計 $4,200\text{m}^2$ ）を細田遺跡として調査した。

(陥穴状土坑)、時期不明の炭窯の調査、11月上旬には旧石器時代の遺物の有無について試掘調査を行った。

11月14日までにすべての作業を終了し、現場を撤収した。

#### 【細田遺跡】

二次調査は平成9年4月14日～8月26日の期間で実施した。

砂の敷設による重機の搬入路を設置ののち、表土除去を開始した。5月上旬から作業員を投入し、丘陵裾部である調査区西側端から順次、遺物包含層の掘削を開始した。水田(低地)部分の東側では、南北両側が耕作中の水田であったため、水の浸み出しが著しく、壁の崩落も起きたため、シートで被覆するとともに、南側に排水溝を兼ねたトレーンチを掘削した。遺物が集中して出土した15O'・P'・Q'・R'グリッドを除き、遺物包含層の掘削を6月下旬にほぼ終了し、遺構の精査・遺構掘削を行った。8月26日にはすべての作業を終了し、現場を撤収した。

## 3 整 理

出土遺物の水洗・註記作業は、発掘調査と並行して行った。調査現場で作成した遺構図面・写真や記録類の整理、各遺構の台帳(遺構カード)作成など基礎整理作業は平成9年度の冬期間に行った。なお、細田遺跡の木製品については、平成12年度に自然科学分析用試料採取(切片作成)、平成13年度に図化・写真撮影を行った。保存処理は平成14・15年度に糖アルコール含浸処理を行った。

報告書作成整理作業は県教委が埋文事業団に委託し、平成16年度に行った。作業内容は以下のとおり。

遺物：事業団職員が接合・復元、実測個体の選出・図化・トレース・写真撮影(ニコンD100使用)

遺構：原図・仮版作成を事業団職員が行い、トレース・版組を(株)セビアスに委託した。

版下作成・印刷製作：版下作成から印刷製本の作業工程は、印刷用図面・写真・文書編集のデジタル化に適応するため、作業の一部を(株)セビアスに委託した。委託した業務は遺構図面のデジタルトレース・従前まで印刷業者の行っていた版構成作業一般である。埋文事業団では本文・挿図の作成、図版のレイアウト・編集作業を行った。

## 4 調査体制

### A 下馬場遺跡

#### 【一次調査】

調査期間 平成8年12月2日～12月13日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 平野 清明)

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

#### 【二次調査】

調査期間 平成9年4月21日～11月14日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 平野 清明)

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理	總括	藍原 直木	事務局長
管 理	山上 利樹	総務課長	
庶務	泉田 誠	総務課主事	
調査	總括	亀井 功	調査課長
指 導	藤巻 正信	調査課調査第一係長	
担 当	田海 義正	〃 主任調査員	
職 員	加藤 学	〃 文化財調査員	

管理	總括	藍原 直木	事務局長
管 理	山上 利樹	総務課長	
庶務	泉田 誠	総務課主事	
調査	總括	亀井 功	調査課長
指 導	藤巻 正信	調査課調査第一係長	
担 当	小池 義人	〃 主任調査員	
職 員	近藤 克人	〃 主任調査員	
	鹿野 弘之	〃 文化財調査員	
	江口 志麻	〃 嘱託員	

## B 細田遺跡

### [一次調査]

調査期間 平成 8年 12月 24日～12月 25日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野 清明）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理	総括	藍原 直木	事務局長
管理	山上 利雄	総務課長	
庶務	泉田 誠	総務課主事	
調査	総括	亀井 功	調査課長
指導	藤巻 正信	調査課調査第一係長	
担当	小田由美子	新潟県教育庁文化行政課主任調査員	
職員	島田 昌幸	調査課文化財調査員	
	沢田 敦	〃 文化財調査員	
	山崎 天	〃 嘱託員	

### [二次調査]

調査期間 平成 9年 4月 14日～8月 26日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野 清明）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理	総括	藍原 直木	事務局長
管理	山上 利雄	総務課長	
庶務	泉田 誠	総務課主事	
調査	総括	亀井 功	調査課長
指導	藤巻 正信	調査課調査第一係長	
担当	杉田 健一	〃 主任調査員	
職員	吉澤 順	〃 主任調査員	
	海津 知	〃 嘱託員	

## 5 整理体制

### A 細田遺跡木製品の整理と保存処理

#### [平成 12・14・15年度]

作業内容 平成 12年度（実測図作成・分析用切片採取）

平成 14・15年度（糖アルコール含浸処理）

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 12年度 野本 忠雄 14・15年度 板屋越嶺一）

整 理 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理	総括	須田 益輝	事務局長：12・14年度
		黒井 幸一	〃 : 15年度
管理	長谷川司郎	総務課長：12・14年度	
		長谷川二三夫	〃 : 15年度
庶務	雁谷 久雄	総務課長：12年度	
		高野 正司	〃 : 14・15年度
整理	総括	戸根寺八郎	調査課長：12年度
		岡本 邦次	〃 : 14年度
		藤井 正信	〃 : 15年度
指導	鈴木 健成	調査資料担当課長代理	
担当	三ツ井朋子	〃 保存処理班長	
報告員 (12年度)	坂上由紀 内山輝美 池西美津子 北村順子 木山京子 高野智恵子 宝塚真弓 吉田珠代		
報告員 (14年度)	今野明子 鶴崎文子 木山京子 吉田珠代		
報告員 (15年度)	今野明子 木山京子 宝塚真弓 吉田珠代		

### B 報告書作成に係る整理作業

#### [整理作業：平成 16年度]

整理期間 平成 16年 4月 1日～平成 17年 3月 31日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越嶺一）

整 理 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理	総括	黒井 幸一	事務局長
管理	長谷川二三夫	総務課長	
庶務	高野 正司	総務課長	
調査	総括	藤巻 正信	調査課長
指導	高橋 保	調査課整理担当課長代理	
担当	尾崎 高宏	〃 班長	
嘱託員	小倉鉢子 藤崎文子 高野智恵子 広野 澄 柳谷栄子 渡辺和子 渡辺容子		

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

下馬場遺跡は上越市大字下馬場字浦山、細田遺跡は同市大字黒田字細田に所在する。両遺跡は高田平野西側の丘陵（西頸城丘陵・山地）付近に位置する。下馬場遺跡はこの丘陵地帯から伸びる標高約70～78mの尾根（台地）上、細田遺跡は標高約30～35mの黒田古墳群の存在する丘陵の裾部から低地（青田川の形成した扇状地）にかけた場所に立地する。

高田平野（以下、平野）は、新潟県の南西部に開けた沖積平野である。平野北縁には海岸線に平行して潟町砂丘、北東部は米山（993m）をはじめとする米山山地が存在し柏崎平野との境をなす。平野北東部から南東にかけては東頸城丘陵があり、南東側では菱ヶ岳（1,129m）、鍋倉山（1,289m）などが連なる関田山脈が長野県との県境をなしている。一方、今回報告の2遺跡の所在する平野西側は丘陵・山地帯であり、北から鉢巻山（412m）、南葉山（949m）、重倉山（1,029m）、大毛無山（1,429m）、火打山（2,462m）、妙高山（2,446m）などの山々が連なる。平野南側は妙高火山の岩屑流・火碎流によって形成された火山山麓丘陵である。

平野にはこれら周辺の山地・丘陵から多くの河川が流入している。平野第一の河川である関川は妙高山系に源を発し北流して日本海に注ぐ。途中、矢代川・青田川・正善寺川などの西側丘陵地帯に源を発する河川、大熊川・別所川・柳池川・飯田川など関田山脈を源とする河川が合流する。関川をはじめとするこれらの河川が運ぶ大量の土砂により、平野南側を中心とする河川流域には扇状地が発達している。これらの扇状地と平野北縁の砂丘地帯を除けば、平野の大半は氾濫原性低地で占められる。氾濫原性低地は上位の高田面、下位の関川面、関川両岸の関川氾濫原面に区分され、大部分は高田面で占められる。また、高田面上の河川および旧河道沿い（特に保倉川・飯田川流域）では度重なる氾濫により形成された自然堤防の発達を顕著に見いだすことができる。

弥生時代以降の集落遺跡の大半は、高田面および高田面上の自然堤防に立地する。古手の遺跡では、吹上遺跡（上越市大字稻荷：弥生中・後期）、中島廻り遺跡（上越市大字戸野目：弥生後期）、子安遺跡（上越市大字子安：弥生後期・古墳前期）、北割遺跡（上越市大字東中島：古墳前期）、津食田遺跡（上越市大字中真砂：古墳前期）、下割遺跡（上越市大字米岡：弥生後期～古墳前期）等がある。下割遺跡では古墳時代の遺物包含層のさらに下層（現地表下約4m前後）から繩文後期の土器が試掘調査により出土しており、低地部分での弥生以前の遺跡の存在が明らかとなった〔尾崎2003〕。

下馬場遺跡付近の丘陵地を構成する表層地質は、泥岩・砂岩の互層堆積物が固結して形成された新第三紀系の能生谷層で、下馬場遺跡の乗る中門前層は能生谷層の上位にある。これらの層はいずれも非常に軟弱で地滑りの多発地帯となる。下馬場遺跡および北側に所在する黒田古墳群の立地する緩傾斜の地形は地滑りにより形成されたものと推測される。

これらの緩斜面を含む丘陵縁辺部には愛の風段丘（標高40m前後）、平山段丘（標高20m前後）と呼ばれる洪積段丘が南北に連なっている。段丘上には頸城ローム層と呼ばれる層が堆積しており、大塚遺跡（上越市大字灰塚）・蛇谷遺跡（上越市大字向橋）・黒田古墳群（上越市大字黒田）・下馬場遺跡（上越市大字下馬場）でこの層内から旧石器が出土している。

## 2 歴史的環境

### A 縄文時代

高田平野（以下、平野）周辺の縄文時代の遺跡は東頸城丘陵および西頸城丘陵上や平野北縁の砂丘上および潟町潟湖群周辺に多く分布している。氾濫原性低地部分では、八反田遺跡（上越市春日山町：早期～後期）、下割遺跡（上越市大字米岡：後期）、池田遺跡（上越市大字木田：晚期）など数は少ないが、現地表から深く埋没して存在することが明らかになっている。

報告の2遺跡が位置する上越市域では縄文時代の遺跡は39か所が報告されている〔寺崎2003〕。本報告書の下馬場遺跡は縄文時代早期・前期・中期・晚期の遺物、細田遺跡では縄文中期・後期・晚期の遺物が出土していることから遺跡数は41か所となる。

縄文草創期の遺跡は山屋敷I遺跡（上越市山屋敷町）で局部磨製石斧、黒田古墳群（上越市大字黒田）、蛇谷遺跡（上越市大字向橋）で有舌尖頭器が出土している。下馬場遺跡においても尖頭器が1点あり、上越市域では3例目となる。

早期以降の遺跡については、各遺跡の存続期間から後期までの遺跡と後期以降の遺跡に2分することができる。草創期～晚期まで長期にわたる遺物が確認されているのは山屋敷I遺跡のみであるが、裏山遺跡、大塚遺跡および今回報告の下馬場遺跡では小規模であるが断続的に早期～後期（下馬場は晚期）までの遺物が出土している。

### B 弥生時代

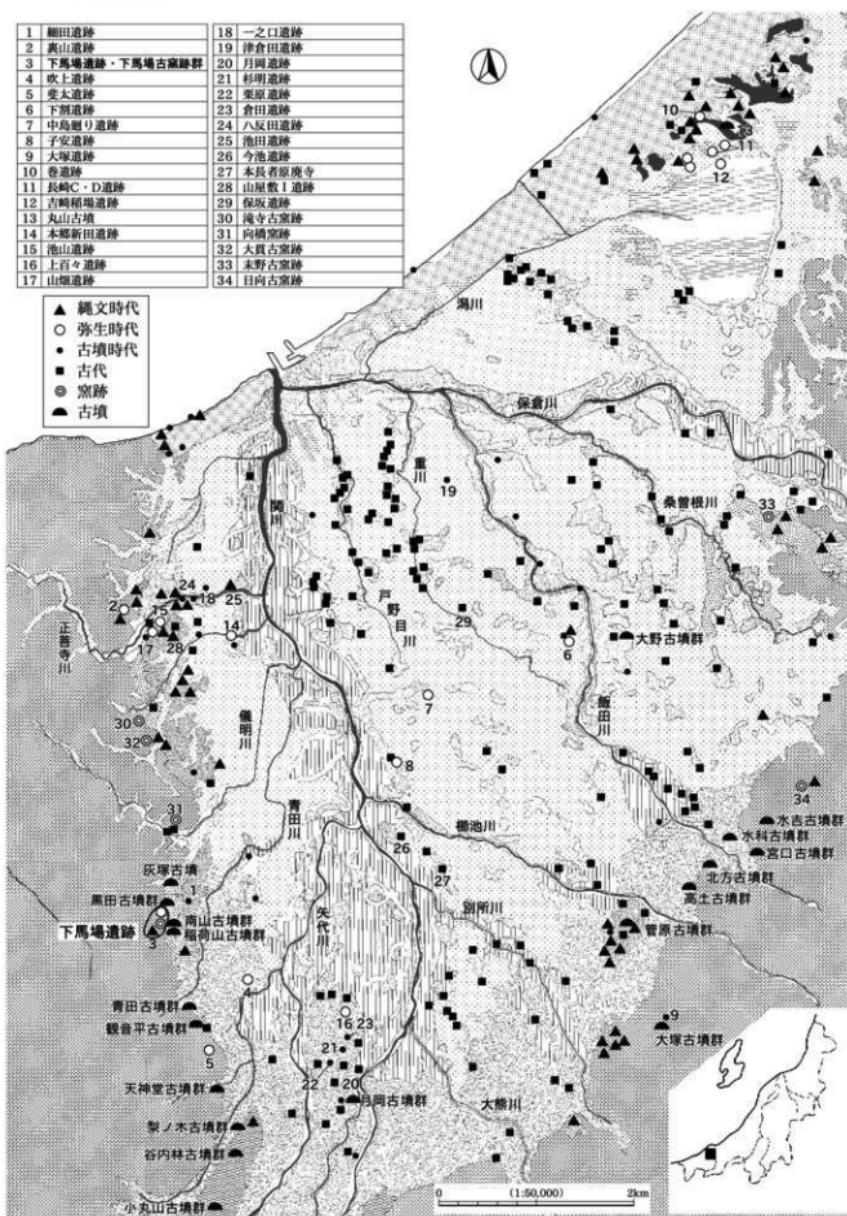
高田平野周辺の弥生時代遺跡は、大きく分けて、潟町潟湖群周辺・関川流域の低地・西頸城丘陵縁辺部・妙高山麓の4つの分布域に分けることができる。

潟湖周辺は、最も遺跡の分布が濃密で、巻遺跡出土のクリス形石弋、坂の下の銅鐸、長崎・古崎間の石刀などが知られている〔室岡1981・1983〕が、いずれも表探遺物で、発掘調査が実施されたのは丸山古墳のみである。丸山古墳の墳丘盛土下から竪穴建物跡が検出され、後期後半の土器が出土した〔小野・桑原ほか1988〕。潟湖周辺は縄文時代以来継続して遺跡が存在しており、内水面が安定した生活資源を供給していたと考えられる。

関川流域の沖積地では前項で述べた、吹上遺跡・中島廻り遺跡・子安遺跡・下割遺跡のほか、本郷新田遺跡（上越市大字藤巻）、池山遺跡（上越市大字藤新田）、上百々遺跡（妙高市大字上百々）がある。吹上遺跡では、弥生中期のさまざまな系統の土器が出土しており、緑色凝灰岩の管玉製作が行われていた。上百々遺跡では中期の栗林式、後期の箱清水式など信州系の土器がまとまって出土した。正善寺川流域の段丘上（平山面）では山畠遺跡（上越市大字岩木）で後期終末期の竪穴住居1棟が確認された。

西頸城丘陵縁辺部には、高地性集落の裏山遺跡（上越市大字岩木）、斐太遺跡（妙高市大字宮内）、下馬場遺跡（上越市大字下馬場）の3遺跡がある。裏山遺跡は弥生時代後期後半の遺跡で、平成7・8年度に上信越道関係で発掘調査が行われ、竪穴建物8基・環濠3条を検出したほか、鍛先6点を含む11点の鉄製品のほか砥石・軽石製研磨具など鉄器使用に伴う遺物が多数出土したことで注目される。斐太遺跡群は1955～58年にかけて東京大学考古学研究室によって調査が行われ、半埋没の竪穴らしき窓みが百両山地区で47か所、上ノ平・矢代山地区で24か所確認された。そのうち6基の発掘が行われ、1基のみが方

1 綿田道跡	18 一之口道跡
2 真山道跡	19 津付道道跡
3 下馬場道跡・下馬場古窯跡群	20 月岡道跡
4 吹上道跡	21 松明道跡
5 叟太道跡	22 草原道跡
6 下照道跡	23 倉田道跡
7 中島越り道跡	24 八反田道跡
8 子安道跡	25 池端道跡
9 大摩道跡	26 今池道跡
10 卷道跡	27 本民者原廣寺
11 長崎C・D道跡	28 山星敷I・II道跡
12 古崎稻場道跡	29 保坂道跡
13 丸山古墳	30 渡古寺古窯跡
14 本郷新田道跡	31 向橋窑跡
15 池山道跡	32 大賀古窑跡
16 上百々道跡	33 末野古窑跡
17 山畠道跡	34 日向古窑跡



第3図 高田平野周辺の遺跡

形の土坑、その他は方形の竪穴建物であった。また、建物群の存在する平坦面の東西に、南北方向に伸びる環濠が巡っている。平成12~14年度には史跡追加指定・整備を視野に入れた分布・確認調査が新井市（現妙高市）教育委員会により実施され、從前までの周知範囲の南側（矢代山B地区）で新たに60か所以上の竪穴・竪穴状の窪み、二重環濠、区画溝、方形台状墓等が発見された。吹上遺跡は丘陵から東側へ約1.5km離れた青田川扇状地扇端部の小丘陵状の台地周辺に立地する。調査の結果、弥生中~後期（中期を主体とする）の遺構・遺物を検出した。遺構は環濠・竪穴建物・掘立柱建物・方形周溝墓・土坑墓が確認されている。また中期の玉作り関連の遺構・遺物も確認されている。銅鐸形・銅弋形土製品など祭祀遺物の存在も注目される〔木島・笛澤2003〕。

### C 古墳時代

古墳時代の遺跡は、近年沖積地の開発に伴う発掘調査の結果、資料数が増加している。

前期では、一之口遺跡・子安遺跡・津倉田遺跡・下削遺跡・中島廻り遺跡などが確認されている。墳墓では、媛音平古墳群に前方後円墳2基が分布調査により確認された〔佐藤2004〕。また、沖積地上では子安遺跡で「周溝遺構」2基、中島廻り遺跡では「古墳」2基が検出されており、前期末~中期の大野古墳群（上越市三和区大野）では16基の円墳〔吉川2001〕、中期の月岡遺跡（妙高市大字月岡）でも3基の円墳が確認された。中期後半~後期では頸城西部古墳群（西頸城丘陵線辺部・矢代川中流域）と頸城東部古墳群（柳池川・飯田川扇状地上）と総称される〔金子・高橋・秦1980〕群集墳が形成される。集落遺跡では初期須恵器などが出土した中島廻り遺跡（上越市平成町）や一之口遺跡（上越市大字木田）など古墳前期から断続的に古代まで存続する遺跡もある。

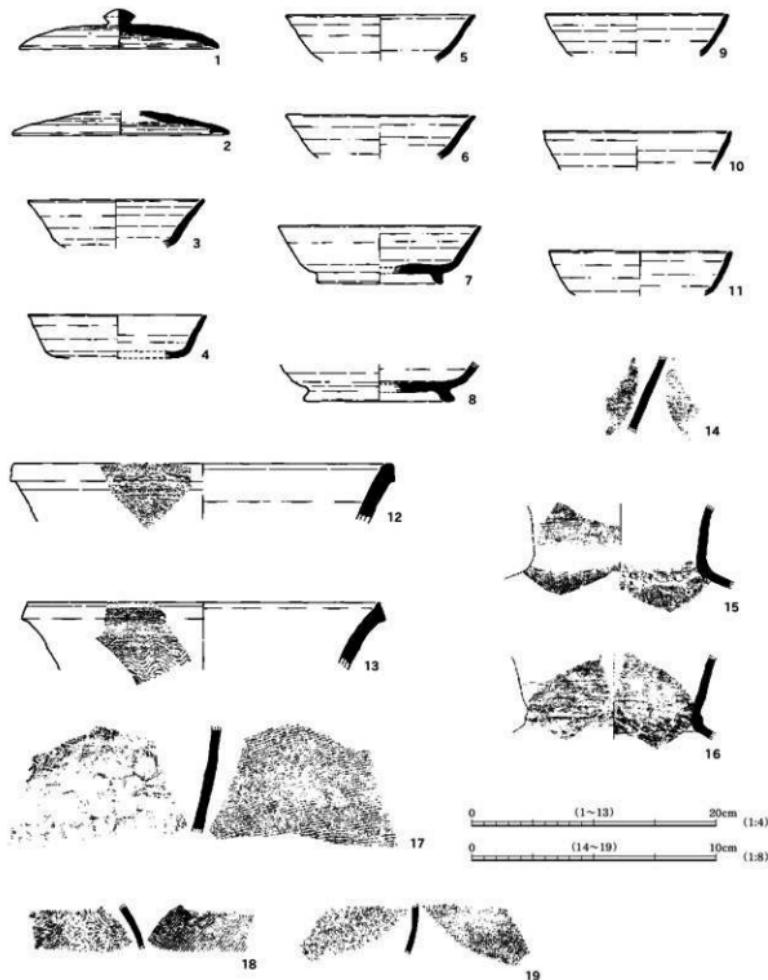
### D 古代

高田平野周辺は古代の行政区画の「頸城郡」にあたり、当初は越中国に属していたが、8世紀初頭に蒲原・古志・魚沼郡とともに越後国に編入された。編入後、「和名類聚抄」には「国府在頸城郡」と記されているように国府が置かれ、越後国の行政・文化の中心地となつた。沖積平野を中心に数多くの遺跡が確認されている。今池遺跡（上越市大字今池）、子安遺跡（上越市大字子安）、保坂遺跡（上越市大字保坂）、本長者原廃寺など、国府や国分寺との関連性が考えられる遺跡が多く調査されているが、国府・国分寺の特定には至っていない。郡衙（頸城郡）では、栗原遺跡（妙高市大字栗原：大型の掘立柱建物や「郡」や人名の墨書き土器、円面鏡、銅製帶金具など出土）や倉田遺跡（妙高市大字栗原：倉庫と考えられる總柱建物を検出）が関連遺跡として推定されている。生産関連の遺跡では、須恵器窯跡が多く知られており、下馬場窯跡群（7世紀末）を最古として、西頸城丘陵（北から滴寺・大貫窯跡、向橋窯跡、下馬場窯跡）および東頸城丘陵（末野窯跡群、日向窯跡群）周辺に分布する。

### E 下馬場遺跡・下馬場古窯跡群について

下馬場遺跡・下馬場古窯跡群は上越市教委の範囲確認調査〔市教委1989〕により、須恵器窯2基、半埋没の竪穴住居跡4棟、古墳1基が確認されている（新潟県遺跡台帳には窯跡が「下馬場古窯跡群」、竪穴建物群は「下馬場遺跡」、古墳は「南山古墳群」として登録されている）。次頁に図化・掲載の資料は、平成9（1997）年に窯跡の存在する稻荷池の水抜きが行われ、旧地形が露出した際に汀線付近で表面採取されたものである（整理箱3箱分）。遺物の時期については、口縁端部がかえりをもつ杯蓋の存在から7世紀後半と推測さ

れ、高田平野付近で最古期に位置づけられる窯跡である。採集遺物の大半は甕片で、そのほかには、有台杯・杯蓋なども少量含まれていた。小片のため図化していないが、土師器片（甕か）も若干量見られる。甕片は大きく2種あり、厚手大型のものと薄手のものに分けることができる。中でも薄手のものでは、内面の同心円当て具痕の中心部が円形の突起状になるものが特徴的に見られる。図化にあたっては器種のバラエティ、器形・調整の特徴的なものを選択して行った。



第4図 下馬場古窯跡群表探資料

## 第III章 下馬場遺跡

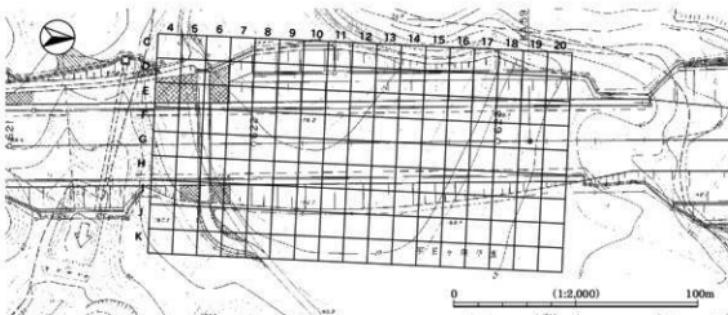
### 1 調査の概要

#### A グリッドの設定

国家座標の数値上で南北方向に100mの距離を持つA点【X=118.930.000, Y=-24.230.00】とB点【X=119.030.000, Y=-24.230.00】を基準に国家座標の軸に合わせてグリッドの軸方向を設定した。大グリッドは10m四方とし、南から北へ算用数字、西から東へアルファベットを昇順に付し、両者を組み合わせて「4D」のように表記した。小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割して算用数字を付し、大グリッドに統けて「13G1」のように表記した。

国家座標値は旧座標系を使用しており、新しい座標系との対応関係は以下の表のとおりである。

杭	日本平面直角座標系第3区系（旧座標）	新座標 JGD2000系（計算値）
A点：8G杭	【X=118930.000, Y=-24230.00】	【X=119280.7651, Y=-24510.7473】
B点：18G杭	【X=119030.000, Y=-24230.00】	【X=119380.7635, Y=-24510.7472】



第5図 下馬場遺跡グリッド設定図

### 2 地形と基本層序

遺跡は西頭城丘陵の東端が沖積地に接する台地あるいは尾根に立地し、南北両端は比較的急勾配の斜面となっており、沢へつながる。遺跡の中心となる台地は最高点が標高であり、西から東へ緩やかに傾斜している。この丘陵（台地）は砂・礫・ローム質土の堆積物で構成されており、本来は土壤が丘陵全体を覆っていたと考えられるが、後世の牧草地造成により削平を受けているため、遺存状況は良くない。以下に示す基本層序が残存するのは遺跡南縁の一部のみである。その他はⅡ層が完全に削平され、Ⅲ層も上部が削りとらわれていた。

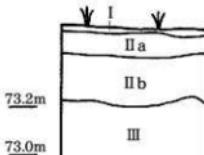
I : 暗褐色土。表土。未分解の腐植からなる。植物の根が密生する。

I b : 暗褐色土。耕作土および牧草地造成土。黄褐色土がまだらに混じる。

II a : 黄褐色土。炭化物粒（径2mm以下）をごく少量含む。植物の根が密生する。

II b : 褐色土。炭化物粒（径3mm以下）を少量含む。ややしまりの弱い土層で、縄文時代早期～中期、弥生時代の遺物包含層。

III : 黄褐色土。遺構確認面としたローム質土。ごく微細な黒色粒子（スコリア？）をごく少量含む。しまりがある。



第6図 4D25・4E1付近基本層序

### 3 遺構

#### A 概要

下馬場遺跡からは弥生時代後期後半の竪穴14軒・土坑16基・性格不明の落ち込み3基・ビット4基を検出した。その他、遺物を作わないため詳細な時期は不明であるが、丘陵北側縁辺部に15基からなる縄文時代の陥穴状土坑列、土坑1基を検出した。また、円形および方形の炭窯（伏焼窯）8基を確認した。

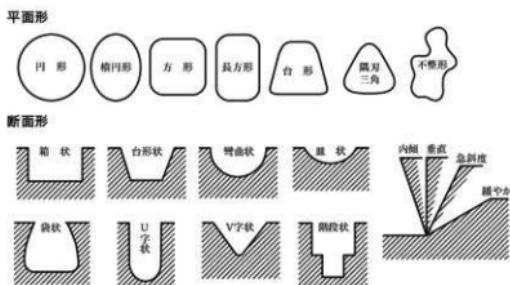
竪穴建物は平面形および主柱穴の配置から①隅丸方形で主柱穴4本のもの、②隅丸長方形で主柱穴2本のもの、③円形で柱穴を環状に配するもの、④その他・不明のもの、以上大きく4つに分類することができる。各竪穴建物・土坑はすべて単独で存在し、切り合い関係を持たない。

#### B 遺構の計測・記述方法

遺構の説明には観察表・本文・図面図版・写真図版を用いる。遺構の呼称は遺構種類・遺構番号の順に遺構の種類ごとに1から通し番号を付した。個々の遺構の位置・規模・形状・出土遺物・埋土の状況・切り合い関係などについては巻末の観察表に記載しており、本文中では特別な場合を除き個々について触れない。平面の形状・計測値については確認面での数値であり、深度は確認面のうら高い箇所からの深度を採用している。遺構の平面形・断面形の呼称は「奈良崎遺跡」「春日2002」の分類に基づき記載した（第7図）。竪穴の主軸については、長軸方向を主軸方位とした。方位は北から東西に振れる角度を「N—○○°—E（またはW）」と表記した。

遺構の図面図版は全体図と建物跡・土坑などの個別図、断面図、エレベーション図（横断面図）で構成する。断面図の土層註記は農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帳』を使用し、統一的な色の記述を行った。

遺構の写真は、調査の過程に応じて、検出状況・土層の断面・遺物出土状況・完掘状況等を撮影しているが、重要な遺構・残存状況の良好なもの、遺構の特徴を良好に示すものなどを選択的に掲載している。



第7図 遺構形状の分類と呼称

〔春日2002から転載〕

## C 遺構各説

### 1) 竪穴建物

#### 1号竪穴（図版2・3／写真図版60・67）

11Iグリッドに位置する。地形的には南西から北東の方向に向かって緩やかに傾斜する場所に立地する。堆積土断面図のライン（A-A'・B-B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。A・B区（東側）は削平されており、壁の立ち上がりは確認できなかったが、柱穴の配置状況から平面形は直径8～8.5mの円形であると推測される。柱穴は円形に7基を配している。ピット5～ピット7～ピット8～ピット1それぞれの柱間は約3mあり、その他が約2～2.5mであるのに対して広くなっている。西～南西側では幅約20cmの壁溝があり、壁際および壁溝内からは、土器類のほか多数の菅玉製作の工程品が出土した。また、D区では炭化した板材を検出した。削平されていることもあり床面の残存状況はあまり良好ではなく、硬化も認められなかった。炉跡および焼土の痕跡は確認できなかった。

#### 2号竪穴（図版4・5／写真図版60・67）

9G・H、10G・Hグリッドに位置する。地形的には北西から南東の方向に向かって緩やかに傾斜する場所に立地する。堆積土断面図のライン（A-A'・B-B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。B・C区が削平されており、壁の立ち上がりは確認できなかったが、壁および幅15～40cmの壁溝が残存するC・D区の形状から、平面形は一辺9mの隅丸方形であると推測される。遺構の中心には、直径約30cm、深さ約7cmの掘り込みを持つ炉跡を検出した。C区では直径約25cmの範囲で床面の赤化部分を確認した。柱穴は炉を中心として対称形に4本配している。ピット5～7は貯蔵穴であると考えられる。北側～西側～南側では壁溝を確認した。遺物は壁際および壁溝内からは土器類のほか、砥石類が出土している。

#### 3号竪穴（図版5・6／写真図版61・67・68）

10Eグリッドに位置する。地形的にはほぼ平坦面に立地する。堆積土断面図のライン（A-A'・B-B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。A区（北東側隅）とB区（東側）で、削平により途切れる以外は、壁溝が全周する。一辺約5mの隅丸方形の平面形を持つ。柱穴は遺構の中心から東に若干ずれた位置で対称に4本配している。遺構の中心には長軸40cm、短軸25cm、深さ8cmの浅い掘り込みを持つ炉跡を検出した。炉跡は壁面の橙色化が見られ、堆積土中には多数の焼土・炭化物を含んでいた。また、中心の炉以外に、明確な掘り込みを持たないが、焼土の集中範囲がA区（北東隅）1か所、B区（南東隅）2か所、C区（西側）1か所、D区（西側）1か所で確認している。焼土は床面よりも盛り上がったようになり、焼土直下の床面（地山）は赤色化していないが、被熱により硬化していた。ピット5は貯蔵穴で直径約56cm、深さ40cmで、断面が階段状に一段塗む。D区西～北側の壁際付近から土器類がまとまって出土している。

#### 4号竪穴（図版7・8／写真図版61・68）

8D・E、9D・Eグリッドに位置する。堆積土断面図のライン（A-A'・B-B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。床面は北から南に緩やかに傾斜している。幅10～25cmの壁溝を持つ。B区東側は削平により壁溝は検出できなかった。長軸6.2m、短軸5.7mの隅丸方形の平面形を持つ。柱穴は建物中心から対称に4本配している。また、建物中心では長軸44cm、短軸40cm、深さ27cmの掘り込みを持つ炉跡を検出した。ピット5は貯蔵穴で長軸86cm、短軸64cm、深さ34cmの平

面隅丸長方形で、北側に階段状の段が存在する。床面直上に堆積する8層中からは、建物の構造材および屋根材と思われる角材・板材・棒材などの炭化材が散乱状態で出土した。D区北西隅では、板材・棒材のまとまりが確認できる。炭化材の間から出土した土器類にも二次焼成痕が認められることから焼失建物であると推測される。炭化材の一部について樹種同定を行ったところ、板材はクリ・キハダ、角材はクリが用いられている。隣接する裏山遺跡〔小池ほか2000〕で竪穴建物跡の樹種同定が行われており、6号ではクリ、7号ではキハダという結果が示されており、当竪穴はこれらと類似した材を使用していることが確認された。

#### 5号竪穴（図版9／写真図版62・69）

8F・Gグリッドに位置する。埋土断面図のライン（A-A'・B-B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。A・B区側は削平により壁の立ち上がりの遺存状況が良好でないが、長軸4.8m、短軸4.5mの隅丸方形の平面形を持つ。床面は東から西に緩やかに傾斜している。壁際には、幅約20～25cm、深さ約10cmの壁溝が巡る。B～D区の壁溝の内側には幅25～50cmの平坦面（棚状造構）が存在した。柱穴は建物北半（A・D区）で2基を確認したが、南半（C・D区）の対称位置で柱穴を確認することはできなかった。建物中心から北東寄りでピット4を検出した。直径約50cm、深さ18cmで、堆積土中に炭化物・焼土を含むことから掘り込みを持つ炉と思われるが、壁の橙色化は認められない。南東（B区）の壁のラインに平行して平面梢円形のピット3を検出した。床面の硬化部分は確認できなかった。

#### 6号竪穴（図版10／写真図版62・69）

7E・Fグリッドに位置する。堆積土断面図のライン（A-A'・B-B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。斜面下方に位置するA・B区は削平により壁の立ち上がりの遺存状況が良くない。平面形は長軸推定4.6m、短軸4.0mの隅丸方形（長方形に近い形状）である。A・C・D区では幅約10～25cmの壁溝を検出した。柱穴は遺構の中心から長軸方向に2本対称に配している。遺構の中心に掘り込みを持つ炉跡を検出し、B区では貯藏穴と思われるピット3を検出した。ピットの堆積土中から壺、台石が出土した。ピット北側からは管玉製作の工程品のほか、チャート・玉鰐などの原石（小礫）が出土した。P（土器）1の壺形土器内部にチャート・玉鰐・緑色凝灰岩などの原石が入った状態で出土した。本遺構では鉄石英・緑色凝灰岩の管玉工程品よりも、チャートなどの小礫の持ち込みが顕著に認められるが、用途等については不明である。また、C区南東隅では床面に白色の粘土塊があり、北側から大型の砥石が出土した。粘土については、竪穴の貼り床、鍛冶炉などの火床遺構の一部（炉床の貼り粘土）などの可能性があるが、検出範囲が狭く、被熱痕跡等がないことから用途・機能については不明である。

#### 7号竪穴（図版11・12／写真図版63・69・70）

5D、6Dグリッドに位置する。堆積土断面図・横断面図のライン（A-A'・E-E'）で4分し、北東（東）をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。斜面下方のA・B区（東～南東側）は削平により壁の立ち上がりが残存していないが、直径8.8m（Eライン）の円形の平面形を持つと思われる。柱穴（ピット1・2・5～7）を円形に配している。ピット3・4については、直径が40cm以上と他よりも大きく、位置的にも中心方向にずれるため主柱穴ではない可能性が高い。中心からは直径50cm、深さ約10cmの掘り込みを持つ炉を検出した。壁の立ち上がりが残存していたC・D区の壁際から土器類のほか、鉄石英の管玉工程品が出土した。

#### 8号竪穴（図版13／写真図版63・70）

4Dグリッドに位置する。削平および木根の擾乱により遺構の残存状況は良好ではなく、底部付近がわ

すかに残るのみである。西～北側では壁の立ち上がりがわずかに残存している。北西側の隅、西側の壁際でスタンプ文を持つ器台などがまとまって出土した。柱穴・炉跡などは検出できなかった。

#### 9号竪穴（図版13・14／写真図版64・70）

5F・G、6F・Gグリッドに位置する。堆積土断面図のライン（A-A'・B-B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。東側～南側（A～C区）の壁の立ち上がり・床面は削平により残存していない。平面形は長軸4.4m、短軸3.4mの隅丸長方形である。柱穴を長軸方向に2本対称に、中心からは南により配置している。C区では、2か所で床面の硬化と焼土粒の集中範囲が認められた。焼土1は直径約20cmの円形、焼土2は長軸約50cm、短軸35cmの楕円形の範囲である。焼土は3号竪穴と同様に床面よりも盛り上がった状態で検出され、焼土直下は赤色化していないが硬化している。ピット3は貯蔵穴であると思われる。遺構北側と南東隅で一括土器が出土した。

#### 10号竪穴（図版14／写真図版64・70・71）

8Iグリッドに位置する。堆積土断面図のライン（A-A'・B-B'）で4分し、北東（東側）をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。斜面下方にあたるA・B区は壁・床面が削平により消滅している。ピット1の位置関係から推測すると、長軸方向に主柱穴2本を持つ長方形の建物の可能性が高い。焼土1については位置・規模から建物中心の炉跡の可能性がある。焼土1以外にも、床面の硬化・焼土粒の集中範囲を2か所（焼土2・3）で検出した。焼土は床面よりも盛り上がった状態で確認されている。また、竪穴D区の堆積土1・2層およびピット1の埋土から炭化米合計247粒、総重量1.64gが出土した。北東側の壁際から貯蔵穴と思われるピット2を検出した。

#### 11号竪穴（図版15・16／写真図版65・71）

5Iグリッドに位置する。一次調査の段階から産みとして認識されていた半埋没の竪穴である。堆積土断面図のライン（A-A'・B-B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。遺存状況は良好で、壁際から平面輪状に埋没していた状況が上層から認識できる。柱穴を建物中心から4本対称に配置している。柱間は2～2.5mである。壁溝は幅約20～30cmで、北東～東側を除く範囲で検出した。建物中心からは炉跡は検出できなかったが、建物西側のD区で浅い掘り込みを持ち、床面の硬化・焼土粒の集中する範囲を5か所で確認した。規模および平面形は、焼土1は直径40cmの円形、焼土2は長軸60cm、短軸45cmの楕円形、焼土3・4は直径約30cmの円形、焼土5は長軸約50cmの楕円形（複雑により不明）である。いずれも床面よりも盛り上がったような状態で確認されており、焼土直下は硬化している。貼り床等の床面の硬化は確認できない。北東隅では壁のラインに平行して掘られた長楕円形のピット5を検出した。土器はB区（南東側）・D区（西側）の壁際で集中して出土した。

#### 12号竪穴（図版17・18／写真図版65・71）

6・7Jグリッドに位置する半埋没の竪穴である。堆積土断面図のライン（A-A'・B-B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。長軸6.2m、短軸4.9mの隅丸長方形のプランを持つ。幅約15cmの壁溝が北東～東側を除き全周する。柱穴を長軸方向に2本対称に配している。竪穴中心から直径約25cmの浅い掘り込みを持つ炉跡がある。竪穴北側隅の壁際から土器がまとまって出土した。堆積土からは玉作関連の遺物はほとんど出土しなかった。東側の壁際から貯蔵穴と思われるピット3を検出した。

#### 13号竪穴（図版18・19／写真図版66・71・72）

5Hグリッドに位置する。堆積土断面図のライン（A-A'・B-B'）で4分し、北東をA区とし、時計回りにA～D区と区分する。長軸5.9m、短軸4.9mの隅丸長方形のプランを持つ。幅約15cmの壁溝を北

半のみで検出した。柱穴を長軸方向に2本対称に配している。建物中心には長軸55cm、短軸45cmの不整橢円形のプランを持つ焼跡がある。竪穴北側には直径50cmの浅い窪みを持つ床面の硬化・焼土の集中範囲を2か所で確認した。竪穴北東側で土器・砥石が出土し、北西側隅で針状鉄製品が出土した。

#### 14号竪穴（図版20／写真図版66・72）

5J、6Jグリッドに位置する半埋没の竪穴である。道路用地外を含めた調査着手前の現況測量では深さ約30cmの窪みが見られた。大半は用地境界外のため、北西側の隅の一部を検出したのみである。窪みの形状、調査によるコーナー部の状況から一辺約5m程度の竪穴と推測される。埋土からは、刺突文を持つ鉢や赤彩の鉢などが出土している。

### 2) 弥生時代の土坑・性格不明遺構・ピット

#### 土坑（図版21～24／写真図版73～75）

ピットとの区分は明確ではないが、長軸60cm以上のものを土坑とした。計測値がそれ以下でも土坑としたものもある。土坑は長軸（直径）130cm前後のSK1・2・3・4・6・7、断面形状が袋状のSK17・18・19に分類される。SK1・2、SK3・4は2基の規模の類似した土坑が比較的近接して存在することから2基を1群として捉えることができる。SK6・7・17・18についてもさらに区分できる可能性があるが群として捉えることができる。堆積土中からは遺物はほとんど出土していないが、SK7・17・19の堆積土から弥生土器が出土した（315・327・328）。

これらの土坑については、石川県押水町冬野遺跡群等で確認されている「大型土坑」〔北野1991〕に形態等の共通性が認められる。機能・用途については貯蔵穴の可能性が指摘されている〔三浦1980〕。

一方、SK17～19の袋状土坑については「袋状貯蔵穴」として高床式倉庫と並存・補完する穀物の貯蔵庫の可能性について温度・湿度の測定実験などの結果から指摘されている〔杉本2004〕。九州、山陰・中国地方の丘陵・台地上の集落遺跡で大規模に群集して検出されている。貯蔵穴は、竪穴建物・掘立柱建物・環濠などと同様に集落の重要な構成要素の1つとして捉えることができる。

土坑内から植物遺体等は確認できなかつたため、貯蔵物は特定できないが豪雪地帯での貯蔵物が西日本の事例と同様に穀物類であるかどうかも含め、今後の事例の増加を待ちたい。

#### ピット（図版22～24）

ピット（Pit）14・16・21・23の4基を検出した。それぞれのピット周辺部の精査を行ったがいずれも単独で検出されており、柵や掘立柱建物等を構成するような連続性・規則性は認められなかつた。

#### 性格不明遺構（図版21・22／写真図版74・75）

SX5・8・13・17がある。SX5は浅い皿状、SX8は長楕円形で底面南西側端にピット状の落ち込みを持つ。SX8では堆積土中から多数の土器が出土した。甕の形態から見て遺跡内で最も新しい時期（漆町編年5・6群か）の遺構であると推測される。

### 3) 木 炭 窯（図版24／写真図版76・77）

伏焼窯とも呼ばれる簡易的な炭窯である。平面形状が方形（隅丸方形）のCSK1・2・4・8と円形のCSK3・5・6・7がある。CSK2出土の炭化物は放射性炭素年代測定を実施したところ、1,240±40BPで、古代に属するとの結果が得られた。

#### 4) 縄文時代の土坑（図版25～27／写真図版77～79）

16基の土坑を検出した。JSK16を除く、15基はいわゆる竪穴土坑であり、遺跡北側で2列の群として捉えることができる。いずれも覆土から土器類などの遺物が出土していないため時期は不明である。覆土は概して黒褐色土を主体とし、部分的に壁の崩落によると思われる黄褐色系土がブロック状に混じる。底面付近では微細な炭化物を含んでいた。

##### 竪穴土坑A列 (JSK1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12)

列の西側では等高線と平行に近いが、JSK3よりも東側では等高線に直交するように弧を描く。JSK7・6・12は平面形が円形に近い。いずれも壁の立ち上がりは垂直に近く、JSK12では底部のビットは検出できなかった。

##### 竪穴土坑B列 (JSK13・14・15)

等高線と直交するように弧を描く。平面形は円形に近い。断面形は台形状に近い。いずれも底部のビットを確認できなかった。

##### JSK16

上部は削平されているため底部付近しか残存していなかった。堆積土は炭化物を多く含み、底部からは若干浮いた状態であるが、中央付近から礫が1点出土した。

## 4 遺 物

### A 遺物の概要と記述の方法

遺物の説明には観察表・本文・図版（図面・写真）を用いる。出土遺物には弥生時代（後期～終末期）の土器・石器・石製品（管玉製作工程品含む）・鉄製品、続縄文土器、旧石器、縄文時代（早・前・中・後・晚期）の土器、縄文時代の石器が出土している。遺物包含層が削平されていたこともあり、大半が弥生時代で、竪穴建物などの遺構出土遺物である。図化にあたっては遺構出土のもの、残存状況の良いもの、出土例の少ないものを任意に選択し、図化したすべてについて観察表に記載した。竪穴建物出土石器のうち、床面の直上で出土した遺物（図面図版遺物出土状況図でS.○○としたもの）については掲載・未掲載の別なく竪穴ごとの一覧表を作成し、種別・法量等を記した。観察表は土器・石器など遺物の種別により観察項目が異なるため種別ごとに作成した。観察項目は出土位置・計測値のほか、土器については製作痕跡（調整痕や黒斑等）や消費・使用痕跡（被熱・摩耗）など、ライフヒストリー的な観察〔川畑1999〕も行った。石器については消費・使用痕跡まで触れることができなかつた。個々の遺物の詳細は基本的に観察表に記すこととし、特記事項のあるもののみ本文中の説明・記述を行う。

### B 弥 生 土 器

#### 1) 文様・調整・胎土

##### a 文 様

下馬場遺跡出土土器のうち、有段口縁甕は約3割（口縁部残存率）あるが、凹線文・擬四線文などの文様が入る甕はそのうちの約1割前後しか確認することができない。西谷遺跡〔滝沢1992〕、裏山遺跡〔小池ほか2000〕などとも通有の状況が見られる。その他の文様では、壺・高杯・器台類に刺突文・圧痕

文・スタンプ文などが施される。以下に文様種別ごとに概要を記す。

#### ①凹線文

布・指・革などを用い、横ナデの手法により施した沈線状の文様。複数の沈線が平行するような場合でも1本ずつ施文される〔小林・佐原 1964〕。新潟県内における凹線文については裏山遺跡における分類〔小池ほか前掲〕があり、凹線文A～C類に区分している。大半が「凹線文A類（横ナデ手法による起伏の弱い）」であるため細別を行っていない。口縁端部の摘み上げや有段口縁の稜部分の強調による沈線状の窪み（強い横ナデにより生じる）は凹線文には含めていない。

#### ②擬凹線文

擬凹線文の施文手法について次の3手法が指摘されている〔谷内尾 1983〕。①ヘラ状工具のヘラ先で1本ずつ数条にわたって施文する。疑似擬凹線文〔品田 1990〕とも呼ばれる手法・文様である。②細かい切り込みを入れた櫛歯状工具で施文する。③板材の杼目小口面に生じる自然面の凹凸をそのまま利用して施文する。擬凹線の形態的な分類については滝沢の分類を参照した〔滝沢 1993〕。

擬凹線文A類 沈線は比較的幅広くシャープで施文後の口縁部外面が平坦なもの。

擬凹線文B類 沈線幅はA類に比して狭く、施文後の口縁部外面は丸みを帯びる。

擬凹線文C類 沈線間の幅が狭いもの。

#### ③刺突文・圧痕文・沈線文

紡錘状 板状もしくはヘラ状工具の小口端部を押圧したもの。滝沢「刺突文A類」に相当するもの。裏山遺跡同様に押圧後、工具を反時計回り（左回り）方向に短く引っぱるものが多い。

点状 列点状の刺突文が見られる。滝沢「刺突文E類」に相当するもの。

その他 爪形の圧痕文（26）、V字状の刺突文（324）のほか、313は貝殻状の原体による刺突文か。

沈線文 出土量は少ない。213は山形の集合沈線を持つ。128では刺突文と組み合わされる。

#### ④スタンプ文

溝文と鉢歯文を併用するもの（220・339）、溝文のみのもの（221・342）がある。

#### ⑤その他

貼り付けによる棒状浮文を持つもの（324・338）、貼り付けの実帶上に凹線文を施す238などがある。また、明確な文様は確認できなかったが、赤彩品の中には表面全体ではなく、173のように部分的（受部下部・脚部は棒状？）に彩色するものが見られた。

## b 調 整

土器群は全体的に風化が進み、残存状態はあまり良好ではない。土器表面の調整痕跡や赤彩の有無が不明瞭なものが多く見られた。甕・壺類に多く見られるハケメは、目の粗い条線状のものと、目の細かなものの大まく分けて2種類の原体が存在すると思われる。甕・壺類の内面や底部外面に多く見られるナデのうち、ハケメと同じ原体を用いた器表面の平滑化を主に指向するものを「スリナデ」とした<sup>1)</sup>。その観点で、主にヘラ状工具を用い、器壁を薄くすることを目的とするケズリ調整とは区別して記載した。甕類ではケズリ調整をするものは少なく、行っていても内面下部など部位が限られている場合が多い。

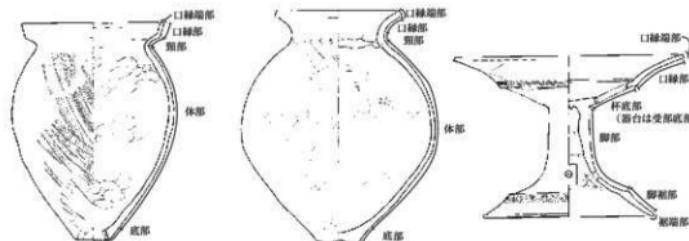
1) 「スリナデ」については、寺沢薦がいわゆる「ハケメ」「ナデ」を含めた細分案を提示している〔寺沢 1980〕。以前までの「ハケ（指）ナデ」との混同を防ぐため、ハケメ状の工具を用いた器面のナデ付けに限定して「スリナデ」とここでは呼称する。

## C 胎 土

各器種を通じた胎土の特徴は、白色の風化礫の混入が特徴的である。ミガキ調整される壺・高杯・器台などでは表面上目立たないが、割れ面の観察では礫の混入が目立つ。観察表で白色粒子（白と記載）としたものは直径1mm以下の混入物、小礫としたもの（直径5mm以下）はいずれも風化礫由来の混入物であると思われる。

### 2) 分 類

壺・壺・鉢・蓋・高杯・器台などの大別器種に分類後、細分を行った。土器の図化が主に口縁部破片を中心に行っているため、分類も口縁部の形態や調整に基づいている。遺物の大きさによる分類も本来は必要であるが、資料数が限られているため分類の要素としては含めていない。土器各器種の部位名称は第8図のとおりである。



第8図 土器の部位と名称

#### a 壺形土器

**壺A類** 口縁部有段で外面に（擬）凹線文を施すもの。口縁部の形状から3つに細分される。A1類は段が明瞭で、口縁部が直線的に上方に伸びるもの。A2類は段が明瞭で、口縁部が直線的にやや外傾して伸びるもの。口縁端部は面を持つものは290のみでその他はすべて丸くおさめている。A3類は段が不明瞭で、内面の段部分の屈曲がないもの。

**壺B類** 口縁部有段で無文のもの。口縁部の形状で6つに細分される。壺の中でも最も出土量が多い。B1類は段が明瞭で、口縁部が直立もしくは外傾して直線的に伸びるもの。B2類は段が明瞭で、外反して伸びるもの。B3類は段が明瞭で、頸部が短く、口縁部が比較的長くのびるもの。B4類は段が弱く不明瞭で、口縁部が外傾して直線的にのびるもの。B5類は段が弱く不明瞭で口縁部が短く外反するもの。B6類は段が弱く不明瞭で、口縁部が直立して直線的に伸びるもの。

**壺C類** 口縁部が断面「く」の字状のもの。6つに細分される。C1類は口縁端部を上方を擒み上げ、外面に面を持つもの。有段甌とも呼ぶことも可能な器形であるが、横方向の強いナデにより面が形成されたものと考えられる。C2類は口縁端部を上方に擒み上げ、下方に垂下するもの。C3類は口縁端部を上方に擒み上げ、内傾する面を持つもの。C4類は口縁端部を上方に弱く擒み上げ、内傾する面を持つもの。C4類に比して端部の面は狭い。C5類は頸部外面の屈曲が不明瞭で、外傾して直線的に伸びるもの。C6

類は口縁端部を丸くおさめるものを一括した。

**壺D類** 内湾氣味の口縁を持ち、肩部があまり張らず、縱長の器形のもの。いわゆる「八幡山式」の範疇で捉えることができる〔渡邊2001〕、東北系と北陸系の折衷土器。

#### b 壺形土器

**壺A類** 口縁部有段・短頭で、(擬) 四線文を施すもの。

**壺B類** 口縁部有段・短頭で、無文のもの。口縁の伸びが長いもの。

**壺C類** 口縁部有段・短頭で、無文のもの。口縁が内湾氣味に伸びるもの。

**壺D類** 口縁部有段で、広口になるもの。頭部の長いもの(D1類)、短いもの(D2類)がある。D1類では口縁部が長く伸びるものが多い。

**壺E類** 口縁部有段の長頸壺を一括した。口縁部の長さで2つに区分できる。E1類は口縁部の長いもので口縁部が直線的・外傾するものもしくは外反するものがある。E2類は口縁部の短いもので、段というよりは端部の面取りの範疇で捉えることができる。口縁端部を内傾氣味に引き出すもの(274)、上下に引き出し面を持つもの(166・253)が見られる。その他、E類の肩部でヘラ描きを持つもの(189)が1点見られる。

**壺F類** 口縁部有段で端部に面を持ち、ハケ原体による刻み目状の刺突を施す。1点(300)のみ確認した。近江系の受口状口縁壺の系譜を引くものと考えられる。

**壺G類** 口縁部断面が「く」の字状のもの。

**壺H類** 「無頸壺」。口縁部が短く上方に伸びるもの。

**壺I類** 体部にスタンプ文・刺突文を持つ壺。小型品が多い。

**壺J類** 体部中半に突帶を持つ小型壺。

**壺K類** 細頸の壺を一括した。口縁部資料が少ない。

**壺L類** 口縁部の断面形状が「く」の字状の小型壺。点数は少ない。

#### c 鉢形土器

**鉢A類** 口縁部有段で(擬) 四線文を施すもの。口縁が長く外反するもの(21)、外傾して直線的に伸びるもの(140)、直立氣味に伸びるもの(163)がある。

**鉢B類** 口縁部有段で、無文のもの。外面をミガキ調整する。

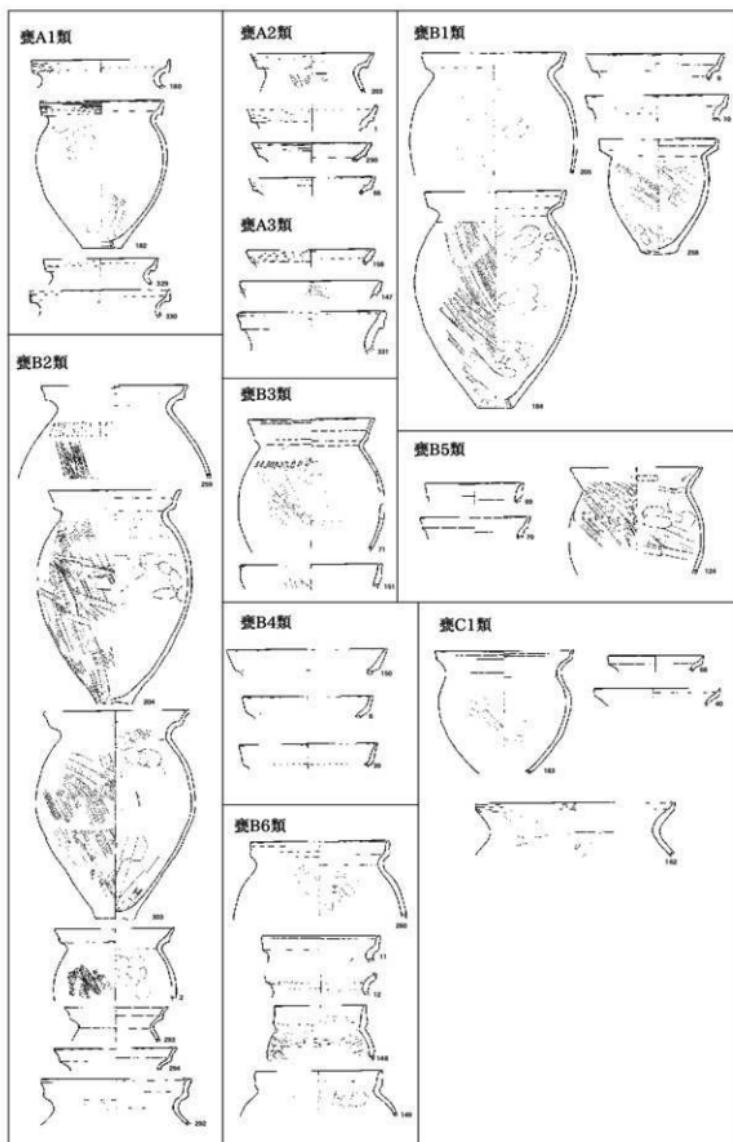
**鉢C類** 口縁部有段で、受口状のもの。端部に内傾する面を持つもの。赤彩されるものが多く、刺突文を持つものもある。

**鉢D類** 口縁部有段だが、段が外面のナデにより作り出され不明瞭なもの。口縁部内湾氣味のものが多い。

**鉢E類** 内湾氣味の器形で平底のもの。

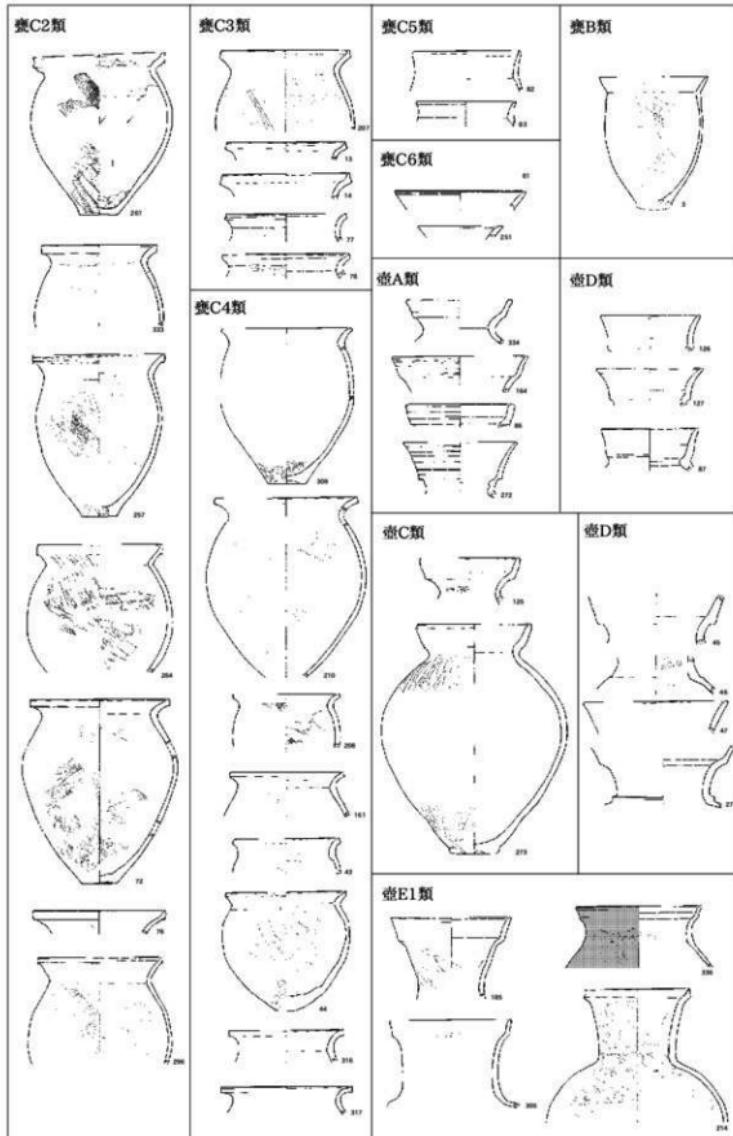
#### d 有孔鉢形土器

出土数は少ないが、有段で平底のもの(216・219)や丸底に近いもの(326)が見られる。



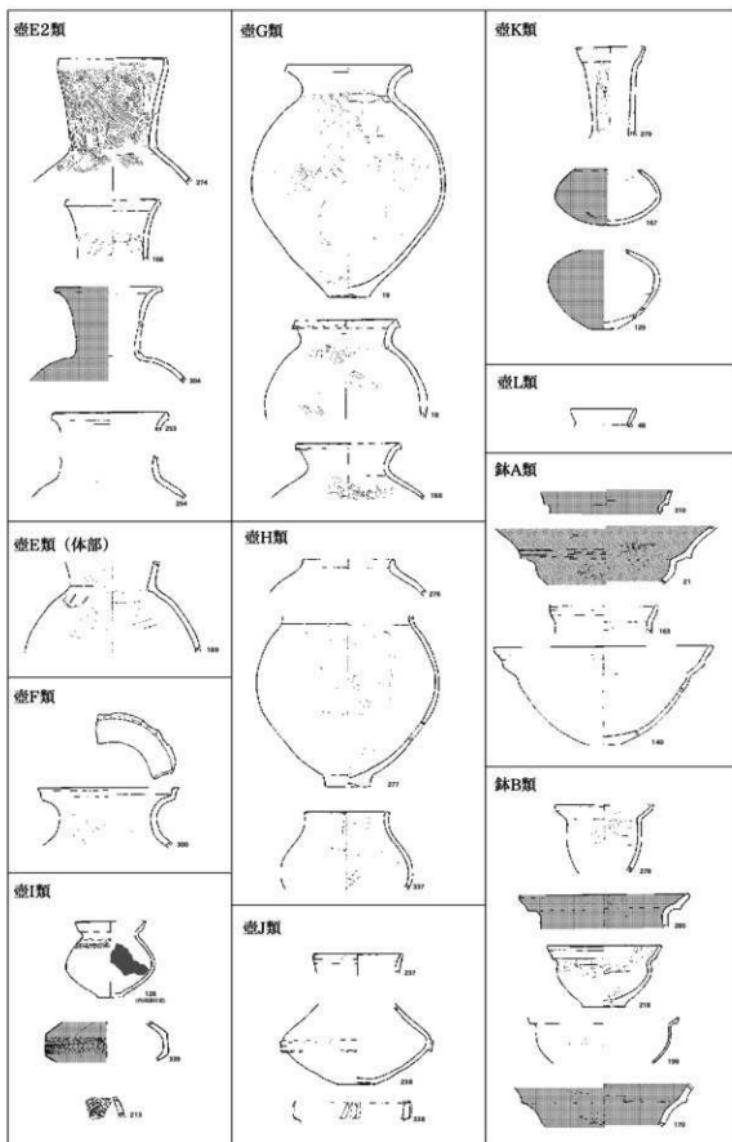
第9図 弥生土器分類図(1)

[S = 1 : 6]



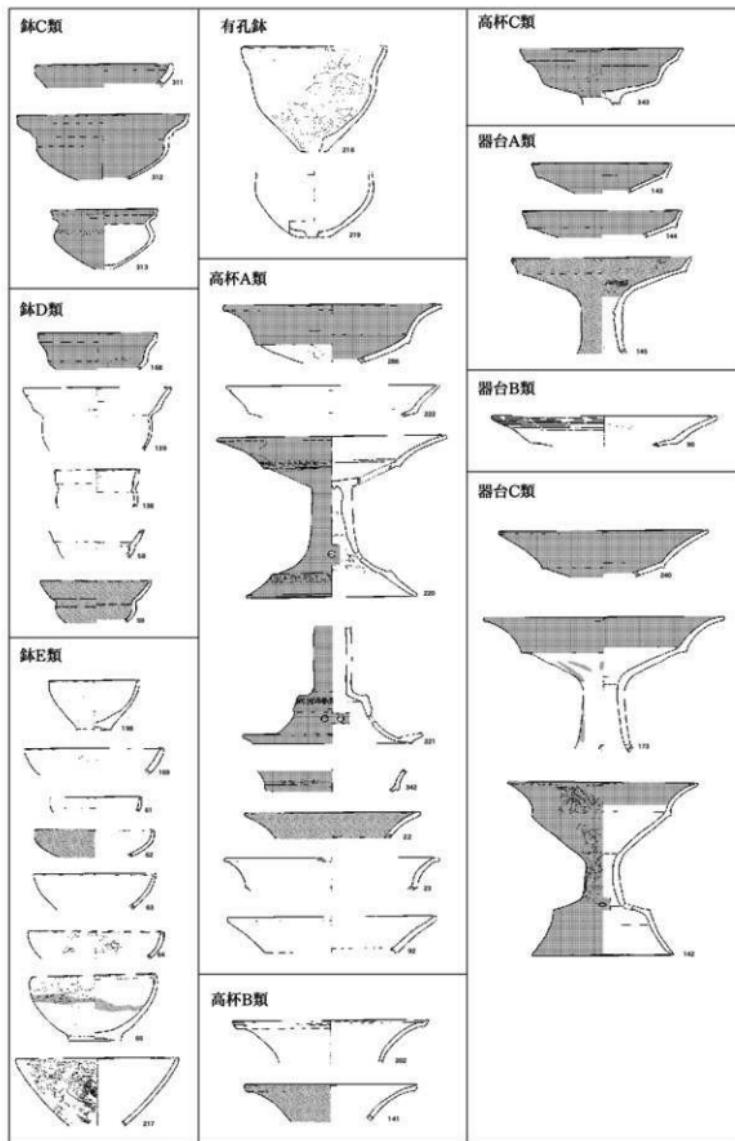
第10図 弥生土器分類図(2)

[S = 1 : 6]



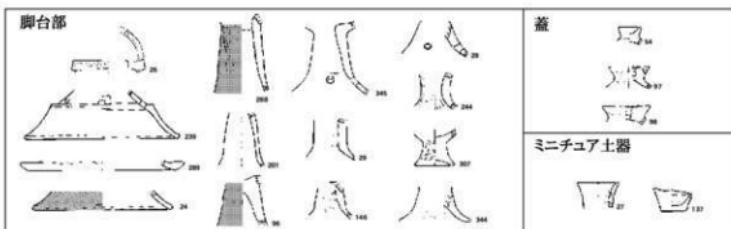
第11図 弥生土器分類図(3)

[S = 1 : 6]



第12図 弥生土器分類図(4)

[S = 1 : 6]



第13図 弥生土器分類図(5)

〔S=1:6〕

## e 高 杯

高杯A類 杯部有段で、口縁部が長く外反するもの。杯部のみのものが多く、脚部の形状は不明であるが、220では脚部も有段で、段の稜付近にスタンプ文（溝文・鋸歯文）が施される。221は棒状の脚で脚台の段部にスタンプ文（溝文）が施され二孔一对の透孔を持つ。

高杯B類 外反する杯部を持ち、口縁端部を上方に摘み上げるもの。

高杯C類 口縁部有段のもの（343）。1点のみである。

## f 器 台

器台A類 受け部が有段で、段部（口縁部）が短いもの。

器台B類 杯部有段で外反し、（擬）凹線文を持つもの（90）。1点のみである。

器台C類 受け部が有段で、段部（口縁部）が長く外反するもの。脚部も有段のもの（142）がある。

器台D類 受部段の側面にスタンプ文（溝文）を持つもの。

## g 脚 台 部

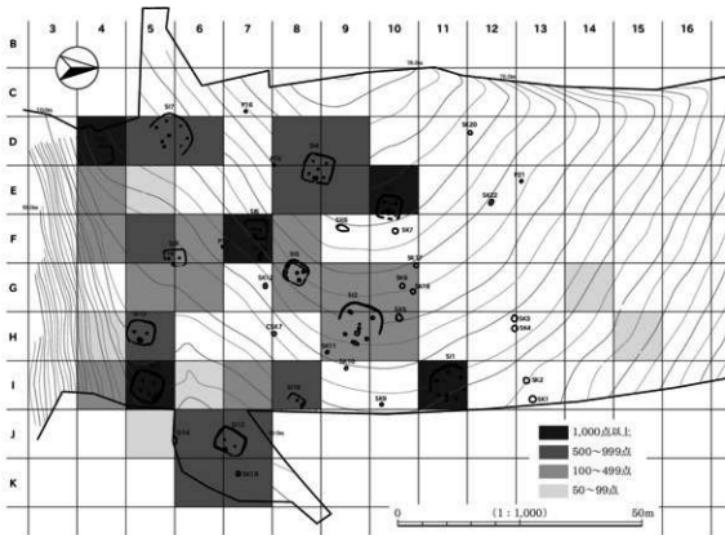
器種の判別が困難なものも含むため、高杯・器台の脚部、鉢・壺類の台部を一括した。26・239は有段の脚部で、26は爪形の圧痕文が巡る。289は裾端部の上方に平坦面を持ち、断面三角形状となるもの。その他、柱状（288）、脚上部は柱状で裾部が大きく開くもの（345・201・29）、八の字状に開くもの（146・96・244・28）、鉢か壺の台と思われる低脚のもの（307・344）などがある。

### 3) 分布状況

遺跡からは総計 25,733 点、口縁部残存率で 1976.5 / 36 個体（口縁部破片数 1,287 点）、底部残存率で 4269.5 / 36 個体（底部破片 439 点）の弥生土器が出土している。大別器種ごとの個数、比率は以下の表のとおりである。器種で最も多いのは甕で、全体の約 5 割を占める。中でも遺物の分布状況は第 14 図に示したとおりであるが、竪穴建物内およびその周辺部に集中しており、特に 3 号・11 号竪穴で多くの遺物が出土している。

器種	口縁部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)	底面/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)
有段甕	543	513	27.5%	39.9%	-	-	-	-
甕	514	337	26.0%	26.2%	2269	228	53.1%	51.9%
壺か鉢	0	0	0.0%	0.0%	36	2	0.5%	0.5%
小型甕	27	9	1.4%	0.7%	36	1	0.8%	0.2%
有段壺	243	78	12.3%	6.1%	-	-	-	-
台付甕	0	0	0.0%	0.0%	9	1	0.2%	0.2%
甕	249.5	94	12.6%	7.3%	973.5	104	22.8%	23.7%
小型壺	17	9	0.9%	0.7%	72	4	1.7%	0.9%
壺か鉢	0	0	0.0%	0.0%	72	3	1.7%	0.7%
有段鉢	77	33	3.9%	2.6%	36	1	0.8%	0.2%
有台鉢	0	0	0.0%	0.0%	5	1	0.1%	0.2%
有孔鉢	26	7	1.3%	0.5%	121	10	2.8%	2.3%
鉢	116	55	5.9%	4.3%	405	35	9.5%	8.0%
高杯	39	27	2.0%	2.1%	61	14	14%	3.2%
高杯か器台	48	90	2.4%	7.0%	52.5	29	12%	6.6%
器台	59	34	3.0%	2.6%	0	0	0.0%	0.0%
蓋	0	0	0.0%	0.0%	83	4	1.9%	0.9%
ミニチュア土器	18	1	0.9%	0.1%	38.5	2	0.5%	0.5%
合計	1976.5	1287	100.0%	100.0%	4269.5	439	100.0%	100.0%

第 1 表 下馬場遺跡出土弥生土器口縁部・底部残存率集計表



第 14 図 弥生土器出土量分布

#### 4) 遺物 各説

遺構出土土器は各遺構単位で記述し、それ以外は遺物包含層出土土器として一括した。各遺構出土土器群の年代観については後述する「第VI章まとめ 1 下馬場遺跡出土土器の年代観」に遺構ごとの年代観の変遷を示した。

##### a 穫穴出土土器

###### 1号竪穴(図版28)

計1,488点の土器片が出土した。そのうち口縁部破片が52点、底部破片が26点あり、口縁部残存率で120/36個体、底部残存率では205.5/36点の土器が出土した。南西側・北西側の壁際で完形に近い3・19等が出土している。甕類ではB類(4~12)が多く、A類の凹線文系のものと合わせると甕の約6割(口縁部破片数)を占める。3は甕D類としたもので、遺跡全体でも1点のみの出土である。内湾気味の口縁を持ち、東北系と北陸系の折衷様式である八幡山式C類〔渡邊2001〕に類似する土器である。口縁部には横ナデ調整は見られず、指の圧痕のみが見られる。19は口縁端部に面を持ち、面に放射状(斜方向)のハケメが見られる。頸部には指による連続した押圧痕が見られる。これらの調整痕は装飾的な意味を兼ねているとも考えられる。20は鉢B類で、丸みを帯び、深身の形状のもの。21は口縁部が長く外反し、段の側面に擬凹線文が施される。25の高杯は口縁部が外方に長く延びる。26は器台(?)の脚部で、段部の上面・側面に爪形の圧痕を持つ。27は外側に輪積み痕を残すミニチュア土器である。30~35は甕底部、36・37はミガキ調整が見られる甕底部である。

器種	口縁部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)	底部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)
有段甕	37.5	20	31.3%	38.5%	-	-	-	-
甕	16	8	13.3%	15.4%	101	11	49.1%	42.3%
小型甕	13	5	10.8%	9.0%	0	0	0.0%	0.0%
壺	34.5	10	28.8%	19.2%	99	12	48.2%	46.2%
高杯	5	2	4.2%	3.8%	0	0	0.0%	0.0%
高杯か器台	1	1	0.8%	1.9%	3	2	15.6%	7.7%
器台	13	6	10.8%	11.5%	0	0	0.0%	0.0%
ミニチュア土器	0	0	0.0%	0.0%	2.5	1	1.2%	3.8%
合計	120	52	100.0%	100.0%	205.5	26	100.0%	100.0%

第2表 1号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

###### 2号竪穴(図版29)

計1,121点の破片が出土した。口縁部破片は52点、底部破片は24点あり、口縁部残存率で106.5/36個体、底部残存率で231.5/36個体の土器が出土した。甕類ではC類が多く、鉢B・C類も目立つ。

器種	口縁部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)	底部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)
有段甕	3	2	2.8%	3.8%	-	-	-	-
甕	24	13	22.5%	25.0%	89.5	12	38.7%	50.0%
小型甕	14	4	13.1%	7.7%	36	1	15.5%	4.2%
有段鉢	3.5	3	3.3%	5.8%	-	-	-	-
壺	4	3	3.8%	5.8%	22	2	9.5%	8.3%
小型壺	7	5	6.0%	9.0%	0	0	0.0%	0.0%
有段鉢	5.5	1	5.2%	1.9%	-	-	-	-
鉢	43.5	20	40.8%	38.5%	52	6	22.5%	25.0%
高杯	2	1	1.9%	1.9%	0	0	0.0%	0.0%
高杯か器台	0	0	0.0%	0.0%	6	2	2.6%	8.4%
器台	0	0	0.0%	0.0%	0	0	0.0%	0.0%
蓋	0	0	0.0%	0.0%	26	1	11.2%	4.2%
合計	106.5	52	100.0%	100.0%	231.5	24	100.0%	100.0%

第3表 2号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

39は口縁部が比較的長く、外傾して伸びる。44は内面に指の圧痕（ナデ）が連続して残る。底部外面付近のみをケズリ調整する。46は二重口縁壺の頸部から肩部か。48は小型壺で砂礫の少ない精良な胎土である。56は大型の高杯で、別づくりの脚部を杯部に挿入したものか。鉢D類の58・59は頸部外面に強い横ナデを施すことにより外面の段を作り出している。59は口縁が内湾気味に伸び、内面が赤彩される。62は浅い椀状の器形のものか。65は竪穴北西隅から完形で出土した。外面は横方向のミガキ調整で仕上げられ、内外面に赤彩の痕跡と思われる帶状の赤色部分が見られる。

## 3号堅穴（図版29・30）

総計4,074点の土器片が出土した。口縁部破片は90点、底部破片は62点あり、口縁部残存率で173.5／36個体、656.5／36個体の土器が出土した。壺が80%以上（口縁部残存率・口縁部破片数）を占める。壺は有段のA・B類よりもC類が圧倒的に多く出土している。特にC2・C3類の口縁端部摘み上げを行うものが目立つ。壺では、A類(86)、B類(87)、E類(89)、G類(88)がある。

66・67は外面に擬凹線文を持つ。71は口縁部が比較的長く伸び、端部は丸くおさめ、外方に引き出す。72～76はC2類で口縁端部に有段状の広い面を作り出す。C4類としたものを含めると広い面を作り出すものがC類では全体的に目立つ。87は外面の段が明瞭ではない。88は外面に横方向のミガキ調整が施される。90は外面の風化が著しいため不明瞭だが、杯部外面に擬凹線文を持つ。95は内外面赤彩され、杯部に段を持ち、段部に擬凹線文を施す。97・98は比較的大型の摘みを持つ蓋である。99～112は壺、113～119は壺の底部である。底部は上げ底のものが多い。119は鉢で、内面はミガキ、底外面に不整方向の線状痕が見られる。

器種	口縁部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)	底部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)
有段壺	39	26	22.5%	23.3%	-	-	-	-
壺	108	49	62.2%	60.0%	437.5	38	66.6%	61.3%
有段壺	10	4	5.8%	4.4%	-	-	-	-
壺	10.5	5	6.1%	5.6%	164	18	25.0%	29.0%
鉢	0	0	0.0%	0.0%	36	4	5.5%	6.5%
高杯や器台	2	2	1.2%	2.2%	1	1	0.2%	1.6%
器台	4	4	2.3%	4.4%	0	0	0.0%	0.0%
蓋	0	0	0.0%	0.0%	18	1	2.7%	1.6%
合計	173.5	90	100.0%	100.0%	656.5	62	100.0%	100.0%

第4表 3号堅穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

## 4号堅穴（図版31）

総計2,033点の破片が出土した。口縁部破片は80点、底部破片は42点あり、口縁部残存率で168／36個体。底部残存率で531／36個体の土器が出土した。壺が全体の約30%（口縁部残存率比）を占め、有段・非有段の比率はほぼ同じ位の割合である。高杯・器台が比較的多く、小片のため「高杯または器台」

器種	口縁部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)	底部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)
有段壺	21	15	12.5%	18.8%	-	-	-	-
壺	29	15	17.3%	18.8%	220	23	41.5%	54.8%
壺か器	0	0	0.0%	0.0%	36	2	6.7%	4.8%
有段壺	28.5	7	17.0%	8.8%	-	-	-	-
壺	2	2	1.2%	2.5%	54	3	10.2%	7.1%
小型壺	10	4	6.0%	5.0%	72	4	13.6%	9.5%
有段鉢	10	5	6.0%	6.3%	-	-	-	-
鉢	3	3	1.8%	3.8%	108	5	20.3%	11.9%
高杯	1	1	0.6%	1.3%	0	0	0.0%	0.0%
高杯や器台	20	11	11.9%	13.8%	5	4	1.0%	9.5%
器台	25.5	16	15.2%	20.0%	0	0	0.0%	0.0%
ミニチュア土器	18	1	10.7%	1.3%	36	1	6.7%	2.4%
合計	168	80	100.0%	100.0%	531	42	100.0%	100.0%

第5表 4号堅穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

としたものを含めると約27%となり、甕とほぼ同じ割合となる。

121は口縁部が上方に直線的に伸び受口状となる。124は口縁部有段で内湾気味に伸びる。125は壺C類で内湾気味の口縁部を持ち、段下部を稜状に引き出す。山陰地方系譜のものか。128は小型の有段壺（装飾壺）で外面に縦3段が1単位の列点（円形）刺突が見られる。内面中半に漆と思われる付着物が見られる。胎土は海面骨針を多く含み、砂粒等をほとんど含まない精良な土である。遺跡で通有の胎土とは異なるため搬入品と思われる。140は鉢Aとしたもので、口縁部外面は摩滅により不明瞭であるが擬凹線が2条確認できる。内面の屈曲部は稜のように尖った断面形状である。142は器台C類で、杯・脚部に段を持つ。杯部は脚部から外方に直線的に伸び、口縁部は大きく外反する。脚部の屈曲部付近に円形の透孔を持つ。143～145は器台A類としたもので、段の伸びが短く、段下部を稜のように引き出すものが定量見られる。内外面を赤彩する。

#### 5号竪穴（図版32）

総計466点の土器片が出土した。口縁部破片は33点、底部破片は8点あり、口縁部残存率で43.5/36個体、底部残存率で116/36個体の土器が出土した。器種は甕・壺・有孔鉢のみしか確認できなかつた。甕が8割弱を占め（口縁部残存率比）、有段のB4・B6類の口縁部直立もしくは直線的なものが目立つ。147は擬凹線系壺のA3類に分類したが、擬凹線は1条しか見られない。148・149は甕B6類で、頸部に強い横ナデを施すことにより段部を作り出している。148では指の圧痕が内外面に横方向に連続して見られ、体部は下方から上方に向かってケズリ調整する。151は頸部以下が不明であるが、口縁端部の形状や外面のわずかな稜の存在から3号竪穴出土の71の土器に類似した器形のものであると考えた。

154～156は甕底部、157是有孔鉢である。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
甕	6.5	2	14.9%	6.1%	108	7	93.1%	87.5%
有孔鉢	0	0	0.0%	0.0%	8	1	6.9%	12.5%
有段甕	34	30	78.2%	90.9%	-	-	-	-
有段壺	3	1	6.9%	3.0%	-	-	-	-
合計	43.5	33	100.0%	100.0%	116	8	100.0%	100.0%

第6表 5号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

#### 6号竪穴（図版32）

総計1,365点の土器片が出土した。口縁部破片は104点、底部破片は39点あり、口縁部残存率で95.5/36個体、底部残存率で209.5/36個体の土器が出土した。器種では壺類が多く、中でも長頸有段のE類が目立つ。158は擬凹線文（B）が施される。159は口縁部外面に凹線状の横ナデが施され、端部はほぼ水平な面を持つ。近江系譜で捉えることができるものか。162は大型の甕で、口縁端部を上方に引き上げる。164は壺A類で外面に擬凹線文（A）が見られる。166は壺E2類としたもの。口縁端部を上下方向に引き出し、内傾する面状となる。167は竪穴南東側で出土した外面赤彩の小型壺である。口縁部は残存していないが体部は完形で、チャート・緑色凝灰岩などの母指頭大の小礫（原石）が1

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段甕	9	3	9.4%	2.9%	-	-	-	-
甕	16.5	11	17.3%	10.6%	55	8	26.3%	20.5%
有段壺	10	7	10.5%	6.7%	-	-	-	-
壺	41	11	42.9%	10.6%	126	24	60.1%	61.5%
高杯か器台	7	4	7.3%	3.8%	18	1	8.6%	2.6%
合計	95.5	104	100.0%	100.0%	209.5	39	100.0%	100.0%

第7表 6号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

に入った状態で出土している。171は深みで口径が比較的小型の高杯である。172・173は受部有段の器台である。173は口縁部外面は全面赤彩が施されているが、受部下位は縱(斜)方向に帶(棒)状の赤彩部分が見られることから文様状に塗彩されていると思われるがモチーフ等は摩滅により不明である。174～176は壺底部、177は外方へ大きく聞くことから鉢の底部とした。178・179は外面にミガキ調整が見られる壺の底部である。

## 7号竪穴(図版33)

総計1,519点の土器片が出土した。口縁部破片は278点、底部破片は24点あり、口縁部残存率で165/36個体、底部残存率で253/36個体の土器が出土した。器種では有段壺が約4割(口縁部残存率比)を占め、擬四線文を持つもの(180～182・壺では187)が見られる。183は口縁端部を上方に強く擒み上げたことにより外反する有段状となる。184は内面にケズリ調整は見られず、すべて指の圧痕(ナデ)である。189(壺E類か)は肩部に記号文を持つ。記号文の種類は十字文・連続弧(三日月)文、U(V)字文、ジグザグ文、多条線文【北野1991】がある。施文器種は長頸壺もしくはその系譜を引くもの。施文部位は頸部付近が多いとされる【楠1989】。本遺跡例はU字形に近い形状であるが、U字の中央に線が入る「イカリ形」のモチーフの可能性がある。「イカリ」形は石川県押水町上田出西山遺跡【三浦1980】で出土例がある。190は壺K類(細頸壺)の体部と思われるが赤彩の有無は不明である。191～194は壺底部、195・196は壺底部である。197は蓋で外面赤彩でミガキ調整を施す。擒みは上部が窪む(環状の擒み)。199は口縁部(段部分)の残存状態が良くないため文様の有無は不明である。丸みを帯び、深身の体部を持つ。202は口縁端部が強く上方に引き出され、外面に面を持つ。面の中心に横ナデ痕があり、凹線状となる。

器種	口縁部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)	底部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)
有段壺	66.5	244	40.3%	87.8%	-	-	-	-
壺	1	1	0.6%	0.4%	142	16	56.1%	66.7%
有段壺	28	9	17.0%	3.2%	-	-	-	-
壺	36	8	21.8%	2.9%	74	5	29.2%	20.8%
鉢	13	6	7.9%	2.2%	37	3	14.6%	12.5%
高杯か器台	7	3	4.2%	1.1%	0	0	0.0%	0.0%
器台	13.5	7	8.2%	2.5%	0	0	0.0%	0.0%
合計	165	278	100.0%	100.0%	253	24	100.0%	100.0%

第8表 7号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

## 8号竪穴(図版34)

総計1,072点の土器片が出土した。口縁部破片は200点、底部破片は35点あり、口縁部残存率で179/36個体、底部残存率で312.5/36個体の土器が出土した。壺が約7割強(口縁部残存率比)あり、非有段の壺C類の比率が多い。有孔鉢の比率は竪穴群の中で最も高い。壺は明確に形が把握できるものはE類(214)のみである。203は擬四線(A類)が施される。内面はケズリ調整によると思われる砂粒の動きが

器種	口縁部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)	底部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)
有段壺	44	58	24.6%	29.0%	-	-	-	-
壺	87	123	48.6%	61.5%	126	11	40.3%	31.5%
壺	0.5	2	0.3%	1.0%	0	0	0.0%	0.0%
有段鉢	8	2	4.5%	1.0%	-	-	-	-
有孔鉢	26	7	14.5%	3.5%	72	2	23.0%	5.7%
鉢	9.5	5	5.3%	2.5%	48.5	6	15.5%	17.2%
高杯	3	2	1.7%	1.0%	61	14	19.5%	40.0%
高杯か器台	1	1	0.6%	0.5%	6	2	1.6%	5.7%
器台	0	0	0.0%	0.0%	0	0	0.0%	0.0%
合計	179	200	100.0%	100.0%	312.5	35	100.0%	100.0%

第9表 8号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

見られる。204～206は甕B類であるが、204は内面下部のみケズリ調整によると思われる砂粒の動きが見られる。205の内面はナデもしくはスリナデ調整のみである。207では体部内面の中半付近を横方向にケズリ調整する。212は小型の甕か。213は山形状もしくは波状の文様が見られることから装飾甕の可能性がある。214は頸部が縱方向のミガキ、肩部が横方向のミガキ調整が施されている。体部内面上位はケズリと思われる砂粒の動きが見えるが調整単位は不明である。215は有孔鉢で、底部から大きく聞く器形である。216は有段の鉢B類に類似した器形を持つ有孔鉢である。内外面下部にミガキ調整を施す。217は底部付近が残存していないため鉢D類とした。有孔鉢は一般的に被熱による器面の赤化や外へのススの付着が見られることから217についても有孔鉢の可能性もある。218は山陰系譜で捉えることができる。220・221は杯・脚部有段の高杯で、220は溝文D類【桜木1987】と銘文文のスタンプ文を併用する。221は溝文D類のスタンプ文のみである。溝文はいずれもZ字III A1類で、サイズはMに分類される。

#### 9号竪穴(岡版35)

総計1,116点の土器片が出土した。口縁部破片は36点、底部破片は53点あり、口縁部残存率で46／36個体、底部残存率で258.5／36個体の土器が出土した。甕が約65%を占め、そのうち有段系の甕が約3割を占めるが、器形が把握できるものは少ない。224～226は同一個体の可能性がある。237・238は同一個体で、口縁部有段長頸で体部中間に貼り付けによる突帯があり、台付ではなく平底のものである。口縁部に擬凹線文、体部の突带上に凹線文を持つ。228・231・232は甕の底部でいずれも上げ底である。229は粒子が細かな胎土を持つ。甕もしくは鉢の底部か。233・235・236は甕の底部である。233では内面にケズリ調整が見られる。234は底部有孔の鉢である。240～243は高杯で、有段・深身で外方に大きく聞くものが特徴的に見られる。

器種	口縁部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)	底部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)
有段甕	10	6	21.7%	16.7%	-	-	-	-
甕	29.5	9	44.6%	25.0%	133	27	51.5%	50.9%
壺	8.5	5	18.5%	13.9%	76	9	29.4%	17.0%
有孔鉢	0	0	0.0%	0.0%	27	5	10.4%	9.4%
鉢	0	0	0.0%	0.0%	4.5	1	1.7%	1.9%
高杯	4	13	8.7%	36.1%	0	0	0.0%	0.0%
高杯か器台	3	3	6.5%	8.3%	18	11	7.0%	20.8%
器台	0	0	0.0%	0.0%	0	0	0.0%	0.0%
合計	46	36	100.0%	100.0%	258.5	53	100.0%	100.0%

第10表 9号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

#### 10号竪穴(岡版36)

総計697点の土器片が出土した。口縁部破片は8点、底部破片は10点あり、口縁部残存率で23／36個体、底部残存率で102.5／36個体の土器が出土した。高杯・器台・鉢などの器種が見られず、甕・壺を主とする。246は有段無文で、内面に縱方向のケズリ調整が見られる。251は甕C6類の小型品か。甕ではE類が確認され、252と同一個体の253・254がある。255は甕の底部、256は細かな粒子の胎土を持つ甕か鉢の底部である。

器種	口縁部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)	底部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)
有段甕	2.5	1	10.9%	12.5%	0	0	0.0%	0.0%
甕	19	6	82.6%	75.0%	51	6	49.8%	60.0%
壺	1.5	1	6.5%	12.5%	15.5	2	15.1%	20.0%
壺か鉢	0	0	0.0%	0.0%	36	2	35.1%	20.0%
合計	23	8	100.0%	100.0%	102.5	10	100.0%	100.0%

第11表 10号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

## 11号竪穴（図版36・37）

総計2,670点と最も多くの土器片が出土した。口縁部破片は155点、底部破片は49点あり、口縁部残存率で362／36個体、底部残存率で620／36個体の土器が出土した。口縁部有段の壺・壺の比率が高い。

257は内面を横方向にスリナデ調整する。258は口縁部が頸部から外方に大きく開き、直立気味に上方に伸びる。口縁は比較的短い。259は口縁端部に内傾する面を持つ。肩部に刺突文を持つ。近江系の系譜で捉えられるもの。260は口縁が上方に直線的に伸びる。口縁部中央に凹線状の強い横ナデ痕が見られる。261・263・264は口縁端部を上下方に引き出した比較的広い面を持つ。261は内面をケズリ調整する。263は肩部に刺突文が見られる。265～269は壺の底部でいずれも底部上げ底状のものである。271は頸部に突帯が巡る。272は摩滅および器面の剥落のため不明瞭となっているが、擬凹線文の痕跡が見られる。273は口縁部が内湾気味に伸びる段を持ち、体外側は縱方向のミガキ調整を施す。274は壺E2類で内外面ともにハケ調整される。頸部上位で縱方向のミガキが若干見られる。275は口縁部上位はハケ調整を消すようにナデ調整が施される。276・277は同一個体の可能性があり、口縁部の立ち上がりがわずかしかない。広口壺とも分類できる器形であるが無頸壺とした。279は細頸の長頸壺で、外面は縱方向のミガキ調整が施される。278は口縁部端部を上方に摘み上げ、外面に凹線状の緩やかな窪みを持つ。280～283は壺の体部～底部で外面下部（底部側面）にミガキ調整が見られる。284は胎土が精良で、外方に大きく開く。壺か鉢の底部であると思われる。285・287は同一個体の可能性がある有段の鉢である。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段壺	148.5	55	41.0%	35.5%	-	-	-	-
壺	65	33	18.0%	21.3%	390	33	62.9%	67.3%
有段壺	94.5	27	26.1%	17.4%	-	-	-	-
壺	9	11	2.5%	7.1%	190	14	30.6%	28.6%
壺か鉢	0	0	0.0%	0.0%	36	1	5.8%	2.0%
有段鉢	20	19	5.5%	12.3%	-	-	-	-
鉢	2	2	0.6%	1.3%	0	0	0.0%	0.0%
高杯	20	7	5.5%	4.5%	0	0	0.0%	0.0%
高杯か器台	0	0	0.0%	0.0%	4	1	0.6%	2.0%
器台	3	1	0.8%	0.6%	0	0	0.0%	0.0%
合計	362	155	100.0%	100.0%	620	49	100.0%	100.0%

第12表 11号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

## 12号竪穴（図版38）

総計1,431点の土器片が出土した。口縁部破片は76点、底部破片は13点あり、口縁部残存率で189／36個体、底部残存率で139／36個体の土器が出土した。壺が6割以上を占める。有段・非有段の個体数は有段が若干上回っているが、ほぼ拮抗している。290は口縁端部上方に面を持ち、外面に擬凹線文を施す。291は外面に凹線文が見られる。295は小型の壺でC4類に分類した。296の壺は最大径が体部の中半、297は体部上半（肩部）に最大径を持つ。両者ともに頸部の屈曲が明瞭で外方に比較的長く延びる。300は壺F類としたもので、口縁部が受口状で端部に内側に傾斜する面を持つ。面にはハケ原体によるとと思われる刻目が施される。近江地方に系譜を持つ。本来は口縁部外側の段付近にハケ原体等で刺突文（刻目）を施すが、本遺跡では持たない。301は壺の底部で内外面にスリナデの痕跡が見られる。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段壺	66	29	34.9%	38.2%	0	0	0.0%	0.0%
壺	56	25	29.6%	32.9%	56	8	40.3%	61.5%
有段壺	9	1	4.8%	1.3%	-	-	-	-
壺	41	13	21.7%	17.1%	48	2	34.5%	15.4%
鉢	17	8	9.0%	10.5%	35	3	25.2%	23.1%
合計	189	76	100.0%	100.0%	139	13	100.0%	100.0%

第13表 12号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

## 13号竪穴（図版38）

計664点の土器片が出土した。口縁部破片は28点、底部破片は23点あり、口縁部残存率で68.5／36個体、底部残存率で250／36個体の土器が出土した。甕は有段のもののみで、約6割を占める。図化できたものは6点のみで、甕B2・壺E1・E2類が見られる。303は内面は主にスリナデ調整される。307は外側の風化が著しいため、成形時の指の圧痕のみしか確認できない。壺か鉢の脚台と考えられる。

器種	口縁部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)	底部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)
有段甕	41	17	69.9%	60.7%	-	-	-	-
甕	0	0	0.0%	0.0%	137	12	54.8%	52.1%
有段壺	7	2	10.2%	7.1%	-	-	-	-
壺	15.5	7	22.6%	25.0%	68	5	27.3%	21.7%
有台鉢	0	0	0.0%	0.0%	5	1	2.0%	4.3%
鉢	3	1	4.4%	3.6%	31	4	12.4%	17.4%
高杯か器台	2	1	2.9%	3.6%	0	0	0.0%	0.0%
蓋	0	0	0.0%	0.0%	9	1	3.3%	4.3%
合計	68.5	28	100.0%	100.0%	250	23	100.0%	100.0%

第14表 13号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

## 14号竪穴（図版39）

計131点の土器片が出土した。竪穴のごく一部の調査であるが、甕C類(309)、鉢A類(310)、鉢C類(311～313)等が出土している。311・312は内湾気味の口縁を持ち、端部は内側に傾斜する面を持つ。近江系の受口状口縁を意識したものか。313は受口状の口縁を持ち、口縁部(段側面)・肩部に刺突文が見られる。美濃系の可能性がある。

器種	口縁部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)	底部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)
甕	9	5	22.5%	50.0%	36	5	50.0%	83.3%
有段鉢	31	5	77.5%	50.0%	(鉢) 36	1	50.0%	16.7%
合計	40	10	100.0%	100.0%	72	6	100.0%	100.0%

第15表 14号竪穴出土土器口縁部・底部残存率集計表

## SX5・SK7・SX13・SK17・SK19（図版39）

いずれの造構も少量の土器しか出土していない。SX5では、図化した有段口縁甕(D2類:314)1点に加え、甕の破片5点が出土したのが唯一例外で、他の造構では図化したもののみしか出土していない。

部部破片が多く、詳細な時期決定は難しいが、竪穴出土遺物とほぼ並行する時期であると思われる。324はSX13出土土器で、部部中半に突帯を持つ甕(甕J類)であると推測される。突帯上にはV字様の刺突文が見られる。

器種	口縁部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)	底部/36	破片数	比率(残存率)	比率(破片数)
甕	3	5	42.9%	55.6%	7	1	100.0%	100.0%
有段甕	4	4	57.1%	44.4%	0	0	0.0%	0.0%
合計	7	9	100.0%	100.0%	7	1	100.0%	100.0%

第16表 SX5出土土器口縁部・底部残存率集計表

## SX8（図版39）

口縁部破片数で38点の土器片が出土しており、口縁部残存率で72／36個体の土器が出土している。有段系の甕A・B類は少なく、C類が多い。いずれも端部に面を持つ。319は内面にケズリ調整が見られる。320は部部外面に目の粗いハケが見られる。321は不整形であるが底部平底の鉢E類である。322は内面にケズリ調整、底部には線状痕が見られる。325は甕の口縁・底部で、口縁部は摩滅により調整不明であるが、底部付近の外側にはミガキ調整が見られる。326は部部内湾気味に伸び、砲弾型の器形の有孔鉢である。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段鉢	2	2	2.8%	5.3%	-	-	-	-
壺	44.5	26	61.8%	68.4%	108	6	65.5%	50.0%
壺	15.6	7	21.5%	18.4%	7	2	4.3%	16.7%
有孔鉢	0	0	0.0%	0.0%	14	2	8.5%	16.7%
鉢	10	3	13.9%	7.9%	35	2	21.3%	16.7%
合計	72	38	100.0%	100.0%	164	12	100.0%	100.0%

第17表 SX8出土土器口縁部・底部残存率集計表

## b 包含層出土土器（図版40）

豊穴・土坑・性格不明遺構を除く、遺物包含層からは口縁部破片で35点、口縁部残存率で112／36個体の遺物が出土している。壺の比率が7割近くを占める。出土位置状況は先に挙げたグリッド別分布状況から概観すると、豊穴から少し離れた場所のものが多く、器種も337～339の壺・343の高杯など豊穴出土遺物で欠落する精製器種（赤彩含む）が目立つ。細かな位置関係が不明なものが多いが、集落内（野外）での祭祀に用いられた個体である可能性も考えられる。330・331は凹線状の大きな窪みの中にごく浅い沈線状の窪みが数条平行して見られる。横ナデの可能性もある。333は口縁端部を上下に引き出して面を持つ。337は外面は精緻なミガキ調整、内面はハケおよびケズリ（スリナデ？）調整する。338は全体部中半の突帯部分と思われる外面に貼り付けによる棒状浮文が見られる。339も壺体部と思われる。体部外面にスタンプ文（溝文と上下対向する鋸歯文）が施される。342高杯の杯部（有段）と思われるが、段側面にスタンプ文（溝文）が施される。343は外表面赤彩される有段鉢状の高杯である。体部は横方向のミガキ調整が見られる。

器種	口縁部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）	底部/36	破片数	比率（残存率）	比率（破片数）
有段鉢	19	5	17.0%	14.3%	-	-	-	-
壺	6	4	5.4%	11.4%	36	1	34.3%	11.1%
有段壺	45.5	13	40.6%	37.1%	-	-	-	-
台付壺	0	0	0.0%	0.0%	9	1	8.8%	11.1%
壺	30	9	26.8%	25.7%	30	6	28.6%	66.7%
有段鉢	2.5	1	2.2%	2.9%	-	-	-	-
鉢	5	2	4.5%	5.7%	0	0	0.0%	0.0%
高杯	4	1	3.6%	2.9%	0	0	0.0%	0.0%
蓋	0	0	0.0%	0.0%	30	1	28.6%	11.1%
合計	112	35	100.0%	100.0%	105	9	100.0%	100.0%

第18表 遺物包含層出土土器口縁部・底部残存率集計表

## c 繩繩文類似土器（346・347）

346・347は同一個体である。347は、12号豊穴の覆土から出土した。胎土は直径1～3mmの白色の混入物（石英・長石）を多く含み、明らかに遺跡内の他の土器群とは異なる土であるため、搬入品であると思われる。県内では五泉市大倉山遺跡〔五泉市史編集委員会1994〕、中条町兵衛遺跡・四ツ持遺跡〔水澤1998〕、柏崎市（旧西山町）内越遺跡〔大森1983〕、巻町南赤坂遺跡〔前山・相田2002〕、新潟市（旧豊栄市）椋遺跡〔未発表〕などがある。

横方向の弧状のモチーフを描く点で北海道白老町アヨロ遺跡出土土器などに類似し、恵山式土器の影響を受けた土器であると思われる。時期的には後北C1式に比定される資料であると思われる<sup>1)</sup>。両者ともに地文を施した後に沈線文・刺突文を施す。346では条の走行とは無関係に2本1単位の弧状の沈線文が描かれる。その沈線文の間には円形（D字状？）の刺突文が施される。347は地文のうち、弧状の沈線とその下位には平行する沈線文が描かれる。下馬場遺跡の縄繩文土器については、後北C2・D式併行期で

1) 石川日出志氏のご教示による。

あるとの指摘がされている〔水澤1998；前山1999〕。

### C 縄文・その他の時期の土器

総計3,622gの土器が出土した。時期的には縄文時代早期・前期・中期・後期・晚期と、量的には少量ずつながら長期間にわたる遺物が出土している。それぞれの点数・重量の割合は以下の表のとおりであるが、小片・無文のものが多く、時期の特定が難しいものは時期不明とした。縄文早期の分布範囲は5E・5Gグリッド付近で5点以上あり、その他では大グリッドあたり1～2点が出土している。全体的な傾向としてはグリッド6列以南で出土量が多い。調査前の現況では5・6列以北は後世の牧草地造成により遺物包含層が削平されていたことから、分布量の差異は地形変動の影響によるものが大きいと推測される。

#### 早期（348～356）

348～355は早期前葉～中葉の押型文系土器、356は沈線文系土器である。348は外側面に横位の山形文が密接せず施文される。349は外側面のみに山形文を持つ。文様下部が無文となっているため、密接しない文様構成であると考えられる。350～354は菱目文である。350・351では文様間の無文域が見られることから、山形文と同様に密接しない文様構成であると考えられる。355は稍円文が施文されているが小片のため文様構成は不明である。356は沈線文系土器で、山形状に施文した刺突文（原体は貝殻か）が2条（上部にも数条続くか？）見られる。下部の区画内に貝殻腹縁文を横位施文する。

#### 前期（357～361）

前期の土器群は早期と類似した地点に多く、4～5D・Eグリッド付近で多く出土している。357～359は、胎土に纖維を含み、非結束の羽状縄文を施すものである。360は山形・横位の結節状浮線文を施す。前期末（十三普提式）に比定される。361は

底部で外側面に絡糸条の圧痕が見られる。

#### 中期（362・363）

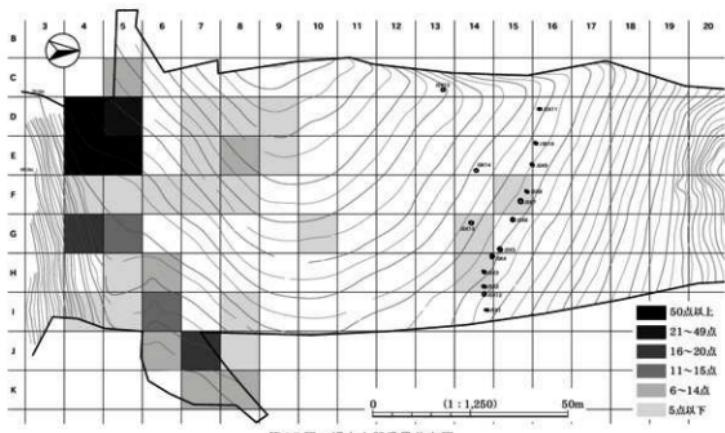
全体量が少なく、とりわけ分布範囲が集中する箇所は認められないが、グリッド6列以南の遺物包含層残存部分で主に出土している。362は口縁端部および口縁部から縦に垂下する降帶上に連続爪形文を持つ。半隆起線による横区画が見られる。363は斜方向の集合沈線が見られる。ともに中期初頭に比定される。

#### 後・晚期（364～373）

分布範囲は4・5D、4E、7Jグリッドである。大グリッドあたり5～10点が出土している。364～366は同一個体である。口縁部は無文である。367・368は同一個体で、口縁部に稍円状の突起を持ち、口縁部内面にはナデによる沈線状の窪みが見られる。体部外側には隆起線文(工字文)が見られる。

(複数グリッドにかかるものは合計)									
大グリッド	早期	早期～前葉	前葉	中期	後葉	後葉～晚期	晚期		
4D	1		28	8			6	46	89
4E	2	1	58	2			10	24	97
4F				2				2	4
4G	1							18	19
4I	1							3	4
5C								6	6
5D			6		3		10	4	23
5E	7		37					6	50
5F	2								2
5G	11							2	13
5H	1				1			3	5
5I								4	4
6F			4						4
6H								7	7
6I	1		5					5	11
6J			5	1				1.5	7.5
7D	1								1
7E								3	3
7F			1					1	2
7J	1		2	2	8			3.5	16.5
7K					8				8
8D			1				0.25	1.75	3
8E	1		2.5				0.25	5.75	9.5
8F			1						1
8I			1						1
8J				1					1
8K		2	6					1	9
9D		0.5					0.25	0.25	1
9E		1					0.25	0.25	1.5
10G		2							2
14G								4	4
14H	1			2					3
15F								1	1
地点不明					2			1	3
総合計	31	1	169	32	11	1	27	164	416

第19表 時期・グリッド別縄文土器出土点数一覧



第15図 縄文土器重量分布図

371は口縁端部に沈線が1条あり、その下位は無文帶である。372・373は同一個体で、山形の突起を持つ彫の口縁である。

#### 時期不明 (374・375)

374は底部で側面に1条の沈線を巡らせる。375は上器片円盤で曲線状の沈線が見られる。

#### 弥生中期 (376~378)

中部高地系(栗林式: 弥生中期後半)の土器群であると思われる〔中島1994; 石川2002〕。376・377は同一個体である。斜め方向の櫛描が見られる。横羽状文の一部であると思われる。377は斜め方向の櫛描が施される。破片下部に横方向の沈線状の窪みが1条見られる。横方向の直線文の一部である可能性がある。378は地文の縄文のうち山形文が施される。

### D 弥生時代の石器・石製品

各竪穴から砥石・磨石類を中心とした石器が出土しており、その他軽石製研磨具・台石等がある。石材はいずれも搬入品と考えられる。

石器・石製品群の組成は各竪穴間で相違が見られ、大きく分けて3つのタイプに区分される。①砥石と磨石類を主体とする竪穴(2・3・5号竪穴)、②砥石・磨石類のほか管玉製作工程品(ヒスイの分割品も含む)を持つ竪穴(4・6・11・12号竪穴)、③管玉製作工程品が主体となる竪穴(1・7号竪穴)がある。

1・7号竪穴ではとりわけ多くの管玉工程品が出土している。そのほとんどが打削や形削などの工程階のもので、剥片・チップ類が他の竪穴に比べ圧倒的に多い。1・7号竪穴では研磨のための砥石類はほとんど出土せず、他の竪穴で多く出土していることから、形削などの打削の工程と研磨の工程が竪穴ごとに分業化されていた可能性も考えられる。

基本的にこの項で弥生時代の石器として取り扱ったものは主として竪穴建物などの遺構から出土した石器・石製品である。遺物包含層出土の石器は縄文時代~弥生時代までの遺物を含んでおり、これらの中にも弥生時代の石器が含まれている可能性がある。しかし、磨石類が多く、時期的な区分が困難であるため「E 包含層出土石器」として基本的に別項に記載する。一部、弥生期の可能性が高いと判断したものは本

項で記載する。

竪穴出土石器・石製品のうち、ドットで取り上げを行ったものについては掲載外遺物を含め、竪穴ごとに種別（器種）・石材・法量を巻末の観察表に記した。また、各竪穴ごとの石器の数量・組成表も合わせて記している。竪穴ごとの石器・石製品を含めた全体観はこちらを参照されたい。また、出土量の多い砂岩製の砥石については粒度の違いで大きく3つに区分し観察表に記載した。①粒径1~2mm（またはそれ以上）の砂粒が混じるもの（粗）、②一般的な砂岩のイメージのもので、粒径1mm以下の砂粒のもの（中）、③シルト岩に近い極めて粒の細かなもの（細）で、同一の砥石の中でも、砂岩の性質により粒度の違いがある場合は主要な使用部分の粒度により分類・記載した。

### 1) 石器

a 有溝砥石 (1~16)

固化した16点の内、13を除くその他すべては豊穴から出土した。石材は9が凝灰岩、15が泥岩で、それ以外はすべて砂岩である。溝の断面形状から断面V字状もしくは鋭角なもの(1~3・6・10~16)、半円形のもの(5・7)、半円形とV字状もしくは鋭角な溝、幅1~2mmの線状の溝(線状溝)が併存するもの(4・8・9?)に分類される。その他、浅い穿孔が見られるもの(13・14)、敲打が見られるもの(15)がある。

1の表面は分割面、2の表面は破面であり、破損部分の再利用をもしくは意図的に打削し、研磨面の更新を行っている可能性がある。4は表面・右側面に半円に近い溝を持ち、表面にはさらに幅の狭い線状の溝が見られる。6は表面の上部側縁に8は大型の砥石で、表面に断面半円に近いものが見られるが、裏、

第20表 遺跡出土石器石材・種別一覧

両側・上・下面是V字状の溝を持つ。9は上下が原石の丸みを残し、それ以外の4面を使用している。表面は断面V字状に近いが、裏面・右側面は丸みを帯びている。10は大型品で、左側が粗粒、右側が中粒で、右側で破損している（接合して図化）。右側の中粒部分が研磨により皿状に窪む。窪んだ面に線状の溝が若干見られる。11は上側縁に剥離痕を残すが、剥離面にも部分的に研磨痕が見られる。剥離により研磨面の更新を行ったものか。13・14は錐状の工具によると思われる直径1~3mm、深さ2~3mmの断面円錐形の孔を持つ。孔の表面は平滑で回転運動によるものと思われる。13は2か所、14は9か所を見られる。弥生後期の玉作では穿孔に鉄製の針が用いられることが報告されており【富田1997; 野島・河野1997】、これらの孔も穿孔の工程と関連する可能性がある。近隣の裏山遺跡でもこうした孔を持つ砥石が1点出土している。しかし、孔が使用面の平坦部だけではなく、丸みを帯びた側縁近くにもあり、穿孔の台として使用したとは素材の固定・安定性の面から考えにくい。穿孔具の先端調整（研磨）等に用いたのであろうか。15は、表面に研磨痕・線状痕、表面上部から左側面上部にかけて敲打痕が見られる。表面右下の側縁には研磨による平坦面を持ち、裏面方向からの研磨とも合わせて断面形が尖る。16は右・下側面が破断している。表・裏・左が使用面で、左・裏は凹石として使用した痕跡が見られる。

#### b その他砥石 (17~25)

図化した9点のうち、23を除くその他は豊穴からの出土遺物である。石材は22・25が凝灰岩、23が泥岩である以外、砂岩である。17は接合品で、表面以外は破断面である。表面には折断とは別の古い剥離痕が見られ、研磨を受けている。研磨面の更新のための剥離痕か。19は裏面に錐状工具による穿孔が見られる。21は大型・四角柱状のもので、4面を使用している。金属刃器によると思われる細かな線状痕が若干見られる。平滑な平坦面を持つ。表面は砂岩の粒度の相違により減滅の差が生じ、若干の凹凸が認められるが、概ね平坦な面である。22は表面に使用により緩やかに窪む。23は表面には細かな線状痕、裏面は剥離が見られる。裏面の剥離は部分的に研磨を受けている。24・25は小型・四角柱状のもので4面を使用する。24では側縁に原石面を残すほか、研磨面の更新・もしくは整形による古い剥離痕が研磨されきらずに残る。25は使用により側縁も整った角を持つ。形態的には古代以降の遺跡でも一般的に見られるような砥石（仕上げ紙）に類似する。左側面・裏面に古い剥離痕が残る。

#### c 台 石 (26~28)

いずれも豊穴の床面出土の資料である。26はヒン岩で下部は破断する。裏面は平滑で、線状痕が若干見られる。27は凝灰岩で、表面が上を向いた状態で出土している。ガジリにより線状痕の有無は不明であるが、平滑で若干の光沢を有する。28は砂岩で、表面中央部付近が使用により窪み、擦痕とその上部には敲打による表面の荒れが認められた。後述する34の磨石も同一の豊穴（6号）から出土しており、セットとして使用したものと推測される。用途については不明であるが、後述する玉作関連で、研磨剤として瑪瑙・玉髓が用いられることが報告されており【田海2000】、本遺跡においても研磨剤を作るために用いられた可能性も考えられる。

#### d 磨 石 類 (29~38)

35を除き、いずれも豊穴出土の遺物である。29は上側縁に敲打痕を持ち、表面中央の欠損部付近には凹痕を持つ。30は右側面に弱い擦痕が認められる（自然の可能性もある）。31は右側面に敲打痕、表裏は

擦痕が見られる。32は裏面に擦痕があり、平坦な面を持つ。33は表・右側面に擦痕があり、平坦な面状になっている。34は上・右側縁に敲打痕、表面中央に凹痕を持つ。35は左・下側面を除く全面に凹痕が見られるものである。ただし、これらの凹痕は繩文に通有のものと異なり、金属で抉り取られたように皿状に浅く窪み、表面平滑なものである。類似した磨石が裏山遺跡で報告されており、弥生期の可能性が指摘されている〔野水・加藤・石田2000〕。36も35同様に裏面に浅い窪み状のものが見られる。上面は敲打痕が見られ、主として下面に微細な擦痕が見られる。37は上面、38は下面が平坦で擦痕が見られる。

#### e 軽石製研磨具（41～45）

計5点すべてを図化した。面的に摩耗しているものが多いことから研磨具とされているものである。

近隣では裏山遺跡で165点（遺構内は27点）が出土しており、大きく分けて5つの使用痕跡が見られることが報告されている〔野水・加藤・石田前掲〕。①面状摩耗痕（表面が平らに摩耗した痕跡）②溝状擦痕（断面円形状の物体の摩擦による断面半円または弧状の痕跡）③筋状擦痕（鋭利な物体による切り込み状の痕跡）④刺突孔（錐・著状の物体による刺突痕跡）⑤円錐形穿孔（回転運動や抉り取りによるもの）があり、1つの研磨具の中に、複数の使用痕跡が見られる場合がほとんどである。

41は表裏面に鋭利な刃物による筋状擦痕・面状の擦痕、刺突孔が見られる。42は表面に面状と溝状の擦痕が見られる。円形の刺突痕跡も見られる。43は表面に筋状擦痕と円形の刺突孔、裏面には面状・溝状の擦痕が見られる。44は表面と左側縁に面を持つ。円形の刺突痕跡を持つ。45表面上部は鋭利な刃物により切り取られたように角を持ち、下部は面状の擦痕が見られる。裏面は円形の刺突が見られる。

#### f そ の 他

39は泥岩の剥片で裏面は原石面である。表面には上部と左右側縁に剥離が見られる。遺跡内では研磨痕を持つ泥岩が出土していることから、砥石の素材として持ち込まれた可能性がある。40は蛇紋岩で、裏面は原石面、表面は上下および左側面方向からの剥離が見られる。敲石の可能性があるが、裏面には敲打の痕跡は確認できない。46・47は上下方向からの剥離が見られるもので、断面扁平な形状である。形状からは石錘の可能性もあるが、46のように表裏に擦痕が見られ、研磨により扁平な形状となった可能性が高い。

### 2) 玉作関連資料

この項で取り上げるのは砥石等の工具類を除く、玉作（管玉・勾玉）の遺物である。とりわけ遺跡では1・7号竪穴建物を中心に鉄石英・緑色凝灰岩の管玉製作工程品、原石から研磨・穿孔までの一連の工程資料が出土している。施清分割技法は緑色凝灰岩の工程品で確認された（明瞭なものは1点のみ）以外は、すべて打削技法のみである。打削の特徴としては、定型化されたパターンはあまり見られず、石核由來の剥片もしくは両極打撃により作り出された扁平板状の素材を横置きにして分割し、角柱体を生み出すものである。分割面の観察からはコーン・バルブの発達しないものが多く見られる。技法的には古墳前期の玉作遺跡である柏崎市行塚遺跡の玉作技法（1類）により近い技法である。

#### a 鉄 石 英（48～88）

##### 原石・石核（48～50）

原石段階もしくは石核形成段階までの資料を一括した（ブランクも含む）。48は板状の石核で、平面形が

上下が平行・直線的になるように剥離したもの。右側面は原石面か。49は石核で、裏面は原石面を残す。原石の上下を平行になるように剥離した後、縦方向（表面上部：下から上方方向の剥離）に打ち割ったもの。左右側面には石核調整を施して方形に近い平面形を作り出しているが、表面には稜が残り断面三角形に近い形状となる。50は裏面が分割面、左側面上半と上側面に石核調整剥離を施す。右側面・左側面下半は原石面（古い剥離）である。

#### 両極打撃による板状素材 (51～59)

両極打撃により両極状石器に類似した平面方形で断面平坦な素材を作出する工程品を一括した。51は下側面に両極打撃による平坦面を持つ。裏面は原石面を残すが、右下部から剥離を入れ平坦面を作出する。下部には一部研磨の痕跡が見られる。52は裏面に両極打撃による平坦面を持つ。53は表面に上下方向からの両極打撃による剥離、右側面方向からの剥離が見られる。左側面は両極以前の整形の剥離か。54は表面に上下両極からの剥離が見られる。左側縁に微細剥離が見られる。55は表裏面に上下方向からの剥離が見られ、左右両側面は裏面からの打撃により直線的に分割される。56は表面に上下方向からの剥離が見られる。左右両側面は表裏方向からの打撃により直線的に分割されている。57は表面に左右方向、裏面に上下両極の剥離が見られ、平坦面を作出する。左側面は裏面方向からの打撃による分割面である。58は裏面に原石面を残す。左側面が節理面、右側面は表面方向からの打撃で分割された面である。59は裏面が素材面、上・下・左・右側面は分割面である。

#### 薄手の剥片で分割痕が見られるもの (87・88)

87は上下面が分割面で、バルブがあまり発達しない。88は上・左側面が分割面である。

#### 分割による角柱状素材 (60～67)

60は三角柱体に近い形状のもの。上面は素材面と思われ、摩擦痕が見られる。61は裏面右方向から分割剥離痕が見られる。左・右側面は素材面を残す。63は表・裏面に側面方向からの分離痕が見られる。64は裏面に素材面を残す。65は裏面に素材面を残す。左側面は表面方向からの打撃による分割面である。66は表・裏面に素材面を残す。左側面は表面方向からの打撃による分割面である。67は表・裏が素材面、右が表面方向、左が裏面方向からの分割痕跡が見られる。

#### 側縁剥離の見られるもの (68～73)

角柱状素材の側縁に連続した細かい剥離を施すものを一括した。68は正面に比較的細かな剥離調整をする。右・裏面はわずかに研磨の痕跡が認められる。69は表・裏面に素材面、上面は原石面を残す。表面の左・右・上面には連続した剥離が見られる。70は左・右側面が素材面で表面に細かな剥離が見られる。裏面は分割面である。71は表裏が素材面、左右両側面に側面剥離する。図では表現できないが、拡大鏡の観察では、裏面上部には針状の工具によると思われる打点が見られる。72は裏面が主要剥離面である。73は表面上部に素材面を残す。表面下部に細かな剥離が見られる。石核段階の調整剥離の可能性がある。

#### 研磨・穿孔するもの (74～86)

74は表面を研磨する。表・左面下部と裏面は原石面を残す。右側面は裏面方向からの分割面である。75は上・右側面が分割面である。その他の面は研磨されており、側縁剥離の痕跡等は見られない。黒褐色に近い発色の石材である。76では表裏面に研磨後の剥離が見られる。77は表面を研磨する。角柱状素材に比べて幅広で、左右側面が分割面であることから、通常の仕上げ工程の研磨ではなく、分割時の接地の安定性を増すために平坦面を作出したものである可能性が高い。78は四角柱状となる。79は上端部分が丸みを帯びている。80・81は下部を欠損する。82は穿孔段階の資料である。孔径は上部で径約1.5mm、

下部で約1mmである。83は細長のもので、遺跡内で明確に長い製品はこの1点のみである。両端に本格的な穿孔に先立つ予備的な穿孔（以下予備穿孔とする）と思われる径・深さ約1mmの孔が見られる。84は上部が欠損面である。半裁状に径の半分も欠損しているため孔の内部が観察できる。孔内面は上部の方向がわずかに太く、下部に向かって狭まる形状で、内面は非常に平滑で、光沢を有している。85は下部がわずかに欠損する。孔は上面では径約1.5mm、下面では約0.05mmほどしかない。印象材（歯科治療等に使用する型取りのための素材）による孔内部の型取りの結果（図版58カラー写真参照）断面細円錐形の孔であることがわかった。印象材表面も非常に平滑で、内眼的には線状痕等は見られなかった。86は表裏ともに剥離面で、穿孔段階での破損品の一部であるとも推測されるが、穿孔段階で長さを揃えるために打ち削られたもの的一部である可能性も考えられる。

#### b 緑色凝灰岩（89～107）

緑色凝灰岩製の管玉製作工程も鉄石英同様に打削技法が基本となるが、一部、弥生中期の段階からの流れを引く施溝分割技法の可能性があるものが含まれている唯一96の裏面右上部に長5mmで光沢を有する擦切（施溝）の痕跡が見られる。93・94・97は縦方向の剥離が見られるもので、いずれも上面が分割面であるため施溝の痕跡が不明だが、縦方向の剥離が見られる。

#### 原石～角柱状素材（89～93・97）

89は裏面に原石面を残す。下面を平坦に作り出しているが上・左・右面は原石面付近の白濁部分が占める。90は正面は節理面である。上面が平坦となる。左・右・下面是裏面方向からの剥離により直線的に調整しているが、右側面が他の面に対し斜めの状態に剥離面が形成されたため角柱状とはならなかった。91は表・裏面が側面方向からの分割面である。横断面は三角形状である。右側面には研磨痕跡が見られる。92は左・右面が表面方向からの分割面で裏面には素材面を残す。右側面の分割面では針先状の工具によるバルブが形成される。93は右側面が研磨により鏡面状の光沢を帯びる。下面是表面方向から、裏面は下面方向（角柱状素材の縦方向）からの剥離により平坦面を形成する。左側面は表面方向からの分割面である。表面は上下左右からの剥離が見られる。97は上面が研磨され鏡面状に光沢を有している。下面是素材面の平坦部をわずかに残す。表および左・右側面は下方向（縦方向）から剥離調整する。上面の研磨加工は、打削に対応する面の平坦化・安定化をはかる目的で行われたものと推測される。

#### 板状素材（94～96・98）

角柱状素材のうち、薄手で断面長方形の板状のものである。94は上・左・右側面が分割面である。裏面には素材面を残し、縦方向の剥離痕が見られる。95は平面長方形の板状に成形されている。いずれの面でも上下方向（縦方向）からの剥離（分割）は見られない。96は左側面に原石面を残す。右側面は裏面方向からの分割面である。98は表（右側）面と左側面は横方向からの分割痕が見られる。側縁に細かな剥離（側面剥離）が見られる。

#### 研磨・穿孔（99～107）

99は研磨段階のもので、右側面に横方向の剥離（分割？）痕跡が残る。100は研磨により多角柱状となるもの。101は白色を帯びた石材である。側面を幅約1～2mm程度の面取りにより多角柱状に整形している。上面に深さ0.05mmにも満たないかすかな穿孔（予備穿孔）の痕跡が認められる。102は白色を帯びた石材である。上下方向からの穿孔が見られるが貫通していない。103は流離構造がはっきり確認されるが、研磨工程品の中では最も緑色の強い石材を使用している。下部を若干欠損する。孔径は上面の孔

SI1 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数		30			3	27	155	3	7	225
鉄石英	重量(g)		38.43			5.88	31.86	5.23	24.05	124.75	230.2
緑色凝灰岩	個数	1	1		1	2	1	36			42
緑色凝灰岩	重量(g)	0.06	1.31		0.4	0.94	0.31	0.98			4

SI2 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数		1								1
鉄石英	重量(g)		1.13								1.13
緑色凝灰岩	個数									1	1
緑色凝灰岩	重量(g)									50	50

SI3 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数		4			1	2				7
鉄石英	重量(g)		8.65			0.63	1.56				10.84

SI4 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数		5								5
鉄石英	重量(g)		6.32								6.32

SI5 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数					1					1
鉄石英	重量(g)					0.18					0.18
緑色凝灰岩	個数	3				7				1	11
緑色凝灰岩	重量(g)		8.43				2.69			25.46	36.58

SI6 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数					1					1
鉄石英	重量(g)		0.41	192.4	77.22	0.37	15.66	83.97	107.83	180.32	16.32
緑色凝灰岩	個数	1	1	4		1	22	52		4	85
緑色凝灰岩	重量(g)	0.08	0.02	3.4		0.92	1.34	2.31		0.03	8.1

SI7 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数	2	101	19	2	9	81	3721	9	1	3944
鉄石英	重量(g)	0.41	192.4	77.22	0.37	15.66	83.97	107.83	180.32	16.32	672.65

SI8 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数		1							2	2
鉄石英	重量(g)			1.17			7.73			76.06	76.06

SI9 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数		1				4				5
鉄石英	重量(g)			1.17			7.73				8.9

SI11 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数			1							1
鉄石英	重量(g)										10.38
緑色凝灰岩	個数		2			1					3
緑色凝灰岩	重量(g)			3.01			0.19				3.2

SI12 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数		1				34	33	1		69
鉄石英	重量(g)			0.67			2.12	1.36	17.58		25.35

SI13 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角柱	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数		1				34	33	1		69
鉄石英	重量(g)		4.29				2.12	1.36	17.58		25.35
緑色凝灰岩	個数	1	8	2		1	37	193	1		243
緑色凝灰岩	重量(g)	0.04	5.43	3.42		0.3	20.89	6.41	8.13		44.62
緑色凝灰岩	個数						0.1		62.79	38.83	105.39

第21表 遺構別管玉工程品集計表(1)

遺跡全体 管玉工程品石材別組成表

石材名	完形品	欠損品	角材	両極	穿孔	研磨	剥片	チップ	石核	原石	合計
鉄石英	個数	2	186	25	3	14	199	3909	18	11	4365
	重量 (g)	0.41	326.21	94.3	0.77	23.22	205.56	114.42	329.27	158.96	1250.87
緑色凝灰岩	個数	3	2	18	3	4	69	281	4	7	392
	重量 (g)	0.26	0.06	21.58	7.09	2.16	25.52	9.7	70.92	114.32	252.01

第22表 遺構別管玉工程品集計表 (2)

がわずかに大きい。孔内部の型取りでは内面は平滑で、線状痕等は見られなかった。孔の断面（型取りによる推定）が中下半よりでごくわずかにふくらむことから両側穿孔の可能性もある。104では上面の孔が下面の孔に比べて径が大きく、103同様に孔が中下半よりでわずかにふくらむ。105は半裁状に欠損し、下部も欠く。孔内は平滑で線状痕等は確認できない。孔径は、上部から下部へわずかに狭まる。106は長さ0.5cmと101・102の約1/3、104と比べても約半分と短いものである。孔内部の型取りでは、下方に狭まる形状であることから、上面方向から穿孔されたと考えられる。107は欠損品で上部の一部であると考えられる。

### c ヒスイ (108~115)

ヒスイ関係の資料については微細な剥片資料を除きすべて図化・掲載した。遺跡ではヒスイ製の勾玉1点が出土している。製作途中の未成品は出土していないが、打削工程品が出土していることから、小規模な製作が行われていたと考えられる。108~111は原石である。110は全面に縦横に走る亀裂が見られ、表面も風化したように細かな荒れが見られる。こうした亀裂は加熱処理による可能性が高く、裏山遺跡でも同様の事例が確認されている【野水・加藤・石田2000】。112・114は擦切（施溝）の痕跡が見られるものである。111は表面に研磨痕が見られる。112は表面右上部に濃緑色の部分があり、この部分の抽出のために分割されたものと思われる。3か所の擦切溝が見られる。表面左上、右側面は施溝面で、研磨により平坦面が作り出されている。石材表面は黒味を帯びており、加熱処理された可能性がある。113は裏・左が分割面である。擦切痕は見られない。114は表面下部に擦切溝が見られる。115は勾玉の完形品で、裏面方向から穿孔される。表面の孔周辺は貫通の際に剥離した窪みが残る。孔の断面は円錐形に近い形状である。

### 3) 石 製 品

#### 丸玉 (116)

石材は黒褐色の滑石で、不整方向の研磨痕が見られる。上面は平坦で、下部に向かって丸みを帯びる。穿孔は上から下方向への片側穿孔で、孔内には横方向の細かな線状痕が見られる。

#### 石偶 (117)

石材は白色の流離構造が見られる石である。中半の左右側縁に両面調整し、くびれ部を作り出している。続縄文土器と共に伴することが多く、東北地方に類例が多く見られる。

#### 不明石製品 (118)

石材は泥岩で、裏・上下を欠損する。表面には研磨による斜め方向の線状痕が見られる。横断面の観察からは左右両側にすぼまり、残存する右側面には幅2.5mmの平坦面を持つ。表裏、左右が対称形となる製品の可能性もあるが、器種は不明である。

### 4) 鉄 製 品

鉄鏃1点・板状鉄製品3点・鉈1点・針状鉄製品9(?)点が出土している。すべて竪穴から出土してい

る。竪穴建物の項でも触れたが、2・3・9・10・11・13号竪穴では炉の他に複数の焼土面（焼土の集積および床面の硬化箇所）をもっており、金属刃器によると思われる有溝砥石の存在から、遺跡内での鍛冶工程の存在が推定できる。福井県林・藤島遺跡では幅1mm前後の微細な鉄製針が多数出土している。これらは微細造物や鍛造剥片・粒（球）状滓の採集を目的とした土壤の洗浄・磁石による選別によるところが大きい。調査時に玉作関連の遺物採取を目的とした土壤の水洗・選別は行っているが、磁石による微細遺物（小型製品・鉄片・鍛造剥片・粒（球）状滓）の選別を実施していないため、鍛冶関連遺物の有無は不明である。可視的なものでは4Eグリッドで鍛治津と思われる鉄滓1点が出土している。滓は梢円形で遺物表面に細かな気泡が見られる。表面に火床面に由来すると思われる黄灰色の粘質土が付着する。長さ2.1cm、幅1.7cm、厚さ1.0cm、重量3.27gと小型で、断面は椀状でいわゆる椀形滓の形状に類似する。裏面には、鍛造剥片と思われる皮膜状の微細な付着物が見られる。遺跡周辺では中世期と推定される炭窯を検出しているが、古代・中世の遺物がほとんど出土していないことから、弥生期のものである可能性もある。

#### 鉄鐵（119）

上・下は欠損しており形状は不明。下部は錆彫れにより地金の原形をとどめないが、上方では断面が両刃である。

#### 板状鉄製品（120・121）

120は厚さ約1～2mmで、上部から下部に向かって幅・厚さがすばまる形状である。上下は欠損している。表面には一部木質の残る部分が見られる。器種は不明である。121は断面長方形の板状の鉄製品で上下は欠損している。

#### 不明鉄製品（122）

122は断面長方形の板状で、上部は欠損している。下部は錆に覆われているためはつきりと木目が確認できないが、木質に挿入された部分である可能性がある。木質部分以外の部位で刃がつけられたような痕跡は確認できなかった。器種は不明である。

#### 鉈（123）

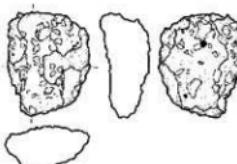
側面に若干の湾曲が見られる。断面形は、下部が長方形、上部は両刃になることから鉈とした。上下は破壊している。

#### 針状鉄製品（124）

全長で7.5cmあり、合計9本の針状の鉄製品が束となって錆着している。X線撮影像からは上下が欠損したのも含まれるが、先端が丸みを帯びて尖っているものも見られる。法量的には長さ5cm以上・幅2～3mmの長いもの（7本）と、表面中央付近に長さ約3cm、幅1mmの細く短いものの2種が存在するようである。針状の鉄製品については、福井県林・藤島遺跡〔富山1997〕、京都府奈良園遺跡〔河野・野島1997〕等が知られており、林・藤島例では穿孔具と押圧剝離具の大小2種の法量のものの存在が報告されており、本遺跡も同様の可能性がある。しかし、本遺跡の法量の大きなものは幅2mm程度と幅細で、押圧剝離具として耐えうる強度があるかどうか疑問が残る。法量の大きなものについては、形状そのままが製品ではなく、より細い針状に加工する前段の棒状の素材である可能性も指摘しておきたい。

### E 包含層出土石器

遺物包含層中からは、旧石器時代・縄文時代～弥生時代の石器、弥生時代の石製品・玉作関連資料が出



第16図 4Eグリッド出土鉄滓 [S=1:1]

土している。剥片石器類については形態から旧石器・縄文期の時期判断が可能であったが、磨石類については弥生時代の豊出出土遺物と比較して形態的な相違が認められないものが多く、時期判断が困難であるため、時期については言及していない。

報告は、地山ローム層から出土した旧石器時代の石刃2点、縄文時代の石鎌3点、石鎌未成品1点・磨製石斧5点・打製石斧1点・両極石器2点・不定形石器4点、時期不詳の磨石類33点を図化した。

## 1) 剥片石器

### 石刃 (125・126)

125は珪化した泥岩、126は安山岩である。いずれも剥離面を打面とする。125は表面の左側縁～右側縁下部に連続した微細剥離痕が見られる。126は風化により側縁の二次調整の有無は不明である。

### 石鎌 (127～129)

127は基部を欠損した有茎鎌であると思われる。表面での加工は縁辺部でとりわけ入念であるが裏面では素材の剥離面を残す。先端部ほど調整が細かく直線的で鋭い。128は凹基無茎鎌で、肩部が欠損している。側縁に細かな調整が施されている。

### 磨製石斧 (131～135)・打製石斧 (136)

132は使用により基部が欠損したと思われ、上部の厚みが薄い。再生のため研磨されているが、破損時の剥離（整形剥離の可能性もある）が表裏上部に残る。133は表裏面および刃部を研磨する。基部～両側縁は原石面が残る。134は表面右側縁と、裏面に整形剥離が残る。135は表面の右側縁・裏面の側縁に整形剥離を残す。左右両側面を研磨する。136は短冊形のもので、表裏に原石面を残す。

### 両極石器 (137・138)

いずれもチャートで、上・下2方向（極）からの剥離が見られる。137は上部に連続した剥離が見られる。138も表面上部・裏面下部に比較的細かな剥離が見られる。

### 不定形石器 (139～142)

139は下側縁に微細剥離1調整が見られる。上部が欠損しており、石鎌の未成品の可能性もある。140は円形に近い形状で側縁に調整剥離が見られる。141は横長剥片が素材で、表面右側縁に細かな剥離が連続する。打製石斧の調整剥片である可能性もあると思われる。142は珪化岩で、横長の剥片を素材とする。調整剥離痕は見られない。

## 2) 磨石類

143～146は「特殊磨石」とも称されるもので、断面形状が三角形に近い縦の側面稜部分を使用する。その他については使用痕跡の組み合わせにより細分した和泉A遺跡の分類（A～G類）[加藤1999]に基づいて観察・記述する。A類：磨痕のみ、B類：磨痕+凹痕、C類：磨痕+敲打痕、D類：磨痕+凹痕+敲打痕、E類：凹痕のみ、F類：凹痕+敲打痕、G類：敲打痕のみのものである。磨痕については表裏に見られる明らかに滑らかな面と側面に見られるざらついた平坦面の範囲をスクリーントーンで示した。しかし滑らかな面と自然面の識別基準は観察者の感覚的なものであるため、必ずしも客觀性を得たものではない。敲打痕も面的な広がりを持つものについてはスクリーントーンでその範囲を示した。

## 5 自然科学分析

### A 下馬場遺跡出土炭化物の年代測定

株式会社 加速器分析研究所

- 1) 年代値の算出にはLibbyの半減期5568年を使用する。
  - 2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前か表す。
  - 3) 付記した誤差は、標準偏差( $1\sigma$ )に相当する年代で、次のように算出する。
- 複数回(通常4回)の測定値についてX<sup>2</sup>検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根(標準偏差)と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差とする。
- 4)  $\delta^{13}$ の値は通常は質量分析計を用いて測定を行なうが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考として掲載した。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰; パーミル)で表したものである。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{AS} - {}^{14}\text{AR}) / {}^{14}\text{AR}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{AS} - {}^{13}\text{APDB}) / {}^{13}\text{APDB}] \times 1000 \quad (2)$$

${}^{14}\text{AS}$ : 試料炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度:  $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_s$ または $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_R$

${}^{14}\text{AR}$ : 標準現代炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度:  $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_R$ または $({}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C})_S$

$\delta^{13}$ は、質量分析器を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度( ${}^{13}\text{AS} = {}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C}$ )を測定し、PDB(白亜紀のペレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準とし、その値からのずれを計算する。

ただし、今回の分析では加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C}$ も測定しているため、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることがある。この場合には表中に「[加速器]」と注記した。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰)であるとしたときの ${}^{14}\text{C}$ 濃度( ${}^{14}\text{AS}$ )に換算した上で計算した値である。(1)式の ${}^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{AN} = {}^{14}\text{AS} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad [{}^{14}\text{AS} \text{として } {}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C} \text{を使用するとき}] \text{ または}$$

$$= {}^{14}\text{AS} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad [{}^{14}\text{AS} \text{として } {}^{14}\text{C} / {}^{12}\text{C} \text{を使用するとき}]$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{AN} - {}^{14}\text{AR}) / {}^{14}\text{AR}] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻など、海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的その貝と同一時代のものと思われる木片や木炭などの年代値と一致する。

${}^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC(percent Modern Carbon)がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のとおり。

$$\Delta^{14}\text{C} = (p\text{MC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$p\text{MC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age: yrBP)が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (p\text{MC} / 100)$$

分析試料・結果は以下の表のとおり。試料は4号竪穴(焼失建物)の炭化材、7号・12号竪穴覆土出土の炭化物、2号炭窯出土炭化物である。

DA Code No.	試 料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-40252 #590-1	試料採取場所 : 上越市大字下馬場字明日ヶ原 下馬場遺跡 試料形態 : 木片・炭化物 試料名(番号) : SI4-55	Libby Age (yrBP) : 1,950 ± 40 $\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -28.24 ± 0.99 $\Delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -215.3 ± 3.6 $p\text{MC} (\%)$ = 78.47 ± 0.36
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -220.5 ± 3.2 $p\text{MC} (\%)$ = 77.95 ± 0.32 $\text{Age (yrBP)}$ : 2,000 ± 30
	試料採取場所 : 上越市大字下馬場字明日ヶ原 下馬場遺跡 試料形態 : 炭化物 試料名(番号) : SI4-66	Libby Age (yrBP) : 1,960 ± 40 $\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -26.79 ± 1.09 $\Delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -216.4 ± 3.6 $p\text{MC} (\%)$ = 78.36 ± 0.36
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -219.2 ± 3.1 $p\text{MC} (\%)$ = 78.08 ± 0.31 $\text{Age (yrBP)}$ : 1,990 ± 30
	試料採取場所 : 上越市大字下馬場字明日ヶ原 下馬場遺跡 試料形態 : 炭化物 試料名(番号) : SI7-D-4	Libby Age (yrBP) : 1,770 ± 30 $\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -31.13 ± 0.88 $\Delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -198.0 ± 3.4 $p\text{MC} (\%)$ = 80.20 ± 0.34
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -208.1 ± 3.0 $p\text{MC} (\%)$ = 79.19 ± 0.30 $\text{Age (yrBP)}$ : 1,870 ± 30
	試料採取場所 : 上越市大字下馬場字明日ヶ原 下馬場遺跡 試料形態 : 炭化物 試料名(番号) : SI12-1	Libby Age (yrBP) : 1,900 ± 30 $\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -26.50 ± 0.64 $\Delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -210.8 ± 3.3 $p\text{MC} (\%)$ = 78.92 ± 0.33
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -213.2 ± 3.1 $p\text{MC} (\%)$ = 78.68 ± 0.31 $\text{Age (yrBP)}$ : 1,930 ± 30
	試料採取場所 : 上越市大字下馬場字明日ヶ原 下馬場遺跡 試料形態 : 炭化物 試料名(番号) : CSK2-1	Libby Age (yrBP) : 1,240 ± 40 $\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -24.00 ± 1.07 $\Delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -143.4 ± 3.9 $p\text{MC} (\%)$ = 85.66 ± 0.39
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -141.7 ± 3.5 $p\text{MC} (\%)$ = 85.83 ± 0.35 $\text{Age (yrBP)}$ : 1,230 ± 30

第23表 放射性炭素年代測定結果一覧

## B 下馬場遺跡出土炭化材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1) はじめに

新潟県上越市に所在する下馬場遺跡は、高田平野西縁部丘陵上に立地している。本遺跡では発掘調査の結果、弥生時代後期後半の竪穴住居跡や土坑、縄文時代の陥穴状土坑列、時期不明の炭窯等が検出されており、竪穴住居跡では、焼失等により住居構築材と考えられる木材が炭化、残存する状況や時期不明の炭窯では木炭が残存する状況が確認されている。

本報告では、竪穴住居跡や炭窯から出土した炭化材の樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

### 2) 試 料

試料は、弥生時代後期後半の住居跡(SI4)から出土した炭化材9点と、時期不明の炭窯(CSK2)から出土した炭化材1点の計10点である。なお、SI4-10に3片、CSK2-1に2片と複数の炭化材が認められたことから、これらの炭化材も樹種同定を実施することとした。したがって、分析試料は計13点となる。

#### ・ SI4

SI4は、丘陵の尾根上に構築された住居跡で、床面は一辺約5~6mの隅丸方形を呈する。炭化材は、住居跡北西部に集中し、特に北西隅付近に大型の炭化材が集中する傾向が認められる。これらの炭化材は、北・西壁に沿って出土するものと、壁から住居中央部方向に延びるもの等がある。分析試料は、これら大型の炭化材とともに、住居跡内北東側や中央付近の細片化した炭化材の集中より採取された試料である。

#### ・ CSK2

当遺構は、伏せ焼の炭窯である可能性が指摘されている。なお、遺物が共伴しないことから炭窯の操業時期は不明である。

### 3) 分析方法

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の削断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

### 4) 結 果

結果を第31表に示す。炭化材はすべて落葉広葉樹で3種類(クリ・カツラ・キハダ)に同定された。以下に各種類の解剖学的特徴等を記す。

#### ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1~4列、孔圈外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

#### ・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は極めて高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~30細胞高。

#### ・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

試料はいずれも孔囲部の保存状態が悪い。環孔材で、孔囲部は2～5列、孔囲外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～30細胞高。

遺構	時期	試料番号	形状	点数	樹種
SI4 弥生時代後期後半		1	板材	1	クリ
		6	角・棒状材	1	クリ
		63	板材	1	キハダ
		10	角・棒状材	3	クリ(3)
		16	角・棒状材	1	クリ
		55	板材	1	クリ
		56	板材	1	カツラ
		66	板材	1	キハダ
		64	板材	1	キハダ
		CSK2	時期不明(古代?)	1	2 クリ(2)

## 5) 考 察

第24表 樹種同定結果

### a 住居跡の木材利用

SI4から出土した炭化材には、落葉広葉樹3種類(クリ・カツラ・キハダ)からなり、中でもクリが比較的多い。分析試料とした炭化材は、出土状況や形状等の特徴から住居構築材と考えられることから、少なくとも3種類の広葉樹が住居構築材として利用され、クリが多く利用されていたと推測される。なお、炭化材は出土時の形状観察により板状、角・棒状に分類されている。この分類による樹種の傾向を見ると、角・棒状材はいずれもクリのみからなり、板状の炭化材は広葉樹3種類が認められた。本分析結果によれば、炭化材の形状により木材利用の差異があるよう見える。ただし、当住居跡では今回の分析試料を含め大量の炭化材が出土しており、本分析結果が全体の傾向を示しているか課題が残る。今後、この他の炭化材についても調査を行い、検証する必要がある。

ところで、当住居跡の炭化材を構成する木材の特徴を見ると、クリは重硬で強度や耐朽性が高い特徴を有し、カツラは強度は中庸であるが、木理が通直で加工性が高いといった特徴を持つ。キハダは、強度は中庸であるが、耐水性が比較的高い種類である。これらは、丘陵から山地の谷斜面等に生育している種類であり、遺跡周辺に生育していた樹木を利用したことが推定される。

上越市内では、弥生時代後期の高地性集落跡とされる裏山遺跡において、弥生時代の豊穴住居跡(6号住、7号住)2基から出土した住居構築材と考えられる炭化材3点の分析調査が行われている[パリノ・サーヴェイ株式会社2000]。この調査成果によれば、クリ(6号住)、キハダ(7号住)が認められているが、試料数が少ないため住居構築材に用いられた木材の種類構成や主体となる種類等の確認までには至っていない。本分析結果と比較すると、クリ・キハダの2種類が認められている点で共通することから、当該期の住居構築材として用いる種類として、これらの木材が普通に利用されていた可能性がある。

### b 炭窯の炭化材

炭窯は、古代の可能性があるが、時期の詳細は不明である。当遺構から出土した炭化材は、製炭された木炭の一部と考えられ、2点の試料はいずれもクリと同定されたことから、CSK2では少なくともクリを木炭の材料としていたと考えられる。

本遺跡の周辺地域の炭窯から出土した木炭の分析調査は、妙高山東麓に位置する関川谷内遺跡、前原遺跡、丸山遺跡、八斗薪原遺跡等で行われている[パリノ・サーヴェイ株式会社1998・2004a・2004b; 古環境研究所2004]。これらの調査成果によれば、関川谷内遺跡(妙高高原町)の平安時代の炭窯では全点がコナラ節に、前原遺跡(中郷村)の平安時代の所産と考えられる4号炭窯では、炭化材の大多数がブナ属に、丸山遺跡(中郷村)の時期不明の2号炭窯や八斗薪原遺跡(中郷村)の平安時代の所産と考えられる1号炭窯では全点がブナ属に同定されており、本遺跡の炭窯で認められたクリは確認されてい

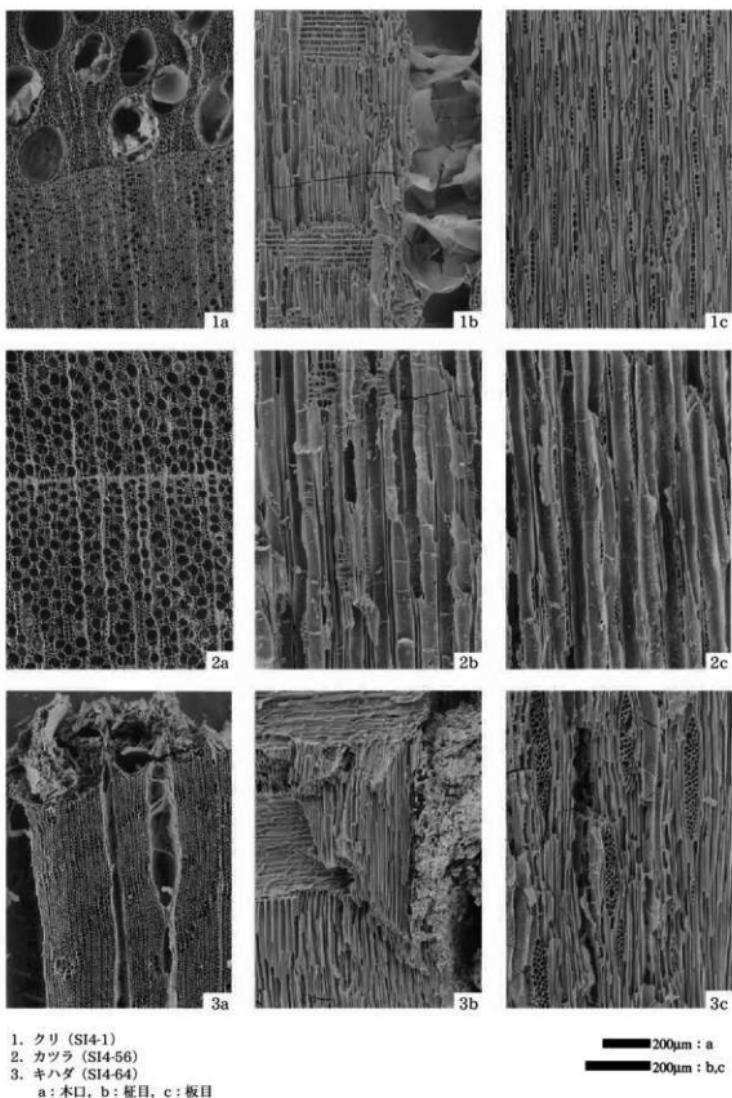
ない。

クリ、コナラ節、ブナ属の木材は比較的重硬な材質を有する点で共通するが、木炭にした場合にそれぞれ材質が異なる。コナラ節は硬く火持ちする炭に、ブナ属はやや軟質な炭に、クリは軟らかくガサガサして立ち消えする炭になるとされる〔岸本・杉浦 1980〕。

このように、木材の樹種により木炭の性質が異なる点を考慮すると、用途を考慮した目的的に樹種を選定し、それぞれ異なる木炭窯で焼成した可能性がある。今回の分析結果では、木炭の用途を明らかにするまでには至らないが、今後、本遺跡で検出された炭窯の性格を検討することも含め、さらに、炭窯から出土する炭化材等の分析や調査事例を蓄積し、炭窯と木炭の樹種の傾向を検討することが望まれる。また、木炭が利用される生産構造等についても同様な分析調査を行い、当時の木炭利用の用途を明らかにしたいと考えている。

#### 引用文献

- 岸本定吉・杉浦銀治 1980 『日曜炭やき師入門』 総合科学出版 p.250
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1998 「関川谷内遺跡における自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 上信越自動車道関係発掘調査報告書IV 関川谷内遺跡I』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.55-59
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2000 「裏山遺跡から出土した炭化材の年代と樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集 上信越自動車道関係発掘調査報告書VII 裏山遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.89-92
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2004a 「炭化材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第129集 上信越自動車道関係発掘調査報告書XII 八斗蒔原遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.28-29
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2004b 「炭化材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第130集 上信越自動車道関係発掘調査報告書XIII 前原遺跡 丸山遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.70-72
- 株式会社古環境研究所 2004 「前原遺跡出土炭化材の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第130集 上信越自動車道関係発掘調査報告書XIII 前原遺跡 丸山遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.46-53



第17図 下馬場遺跡出土炭化材顕微鏡写真

## 6 ま と め

### A 出土土器の編年的位置付け

遺跡からは口縁部残存率で 1976.5 / 36 個体の土器が出土した。遺物包含層が削平されていたこともあり、土器の大半が豊穴建物（床面もしくは堆積土）から出土したものである。小片が多いため、器形の復原が難しいものも含まれるが、高杯・器台や壺（有段）の口縁形状からある程度の先後関係を示す。遺構出土土器の時期決定にあたっては、滝沢編年〔滝沢 2000〕およびそれ以降の時期は川村編年〔川村 2000〕を基準とし、1~5 期の 5 段階で出土土器及び遺構の変遷を捉えた。頬城周辺の主要な遺跡・遺構の変遷、既往編年案との対応関係は第 33 表のとおりである。

#### 下馬場 1 期（法仏式古段階・滝沢 2 期古） 8・9・11・13・14 号豊穴出土土器群

壺 有段・四線系の A 類は少なく、有段・無文の B 類が目立つ。14 号豊穴を除く各豊穴から出土している B1・B2 類（近江系の流れのもの）では口縁部内面の稜が明瞭で、口縁部の延びはあまり顕著ではない。他の壺では、断面「く」の字状で口縁端部を上下に引き出し広い面取りをする C2 類が特徴的に見られる。264 の土器は後期前半（猫橋式・滝沢 1 期）の糸魚川市後生山遺跡 3 号住居跡出土土器に類似する。しかし、後生山例よりも球形に近い体部を持ち、肩部の刺突を欠く点は新しい傾向といえるか。

壺 口縁端部を有段状に摘み上げる E1 類（214・274 など）が見られる。柏崎市戸口 A 遺跡〔品田 1990〕（A II 段階）に多く見られる。

鉢 近江系譜の受口状口縁を持つもの（312）や有段の鉢 B 類（218・285 など）も目立つ。口縁・肩部に刺突文を持つ、美濃地方に系譜（条痕文系の受口鉢）が求められるもの（313）も含む<sup>1)</sup>。11 号・14 号は全体的に後期前半からの流れを引く器形が多いことから 1 期の中でも古い様相を示す。

高杯・器台 高杯 A 類、器台 A 類など杯・受部、脚部有段で棒状脚のもののみである。スタンプ文（満文・韻文）を持つもの（220・221）も見られる。口縁部が比較的長く外反するものも一部見られ（286）、時期的に 1 段階下がる可能性がある。

#### 下馬場 2 期（法仏式新段階・滝沢 2 期新） 1・6・7・10 号豊穴出土土器群

壺 摘四線系の A 類（1・180~182）は、1 段階と直接比較検討ができる資料が少なく（203：1 点のみ）、1 段階との明確な差異は確認できない。その他の壺では口縁端部の下方への引き出しが弱まる C3 類が増加し、端部を上方に引き上げるのが目立つようになる。C1 類（162・183）についても、上方の摘み上げを顕著に行うことによって有段状にしていることから、C3 類増加の流れの中で捉えることができるか。D 類の「八幡山式」に類似する土器も見られる。

壺 長頸の E 類（166・185・253・254）が続く。短頸・球胴の G 類（18・19・186）が加わる。G 類でも 18 と 186 を比較すると 186 では短頸化が進んでいる。K 類の細頸壺（167）も見られる。

鉢 鉢 A 類では、口縁部が大きく外反する 21 が見られ、1 段階の 310 と比較して新しい傾向を示す。

1) 赤沢徳明氏のご教示による。岐阜県関市砂行遺跡〔成瀬ほか 2000〕で時期的な変遷が示されている。施文方法は口縁部および肩部に列点刺突、肩部に櫛文を持つ砂行 II-1 もしくは II-2 段階（法仏併行期）に位置付けられている。

	壺	壺	高杯・器台	鉢・その他	有孔
下馬場1期					
下馬場2期					
下馬場3期					
下馬場4期					
下馬場5期					

第18図 下馬場遺跡出土土器の変遷図 (S=1:10)

下馬場遺跡		越後		頸城周辺の主な遺跡・遺構		南能登		南加賀		北陸型式
時期	遺構の変遷	【浅沢2000】	【川村2000】	頸城		【柄木1995】	【田島ほか1986】			法仏式
		1期		後生山3号住				1群	猫橋	
1期	S111・S114 S108・S109・S113	2期（古）		裏山4号墳穴 子安SX191・下削SX27	7期	1	2群			法仏式
2期	S11 S16・S17		2期（新）	上ノ平・矢代山 1・2号住		2				
3期	S13・S14	3期		百両山10号土坑・子安SE645		3	(+)			
4期	S12 S15・S112		4期			4				
5期	SX8			1段階 津倉田SX104 細田遺跡 2段階 上ノ平・矢代山24号住 3段階 下削SX1317・津倉田SK461 4段階 津倉田SK287	8期	1	3群			月影式
						2				
						3	4群			
						4				
					9期	1	5群			白江式
						2	6群			
						3	7群			
						4	8群			

第25表 下馬場遺跡整穴建物出土土器の編年的位置付け

楕状のE類（169・198）が加わる。

高杯・器台 高杯B類（202）、器台A類（173）など口縁部の発達が見られるものほか、前代からの流れの口縁部が短いもの（23）も含まれる。

#### 下馬場3期（月影式古段階・浅沢3期） 3・4号整穴出土土器群

壺 有段系の壺ではA類があまり見られず、無文のものではB3類（71）の口縁部の発達するものやB5類の口縁部段が不明瞭なものが増加する。その他、C類では、前代よりも口縁端部を上方に弱く引き出すC4類が目立つようになる。

壺 有段・短頭のB類（87・126・127）・C類（125）が見られるようになる。前代からのE類（89）も一部残ると思われる。

鉢 段が不明瞭なD類（138・139）が見られる。前代よりも小型化すると思われる。段内面の屈曲部が明瞭でなく、直線的に伸びるものが多い。

高杯・器台 器台C類では脚部が短くなる。新たにA類（143～145）が見られるようになる。

#### 下馬場4期（月影式新段階・浅沢4期） 2・5・12号整穴出土土器群

壺 有段系の壺では、B3類、B4類、B5類などの段が不明瞭なもののほか、上方に直線的に延びるB6類が目立つようになる。C4類では前代よりもさらに口縁端部の摘み上げが弱く、面取りの幅は前段階よりもさらに狭くなる傾向にある。

壺・鉢 壺ではD類が大半を占める。F類は1点のみ（300）。鉢は楕状のE類が多く、有段部が不明瞭なD類も残る。

その他 高杯・器台などその他の器種については小片が多く、様相は把握し難い。

#### 下馬場5期（白江式～古府クルビ式段階・川村1～4段階） SX8出土土器群

SX8出土土器群のみである。川村の3・4段階に対応する資料のみで、1・2段階に相当する資料は確認されていない。土器の上では若干の空白期が存在している。有段系の壺は見られなくなり、C4類で占められる。体部球胴の鉢（320）や体部砲弾形の有孔鉢（326）が見られる。

## B 玉作関係資料について

越後・佐渡地域は、出雲・丹後・加賀地方などとともに玉（ヒスイ製玉類・管玉等）の製作が盛行した地域で、57遺跡が確認されている〔田海2003〕。

越後では玉作遺跡の多くが海岸部に位置する。中期の管玉製作遺跡では、柏崎市下谷地遺跡が知られており、工程の復元案が提示されている〔斎藤1979・1983〕。その他、和島村大武遺跡〔春日1997：未報告〕、土坑や工房建物群を持つ上越市吹上遺跡〔木島・笛澤2003：本報告は未刊〕においても工程の復元が可能な資料群が出土している。後期では、糸魚川市後生山遺跡で平面円形の3号竪穴から玉作関連遺物が出土した。また、上越市裏山遺跡からも少量であるが管玉製作関連の遺物（ヒスイ製勾玉の工程品もあり）が出土している〔野水・加藤・石田2000〕。一方、佐渡では新穂玉作遺跡群の出土遺物による製作技法の検討〔計良1961〕や近年発掘調査が行われた平田遺跡の成果が報告されている〔田海2000〕。弥生以降の管玉製作については、古墳時代前期の遺跡である柏崎市行塚遺跡（吉井遺跡群）において製作技法の復元が行われている〔伊藤1985〕。

弥生時代後期の管玉製作工程については、これまで県内において資料数が限られていたこともあり状況があまり把握されていなかった。今回下馬場遺跡では、工程の復元が可能な資料群が出土しており、ここでは下馬場遺跡の玉作の工程とその特徴についてまとめる。

### 1) 下馬場遺跡の管玉製作工程

下馬場遺跡では鉄石英および緑色凝灰岩の管玉製作が行われているが、全体では石材の比率で約9割強を鉄石英が占める。使用石材の比率は、下馬場2段階で鉄石英の圧倒的高率に変化すると考えられる。第29図・第30図に鉄石英、緑色凝灰岩ごとの製作工程を示した。

鉄石英の管玉工程品の技法的な特徴としては、①打削のみで角柱状素材を得る、②両極打撃により扁平素材の作出、③扁平素材の分割による角柱状素材（四角柱体）の作出が挙げられる。扁平な素材→分割→角柱状素材という大枠は存在するものの、細部では多様な方を示す。

#### a 鉄 石 英

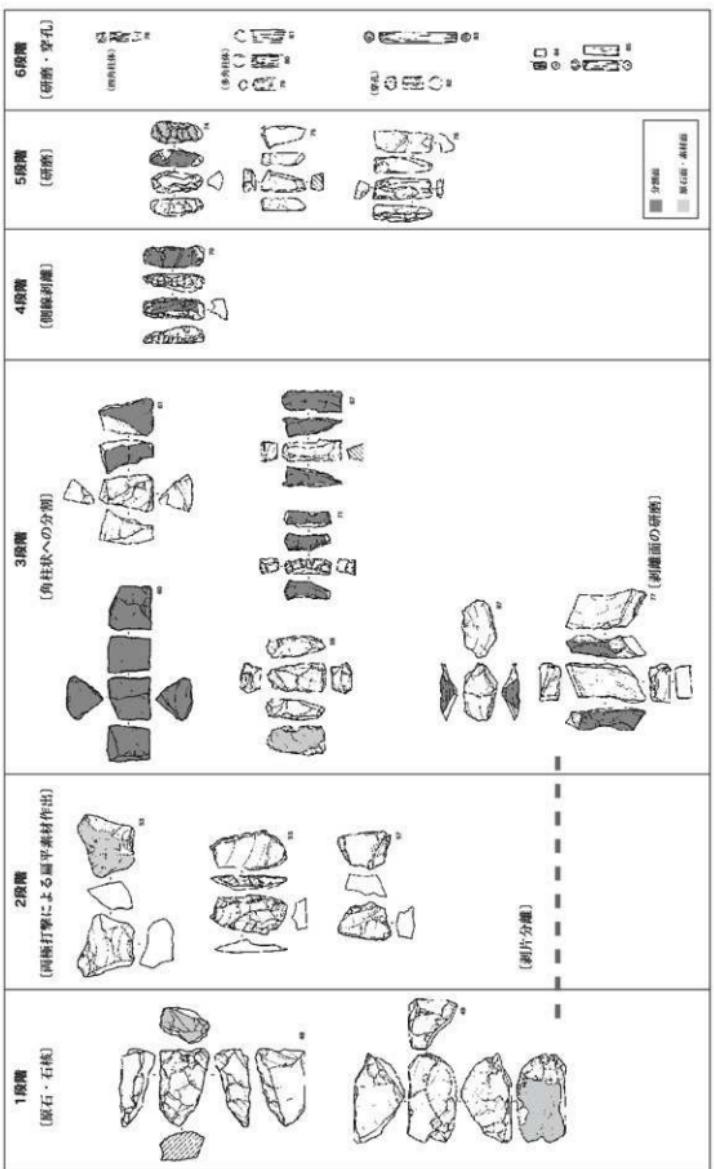
鉄石英の管玉工程については6つの段階に区分することができる。

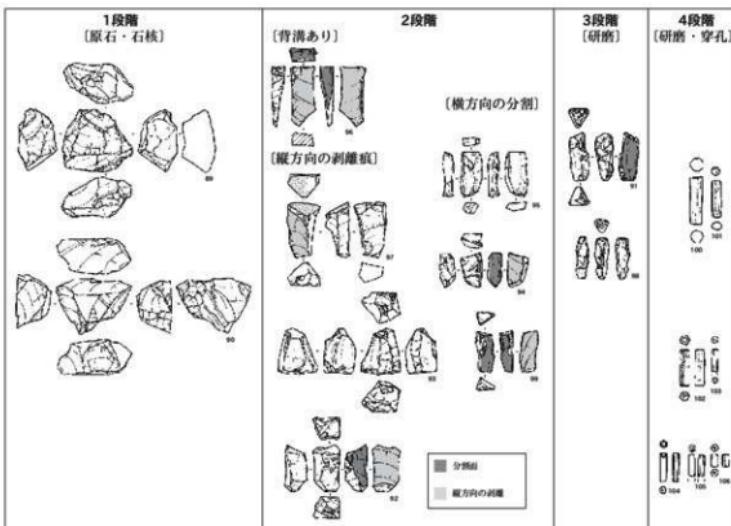
1段階は原石もしくは石核の調整段階の資料群である。遺跡で出土した原石は図化・掲載した以外のものでも大きさが5cmを越えるものはほとんど見られず、小型の原石のみである。

1→2段階の工程では、53・55・59など両極打撃により方形に近く扁平な素材を作り出す。下馬場遺跡では石核になり得ないような小さな原石が多いことから、原石を有効かつ最大限に利用するため選択された技法であると思われる。また、良好な事例が存在しないため図化していないが原石が比較的大きい場合の石核由来の剥片素材もこの工程に含まれる。

2→3段階では、両極状の素材、剥片素材など扁平素材を表裏面方向から分割し、角柱状の素材を作り出す。分割面は打撃によるコーンやバルブの発達が明瞭に見られないものが多い<sup>1)</sup>。70・77・67では

1) 馬場伸一郎氏のご教示による。「ドライバー工具」を使用すると打点付近に線状の痕跡が確認されることが指摘されている〔久田・馬場2003；宮田・馬場2004；馬場2004〕。他に針状工具による打点痕跡（62表裏、71裏面）の存在についてもご教示いただいた。こうした工具使用痕跡の把握には顕微鏡（低倍率）による観察が不可欠であるが、今回はミクロな観点での分析ができなかつた。





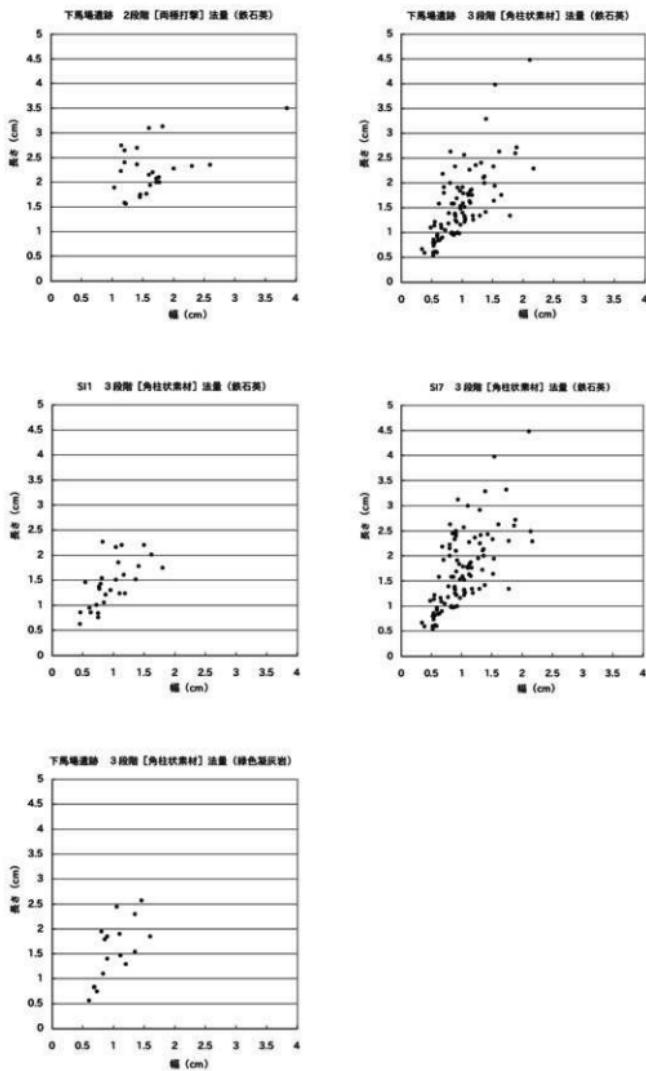
第21図 管玉製作工程（緑色凝灰岩）

扁平な工具（ノミかタガネ状の工具：鉄器か）による線状の打撃痕跡が見られる<sup>2)</sup>。

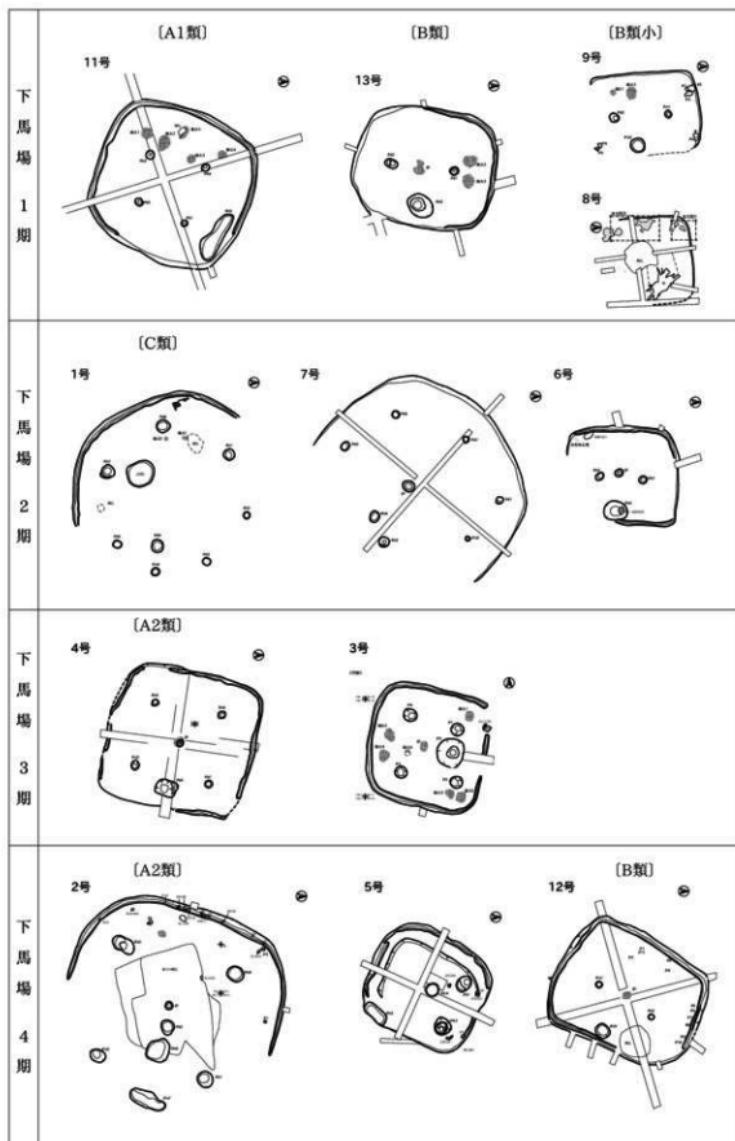
4段階は側棱剥離工程〔計良1961〕と呼ばれる側縁への連続した剥離を持つものである。一般的には角柱状に近い素材のねじれを取るために施されるという。出土資料中で典型的にこの工程の痕跡が見られるものは少なく、必ず行っていた工程であるとは考えにくい。その点では、中期段階の「諏訪田技法」〔寺村1993〕・「大中の湖技法（発堀湖周辺、近畿北部）」〔佐藤1970〕との共通性がある。

5段階は研磨、6段階は研磨および穿孔段階である。完形品は少ないが、研磨段階の資料からは大小2種類の管玉製作が行っていたと考えられる。また、穿孔はまず、82・83のように両面に予備的な穿孔のうち、本格的な穿孔が行われると思われる。84・85では孔の片側が広く、もう一方に向かって細くなる形状であり断面形状からは片側からの穿孔に見える。しかし、後述する緑色凝灰岩の工程では100のように両側穿孔のものが見られること、予備的な穿孔が上下両面に見されることなどから鉄石英においても両側からの穿孔が行われた可能性を指摘しておきたい。孔の断面は平滑に仕上げられており、穿孔時の孔の食い違い等は確認できない。細い工具で穿孔・貫通させた後、穿孔用とは別の工具で仕上げた可能性も考えられる。穿孔段階での工具の使い分けについては、河野・野島が京都府奈良岡遺跡の事例の検討で別工具による2段階の穿孔が行っていた可能性を指摘している〔河野・野島2003〕。なお、穿孔具については石針特有の穿孔方向に直交して生じる線状痕が見られないことから鉄製工具であると思われる。実際、穿孔具の可能性がある針状の鉄製品が13号竪穴から出土している。

2) 時期的に近い遺跡では富山県東砺波郡福岡町下老子篠川遺跡では周溝を持つ堅穴建物から玉作関連資料が出土している。実見の限りでは下馬場遺跡と同様に角柱状の側面に横方向からの打削の痕跡を残すものが見られる。



第22回 管玉工程品法量分布グラフ



第19図 下馬場遺跡竪穴建物の変遷 (S = 1 : 200)

第31図に2段階（両極状素材）と3段階（角柱状素材）の法量を示した。2段階では幅1.0～2.0cmの範囲に法量が集まるが、3段階にはいると幅がその半分の0.5～1.0cmの範囲に集まっており、分割による法量の減少が看取できる。長さに関しては2段階の半分程の1.0cm以下のものも見られるが、1.0～2.0cmの範囲のものが多い。資料がまとまって出土した1号・7号竪穴建物それぞれの3段階の法量は数値の集中範囲に大きな差異は認められない。ただし、7号で2.5cm以上の比較的長さの長いものが少量存在しており、6段階83の法量の製作に関わるものとも推測される。

### b 緑色凝灰岩

資料からは4つの段階に区分できる。扁平な素材を分割する点では鉄石英の工程と共に通するが、2段階とした資料群では96のように擦切（施溝）と分割に伴う縱方向（角柱に対する方向）からの剥離痕跡が典型的に見られるものや、擦切痕は見られないが92・93・97のように縱方向の剥離痕跡を持つものが存在する。1から2段階の一部の工程のみであるが弥生中期の玉作に盛行する施溝分割が残ると思われる。

### c 玉作と鉄製工具

弥生時代の鉄製工具の導入にあたっては、玉作が先導的な役割を果たしたという指摘【野島・河野2001】がある。玉作関連工具（穿孔具や分割具）で鉄製品の出土が認められた遺跡事例としては、京都府八木町池上遺跡【田代ほか2002】、京都府弥栄町奈具岡遺跡【田代1993；河野・野島1997】、福井県福井市林・藤島遺跡【富山1997】などが知られている。また、鉄製工具は確認されていないが、石川県塙崎遺跡・石川県小松市一針B遺跡【久田ほか2002】、猫橋遺跡などでは施溝分割に鉄製工具が使用されていた可能性が指摘されている【馬場2004】。本遺跡でも穿孔具もしくはその素材と見られる13号竪穴出土針状鉄製品やバルブの明瞭でない打削工程品の特徴から扁平な鉄製工具の使用が推測される。

## C 集落について

### 1) 竪穴建物の構造

越後における竪穴建物の構造については、都出比呂志の竪穴構造（主柱穴配置・炉の構造）の違いによる地域性の把握【都出1989】に基づき、越後の状況を検討した論考が、川村・品田・滝沢【川村1996・品田1992・滝沢1995】により提示されている。川村は新井市上ノ平・矢代山遺跡I・2号住居址を北陸と北信濃地城の折衷的な構造であると指摘したほか、滝沢は5・6期（新潟シンボ5・6期）での竪穴平面プランの方形化と求心構造への統一化の動きを指摘している。

下馬場遺跡の竪穴建物は、A類：平面隅丸方形で主柱穴が4基のもの、B類：平面隅丸長方形で2基主柱構造のもの、C類：平面円形（多角形の可能性あり）で環状に主柱穴を配置するもの、以上3つに分類できる（分類の呼称は【小池1998・小池ほか2000】のものをそのまま使用）。A類は柱穴と炉の配置関係から対称構造のA1類と求心構造のA2類に細分できる。B類については、長軸方向の規模で大小2つが存在する。能登の後期後半にも継続して存在するとされ、越後の類例は上ノ平・矢代山24号住居址のみである。また、C類の平面円形のものについては、玉作関連の打削工程品が多く出土しており、県内の事例では時期的に先行する糸魚川市後生山遺跡1号住居跡（滝沢1期、玉作工房と推定される：平面円形）との共通性が見られる。周辺地域の事例では、石川県宿東山遺跡6号住居跡（下馬場1～2期併行）【北野1987】で鉄製品・砥石などの集中的な出土から特殊性が指摘されているほか、富山県高岡市下老子篠川遺跡B6地区2号住居

跡やB5地区12号住居跡では玉作関連遺物が多数出土している遺構が平面円形のプランを持つ。平面積的に見ても規模の大きなものが多く、遺跡の中心的な建物として位置付けることが可能なようである。

## 2) 集落構造の変遷と遺跡の性格

今回の調査範囲内では、妙高市斐太遺跡群や上越市裏山遺跡と同じように、沖積面との比高差が約40mの高台に立地することから、先に挙げた2遺跡と同様に防衛的集落であると評価される。竪穴の時期的変遷は第33表・第28図のとおりである。当初は法式単一の遺跡と時期ごとの立地や建物の特色を挙げる。

1期はA1類の11号竪穴とB類の13・8・9号竪穴（規模大1・小2）で構成される。立地は丘陵南側の斜面際にまとまる。玉作は小規模ながら確認できる。13号では、比率的に緑色凝灰岩が鉄石英を上回る。針状の鉄製品のほか、針状の工具で穿孔された痕跡を持つ砥石が出土しており、玉作への鉄器の導入はこの段階ですでに行われていると思われる。

2期はC類の1・7号竪穴とB類の6号竪穴で構成される。立地は標高72～75m付近にあり、1・7号の中間に6号が位置する。玉作が最も盛行した段階で、1・7号で工程品、6号では工程品は少ないが玉作に関連すると思われる小環（チャート）などが多く出土している。玉作の素材は鉄石英が大半を占めるようになる。

3期は3・4号竪穴の時期で標高77m付近に2基が近接して立地する。建物の構造はA1類のみで構成される。焼失建物の4号からは凝灰岩製の仕上げ砥（25）、3号では炉以外に複数の焼土面が存在し、大型の砥石（10・21）や緻密で溝を持つ9号が出土している。これらは明らかに金属の加工に関連すると思われ、3期以降は玉作関連の遺物はほとんど見られなくなる。また、遺構出土ではないが、続縄文土器（346・347）・石偶（117）など北方系の遺物も出土している。土器の特徴から3期～4期（後北C4式崩・C2・D式中業）に位置付けられる。

4期は、規模の大きなA1類の2号竪穴と小規模で棚状遺構を持つ5号竪穴（A1類か）およびB類の12号竪穴で構成される。3期でB類は見られなかったが、一方、2号では、有溝の砥石（1～6・8）が大量に見られるようになるなど金属加工の痕跡はさらに顕著となる。

5期以降になると、調査範囲内で竪穴が確認されなくなる。時期的位置付けが可能なものとしてはSX8のみであり、明らかに遺跡は衰退している。この時期は滝沢の指揮する防衛的集落の消失・新集落成立の画期【滝沢1999】とも符合し、細田遺跡・津倉田遺跡・下割遺跡など沖積平野へ遺跡の分布は移っていく。

今回の調査範囲・遺跡周辺の尾根及び台地縁辺では、裏山遺跡・斐太遺跡で確認されたような環濠は発見されていない。竪穴跡が現況で半埋没状態の窪みとして確認できたことを考えると環濠も溝状の窪みとして認識されると思われる。こうしたことから推測すると下馬場遺跡では元々環濠を持たない集落である可能性が高い。

また、人々の活動によって生じる土器の廃棄場が確認されていない。立地から推測すると遺跡南北の沢斜面が適地と考えられるが、土器類は僅かに出土したのみである。調査範囲北側を中心に遺物包含層が削平を受けた影響も考えられるが、比較的包含層の残存状況の良かった調査範囲南側でも出土量は少ない。土器は竪穴建物に廃棄された土器が主であり、遺構毎の年代観の変遷からは一定の存続期間を持つものの、常住的性格の集落ではない可能性もある。下馬場のムラは「主村・本村」に対する「分村・支村」的な集落で、玉作関連や金属加工に関する石器および金属器の出土から、生産工房的（專業的な工房である可能性も含め）役割を担った遺跡であるとも推測される。

裏山遺跡については出土遺物の平時性から戦闘の軍事拠点としての砦といった性格よりも本拠の集落が所有する財の一時避難や管理保管の役割を担った遺跡〔小池2004〕との評価、斐太遺跡群については裏山遺跡・下馬場遺跡等の「親ムラ」としての拠点的な性格〔甘船2001〕が指摘されている。

頸城平野西縁の「防御的集落」は少なくとも裏山一下馬場-斐太を含めた一定領域の丘陵地帯の中で「親ムラ-支村」があり、それぞれが異なる空間機能・專業的役割を担っていたと思われる。

下馬場・裏山では墓域は確認されていないが、これらの集団の墓域が拠点的な集落に集約されるのかどうかも含め、今後の調査事例の増加と検討が待たれる。

## 第IV章 細田遺跡

### 1 調査の概要

#### A 遺跡の立地と周辺の地形

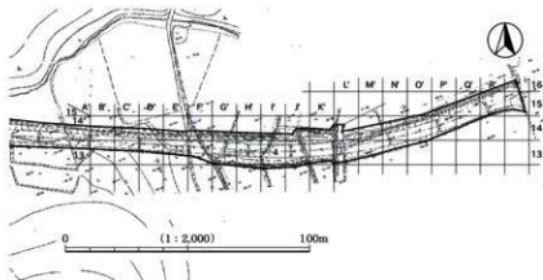
細田遺跡は西頬城丘陵の東端が沖積地に接する裾部（端部）から沖積地（低地）にかけて立地する。遺跡の現況は山林と水田・畑地、標高は30～35mである。南西側約600mに下馬場遺跡、西側の丘陵上～丘陵斜面部に黒田古墳群が存在する。遺跡の東側には青田川が北流し、北西方向に開く扇状地形を形成している。遺跡の低地部分はこの扇状地の扇側部にあたり、南西から北東方向にわずかに傾斜している。

#### B グリッドの設定

細田遺跡のグリッドは近接する黒田古墳群の調査グリッドを延長して設定した。黒田古墳群の国家座標の数値上の2点を基準に国家座標の軸に合わせてグリッドの軸方向を設定した。A点（2Jグリッド杭）[X=119529.849, Y= -24218.200] とB点（7Jグリッド杭）[X=119579.849, Y= -24218.200] である<sup>1)</sup>。グリッドは10m四方とし、南から北へ算用数字、西から東へアルファベットを昇順に付し、両者を組み合わせて「4D」のように表記した。

小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割して算用数字を付し、大グリッドに続けて「13G1」のように表記した。

杭	日本平面直角座標系第VII系（旧座標）	新座標 JGD2000系（計算値）
A点：2J杭	[X=119529.849, Y= -24218.200]	[X=119880.6052, Y= -24498.9466]
B点：7J杭	[X=119579.849, Y= -24218.200]	[X=119930.6043, Y= -24498.9461]



第23図 細田遺跡グリッド設定図

1) 国家座標値は旧座標系を使用しており、新しい座標系との対応関係は表のとおりである。第111集「黒田古墳群」中では7J杭の値が[X=119577.997, Y= -24206.774]となるが上記に訂正する。

## 2 基本層序

遺跡は黒田古墳群の所在する丘陵の裾部から沖積地への変換点に位置する。土層はG'グリッド付近を境に丘陵部分と低地部分に区分することができる。遺構の集中したA'～Fグリッドでは丘陵と同じ黄色系のローム土（①～⑥まで）が確認面土となっている。

低地部分では部分的に存在するIV層（灰色シルト：洪水層か）を間層として、III層（暗褐色土：古代遺物包含層）とV層（黒褐色土：弥生～古墳遺物包含層）の2時期の遺物包含層が存在する。場所によってはIV層が存在しない場所（特にⅢ～Ⅴ）も見られ、IVもしくはV層上面で明確な遺構は確認されなかった。遺構確認面はVI層の灰色シルト（黄灰色・黄橙色の場所もある）である。土層説明・堆積状況は第18図に示した。

## 3 遺構

### A 概要

細田遺跡からは古墳時代後期の土坑1基、古代（奈良・平安）の掘立柱建物4棟、井戸2基、土坑22基、溝5条、性格不明の落込み2基、中世の土坑1基、時期不明の土坑2基を検出した。その他、土色の違いによる明確な平面形は確認できなかったが、上層で古代の土器集中範囲1か所、下層で弥生時代末～古墳時代の土器集中範囲2か所を検出した。いずれも調査区北側寄りで、平面溝状・長梢円形状の分布範囲をもって確認された。

### B 遺構の計測方法と呼称

遺構の説明には観察表・本文・図面図版・写真図版を用いる。遺構の呼称は遺構種類・遺構番号の順に遺構の種類ごとに1から通し番号を付した。遺構の分類については、個々の遺構の位置・規模・形状・出土遺物・堆積土の状況・切り合ひ関係などについては巻末の観察表に記載しており、本文中では特別な場合を除き個々について触れない。遺構の形状・計測値については遺構確認面での数値であり、深度は遺構確認面の高い部分からの深度を採用している。遺構の平面形・断面形の呼称は「奈良崎遺跡」〔春日2002〕の分類に基づき記載した。掘立柱建物の主軸については、長軸方向を主軸方位とした。方位は北から東西に振れる角度を「N-○○°-E（またはW）」と表記した。

遺構の図面図版は1/3,000の全体図と1/100の分割平面図、1/80の建物跡個別図、1/40の上層断面図・エレベーション図（横断面図）で構成される。断面図の土層註記は農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帳』を使用し、統一的な色の記述を行った。

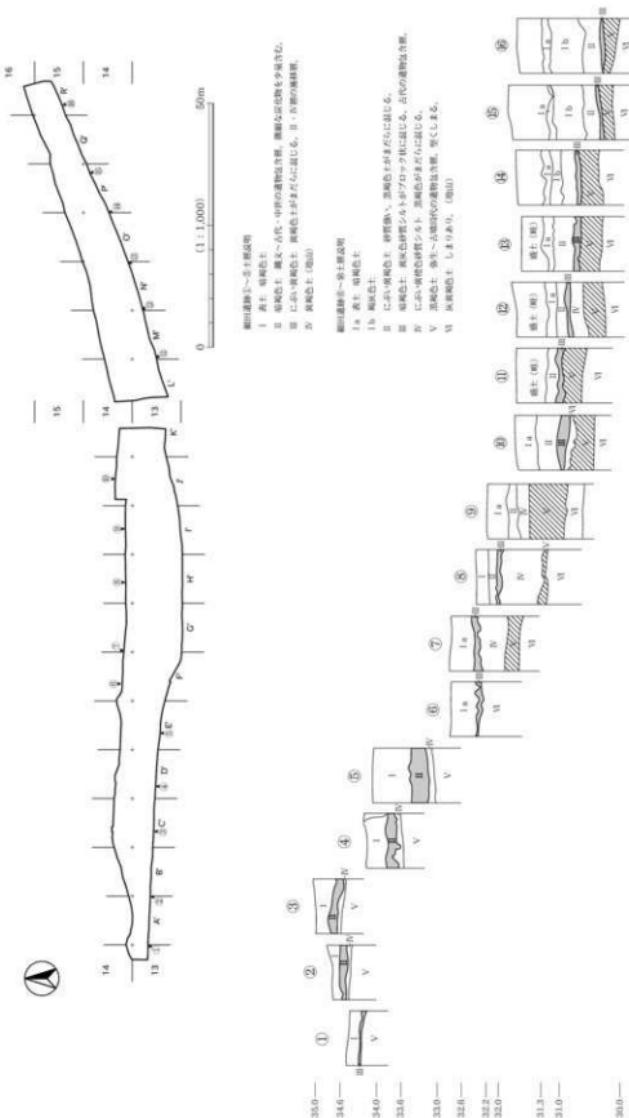
遺構写真は、調査の過程に応じ、検出状況・土層の断面写真・遺物出土状況・完掘写真等を撮影しているが、重要な遺構、残存状況の良好なもの、遺構の特徴を良好に示すものなどを選択的に掲載している。

遺構の平面形・断面形など、分類および呼称は前章（13ページ第7図）と同様の分類基準により記載する。

### C 遺構各説

#### 1) 弥生・古墳時代の遺構

西側の丘陵上から裾部にかけて黒田古墳群が位置しており、古墳群（古墳中・後期）に先行または併行



第24図 細田通跡の断面

する時期や、今回の調査で主に出土した弥生終末期～古墳時代前期の遺物に対応する時期の遺構の存在が期待されたが、SK29の覆土から古墳時代後期の甕が出土している他は、弥生・古墳期の遺構と断定できる遺構は確認できなかった（SX3では古墳後期と古代の遺物が出土しているが出土状況が不明のため時期は不詳である）。地山・遺構埋土の違いによる明確な平面形・掘り込みは確認されなかつたが、14・15Pグリッドと15Q'25・15R'1グリッド付近の2か所で土器が集中して出土している。これら2か所では遺物の分布状況が不整形な帯状もしくは長楕円形状の密集範囲として確認された。出土遺物は完形品が少なく小片が多いことなどから推測して、溝状もしくは土坑状の落ち込みや自然の窪地などに遺物が廃棄された状況である可能性も考えられる。

## 2) 古代の遺構

### 掘立柱建物（図版97・98／写真図版120・121）

3棟の掘立柱建物を検出した。主軸方向および柱穴の形状、重複関係から、SB20・26→SB21・22への変遷を捉えることができる。SK24・28・29・30の4基についても、形状・規模が類似することから掘立柱建物の一部である可能性がある。

**SB21** 13C'・14D'グリッドに位置する2×2間の側柱建物。主軸方向は東偏71°、面積は8.4m<sup>2</sup>、ピットの平面形は円形である。SB20・22、SE37と重複する。SB20、SE37よりも新しい。SB22との前後関係は不明である。

**SB22** 13C'・14C'グリッドに位置する2×3間の側柱建物。主軸方向は西偏20°、面積は14.1m<sup>2</sup>、ピットの平面形は円形である。SB20・21、SE37と重複する。前後関係は不明である。SD27との軸の類似性がある。

**SB20** 14C'・14D'グリッドに位置する。桁行方向で5基の柱穴（4間）を確認した。主軸方向は東偏70°である。南側に続く柱穴が見られないため、北側調査範囲外に延びていると推定される。SB21・22、SX23と重複する。SB26と主軸方向が類似する。柱穴の平面形は不整形で、ピット1は円形であるが、ピット2～4では隅丸方形に近い形状を持つ。

**SB26** 13C'・13D'グリッドに位置する。桁行5間、梁行2間以上の大型の側柱建物であると推定される。主軸方向は東偏66°である。桁方向については、西側方向の壁際で柱穴の痕跡が認められないことから5間以上は延びないと判断した。柱穴の平面形は隅丸方形で長軸1.1m前後である。いずれの柱穴も地山由来の黄褐色ブロックが混じる黒褐色土が埋土で、単層であった。柱の痕跡等は確認できなかつた。ピット1～3の底面付近から柱底面のあたりの痕跡と思われる窪みが確認された。

**Pit24・28・29・30** 掘立柱建物等の柱穴の可能性があるものである。平面形は円形で、直径が80cm前後と規模も類似している。

### 井戸（図版97／写真図版）

SE37の1基のみである。遺構埋土は、黒褐色土（ごく少量地山由来の黄褐色土ブロックが混じる）の單層で、掘削時も底部付近から湧水が顕著に見られた。底部付近から甕が出土した。廃棄時に甕を投げ入れ、その後一気に埋め戻されたと推測される。SB21と重複し、覆土の観察からは柱穴よりもSE37が新しい。溝状遺構（図版95・97・99・102／写真図版122・123）

**SD27** 13C'・14C'グリッドに位置する。遺物は出土していないが、SB21と軸が類似することから、掘立柱建物に近い時期の溝であると判断した。

**SD38** 13E'グリッドに位置する。擾乱により北側が削平されている。建物のある平坦部から若干傾斜する変換点の位置にある。SD27と対応する溝の可能性も考えられる。

**SD5** 13・14G'グリッドに位置する。SK1と重複する。軸が掘立柱建物群に類似した方向であることから遺構群を包む区画溝の可能性がある。

**SD4** 14L'グリッドに位置する。東西方向に延びる溝であるが、東側は調査範囲外、西側では平面形が不明瞭となり、全体形は不明である。途中SD6とつながっているが、覆土の違いによる前後関係は認められなかつた（同時に存在の可能性が高いか）。遺構埋土中から古代の須恵器・土師器が多数出土した。特に土師器無台椀が遺物の8割前を占め、外側面に「凡」の墨書きを持つものが特徴的に見られる。

**SD6** 14L'グリッドに位置する。SD4同様に西側が不明瞭で確認できなかつた。堆積土中から須恵器・土師器が出土した。SD4よりも幅が広い。北側で4本の杭からなる杭群44を検出した。杭は遺構の北側の底面付近に列をなすことから土留めの杭列の可能性がある。

#### 土坑・ビット（図版95～99、101～103／写真図版121～124）

遺構平面形の長軸・短軸の長さに比して深度の浅いものを土坑としたが、土坑とビットの区分は必ずしも明確ではない。掘立柱建物として認識したビット以外にも17基のビットが確認された。建物や柵等の構造物を構成するものとも考えられるが、調査幅が狭いため、組み合わせを捉えることはできなかつた。

**SK35** 13E'18グリッドに位置する。遺構埋土中から「人入」の墨書きを持つ須恵器無台杯、須恵器有台杯が出土している。

#### 性格不明遺構（図版96～101／写真図版122～124）

**SX3** 13・14J'グリッドに位置する。長楕円形の平面形を持つ土坑である。遺構底部には沢の自然堆積によると思われる砂・小礫層があり、その上部を黒褐色系のシルトが覆っていた。底部付近の堆積土中から、古墳時代後期と推測される非口クロの土師器甕片・ミニチュア土器のほか土師器無台椀、須恵器甕片などが出土している。

**SX23** 14D'グリッドに位置する。楕円形の平面形を持ち、SB20の柱穴を切る。堆積土からは、須恵器有台杯、土師器無台椀・小甕が出土しており、古代もしくはそれ以降の遺構である。

**SX10** 13F'グリッドに位置する。南側は調査区外のため全体の形状は不明であるが、北半部分は隅丸方形に近い。覆土中からは古代の須恵器・土師器片が出土している。底面は平坦ではなく、弧状になっておりビットなども確認されなかつた。

### 3) 中世の遺構（図版95・96／写真図版121）

**SK39** 13A'グリッドに位置する。南側半分は調査範囲外のため不明であるが、円形の土坑である。埋土底部付近から礫・五輪塔の空風輪、水輪、地輪が出土した。

**SK36** 14C'グリッドの調査区北端に位置する。覆土上面で中世土師器（324）が出土した。SB20のビットと平面規模が類似することから、古代の可能性もある。

### 4) 時期不明の遺構

#### 杭群（図版94・100・102／写真図版124）

5か所で木杭が集中して確認された。古代の遺物包含層中から上部先端が確認されていることから、少なくとも古代以降のものであると推測される。検出箇所の特徴から、①溝や落ち込みの縁辺に列をなすも

の（杭群43・44）、②沢地形付近にあるもの（杭群41・42）、③その他（杭群40）に分類できる。斜面や水路の土留めなどの機能が考えられるが、性格は不明である。樹種同定の結果から、主にクリ材を使用していることが確認された。

## 4 遺 物

### A 概要と記述の方法

出土遺物は平箱（約長54cm×幅34cm×深10cm）で約50箱であるが、主体となるのは古代および弥生終末期～古墳前期で、縄文時代、古墳中・後期、中世、近世の遺物も少量出土している。古代については遺構出土のものも定量見られるが、その他のものについては遺物包含層からの出土遺物である。

遺物の大半は各時代とともに土器（陶器類含む）で、その他少量であるが縄文時代の石器、中世の石製品、時期不明の木製品等も出土している。

遺物の記述は、時期ごとに区分し、かつ、遺構・遺物包含層の別に記述する。遺物個々の特徴・計測値等についてはそれぞれの観察表に記載しており、特別な場合を除き本文中では触れない。観察表は図化・掲載した遺物すべてについて遺物の種別（土器・石器・木製品）ごとに作成した。土器類についてはライフヒストリー的な観察〔川畠1999〕もを行い、「製作痕跡・使用痕跡・転用痕跡（二次使用）」として観察表に記載している。「使用痕跡・転用痕跡」については、判別が難しいものもあり、感覚的に分類したものも少なからずある。本文では時期・遺物種別ごとの概要や、遺構一括遺物の概要・組成について記述する。

### B 縄文時代の遺物（図版94）

#### 1) 縄文時代の土器（1～14）

1は中期初頭、2～11は後期（前葉～中葉）、12は晩期に位置付けられる。1は横位の隆帶で区画し、隆帶上に連続爪形文を施す。区画内にも横方向に連続爪形文を施す。中期初頭に比定される。2はくびれ部に刻目を持つ隆線が見られる。3・4は同一個体で、くびれ部に刻目を持つ隆線、体部は磨消繩文が見られる。5～8は同一個体で磨消繩文が見られる。9は斜行する沈線文が見られ三角形状となる。10は磨消繩文と多条細沈線による渦巻き文が見られる。11は沈線文が見られる以外は無文である。12は外面に沈線を持ち、口縁部に沿って内面に沈線状の窪みが見られる。13は外面に縱方向の羽状繩文が見られる。内面には何らかの器具でこすり取られたような下から上への砂粒の動きが見られた。14は底部で敷物の圧痕が見られる。

#### 2) 縄文時代の石器（15～21）

15は綫長の剥片を素材とする。表面右側面下部・裏面下部側縁に連続した微細剥離痕が見られる。下端は使用による回転運動により尖った形状となる。

16・18～20は蛇紋岩、17は凝灰岩の磨製石斧である。17・19は上部が破損面で、中半から基部を欠損している。16～18は両側面に研磨による面を持つ。19は両側縁に整形剥離痕を残す。20は刃部・基部ともに使用による剥離が見られる。裏面にはススが付着する。

21は凝灰岩の打製石斧で表面の側縁に整形剥離が見られる。裏面は素材の剥離面を残し、右に連続した整形剥離が見られる。全体的に大きな剥離により整形され、側縁には細かな加工があまり見られない。

## C 弥生時代終末期～古墳時代前期の遺物（図版106～109）

## 1) 概要と分類

弥生時代終末期～古墳時代前期の遺物は甕・壺・鉢・蓋・高杯・器台等が確認される。明確な平面プランを持つ遺構は確認されなかつたが、15P杭付近、15Q'20・25～15R'5付近の2か所で平面帯状に土器が集中して確認された。これらは溝や落ち込みなど遺構の可能性も考えられるため「土器集中区」出土遺物その他については包含層出土遺物として一括した。調査範囲が狭小であるため遺跡の本体は不明であるが、調査範囲内では北側寄りに遺物が集中して確認されている。

## 甕

A類 口縁部有段で、擬凹線を持つもの。口縁部が直線的に上方に伸びるもの（A1）と外傾して伸びるもの（A2）がある。

B類 口縁部有段で、無文のもの。外反気味に伸びるもの（59・82・83）、外傾して伸びる（61）ものがある。

C類 口縁部の断面形状が「く」の字または逆「コ」の字状のもの。口縁端部の形状により細分される。

C1類 端部に面を持ち、上方を擒み上げ、下方を引き出すもの。

C2類 端部に面を持ち、上方を擒み上げるもの。C1類の系譜を引くと思われるものも含む（63・64・86）。口縁部から頸部の長さで細分することが可能。

C3類 端部が丸いもの。

C4類 届曲部から上方に内湾気味に聞くもの（66）。

D類 内湾気味に立ち上がり、端部に内傾する面を持つもの。いわゆる布留系の甕。92は口縁端部の面取りをしていないが布留系甕を模倣したものと考えられる。

E類 体部に櫛描文（中部高地系）が施されるもの（30）。器形および口縁部の形状等はC類に類似しており、文様のみを模倣したものか。

## 壺

A類 口縁部が有段で擬凹線を持つもの。甕の分類同様、口縁部が直立気味に立ち上がるものと、外方に聞き気味に伸びるものほか、擬凹線の窪みに同心円のスタンプ文を持つものがある。

B類 口縁部有段で無文のもの。段内面の届曲が明瞭なものと、不明瞭なものとがある。不明瞭なものについては外面に強いナデを施すことにより段（稜）を作り出している。

C類 二重口縁壺（67・105）。明瞭に頸部・体部の形状までわかるものは出土していない。

D類 口縁が緩やかに外反するもの（100・106）。口縁部の長さにより細分できる。

E類 口縁端部に面を持ち、上方を擒み上げ、下方を引き出すもの。

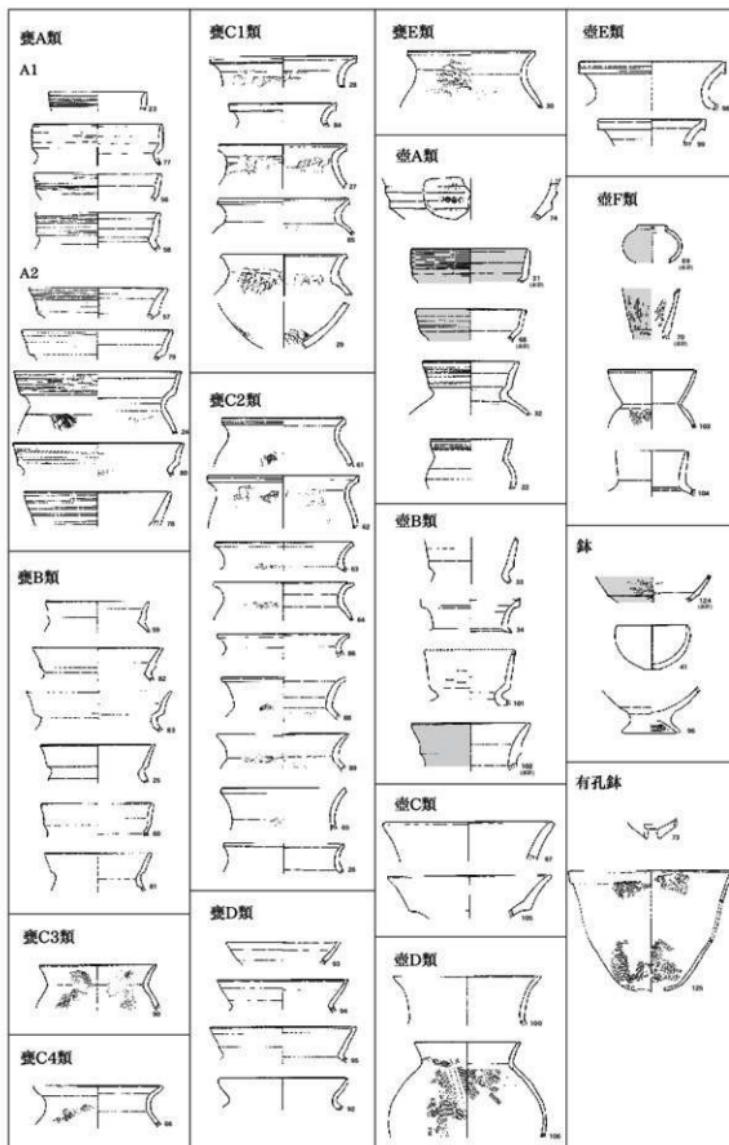
F類 小型の壺を一括した。69は短頸壺。無頸壺とも呼ぶことができるか。口縁～体部の届曲部付近に孔を持つ。70は細頸壺である。内湾気味に聞く口縁を持つもの（103）、直立気味に立ち上がる口縁を持つもの（104）が見られる。

## 鉢

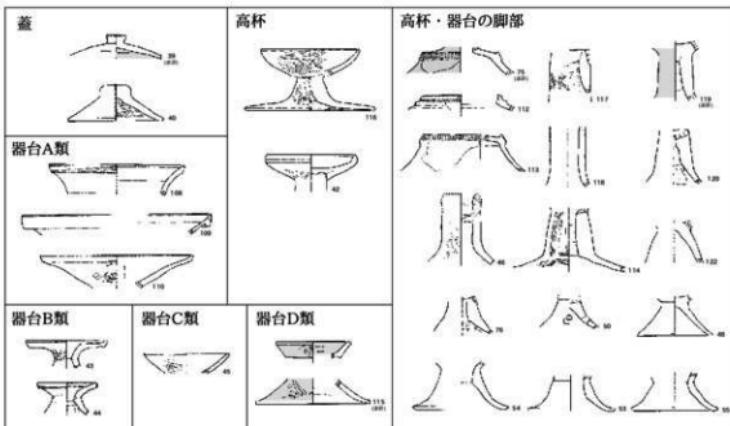
有段のもの（124）、内湾気味の器形で平底のもの（41）、96は有台鉢である。出土量は少ない。

## 有孔鉢

底部に孔を持つ鉢。125は口縁部に貼り付けによる帶状の段を持ち、底部は推定径3cmの孔を持つ。



第25図 弥生～古墳前期の土器分類図（1）



第26図 猿生～古墳前期の土器分類図（2）

## 蓋

「ハ」の字状に広がるもの（40）と内湾気味に広がるもの（39）が見られる。

## 器台

A類 受部が大型で深身のもの。端部に粘土帯を貼付するA1類（109）と端部に面取りし、上方に摘み上げるもの（110）がある。

B類 小型で、受部端に面を持つもの。上方・下方に引き出すもの（43）、面取りのみのもの（44）がある。

C類 小型で、受部内湾気味に開くもの。

D類 小型で、受部に段を持つもの

## 高杯

同化できたのは2点のみである。半球状の杯部を持ち、脚部がハの字に大きく開くもの（116）と、浅い椀状の杯部を持つもの（42）がある。

バリエーションはあるが、出度数が少ないので、細分は行っていない。

## 脚部

脚部に稜を持ち、段の上部や側面に刺突文を施すもの（75・112・113）。棒状に伸びるもの（117～119）、棒状に伸びた後裾部で開くもの（120・46・114）、内湾気味に開くもの（122）、貫通孔が比較的大きなもの（53～55）が特徴的に見られる。

## 2) 各 説

## 14P・15P 土器集中区（図版106／写真図版125）

口縁部破片数で50点、口縁部残存率で114／36個体の土器が出土した。甕が約7割（口縁部残存率の比率）を占める。擬四線を持つ甕A類や甕A類では口縁部の伸びが比較的長く、直線的に伸びるものが多い。甕C類では口縁端部を上下に引き出して面取りをするもの、上方のみを引き出すものの2種がある。

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)	底部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)
土 器	有段壺	28	11	24.6%	22.0%	0	0	0.0%	0.0%
	壺	49	22	43.0%	44.0%	81	5	40.9%	35.7%
	有段壺	4.5	2	3.9%	4.0%	0	0	0.0%	0.0%
	壺	12.5	8	11.0%	16.0%	81	8	40.9%	57.1%
	有孔鉢	0	0	0.0%	0.0%	36	1	18.2%	7.1%
	鉢	13.5	4	11.8%	8.0%	0	0	0.0%	0.0%
	高杯	6.5	3	5.7%	6.0%	0	0	0.0%	0.0%
	合計	114	50	100.0%	100.0%	198	14	100.0%	100.0%

第26表 15P'グリッド出土土器口縁部・底部残存率集計表

壺類はいずれも有段で、A類(31・32)とB類(33・34)がある。30は北陸系の通有の壺の器形を持ち、口縁形状からはC類に分類可能であるが、体部外面に2本1単位の櫛描文(波状文・連弧文)を持つ。施文のモチーフは中部高地系(箱清水系の櫛描文土器)の影響が見られるが、2本1単位は東北を含めた北方系の土器に多く見られる施文方法である。3者要素が混在した折衷土器の可能性もある。42は高杯に分類したが、台付の鉢の可能性もある。脚部の挿入痕が見られる。器台では口縁端部を上下方に引き出し面を持つ43と、面取りのみを行う44がある。39は蓋で、内湾気味に聞く器形のもので、内外面にミガキ調整を施し、外面に赤彩する。40は外反気味に聞く器形で、外面は二次的な焼成痕跡(赤化)が見られる。内面には放射状のハケ調整が見られる。53~55は、器台の脚部で比較的大きな貫通孔を持つ。53・55では二次的な焼成痕跡(外面の赤化)が見られる。

## 15Q'・R'土器集中区(図版107/写真図版126)

口縁部破片で68点、口縁部残存率で212.5／36個体の土器が出土した。壺類が7割近くを占め、中でもC類が多い。口縁端部を上方に摘み上げ、面取りを施すものが多く見られる。蓋類では口縁部に段を持つ壺が多い傾向にある。69は小型の短頸壺で、蓋との固定のための直径5mmの孔を持つ。67は口縁下部(段～頸部)が欠損しているが有段口縁壺と思われる。下部の破断面に擬口縁に施された刻目の凹凸が見られる。70は長頸壺の系譜を引くものである。71は底部に草の茎状のものと類と思われる圧痕が見られる。74は幅の広い凹線の底みに竹管による刺突文と、その上部の底みには爪形の刺突が施される。75は高杯か器台の脚部で有段のものである。段側面に突帯状に粘土を貼り付け、横方向に連続する爪形の刺突が施される。

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)	底部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)
土 器	有段壺	33.5	11	15.8%	16.1%	0	0	0.0%	0.0%
	壺	110	39	51.8%	57.4%	161.5	12	37.5%	36.4%
	有段壺	37	8	17.4%	11.8%	0	0	0.0%	0.0%
	壺	2	2	0.9%	2.9%	93	5	21.6%	15.2%
	台付壺?	5	2	2.4%	2.9%	0	0	0.0%	0.0%
	鉢	2	1	0.9%	1.5%	39	2	9.0%	6.1%
	高杯	2	1	0.9%	1.5%	0	0	0.0%	0.0%
	器台	21	4	9.9%	5.9%	80.5	10	18.7%	30.3%
	蓋	0	0	0.0%	0.0%	摘み57	摘み4	13.2%	12.1%
	合計	212.5	68	100.0%	100.0%	431	33	100.0%	100.0%

第27表 15Q'・15R'グリッド出土土器口縁部・底部残存率集計表

## 遺物包含層出土遺物(図版108・109/写真図版126)

上記2か所の土器集中区を含めた遺跡全体では口縁部破片が519点、口縁部残存率で1227.5／36個体の土器が出土した。

壺類だけを見ても、月影系のA類(77~80)から布留系のD類(93~95)まで時期幅を持つものが含まれる。84は口縁端部の上下を引き出し、幅広の面を持つもので古手の様相を持つものか。87は口縁部

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)	底部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)
土 器	有段甕	84.5	39	6.9%	7.5%	0	0	0.0%	0.0%
	甕	716	317	58.3%	61.1%	1461.5	119	55.8%	45.2%
	有段甕	49.5	12	4.0%	2.3%	0	0	0.0%	0.0%
	甕	103	43	8.4%	8.3%	647	49	24.7%	18.6%
	有孔鉢	21	7	1.7%	1.3%	45	2	1.8%	0.8%
	台付甕	0	0	0.0%	0.0%	9	4	0.3%	1.5%
	鉢	63	27	5.1%	5.2%	121	16	4.6%	6.1%
	ミニチュア鉢	22	1	1.8%	0.2%	36	1	1.4%	0.4%
	高杯	64.5	32	5.3%	6.2%	67	31	2.6%	11.8%
	高杯か器台	2.5	2	0.2%	0.4%	21.5	6	0.8%	2.3%
	器台	94	33	7.7%	6.4%	126.5	30	4.8%	11.4%
	瓶	0	3	0.0%	0.6%	瓶み83	瓶み5	3.2%	1.9%
	不明	7.5	3	0.6%	0.6%	0	0	0.0%	0.0%
合計		1227.5	519	100.0%	100.0%	2617.5	263	100.0%	100.0%

第28表 細田遺跡(全体) 弥生～古墳前期の土器口縁部・底部残存率集計表

断面がくの字状に屈曲し、内面に明確な稜を持つ。内面上部をケズリ調整する。88・89は甕とも分類可能な口縁部が長く外反するものである。96は台付甕の台部である。93～95は布留系甕で口縁部の形態の比較では畿内の編年観では布留1式頃に比定される。92は内湾気味の口縁を持ち、端部を上方に摘み上げる。端部処理は異なるが、布留系甕を模倣したものか。100は広口で比較的長頸の甕、103は小型の丸底甕で内湾する口縁が付く。104は小型で上方に直線的に伸びる口縁を持つ(直口甕)。105は二重口縁甕である。111は器種不明であるが、外面に円形の竹管文、その上下に点状の刺突列を施す。112・113は高杯か器台の脚部で突起状に粘土を貼り付け、横方向の刺突文を施したものである。114は比較的大型の脚部である。116は杯部が半球状で脚部が大きく聞くものである。115は受け部に段を持つものである。脚部では棒状に伸びるもの(117～119)。裾部にむかって緩やかに聞くもの(120)。ハの字状に聞くもの(121)、内湾ぎみに聞くもの(122)がある。127～129はいわゆる「畿内系屈折脚の高杯」である。脚部の調整は確認できる限りでは縦方向の比較的長いストロークのミガキ調整が施される。127は胎土が濃い褐色(赤味が強い)で、中部高地系の土器群の胎土に類似する。内面は横方向のケズリ調整が施されるが、単位が不明瞭である。128は脚内部上半が中実状で、内部中心に棒状工具の刺突によるとと思われる窪みが見られる。この2点については脚部高と同じくらいの長さの細長い板状(棒状)の工具を差し込み器面に沿って回転させてえぐり取るような調整を施している可能性がある。そのため内面のラインが直線的で、奥ほど狭まっていくと思われる。対して128は脚部内面上部に径5mm程の工具による刺突痕が複数見られるが、内面をケズリ調整せず、ナデ調整のみ施す。類似した脚部形態であるが技法の相違が見られる。

#### D 古墳後期の遺物(図版109／写真図版126)

遺物によっては、小破片レベルでの古墳前期の土器群との識別は困難である。したがって弥生末から古墳前期とした土器群の口縁部残存率の数値中に古墳後期の土器群が含まれている可能性は高い。明確に形状を把握し、図化したものは130～137の11点で、古墳後期(6・7世紀)に比定される。130は須恵器長頸瓶の体部で肩部に稜を持つ。胎土の特徴から7世紀後半の下馬場窯跡の可能性がある。132・133・134は高杯脚部で133・134は杯部内面の黒色処理が見られる。135は支脚でナデの整形痕が見られる。136・137はミニチュアの土器で詳細な時期は不明である。

## E 古代の遺物（図版99～104）

## 1) 概 要

遺跡出土遺物の大半が古代の土器であり、須恵器・土師器・灰釉陶器・綠釉陶器・木製品などが出土している。須恵器は杯蓋・有台杯・無台杯・長頸瓶・小瓶・短頸壺・広口壺・小型壺・小甕・土師器は甕・小甕・鍋・無台椀・有台椀・内面黒色処理の無台椀などの器種が見られる。灰釉陶器は椀・皿類・綠釉陶器は蓋の摘み（蓋か）が1点のみであり、これら陶器類については復元可能なものすべてを掲載した。

SD4では上師器椀が主体となる一括資料が出土している。15O'・15P'・15Q'グリッドの調査区北側端では明確な平面プランは確認できなかったが、帶状に土器が集中して出土したことから落ち込み・溝等の造構である可能性がある。そのため「土器集中区」として遺物包含層出土遺物とは区分している。

## 2) 分 類

まず、土器の種類（須恵器・土師器・灰釉陶器など）・器形の特徴から甕・壺・杯・椀などに分類し、須恵器杯類・土師器椀類については製作技法・法量等からさらに細分した。須恵器甕・壺類などの貯蔵具は北野博司氏の分類〔北野1999〕を用いた。なお、観察表中の須恵器の焼成痕跡（降灰・重焼き痕）は新潟県埋蔵文化財調査報告書「沖ノ羽遺跡Ⅲ」の分類〔春日2003〕を使用した。

## 須恵器

杯蓋A類 宝珠形の摘みがつくもの。口径が12～15cm前後のもの（A1類）、16～18cm前後のもの

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)	底部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)
須 恵 器	有台杯	284	74	6.60%	4.67%	794	96	9.63%	8.76%
須 恵 器	無台杯	415	97	9.65%	6.12%	1420.5	144	17.23%	13.14%
須 恵 器	杯類	312	143	7.26%	9.02%	3	1	0.04%	0.09%
須 恵 器	杯蓋	361	112	8.40%	7.06%	(摘み) 279	(摘み) 9	3.38%	0.82%
土 師 器	内黒有台椀	0	0	0.00%	0.00%	2	1	0.02%	0.09%
土 師 器	内黒椀	48.5	18	11.13%	11.13%	103	16	12.5%	1.46%
土 師 器	有台椀	0	0	0.00%	0.00%	60	6	0.73%	0.55%
土 師 器	椀	2174	790	50.56%	49.81%	3854.5	558	46.76%	50.91%
灰 釉 陶 器	碗	10.5	3	0.24%	0.19%	14	3	0.17%	0.27%
灰 釉 陶 器	皿	5	3	0.12%	0.19%	0	0	0.00%	0.00%
貯蔵具合計		3610	1240	83.96%	78.19%	6530	834	79.21%	76.09%
須 恵 器	長頸瓶	19.5	5	0.45%	0.32%	125	7	1.52%	0.64%
須 恵 器	瓶類	18.5	8	0.43%	0.50%	32	7	0.39%	0.64%
須 恵 器	小瓶	16	2	0.37%	0.13%	64	3	0.78%	0.27%
須 恵 器	壺	11	5	0.26%	0.32%	36	23	0.44%	2.10%
須 恵 器	甕か壺	0.5	1	0.01%	0.06%	0	0	0.00%	0.00%
須 恵 器	甕か瓶	3.5	2	0.08%	0.13%	23	5	0.28%	0.46%
須 恵 器	甕	7.5	3	0.17%	0.19%	89.5	9	1.09%	0.82%
須 恵 器	小型甕	9	1	0.21%	0.06%	36	2	0.44%	0.18%
灰 釉 陶 器	長頸甕	4	1	0.09%	0.06%	0	0	0.00%	0.00%
貯蔵具合計		89.5	28	2.07%	1.77%	405.5	56	4.94%	5.11%
土 師 器	甕	268.5	165	6.24%	10.40%	56	5	0.68%	0.46%
土 師 器	小甕	285.5	125	6.75%	7.88%	1171.5	192	14.20%	17.52%
土 師 器	甕	2	1	0.05%	0.06%	30	1	0.36%	0.09%
土 師 器	甕か鍋	24	17	0.56%	1.07%	26	4	0.32%	0.36%
土 師 器	鍋	12.5	8	0.29%	0.50%	25	4	0.30%	0.36%
煮炊具合計		592.5	316	13.89%	19.91%	1308.5	206	15.66%	18.80%
須 恵 器	円筒甕	4	1	0.09%	0.06%	0	0	0.00%	0.00%
須 恵 器	小甕	3.5	1	0.08%	0.06%	0	0	0.00%	0.00%
その他合計		7.5	2	0.17%	0.12%	0	0	0.00%	0.00%
古代合計		4299.5	1586	100.00%	100.00%	8244	1096	100.00%	100.00%

第29表 細田遺跡古代土器口縁部・底部残存率集計表

(A2類)とする。天井部の形状が平坦なものと湾曲したものとにさらに細分が可能である。

杯蓋B類 円環状の摘みがつくもの(265)。1点のみである。

突帶付蓋 227、1点のみである。口縁端部は外反し、かえりを持たないと思われる。天井部の外周に貼り付けの突帶があり、宝珠形の摘みを中心として同心円状の刻線を持つ。後述する(61~62頁)が「上野型有蓋長頸壺蓋」[神谷・桜岡1997]に類似する形態をもつ。

有台杯A類 内湾気味に立ち上がる体部を持つ。比較的厚手のもの。全形がわかるものは231のみであるが、器高が5.2cmと深身である。

有台杯B類 直線的に立ち上がる体部を持つ。口径10~12cm、器高3.5cm前後のもの(B1類)と口径15cm前後、器高6~7cmのもの(B2類)がある。

有台杯C類 口径が12~14cm前後で、器高が3~4cmのもの。

有台杯D類 その他のものを一括した。228は稜を持つ杯で底部はケズリを施す。274は口径9.4cm・器高4.8cmの小型で深身の器形である。

無台杯A類 底部へラ切りのもの。口径11~13cm、器高3~4cmのもの。底径は246・248を除き、7~9cmの範囲におさまる。

無台杯B類 底部回転糸切りのもの。底部付近の側面に強い横ナデを施し、高台状に座むのが特徴。

無台杯C類 器高が3cm以下で、薄手のもの。いわゆる佐渡古窯跡群産といわれるもの。

円面鏡 1点のみである。脚部に短圓形の透かし窓を持つ。

長頸壺 肩部に稜を持つもの(A類)、肩部が丸くなれ肩のもの(B類)とする。

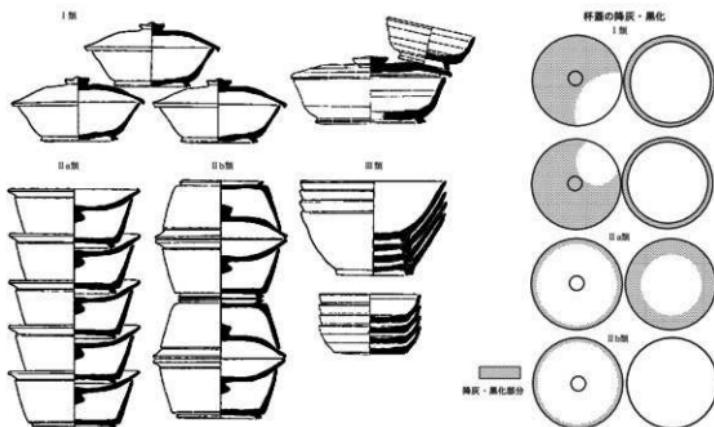
壺 固化できた口縁部資料は、小型の広口壺(288)と短頸壺(255)のみである。

突帶付壺 301のみである。突帶付四耳壺の可能性もある。外面はタキ調整、内面はナデ調整する。

甕 口径30cm以下の小型の甕が大半を占める。

#### 土師器

無台碗A類 器高指数25~30のもの。口縁端部の形状で細分される。



第27図 杯蓋・有台杯の重ね焼き分類 [春日2003]

A1類：口縁端部が外反して尖ったような形状となり、端部内面が内傾する面状となるもの（179～188）

A2類：口縁端部が外反し、丸くおさめるもの（189～202）。

無台椀B類 器高指数30～33で体部が内湾気味に立ち上がるるもの（203～208）。

無台椀C類 器高指数30～37前後のもの。

C1類：内面にカキメ調整・ミガキ調整をするもの。



第28図 古代の土器分類図

C2類：ロクロナデ成形で、口径・器高の大きなもの。

無台椀D類 底部から体部下半にかけてロクロケズリするもの（259）。破片を含め、出土量は少ない。

甕・小甕・鍋 口径よりも器高が大きいものを甕、小型で平底のものを小甕、器高よりも口径の大きいものを鍋とする。小破片では、甕と鍋の識別が困難であるため、口縁部残存率の集計では「甕か鍋」とした。

黒色土器椀 内面黒色処理された土器。破片を含めた遺跡での出土量は少ない。

### 3) 遺物各説

古代の遺物の年代観については、春日真実による時期区分および年代観を用いる〔春日1999〕。

遺構出土遺物（図版110～112／写真図版127・128）

SK29 138は甕で、内外面に粗い原体によるハケメが施される。成・整形にロクロを使用せず、長胴気味の体部を持つ。口縁部および底部が残存していないため詳細な時期は不明であるが古墳時代後期～飛鳥時代（6～7世紀代）の甕と推測される。

SK37 須恵器小瓶（139）、須恵器甕（140）である。V期（9世紀前半）頃に比定されるか。

SK23 須恵器有台杯（141）、内外面にススの付着する土師器無台椀（142）・小甕（143）が出土している。V期頃に比定される。

SX3 ミニチュア土器（148）・甕底部（149）はロクロを用いない。両者ともに調整痕として指の圧痕（指ナデ）が内外面に見られる。これらについては古墳時代後期と推測される。土師器無台椀C類（150）、須恵器甕（151）が出土している。春日VI期に比定されるか。

SK35 底部に「人入」の墨書きを持つ須恵器無台杯（145・146）が出土している。147の須恵器有台杯は西側丘陵産と考えられる。

SD5 須恵器甕片（152）1点が出土した。胴部破片のため詳細な時期は不明。

SD6 須恵器杯蓋A類（153）・有台杯C類（154）・B類（155）・小瓶（156）・甕（158～161）は春日編年V期（9世紀前半）に比定される。VII期（10世紀前半）頃に比定される灰釉陶器皿（157）1点も出土している。詳細な出土状況は不明だが、混入の可能性もある。

SD4 破片数で304点、口縁部残存率で870.5／36個体の土器が出土した。須恵器杯蓋1点、有台杯3点、無台杯4点、長頸甕2点、甕、甕3点、土師器無台椀38点、小甕4点、甕1点、灰釉陶器1点を図化した。174は小甕としたが、広口甕の可能性もある。土器の機能別の構成比率は口縁部残存率計測法で食膳具（須恵器杯類・土師器椀類）は94%、貯蔵具（須恵器甕・甕）0.4%、煮炊具（土師器甕・鍋）5.5%で大半を食膳具が占める。底部残存率の集計でもほぼ同様の傾向が見られる。食膳具の構成は口縁部残存

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)	底部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)
須恵器	有台杯	5	2	17.2%	22.2%	15	2	38.5%	33.3%
須恵器	杯類	3	1	10.3%	11.1%	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	杯蓋	11	1	38.0%	11.1%	0	0	0.0%	0.0%
土師器	椀	1	1	3.4%	11.1%	14	2	35.9%	33.3%
灰釉陶器	皿	2	1	6.9%	11.1%	0	0	0.0%	0.0%
食膳具合計		22	6	75.9%	66.7%	29	4	74.4%	66.7%
須恵器	甕か瓶	0	0	0.0%	0.0%	10	2	25.6%	33.3%
須恵器	甕	1	1	3.4%	11.1%	0	0	0.0%	0.0%
貯蔵具合計		1	1	3.4%	11.1%	10	2	25.6%	33.3%
土師器	甕	6	2	20.7%	22.2%	0	0	0.0%	0.0%
煮炊具合計		6	2	20.7%	22.2%	0	0	0.0%	0.0%
古代合計		29	9	100.0%	100.0%	39	6	100.0%	100.0%

第30表 SD6出土土器口縁部・底部残存率集計表

率計測法で須恵器4.5%、土師器89.4%と土師器が圧倒的に多い。須恵器はV1期を中心とした時期の資料と考えられるが、小泊古窯跡群と推測される須恵器無台杯(169・170)、口縁端部外反のA1類(179～188)、大型品を含むC類(上越市今池遺跡SD3に類似:VI期)、内面黒色土器碗(220:VI期)、灰釉陶器(222:VII期?)など、V～VI期を主とし、それ以降の時期の下がるものも若干含まれる。

172は高台内に墨痕のある長頸壺底部(転用砾?)である。土師器無台碗A1類のうち、法量や口縁端部の形状(端部内面に面を持ち、尖り気味のもの)が極めて類似したもの(179～184・185は墨書はないが器形は類似)の外面に「凡」の墨書きを持つものが存在する。また、187・197のようにタール状・スヌ状の付着物を持つものも存在する。

#### 150'・15P'・15Q'北端遺物集中区(図版113・114/写真図版128・129)

明確な平面プランは認識できなかったが、調査区北側で帶状に遺物の集中が見られた。溝や落ち込みなどの遺構の可能性もあるため、遺物包含層出土遺物とは分けて記述した。範囲としたグリッドは調査区北端にかかる部分で、150'25'・15P'1付近では特に遺物が集中して出土した。

遺物の集中が見られた範囲にかかるグリッドでは口縁部破片数で128点、口縁部残存率で547/36個

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)	底部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)
須恵器	有台杯	5.5	1	0.6%	0.3%	77	6	5.1%	3.1%
須恵器	無台杯	12.5	4	1.4%	1.3%	102	12	6.8%	6.1%
須恵器	杯盤	16	8	1.8%	2.6%	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	杯蓋	6.5	2	0.7%	0.7%	0	0	0.0%	0.0%
土師器	内胆陶	2	1	0.2%	0.3%	0	0	0.0%	0.0%
土師器	椀	776.5	265	89.2%	87.2%	1088	122	72.7%	62.2%
灰釉陶器	有台碗	0	0	0.0%	0.0%	12	2	0.8%	1.0%
食器具合計		819	281	94.0%	92.4%	1279	142	85.4%	72.4%
須恵器	長颈瓶	0	0	0.0%	0.0%	27	1	1.8%	0.5%
須恵器	瓶類	1	1	0.1%	0.3%	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	壺か瓶	1	1	0.1%	0.3%	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	壺	1.5	1	0.2%	0.3%	3.5	1	0.2%	0.5%
須恵器	甕	0	0	0.0%	0.0%	36	23	2.4%	11.7%
貯蔵具合計		3.5	3	0.4%	1.0%	66.5	25	4.4%	12.7%
土師器	甕	6.5	4	0.7%	1.3%	0	0	0.0%	0.0%
土師器	小甕	33	10	3.8%	3.3%	151	29	10.1%	14.8%
土師器	壺か鍋	5.5	4	0.6%	1.3%	0	0	0.0%	0.0%
土師器	鍋	3	2	0.3%	0.7%	0	0	0.0%	0.0%
煮炊具合計		48	20	5.5%	6.6%	151	29	10.1%	14.8%
古代合計		870.5	304	100.0%	100.0%	1496.5	196	100.0%	100.0%

第31表 SD4出土土器口縁部・底部残存率集計表

種別	器種	口縁部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)	底部/36	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)
須恵器	有台杯	149.5	32	27.3%	25.0%	290	23	23.8%	27.1%
須恵器	無台杯	182	31	33.3%	24.2%	571	36	46.9%	42.4%
須恵器	杯盤	57.5	28	10.5%	21.0%	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	杯蓋	94.5	19	17.3%	14.8%	摘み123	摘み4	10.1%	4.7%
土師器	椀	50	10	9.1%	7.8%	96	12	7.9%	14.1%
食器具合計		533.5	120	97.5%	93.7%	1080	75	88.7%	88.3%
須恵器	瓶類	0	0	0.0%	0.0%	4	1	0.3%	1.2%
須恵器	小甕	0	0	0.0%	0.0%	64	3	5.3%	3.5%
須恵器	壺	5	1	0.9%	0.8%	0	0	0.0%	0.0%
須恵器	甕	1.5	1	0.3%	0.8%	0	0	0.0%	0.0%
貯蔵具合計		6.5	2	1.2%	1.6%	68	4	5.6%	4.7%
土師器	甕	3	2	0.5%	1.6%	9	1	0.7%	1.2%
土師器	小甕	0	0	0.0%	0.0%	61	5	5.0%	5.9%
土師器	壺か鍋	4	4	0.7%	3.1%	0	0	0.0%	0.0%
煮炊具合計		7	6	1.2%	4.7%	70	6	5.7%	7.1%
合計		547	128	100.0%	100.0%	1218	85	100.0%	100.0%

第32表 150'・15P'グリッド出土土器口縁部・底部残存率集計表

体の土器が出土した。須恵器杯蓋4点、突帶付杯蓋1点、有台杯11点、無台杯15点、短頸壺1点、小瓶2点、土師器無台椀2点、小壺1点を図化した。土器の機能別の構成比率は口縁部残存率計測法で食膳具は97.5%、貯蔵具1.2%、煮炊具1.2%である。大多数を占める食膳具の内訳は約9割が須恵器が占める。227は突帶の付く蓋で、外面頂部に同心円の沈線を引く。向橋1号窯跡（上越市大字向橋）では山笠形の天井部を持つ蓋に突帶の付くものが見られるが、器形が大きく異なる。天井部の平坦な器形は、群馬県北・西部の須恵器窯に多く見られる「上野型有蓋短頸壺蓋」に類似する〔神谷・桜岡1997〕<sup>1)</sup>。240～247は底部回転ヘラ切りの須恵器無台杯248～254は底部回転糸切りの須恵器無台杯である。

墨書土器は6点出土している。判読可能なものでは、「十」(229・247)、「下」(250)、「宮」(258)がある。237・252については「几」の字を模倣したようにも見え、236も「几」の字状を含めた複数の文字が重なって書かれているようにも見える(237についてはヘラ書きの記号も見られる)。236・237・252は胎土・技法からいずれも西側丘陵(淹寺・大貫古窯跡群)の製品と推測され、産地と文字の共通性が認められる。また、230の底部高台内全面に墨痕が見られた(転用窓か?)。

時期については、228などIV期(8世紀前半)から現れるもの、259の底部外面にケズリを持つ土師器無台椀など、古・新の時期の遺物が混じる可能性がある。杯類では底部の切り離し技法が回転ヘラ切りのもの(240～247)のほか、底部回転糸切りの東海系譜の須恵器杯類(235～239・251～254)も存在することから概ねIV期～V期に比定される資料と考えられる。

#### 遺物包含層出土土器 (図版114・115／写真図版129・130)

須恵器杯蓋5点、有台杯9点・無台杯12点・円面鏡1点・小型壺1点・小瓶1点・長頸壺7点・突帶付壺1点・小壺3点・土師器無台椀2点・有台椀2点・甕2点・鍋1点・内面黒色土器椀2点・縄釉陶器壺蓋?1点・灰釉陶器椀5点・皿2点・長頸壺1点を図化した。包含層出土の墨書土器は9点出土しているが、2点は小片でかつ墨点しか確認できないため図化していない。墨書土器では「人」(281・282・283)がある。283は281との書体の共通性から「人」とした。273・284もこれらとの類似性から「人」もしくは「人人」と判断した。これらの5点はいずれも西側丘陵(淹寺・大貫古窯跡群)の製品と推測され、150'・15P'土器集中区の墨書の状況に類似する。280・285については判読できなかった。272は高台の断面三角形のもので底部に直径約5mmの孔を持つ。無台杯では、275～277が底部ヘラ切り、279～284が底部糸切りの痕跡が見られる。279～283は底部回転糸切りの無台杯。285・286は佐渡小泊窯産のものでVI期か。287は円面鏡で海の部分が残存していないため使用痕跡は不明。288は小型の壺、289は小瓶の口縁部か。290～297は長頸瓶の口縁部・肩部・底部である。肩部に稭を持つものは見られない。297は焼成不良の須恵器としたもので黒色土器のような外表面が黒色で光沢を帯びた発色を示す。301は突帶付壺で、外面はタタキ、内面はナデ調整を施すものでVII期か。302は器面の剥落が著しいが縄釉陶器の蓋(壺蓋か)の摘み部分である。白色緻密な胎土を有する。305は有台椀の底部でVII期に比定されるか。307は内面黒色処理された椀で外面下部はケズリ調整する。VII期に比定されるか。308・309はロクロ成形の甕である。308は口縁部が大きく外反する。内面は目の細かな原体によるハケ(スリナデに近い)調整を行う。310は鍋で底部から体部下位はケズリ調整を施す。把手が体部

1) 群馬県内の類例は、群馬県月夜野窯跡群沢入八支群(月夜野町)、秋間窯跡群東谷津古窯支群(安中市)、乗附観音山窯跡群(吉井町)・八ヶ峰窯跡群(大胡町)などに見られる。しかし、群馬県の事例では円環状の摘みが付くものが多く、突帶だけでなく窓の付くものが多い。群馬以外の事例では秋田県手形山2号窯(8世紀中頃)出土「鰐付須恵器蓋」[伊藤2001]、石川県高松町八野ガメ山窯跡でも類似した蓋が出土している。両者には擬宝珠の摘みのものも見られる。

中半に付く。残存部位では1か所のみ対になると思われるが単位は不明である。底部平底か。311～318は灰釉陶器で碗・皿類が出土している。時期についてはV～VI期を中心に、灰釉・土師器有台椀など時期の新しいものが含まれる。

#### F 中・近世の遺物（図版116・117／写真図版130）

SD4から出土した177・188（混入か）を除いて、その他はすべて表土および遺物包含層からの出土遺物である。中世の遺物では土師器皿、白磁碗、青磁碗、瀬戸美濃焼（天目茶碗・皿・深皿）、珠洲焼（擂鉢・小鉢・壺）、石製品（五輪塔）がある。近世では肥前系磁器（碗・仏飯器）、京焼系陶器（皿）、肥前系陶器（碗）、越中瀬戸（皿、広口壺）がある。

##### 中世土師器（319～326・348）

319・320は底部が突出するいわゆる柱状高台のもので、ロクロ成形で底部は回転糸切り痕を施す。321～324は底径が大きなタイプである。時期的には12世紀代に比定される。325・326はいわゆる「京都系土師器」で手すくね成形のものである。326は口縁端部を上方に摘み上げる。

348は断面台形状の器形を持つもので、鍋と思われる。内外面ともにススの付着、黒化が見られた。把手や耳等の有無は不明である。

##### 中世陶磁器（327～347）

###### 白磁（327） 瓢の底部1点のみである。

青磁（328・329） 328・329は龍泉窯青磁の碗である。328は底部、329は外面に鶴のある蓮弁文が見られる。329は13世紀前半に比定される〔横田・森田1978〕。

瀬戸・美濃焼（330～332） 330は天目茶碗で、内面は全面、外面は体部下半まで鉄釉を施す。露胎部分は灰色で高台脇に段を持つと思われる。331は皿で口縁部が直線的に延び、端部に面を持つ。口縁部（内外面）のみに灰釉を施す。底部は回転糸切り後、無調整である。332は折縁の深皿でいずれも口縁部が外反気味に延び、内外面とも灰釉を施す。口縁端部が内外に開き断面三叉状となる。時期は330が14世紀後半～15世紀、331～333は15世紀後半に比定される〔藤澤1991〕。

珠洲焼（333～347） 333～342はすり鉢、343は壺、344～347は壺である。他にはSD4で出土した177・178がある。177・178・333の鉢は口縁端部（内端）を摘み上げ、内面に鉢目を持たないもので吉岡編年のII期に比定される。334・335の底部も鉢目が見られないことから同じくII期か。336は口縁端部に平坦な面を持ち、12条1単位の鉢目が見られる。IV期に比定される。340・341の底部は鉢目が密に入らないもので、同じくIV期に比定される資料か。337・338は口縁端部が内傾する面を持つもので、V期に比定される。339・340の底部は鉢目が密に見られることからV期以降に比定される。壺・壺類については体部破片のため詳細な時期は不明であるが、擂鉢と同様の時期幅を持つと思われる。

##### 石製品（349～351）

五輪塔（349～351） 3点ともSK39の一括出土遺物である。349は空風輪である。350は地輪で下面には成形時の敲打痕が残る。両者の石材は角閃石を多く含む安山岩を使用している。351は水輪で、上下面のほぼ中央に直径約3cmの円形の窪みを有する。石材は凝灰岩である。石材が異なるため、349・350と1対とはならないと思われる。時期の特定は難しいが15～16世紀代か〔水澤幸一2004〕。

##### 近世陶磁器（352～359）

いずれも時期的には17世紀後半～18世紀前半頃のまとまりとして捉えることができる。近接する黒

田古墳群調査範囲でも同時期の陶磁器類（肥前系陶磁器・京焼系陶器・越中瀬戸等）が出土しており【尾崎2002】。産地・器種等の組成に類似性が認められる。

**肥前系磁器（352・353）** 352は丸碗で、外面に草花文が描かれる。353は仏飯器で蓋付を釉剥ぎする以外は全面に施釉される。体部下半には幾何学模様が描かれる。

**京焼系陶器（354）** 器形は皿で、内外面は黄色味がかった透明釉、表面に細かい貫入が見られる。高台内には暗褐色の鉄釉が施される。胎土はいわゆる京焼風肥前系陶器（唐津）とは異なり、暗褐色の緻密な土である。

**肥前系陶器（355）** 内外面鉄釉で見込みに白泥が見られる。

**越中瀬戸（356～359）** 内外面に鉄釉を施す。356は皿、357～359は広口壺である。

#### G 木 製 品（図版118・119／写真図版131）

いずれも包含層出土のものである。360・361は下駄で、360は小型品である。362～366は曲物の底板である。いずれも柾目板である。362は円形の板で、側面に木釘の孔が5か所見られる。366は板材で、表裏左右は面取りされる。上部は欠損、下部は二次的な加工により尖った形状になる。367は表裏に黒漆が塗布される。368は上・左右側面を欠損する。下側面が丸みを帯びた面取りを残すことから曲物底板の転用品と思われるが用途は不明。369は表面が滑らかに面取りされた痕跡が見られるが、裏面は縱方向の分割面を残す。表面には微細な掠痕（線状痕）が見られ、8か所に穿孔（貫通は4か所）が見られる。下部の隅に炭化部分（火を受けた痕跡）が見られる。370は棒状の木製品で一端が尖った形状となる。371は上下を欠損する。表面に線状痕、右側面に焼けこげが見られる。372は表・裏・右側面に面取りされる。上・下・左側面は丸みを持たせるように加工される。373は表面中央部分を凸状に面取りする。建物の部材等か。374は上・右・裏面が欠損面。柾目の板材であるが用途は不明。375は全面を面取りする。上側面は丸みを帯びた面取りが見られる。376は下部は丸みを持たせた面取り、上部は欠損のため不明であるが、円形の孔が開けられていたと思われる。左側面中央には上斜め方向から長楕円形の孔（長1.5cm・幅4mm・深さ7mm）が開けられる。377は建物の部材等か。右半分・下部を欠損する。上部には長さ約8cmの孔が開けられる（ホゾ穴と思われるが丸みを帯びている）。378は上部を欠損する。上部に向かって幅が広がり、方形の孔が開けられる。何らかの製品の柄の部分とも考えられるが不明である。表面の右側縁に刃物による線状痕と削り痕が見られる。379～391は杭である。下部の先端部を尖らせるように加工が施される他は樹皮を残したままのものがほとんどである。材ではクリが最も多く、その他もクスノキ科・モクレン属・カエデ属・ナツツバキ属など遺跡近隣の雜木類を利用している。

## 5 自然科学分析

### A 細田遺跡出土木製品の樹種同定

#### 1) はじめに

株式会社古環境研究所

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

#### 2) 試 料

試料は、細田遺跡より出土した曲物、下駄、柱、板材、杭など木製品33点である。

#### 3) 方 法

あらかじめ新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片が作製されていたものを、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

#### 4) 結 果

結果は第32表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

**マツ属複維管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 第24図1**

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

**横断面**：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

**放射断面**：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

**接線断面**：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亞属に同定される。マツ属複維管束亞属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑の高木であり、材は水湿によく耐え、広く用いられる。

**スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 第24図2・3**

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

**横断面**：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

**放射断面**：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

**接線断面**：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質より、スギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強韌で、広く用いられる。なおスギの特徴は示すが、分野壁孔の型が不明瞭な試料はスギ?とした。

**ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 第24図4**

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

**横断面**：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

**放射断面**：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

**接線断面**：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質より、ヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。

日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強韌であり、耐朽性、耐湿性とも高い。良材であり、建築など広く用いられる。なおヒノキの特徴は示すが分野壁孔の型が不明瞭な試料はヒノキ？とした。

**サワラ *Chamaecyparis pisifera* Endl. ヒノキ科 第25図5**

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

**横断面**：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

**放射断面**：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型であるがスギ型の傾向を示すものもあり、1分野に2個存在するものがほとんどである。

**接線断面**：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、サワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。材は木理通直、肌目緻密である。ヒノキより軽軟でもろいが、広く用いられる。

**ブナ属？ *Fagus*？ ブナ科**

**放射断面**：道管の穿孔は單穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

**接線断面**：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質より、ブナ属と思われるが、本試料は横断面の切片が存在しないので、同定には至らなかつた。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬かつ緻密で韌性があるが保存性は低い。容器などに用いられる。

**クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第25図6・第26図7**

**横断面**：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

**放射断面**：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

**接線断面**：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、クリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材である。現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸など広く用いられる。なお、クリの特徴は示すが小片のため、横断面において年輪界部分が存在しない試料は、クリ？とした。

モクレン属? *Magnolia?* モクレン科

横断面：小型の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して多数散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、導管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は单穿孔で、道管相互の壁孔は階段状である。纖維状仮道管がしばしば薄い横隔壁で仕切られている。放射組織は上下端のみときに直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅であるが2細胞幅のものが多い。

以上の形質より、モクレン属と思われるが、本試料は横断面の切片が存在しないので、同定には至らなかった。モクレン属にはホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する、常緑または落葉の高木ないし低木である。

## クスノキ科 Lauraceae

横断面：中型から小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は单穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質より、クスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ属、クロモジ属、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無など

試料 No.	報告 No.	グリッド	層位	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	結果 (学名)	樹種	木取り	備考
1	376	13HF10	II 下	用途不明木製品	(25.45)	3.5	1.85	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	板目	
2	372	13HF10	II	用途不明木製品	(17.35)	3.8	2.2	<i>Magnolia?</i>	モクレン属?	板目	
3	389	13HF10	II	杭	(13.1)	2.8	1.7	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	丸材	
4	375	13HF19	II 中	用途不明木板材	(19.1)	3.9	1.65	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	板目	
5	360	13HF21	II 下	下駄	(14.1)	6.9	2.5	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	板目	
6	367	13HF24	II 中	用途不明木板材	(10.2)	2.6	0.5	<i>Chamaceyparis pisifera</i> Endl.	サワラ	板目 表面は黒漆あり	
7	369	13F1	II 上	用途不明木製品	(16.85)	5.0	1.25	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	板目	
8	366	13F1	II 上	用途不明木製品	(11.9)	1.95	0.62	<i>Chamaceyparis obtusa</i> Endl.?	ヒノキ?	板目	
9	362	13F2・11	II 中	曲物底板	10.0	9.25	0.8	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	板目	
10	363	13F8	II 中	曲物底板	(10.75)	4.0	0.9	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	板目	
11	—	13K'5	II 上	木被	2.8	7.4	0.5	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	板目	
12	370	14F11	II 下	棒状木製品	(13.85)	1.0	1.0	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	板目	
13	365	13F13	III 上	曲物底板	(12.4)	(4.8)	1.1	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	板目	
14	377	13F21	III 上	柱	(40.5)	7.1	6.0	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	削材	
15	364	13F22	III 下	用途不明木製品	(11.9)	(1.95)	0.6	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don?	スギ?	板目 底板の可能性あり	
16	373	13F22	III 下	用途不明木製品	13.25	2.75	1.9	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	板目	
17	374	13K'3	III 上	用途不明木製品	(15.6)	(3.6)	1.5	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	板目	
18	366	13K'4	III 中	用途不明木製品	(8.9)	4.95	1.0	<i>Chamaceyparis obtusa</i> Endl.?	ヒノキ?	板目 底板を再利用している	
19	361	13K'8	III 上	下駄	18.8	8.8	3.1	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don?	スギ?	板目	
20	371	14M'21	III 上	用途不明木製品	(8.9)	2.7	1.5	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don?	スギ?	板目	
21	390	13F13	—	杭	59.1	7.7	4.8	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	削材	
22	378	15G'21	—	用途不明木製品	32.95	4.1	2.1	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	削材	
23	391	15G'・16G'	—	杭	(20.15)	3.5	3.0	<i>Pinus subgen. Diplodia</i>	マツ属被管束	丸材	
24	379	13F13	—	杭	(43.0)	7.3	3.3	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. ?	クリ?	削材 板目	
25	380	13F13	—	杭	(55.85)	5.7	4.2	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	削材 板目	
26	381	13F13	—	杭	(43.25)	4.9	3.85	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	削材 板目	
27	382	13F12	—	杭	(42.6)	3.3	3.5	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	削材 板目	
28	383	13F18	—	杭	(27.4)	6.0	5.2	<i>Lauraceae</i>	クスノキ科	丸材 板目	
29	384	13F23	—	杭	(25.9)	4.6	4.5	<i>Acer</i>	カエデ属	丸材 板目	
30	385	14F3	—	杭	(21.65)	5.9	5.6	<i>Stewartia</i>	ナツツバキ属	丸材 板目	
31	386	13HF24	—	杭	(51.6)	3.7	3.8	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	削材 板目	
32	387	13HF23	—	杭	(55.5)	9.9	7.9	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ	削材 板目	
33	388	13HF25	—	杭	(12.1)	5.35	5.2	<i>Fagus?</i>	ブナ属?	丸材 板目	

第33表 細田遺跡出土木製品観察表・樹種同定結果一覧

で細分できる。しかし、本試料は道管径以外の点が不明瞭な為、クスノキ科の同定にとどまる。なお本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

#### カエデ属 *Acer* カエデ科 第25図8

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で1～6細胞幅である。道管の内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。

以上の形質より、カエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、ツヅカエデなどがある。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

#### ナツツバキ属 *Stewartia* ツバキ科 第25図9

横断面：小型で丸い道管が、ほぼ単独で散在する散孔材である。早材部から晩材部にかけて道管の径は緩やかに減少する。晩材部において、軸方向柔細胞が短接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は異性である。道管と放射組織との壁孔は階段状である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下端の1～4細胞ほどが直立細胞からなり、1～3細胞幅である。

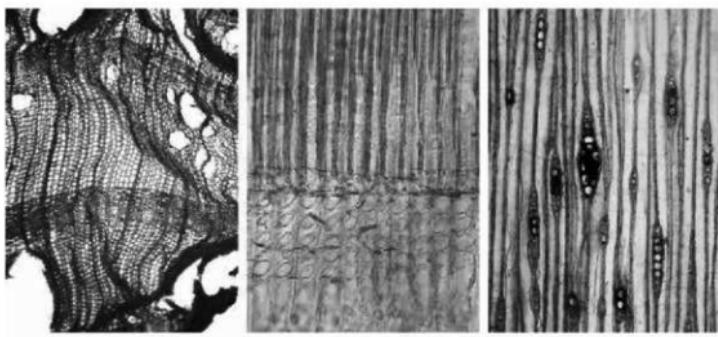
以上の形質より、ナツツバキ属に同定される。ナツツバキ属にはナツツバキ、ヒメシヤラなどがあり、本州（福島県、新潟県以西）、四国、九州に分布する落葉の高木である。材は強靭かつ堅硬で、現在では建築（特に付皮床柱）、器具、彫刻、旋作、薪炭などに用いられる。

### 5) 所 見

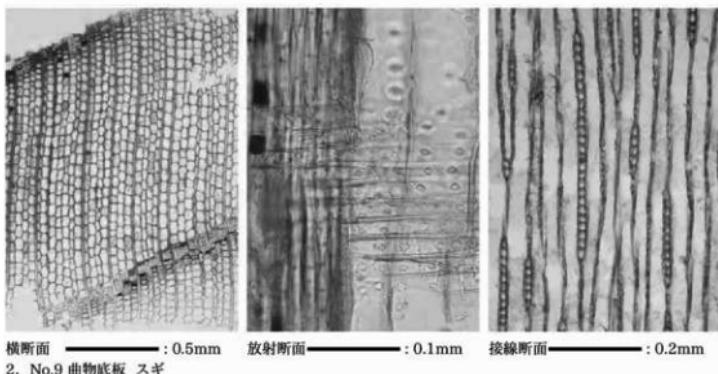
同定の結果、細田遺跡の木製品は、マツ属複維管束亜属1点、スギ14点、スギ？2点、ヒノキ1点、ヒノキ？1点、サワラ1点、ブナ属？1点、クリ7点、クリ？1点、モクレン属？1点、クスノキ科1点、カエデ属1点、ナツツバキ属1点であった。最も多いスギは、曲物、下駄、柱などに使用されていた。スギは温帯に広く分布し、特に中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹である。次に多いクリは、すべて杭に使用されていた。クリは、温帯に広く分布し、暖温帯と冷温帯と温帯の中間域では、純林を形成することもあり、乾燥した台地や丘陵地に分布し、また二次林としての性格を持つ。マツ属複維管束亜属、ヒノキ、サワラは、温帯を中心に分布する針葉樹である。ブナ属にはブナとイヌブナがあり、温帯上部の冷温帯から温帯中間域の落葉広葉樹林帶に分布する。またモクレン属、クスノキ科、カエデ属、ナツツバキ属も、温帯に分布する広葉樹である。以上の事から、いずれの樹種も遺跡周辺からもたらされたと考えられる。

### 参考文献

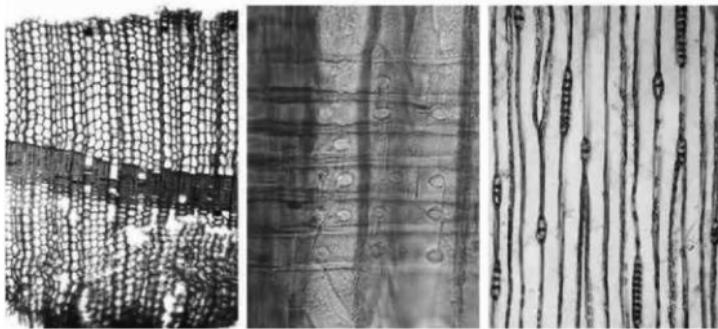
- 佐伯 浩・原田 浩 1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p.20-48
- 佐伯 浩・原田 浩 1985 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p.49-100
- 島地 謙・伊東隆夫 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣 p.296
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究』特別第1号 植生史研究会 p.24



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm  
1. No.23 杉 マツ属複維管束亞属

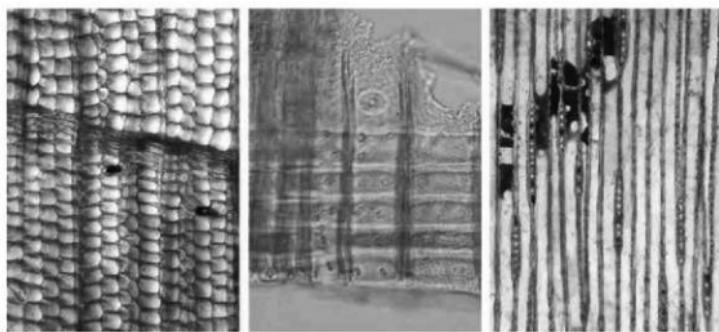


横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm  
2. No.9 曲物底板 スギ

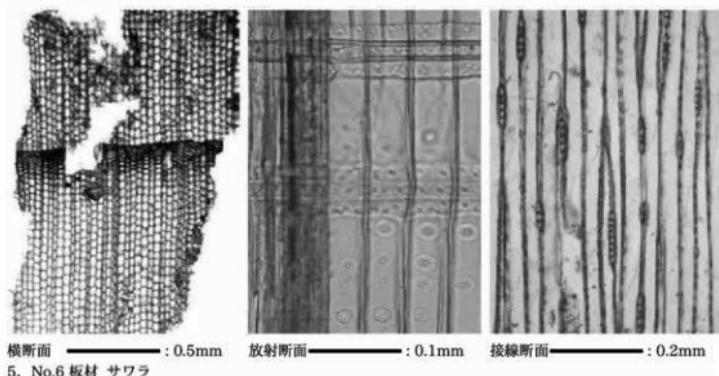


横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm  
3. No.17 不明 スギ

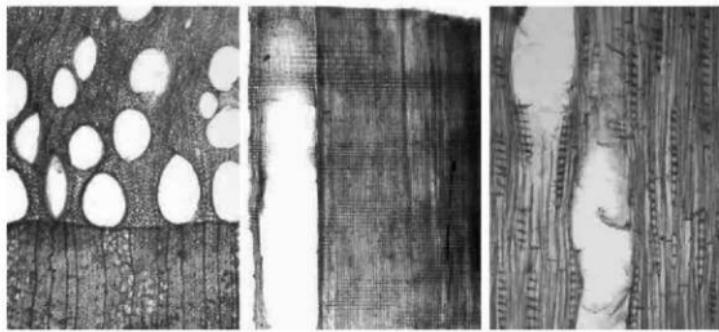
第29図 細田遺跡の木材 (1)



横断面 放射断面 接線断面  
4. No.18 不明（底板再利用） ヒノキ

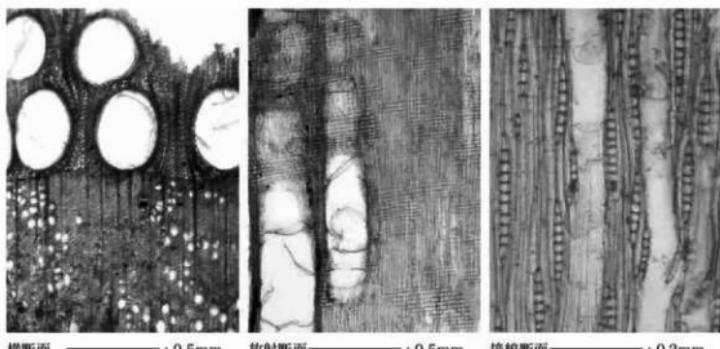


横断面 放射断面 接線断面  
5. No.6 板材 サワラ

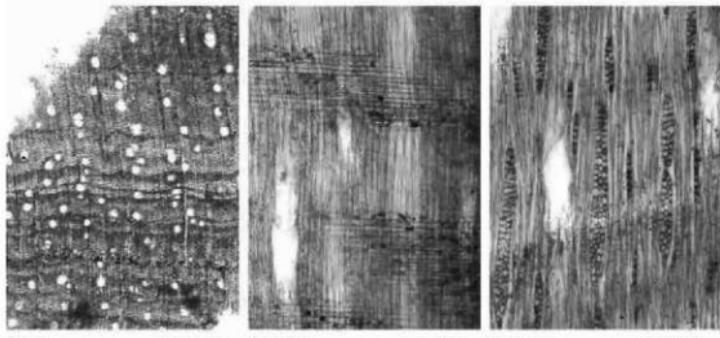


横断面 放射断面 接線断面  
6. No.31 桁 クリ

第30図 番田遺跡の木材（2）



横断面 放射断面 接線断面  
7. No.32 杭 クリ



横断面 放射断面 接線断面  
8. No.29 杭 カエデ属



横断面 放射断面 接線断面  
9. No.30 杭 ナツツバキ属

第31図 細田遺跡の木材 (3)

## 6 まとめ

### A 弥生・古墳時代

第4節で記述したとおり、遺跡からは1227.5／36個体の弥生終末期～古墳前期の土器のほか、少量ずつではあるが古墳前期・古墳後期の土器が出土した。中でも弥生終末～古墳前期の土器群は、丘陵上に存在する下馬場遺跡竪穴群の終焉期（下馬場5期）を中心とした遺物である。調査では明確な平面形・掘り込みを有する遺構は確認されなかったが、14・15Pグリッド、15Q'25・15R'1グリッドの2地点で廃棄行為に伴うと思われる遺物の集中範囲（集中区と呼称した）が確認された。

遺物の集中範囲が調査区北側寄りで確認されていることから遺跡本体は調査区外の北側方向に存在する可能性がある。土器集中区の編年的な位置付けは以下のとおりである。

14・15Pグリッド集中区出土土器は、甕A類（23・24）や壺A類（22・31・32）など擬凹線文を持つものが定量見られる。その他の甕では、断面「く」の字状の甕C類も端部を上方に摘み上げるC1類が多い。43・44などの北陸系の小型器台が見られることから下馬場5期を中心とする時期に位置付けられる。

15Q'25・15R'1グリッド集中区出土土器は、甕A類・壺A類が定量見られること、壺F（69・70）や刺突文を持つ器台脚部（75）が見られることから下馬場4～5期に位置付けられる。

その他、遺物包含層出土遺物については、甕A類の77～80、甕C1類の84・85、器台A類の108～110、刺突文を持つ脚部（112・113）など、土器の集中範囲同様に下馬場4～5期に位置付けられる資料を主とする。若干時期の下がるものも含んでおり、壺F類の103（川村5段階）や甕D類（布留系甕）の93～95（川村6段階）、畿内系の柱状屈折脚の高杯127～129は前期末（～古墳中期前葉）（川村6・7段階）に位置付けることができる。

細田遺跡の土器は、下馬場遺跡で確認できなかった下馬場4・5期を中心とすることから下馬場遺跡の空白期を埋める資料群であるといえる。直接的な関連性は指摘できないが、丘陵上に立地する下馬場遺跡（防衛的集落）の廃絶したのち、丘陵裾へ沖積地上に立地する細田遺跡へつながると見ることもできる。丘陵上から平野へという越後地域内の集落動向〔滝沢1999〕とも一致した動きといえる。

埠書No.	報告No.	埠書跡	器種	埠書部位・方向	グリッド	遺構	備考
1	145	「人」	須恵器縦白柄	底部外面	13P'18	SK35	
2	146	「人」	須恵器縦白柄	底部外面	13P'18	SK35	
3	179	「丸」	十輪器縦白柄	体部外面部側	14J'11	SD4	
4	180	「丸」	十輪器縦白柄	体部外面部側	14J'11	SD4	
5	181	「丸」	十輪器縦白柄	体部外面部側	14J'11	SD4	
6	182	「丸」	十輪器縦白柄	体部外面部側	14J'11	SD4	
7	183	「丸か」	十輪器縦白柄	体部外面部側	14N'8	SD4	
8	184	「□」	十輪器縦白柄	体部外面	14J'6	SD4	
9	229	「十」	須恵器縦白柄	底部外面	15G'21	-	
10	236	「□」	須恵器縦白柄	底部外面	15P'12・13	-	
11	237	「□□□」	須恵器縦白柄	底部外面	14N'25・15G'16	-	ヘラ記入あり
12	247	「十」	須恵器縦白柄	底部外面	15P'12	-	
13	250	「下」	須恵器縦白柄	底部外面	15G'1・15P'7	-	
14	252	「□」	須恵器縦白柄	体部外面部側	15P'2	-	
15	258	「宮」	十輪器縦白柄	体部外面	15G'25	-	
16	273	「人か」	須恵器縦白柄	底部外面	13G'20	-	
17	280	「□」	須恵器縦白柄	底部外面	13H'13	-	
18	281	「人」	須恵器縦白柄	底部外面	13P'6	-	
19	282	「人」	須恵器縦白柄	底部外面	13G'19	-	
20	283	「人」	須恵器縦白柄	底部外面	13G'15	-	
21	284	「人」	須恵器縦白柄	底部外面	13G'20	-	
22	285	「□」	須恵器縦白柄	体部外面	13L'15	-	
23	-	「□」	須恵器縦白柄	体部外面	13H'13	-	
24	-	「□」	須恵器縦白柄	体部外面	13K'8	-	

第34表 細田遺跡出土墨書き土器一覧表

## B 古代

細田遺跡では春日編年〔春日1999〕のIV～VI期（8世紀後半～9世紀後半）を中心とする土器が出土した。丘陵裾部の平坦面に掘立柱建物跡4棟が確認されている（SK24・28・29・30も建物の一部である可能性があるが数には入れていない）。柱穴に遺物を伴わないため細かな年代は不明であるが、切り合いおよび主軸方向からは3時期の建物跡が確認できる。SB26・20→SB21→SB22への変遷を追うことができる。SB21とSB22の切り合は明確ではないが、主軸方向が異なるため、SB26の主軸方向により近いSB21を古く見た。SB26は柱穴の掘形の形状が隅丸方形で桁行5間のもので、遺跡の中心的な建物跡であると考えられる。このSB26と軸を同じくするSB20は同時に存在したものと思われる。井戸（SE37）は立地、切り合からSB26・20時期に伴うと考えられる。SD27・5・38は地形の傾斜の変換点付近に位置し掘立柱建物群の軸に類似することから区画溝の可能性がある。

遺物では、15O'・P'・Q'の調査区北端遺物集中区では春日編年のIV2～V1期の遺物が出土している。口縁部残存率からは須恵器に大幅に組成が偏る。SD4では「凡」の墨書きを持つものを含む土師器椀を定量含む。時期的には春日編年V～VI期の遺物を主体とする。口縁部残存率からは土師器椀に組成が大幅に偏る。その他、遺物包含層出土についてはV～VI期を中心とする遺物が出土している。また、遺跡では判読可能「凡」・「人」・「十」・「下」・「宮」など、合計24点の墨書き土器が出土している（第34表、図版132・133写真参照）点も注目される。「凡」・「人」は、同じ器種・器形の土器に同じ文字を記している。

遺跡はIV期に成立し、V～VI期をピークとし、以降も断続的に続いている（12世紀以降も）。IV～V期は、有力農民層による新たな耕地の開発と初期莊園の成立の時期と重なる。頸城平野周辺の遺跡で初期莊園との関連が指摘されている遺跡は上越市越前遺跡、上越市頸城区榎井A遺跡などが知られており、区画溝で囲まれた区域に掘立柱建物跡が配置される集落構造を持つ。特筆される遺物は、越前遺跡では、墨書き土器（十・中・大・笠・口古・京都（部カ）・毛人・田口）施釉陶器・木製の祭祀具（斎串・舟形木製品・弓形木製品）、榎井A遺跡では墨書き土器（北館・北・館・人・庄など）・施釉陶器・莊園の役夫勤員に関連する木筒が出土している。これらの2遺跡は沖積地上の小河川脇に位置し、内水面交通の利便な立地環境を考えると、開発領主層が関わるしくは、公的性格（物資の集積・輸送など）の強い、中核的な遺跡であると推測される。

対して細田遺跡の立地は、西頸城丘陵の裾部に位置し、開発対象となる青田川流域の沖積地（扇状地）が見渡せる場所にある。遺跡の立地および遺構・遺物（円面鏡・墨書き土器・施釉陶器など）の内容から、中核的な遺跡に属し、開発領域（沖積地・扇状地）の各所に形成された生産拠点としての役割を担った遺跡であると思われる。

## 要 約

### 〔下馬場遺跡〕

- 1 遺跡は新潟県上越市大字下馬場字浦山863番地ほかに所在する。調査範囲は高田平野西縁の丘陵上(台地上)に立地し、現況は牧草地・山林であった。標高は70~78mである。
- 2 発掘調査は上信越自動車道の建設に伴い、平成9年4月21日~11月14日にかけて実施した。
- 3 弥生時代後期から終末期にかけての竪穴建物14軒、土坑16基、ピット4基、性格不明遺構3基が確認された。その他、縄文時代の陥穴土坑15基、土坑1基、時期不明炭窯8基を検出した。調査範囲北側では後世の牧草地造成のため、遺物包含層および遺構確認面の地山面の一部が削平されていた。南側の山林部分は遺物包含層が比較的良好に残存していた。そのため弥生時代の遺物の大半は遺構の堆積土および竪穴床面出土の遺物である。
- 4 遺物は、弥生時代後期~終末期(一部古墳時代前期)の土器・石器・石製品(管玉製作関連・ヒスイ)・鉄製品のほか、旧石器2点、縄文時代早期・前期・中期・後期・晚期の土器、縄文時代(早・前期?)の石器が出土している。
- 5 石製品では、管玉の製作工程品が円形の竪穴建物である1・7号竪穴を中心に出土している。遺跡における管玉製作は弥生後期後半(法仏式併行)段階のみで行われており、弥生終末(月影式期併行)段階には管玉製作は行われなくなる。使用石材は13号竪穴の段階(下馬場1期)では、緑色凝灰岩が多いのに対し、1・7号竪穴の段階(下馬場2期)には鉄石英が約9割を占めるようになる。
- 6 製作工程は石材ごとの特徴が見られる。鉄石英は両極打撃により、扁平板状の素材を作り出し、その板状の素材を分割して角柱状の素材を得る。角柱状の素材には長辺に対し、横(側面)方向からの打撃痕が見られる。緑色凝灰岩では、擦切溝(施溝分割)の痕跡を持つものが見られ、また、角柱状の素材長辺に対し、縱方向からの剥離痕跡が見られるものがある。しかし、鉄石英同様に横(側面)方向からの打撃痕が見られるものも存在する。
- 7 管玉の穿孔は、弥生中期段階に見られるような、穿孔方向に直交して生じる線状痕が見られないこと、孔表面が平滑で、光沢を帯びることから、鉄製工具による穿孔の可能性がある。
- 8 鉄製品では13号竪穴建物出土の針状鉄製品(鍛造大小9本?)が特筆され、玉作工具(穿孔具)の可能性が高く、注目される。遺跡では鉄鏟1・板状鉄製品3・鉋?1も出土しており、複数の焼土面を持つ竪穴(2・3・9・10・11・13号)や有溝砥石(金属刃器の痕跡)も含め、使用のみならず、遺跡内で、金属加工が行われていた可能性も考えられる。

### 〔細田遺跡〕

- 1 細田遺跡は新潟県上越市大字黒田字細田305番地1ほかに所在する。調査範囲は高田平野西縁の丘陵部から青田川左岸沖積地(扇側部)に立地する。標高30~35mである。遺跡西方の丘陵上から斜面部には周知の黒田古墳群が隣接する。
- 2 発掘調査は、上信越自動車道本線工事用道路の建設に伴い、平成9年4月14日~8月26日にかけて実施した。
- 3 弥生時代終末期~古墳前期、奈良~平安時代の遺物を中心に、縄文時代(中・後・晚期)、古墳時代後

期、中世、近世の遺物が出土した。

- 4 弘生時代終末期～古墳前期は2か所で土器の集中が見られたが、明確な造構は確認できなかった。遺跡の成立時期は、下馬場遺跡の豈穴の終末の時期（月影式併行）と重なっており、新潟県内における同一時期の丘陵上から沖積地へという遺跡立地の動向と軌を一にしていると推測される。
- 5 奈良～平安時代は、掘立柱建物4軒、井戸1基、土坑・ピット23基、溝5基、性格不明造構2基が検出された。掘立柱建物の軸、切り合い関係等からは概ね3時期の変遷を追うことができる。大型の建物SB20・26は隅丸方形の柱穴掘形を持つ。
- 6 溝（SD4・SD6）からは土師器を中心とする一括資料が出土した。明確な落ち込みは確認できなかつたが、15P'、15Q'・R'の2か所では須恵器を中心とする土器が一括出土した。
- 7 中世では12世紀代から15世紀までの土器・陶磁器類（中世土師器・青磁・白磁・珠洲焼・瀬戸美濃焼）のほか、土坑内から五輪塔が出土した。

## 引用・参考文献

- 甘粕 健 2001 「裏山遺跡と倭國大乱」 新潟日報事業社
- 石川日出志 2002 「粟林式時の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100合併号 長野県考古学会
- 伊藤恒彦 1985 「行塚遺跡の玉造り」『吉井遺跡群－新潟県柏崎市吉井遺跡群発掘調査報告書一』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第1集 新潟県柏崎市教育委員会
- 伊藤武士 2001 「第五章 奈良・平安時代の生産遺跡 手形山窯跡」『秋田市史』第7巻古代資料編 秋田市
- 井上雅雄 1985 『月夜野古窯跡群』群馬県利根郡月夜野町教育委員会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 尾崎高宏 2002 『上信越自動車道関係発掘調査報告書VII 黒田古墳群』新潟県埋蔵文化財調査報告書第111集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎高宏 2003 『上越地内(米岡地区・下割遺跡隣接地) 試掘調査』『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成14年』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野昭・桑原陽一ほか 1988 『丸山遺跡発掘調査報告書』新潟県大潟町教育委員会
- 春日真実ほか 1994 『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書IV 一之口遺跡東地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 春日真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真実 2002 『二级河川郷本川広域基幹河川改修工事・一般国道116号和島バイパス関係報告書 奈良崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2003 『越自駆動車関係発掘調査報告書 オンノ羽遺跡III(C地区)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第123集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 1999 「V 上刷の調査 C石器」『上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第92集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子正典・滝沢規朗・丸山一昭 1999 「第3章 弘生時代・古墳時代 第2節土器 第3項弥生後期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編
- 金子拓男・高橋保・秦繁治 1980 『水科古墳群発掘調査報告書』三和村教育委員会
- 神谷佳明・桜岡正信 1997 「群馬県『古代生産史研究会'97シンポジウム 東国の須恵器－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－』古代生産史研究会
- 河野一隆・野島 永 1997 「丹後国宮農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡 平成8年度発掘調査概要(2)奈良岡遺跡(第7・8次)」『京都府遺跡調査概要』第76号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 川畑 誠 1999 「須恵器貯蔵具の製作痕跡試論」「須恵器貯蔵具を考える!つぼとかめ 北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会
- 川村浩司 1996 「弥生後期における北信濃と北陸」『考古学と遺跡の保護－甘粕健先生追憶記念論集』同刊行会
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相－関川右岸下流域を中心に－」『上越市史研究』第5号 新潟県上越市
- 木島 勉 1987 「新潟県糸魚川市後生山遺跡」『日本考古学年報』38 日本考古学協会
- 木島 勉・榎澤 浩 2003 「吹上遺跡」『上越市史 資料編2 考古』新潟県上越市
- 北野博司 1991 「第Ⅲ章 冬野遺跡第5層 大型土坑について」『押水町冬野遺跡群』石川県埋蔵文化財センター
- 北野博司 1999 「須恵器貯蔵具の器種分類案」「須恵器貯蔵具を考える!つぼとかめ 北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会
- 楠 正勝 1989 「絵画土器・記号文・スタンプ文」『西念・南新保遺跡II』金沢市教育委員会
- 計良由松 1961 「後期弥生式文化的攻玉法」『考古学雑誌』第47巻第1号 日本考古学会
- 計良勝範・木間信昭 2004 「北陸I 新潟県佐渡島」「日本玉作大観」吉川弘文館
- 小池義人 1998 「下馬場遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成9年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人ほか 2000 『上信越自動車道関係発掘調査報告書VII 裏山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 小池義人 2004 「上越市裏山遺跡と環濠」『考古学ジャーナル』No.511 特集 環濠と土墳 ニューサイエンス社
- 小池義人 2004 「上越市裏山遺跡と環濠」『考古学ジャーナル』511 ニューサイエンス社
- 五泉市史編集委員会 1994 『五泉市史 資料編1 原始・古代・中世』
- 小林行雄・佐原 真 1964 「紫雲出 香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究」香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会
- 駒井和愛・吉田章一郎 1962 「斐太ー新潟県新井市の弥生聚落址」慶友社
- 斎藤基生 1979 「第6章 総括」『下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集 新潟県教育委員会
- 斎藤基生 1983 「新潟県柏崎市下谷地遺跡における細形管玉の製作工程について」『人間・遺跡・遺物—わが考古学論集—』
- 坂井秀勢 1986 「越後における月影式併行期とその前後の土器」『シンボジュム「月影式」土器について 報告編』石川県考古学会
- 佐々木勝・林 大智 1999 「北陸地域における弥生時代鉄製品の様相」『考古学ジャーナル』467 ニューサイエンス社
- 笠澤 浩 2004 「長野県側から見た新潟県の弥生時代（要旨）—特に上越地方を中心にして—」『新潟県考古学会第16回大会 研究発表会要旨』新潟県考古学会
- 笠澤正史 1999 『新潟県上越市上千原地区は場整備関連発掘調査報告書 津倉田遺跡』上越市教育委員会
- 笠澤正史 2000 「越後における庄内～布留式併行期の土器の動き—頸城郡を中心として—」『庄内式土器研究』XXVI 庄内式土器研究
- 笠澤正史 2003 「第5章 古代 第1節 時代概説」『上越市史 資料編2 考古』新潟県上越市
- 佐藤 慎 2004 「鏡音平古墳群の再検討」『城文化』第52号 上越郷土研究会
- 品田高志 1990 「第VII章 戸口遺跡」『吉井遺跡群II－新潟県柏崎市吉井遺跡群第II期発掘調査報告書－』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13 新潟県柏崎市教育委員会
- 品田高志 1992 「越後における古墳時代土器の変遷II－前期土器編年の現状と編年試案－」『柏崎市立博物館報』第6号
- 上越市教育委員会 1989 「下馬場古墳跡群確認調査報告書」新潟県上越市教育委員会
- 杉本源造 2004 「袋状貯藏穴について」『地域と古文化』
- 閑 雅之・藤田富士夫 2004 「北陸 新潟県 富山県」『日本玉作大観』吉川弘文館
- 滝沢規朗 1992 「西谷遺跡の編年的位置付け」『西谷遺跡』羽羽村教育委員会
- 滝沢規朗 1993 「越後における弥生後期以降の土器文様—凹線文系と刺突文を中心に—」『北越考古学』第6号 北越考古学会
- 滝沢規朗 1994 「新井市斐太遺跡群出土土器について」『新潟考古』第5号 新潟考古学会
- 滝沢規朗 1995 「古墳出現前後における集落の動向—越後の集落を考える上での基礎整理として—」『研究紀要』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規郎 1999 「第3章 弥生・古墳時代 第3節 集落」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 滝沢規朗 2000 「新潟県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』第1分冊 東日本埋蔵文化財研究会福島実行委員会
- 田嶺明人ほか 1986 「考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察—」『漆町遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- 田代 弘 1993 「奈良岡遺跡」『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 都出比呂志 1989 「堅穴式住居の平面形」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 寺崎裕祐 2003 「第2章 純文時代 第1節 時代概説」『上越市史資料編2 考古』新潟県上越市
- 寺沢 薫 1980 「奈良市 六条山遺跡」奈良県文化財調査報告書第34集 奈良県立橿原考古学研究所
- 寺沢 薫 1986 「矢部遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 寺村光晴ほか 1991 「寺泊町史 資料編1」新潟県寺泊町
- 田海義正・坂上有紀 2000 「鼠喰は場整備事業関連発掘調査報告書 平田遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田海義正 2000 「第V章石器 Dまとめ」『鼠喰は場整備事業関連発掘調査報告書 平田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田海義正 2003 「新潟県の玉作遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第10号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 橋本英道 1987 「考察 月影式土器をめぐる編年的な問題について」『吉竹遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 橋本英道 1995 「第8章 考察」『谷内・杉谷遺跡群』石川県埋蔵文化財センター

- 富山正明 1997 「福井県林・藤島遺跡出土の鉄製品－弥生時代後期の玉作り工具を中心に－」『東日本における鉄器文化の受容と展開』第4回鉄器文化研究集会発表要旨集 鉄器文化研究会
- 中島庄一 1994 「第V章 成果と課題 第6節 弥生時代中期後半の土器群」『県道中野豊野線バイパス志賀中野有利道路 葦林遺跡・七瀬遺跡』長野縣・長野県道路公社・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 成瀬正勝 2000 「砂行遺跡」岐阜県文化財保護センター調査報告書第65集 (財)岐阜県文化財保護センター
- 河野一隆・野島 永 2003 「弥生時代水晶製玉作りの展開をめぐって」『京都府埋蔵文化財情報』第88号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 橋崎彰一 1976 『日本陶磁全集6 白瓷』中央公論社
- 野水 仁・加藤 学・石田守之 2000 「4 石器・石製品」『上信越自動車道関係発掘調査報告書VII 真山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 橋本博文 1997 「北陸における鉄器の普及と展開－北関東との関わりで－」『第4回鉄器文化研究集会 東日本における鉄器文化の受容と展開 発表要旨集』鉄器文化研究会
- 馬場伸一郎 2004 「猫橋遺跡出土の緑色凝灰岩製管玉の製作工程と製作技術について」『加賀市猫橋遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 馬場伸一郎・宮田 明 2004 「緑色凝灰岩製管玉の施溝分割技術について(1)－石川県八日市地方遺跡の事例分析－」『アルカ研究論集』第2号 考古学研究所 株式会社アルカ
- 久田正弘 2002 「小松市一針B遺跡・一針C遺跡」(財)石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘・馬場伸一郎 2003 「石川県羽咋市東の場タケノハナ遺跡における弥生時代の管玉加工技術と角柱体の形成」『アルカ研究論集』第1号 株式会社アルカ
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群II-古瀬戸様式の編年-」『瀬戸市歴史民俗資料館紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館
- 前山精明 1999 「第3章 弥生・古墳時代 第2節土器 第4項続绳文時代」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 前山精明・相田泰臣 2002 「南赤坂遺跡」巻町教育委員会
- 三浦純夫 1980 「上田出西山遺跡発掘調査報告書」押水町教育委員会
- 水澤幸一 1998 「県営漏水防除事業に伴う発掘調査報告書I 兵衛遺跡・四ツ持遺跡」新潟県中条町埋蔵文化財報告書第15集 中条町教育委員会
- 水澤幸一 2004 「上越市史研究』第10号 新潟県上越市
- 室岡 博 1981 「頸城地方の海と海底海浜遺跡」増補改訂版 上越市総合博物館教養講習第1篇
- 室岡 博 1983 「弥生時代の遺跡」『ふるさと大潟町』新潟県中頸城郡大潟町
- 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川県考古学会
- 山崎忠良 2004 「一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書II 下別遺跡II」新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第134集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山下峰司 1995 「4 灰釉陶器・山茶桜」『魏晉 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『研究論集』4 九州歴史資料館
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
- 吉川俊久 2001 「三和村大野古墳群の調査」『第13回新潟県考古学会研究発表会 発表要旨』新潟県考古学会
- 渡邉朋和 2001 「八幡山遺跡発掘調査報告書」新潟県新津市教育委員会

## 下馬場遺跡 整穴建物觀察表

遺構名	グリッド	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深度 (m)	床面標高 (m)	主軸方向	主柱穴	炉 (焼土)	備考
1号整穴建物	III	円形	8.5	8.0	0.24	72.9	N-10°-W	P1～5・7・8 7本	円形	内側に2か所焼土あり
2号整穴建物	10G・H	隅丸方形	9.0	—	0.36	74.4	N-75°-W	P1～4	4本	P5～7の整穴、壁溝(北半分～内・外半分)
3号整穴建物	10E	隅丸方形	5.0	4.8	0.22	76.2	N-80°-W	P1～4	4本	中心に炉、南側に焼土 P5の整穴、壁溝(北東・東で途切れる)
4号整穴建物	8D・E	隅丸方形	6.2	5.7	0.34	69.88	N-83°-W	P1～4	4本	中心に炉 P5の整穴、壁溝(南西を除くすべて)
5号整穴建物	8F・8G	隅丸方形	4.8	4.5	0.58	74.73	N-65°-W	P1～2	2本	不明(検出されず) (2本小門) 方形
6号整穴建物	7F	隅丸方形	4.6	4.1	0.70	74.82	N-90°-W	P1・2	2本	中心に炉あり P3の整穴
7号整穴建物	5D・6D	円形	8.8	—	0.42	74.64	N-50°-W	P1・2・5～7	不明(検出されず)	P3・4は主柱穴ではないか
8号整穴建物	4D	隅丸方形	3.7	—	0.12	73.38	N-5°-W	不明	南西に焼土2か所あり	北西隅、南側で一括土器
9号整穴建物	5F・G	長方形	4.4	3.4	0.24	72.39	N-4°-W	P1・2	2本	東側に焼土5か所 P3の整穴
10号整穴建物	8I	(長方形)	—	3.5	0.28	71.9	N-40°-E	P1の(2本か)	中心に炉あり	北西側の区画から出土化米
11号整穴建物	5I	隅丸方形	6.5	6.2	0.60	70.44	N-24°-E	P1～4	4本	中心に炉あり、北側に2か所焼土あり 壁溝、P5の整穴
12号整穴建物	6J・7J	隅丸長方形	6.2	4.9	0.68	70.12	N-61°-W	P1・2	2本	P3の整穴
13号整穴建物	5H	隅丸長方形	5.9	4.9	0.36	71.16	N-81°-W	P1・2	2本	P3の整穴
14号整穴建物	5J・6J	隅丸方形	4?	—	—	—	—	—	—	—

## 下馬場遺跡 整穴建物内ピット觀察表

整穴建物	遺構名	平面形	断面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	備考
1号整穴	P1	円	台形状	48	54	70	主柱穴
	P2	円	箱状	30	62	70	主柱穴
	P3	円	箱状	30	72	70	主柱穴
	P4	円	台形状	34	60	70	主柱穴
	P5	椭円	箱状	36	68	70	主柱穴
	P7	円	開口状	60	50	70	主柱穴
	P8	円	台形状	56	52	70	主柱穴
	P9	円	台形状	48	—	81	他とは配置がずれため主柱穴ではないか
	P10	円	箱状	60	68	50	主柱穴
2号整穴	P1	円	箱状	66	48	60	主柱穴
	P2	椭円	台形状	98	52	34	主柱穴
	P3	椭円	台形状	70	62	48	主柱穴
	P5	円	台形状	60	56	38	卵の東側に位置する
	P6	方	台形状	98	90	56	野蔵穴か
	P7	椭円	台形状	154	68	14	東側の壁間に平行して掘られたものか。野蔵穴?
	P8	円	台形状	105	68	67	主柱穴
3号整穴	P2	円	台形状	60	60	74	主柱穴
	P3	円	台形状	50	60	64	主柱穴
	P4	円	台形状	48	60	68	主柱穴
	P5	円	開口状	56	—	40	野蔵穴か
	P6	圓	箱状	32	—	72	主柱穴
4号整穴	P1	円	箱状	38	32	68	主柱穴
	P2	円	台形状	28	—	68	主柱穴
	P3	円	台形状	28	—	76	主柱穴
	P4	円	台形状	30	—	76	主柱穴
	P5	椭方	台形状	86	—	34	野蔵穴か
5号整穴	P1	椭円	開口状	70	54	60	主柱穴
	P2	円	弧状	66	68	42	主柱穴
	P3	椭円	台形状	110	54	32	整穴中心に位置する
	P4	椭円	弧状	52	—	18	整穴南東側の壁間に平行して位置する。野蔵穴?
6号整穴	P1	円	台形状	32	—	60	主柱穴
	P2	円	台形状	32	—	60	主柱穴
	P3	円	台形状	98	78	28	野蔵穴か。管渠工跡点。砾石(28)出土
	P4	椭円	台形状	32	26	60	主柱穴
7号整穴	P1	円	台形状	20	—	33	主柱穴
	P3	円	台形状	43	—	24	他とは配置がずれため主柱穴ではないか
	P4	円	台形状	48	—	24	他とは配置がずれため主柱穴ではないか
	P5	円	台形状	37	30	62	主柱穴
9号整穴	P1	円	台形状	31	—	48	主柱穴
	P2	円	台形状	30	—	56	主柱穴
	P3	円	弧状	38	—	20	主柱穴
10号整穴	P1	円	弧状	38	—	51	主柱穴
	P2	椭円	弧状	82	52	15	野蔵穴か
11号整穴	P1	円	台形状	35	—	14	主柱穴
	P2	椭円	台形状	35	—	16	野蔵穴か
	P3	円	台形状	35	—	29	主柱穴
	P4	円	台形状	30	—	35	主柱穴
	P5	椭円	弧状	112	80	9	壁溝北東側、壁に平行して掘られたものか。野蔵穴?
12号整穴	P1	円	台形状	28	—	46	主柱穴
	P2	円	台形状	22	—	26	主柱穴
	P3	円	弧状	154	62	36	野蔵穴か
	P1	円	開口状	34	—	78	主柱穴
	P2	椭円	開口状	54	34	58	主柱穴
	P3	椭円	台形状	112	94	42	野蔵穴か

## 観察表

## 下馬場遺跡 弥生時代遺構観察表

遺構名	グリッド	層位	平面形	断面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	出土物	備考
SK1	13H17・22		円	U字状	135	130	34	—	
SK2	13H6・7・11・12		円	弧状	130	120	20	—	
SK3	13G5・13H1		円	U字状	133	119	125	—	
SK4	13G10・13H6		円	U字状	126	114	145	—	
SK5	10I13・4		楕円	弧状	150	127	14	314	
SK7	10G14		円	弧状	110	100	50	—	底径 105cm
SK8	9F7・8		円	弧状	110	117	47	315	
SK9	10I22		楕円	弧状	260	121	6	316～325	南辺に直径30cmのビット
SK10	9I3		円	U字状	67	68	38	—	
SK11	9H16・21		楕円	弧状	75	58	30	—	
SK12	7G15		楕円	弧状	105	80	25	—	
SK13	7H19・24		楕円	弧状	135	74	14	324	
P14	7E16・24		円	弧状	62	52	24	—	
P15	8D21・8E1		楕円	台形状	63	45	67	—	
P16	7C23		円	弧状	53	52	64	—	
SK17	10G1		円	弧状	96	90	41	327	直徑 100cm
SK18	10G15・20		円	弧状	95	87	51	328	直徑 115cm
SK19	7K7		円	弧状	94	82	89	—	直徑 65cm
SK20	12I26		円	弧状	80	76	19	—	
SK21	13F6		円	台形状	64	55	39	—	
SK22	12F18		楕円	開段状	119	73	47	—	
P23	12F20		円	開段状	48	42	20	—	

## 下馬場遺跡 時期不明炭窯観察表

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	備考	
CSK1	15H22・23	方	台形状	67	70	20		
CSK2	14I9・14	方	台形状	113	117	21	1,240 ± 40BP (放射性炭素年代測定) : 古代か	
CSK3	14F18・19・23・24	円	台形状	75	76	15		
CSK4	13E9	円	台形状	110	102	21		
CSK5	11H8・9・13・14	円	弧状	114	100	11	SH1のプラン内面で検出された	
CSK6	10I24	円	弧状	83	68	6		
CSK7	7H15・8H11	円	弧状	87	77	26		
CSK8	6I19	長方形	台形状	72	52	7		

## 下馬場遺跡 縄文時代の土坑観察表

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	ビット径	ビット深	備考
JSK1	14H4・15	長方	楕状	109	54	113	—	20	
JSK2	14H24・25	楕円	楕状	109	63	103	—	16	
JSK3	14H14・15	楕円	楕状	105	68	67	—	26	
JSK4	14H5・16H1	楕円	楕状	117	71	67	—	7	
JSK5	15G21・22	楕円	台形状	124	95	123	—	29	
JSK6	15G3	円	台形状	104	100	106	19	32	
JSK7	15F19	円	楕状	130	112	89	15	26	
JSK8	15F5・10	長方	楕状	97	58	92	6	18	
JSK9	15E20・16E16	長方	楕状	101	70	85	7	18	
JSK10	16H1・6	長方	台形状	91	68	99	7	14	
JSK11	16I6・7	長方	台形状	95	55	92	7	15	
JSK12	14H24・14S4・5	円	台形状	104	95	68	—	—	底部のビットは確認されず
JSK13	14G2・3・7・8	楕円	台形状	112	77	80	—	—	底部のビットは確認されず
JSK14	14F23・24	円	台形状	98	82	64	—	—	底部のビットは確認されず
JSK15	13C19・24	円	台形状	99	85	71	—	—	底部のビットは確認されず
JSK16	15E12・13	円	台形状	81	74	16	—	—	—

下馬場遺跡 SI1 出土器物観察表

取引上記 No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	—	費玉工芸品	石核	鈍石英	2.26	1.86	1.52	4.96	
2	—	費玉工芸品	角柱	鈍石英	2.20	1.13	0.84	2.61	
3	—	費玉工芸品	角柱	鈍石英	1.52	1.36	0.95	1.67	
4	—	費玉工芸品	角柱	鈍石英	1.78	1.41	0.92	2.95	
5	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	2.18	2.03	0.72	2.32	
6	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	1.13	0.97	0.54	0.22	
7	78	費玉工芸品	研磨	鈍石英	0.80	0.43	0.48	0.31	
8	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	0.86	0.48	0.22	0.09	
9	—	費玉工芸品	角柱	鈍石英	0.76	0.75	0.49	0.36	
10	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	0.50	0.33	0.12	0.04	
11	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	0.43	0.34	0.80	0.03	
12	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	0.55	0.42	0.15	0.04	
13	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	0.42	0.30	0.90	0.04	
14	—	費玉工芸品	チップ	緑色凝灰岩	0.88	0.58	0.14	0.06	
15	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	1.49	0.51	0.30	0.18	
16	—	費玉工芸品	チップ	緑色凝灰岩	0.82	0.44	0.16	0.08	
17	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	0.80	0.34	0.24	0.06	
18	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	1.14	0.68	0.48	0.28	
19	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	0.77	0.56	0.14	0.07	
20	—	費玉工芸品	チップ	緑色凝灰岩	0.51	0.42	0.05	0.05	
21	—	費玉工芸品	台柱	鈍石英	2.01	1.62	1.14	3.81	
22	41	石器	研磨具	鈍石	6.70	4.90	3.70	26.60	
23	96	費玉工芸品	台柱	緑色凝灰岩	2.45	1.05	0.55	1.31	
24	79	費玉工芸品	研磨	鈍石英	0.80	0.50	0.40	0.30	
25	—	費玉工芸品	台柱	鈍石英	2.16	1.04	1.10	1.92	
26	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	2.61	1.48	0.64	2.00	
27	—	費玉工芸品	台柱	鈍石英	1.43	0.79	0.64	0.63	
28	—	費玉工芸品	台柱	鈍石英	1.61	1.17	0.58	1.65	
29	—	費玉工芸品	台柱	鈍石英	1.51	1.04	0.62	0.76	
30	—	費玉工芸品	石核	鈍石英	4.12	1.77	1.55	14.32	
31	—	費玉工芸品	石核	鈍石英	2.34	1.94	1.79	4.77	
32	—	費玉工芸品	台柱	鈍石英	1.24	1.10	1.21	1.06	
33	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	0.86	0.50	0.34	0.07	
34	—	玉簡儀	星石	チヤード	3.64	2.62	2.04	25.56	
35	—	費玉工芸品	星石	鈍石英	5.21	3.76	2.89	44.79	
36	87	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	1.40	2.40	0.70	2.16	
37	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	2.92	1.53	1.20	4.12	
38	98	費玉工芸品	研磨	緑色凝灰岩	1.70	0.60	0.50	0.54	
39	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	1.26	0.84	0.42	0.45	
40	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	0.72	0.64	0.10	0.07	
41	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	0.62	0.44	0.25	0.10	
42	—	費玉工芸品	星石	鈍石英	5.70	4.10	3.11	79.38	
43	—	費玉工芸品	酒刀	鈍石英	0.81	0.36	0.20	0.07	

下馬場遺跡 SI2 出土器物観察表

取引上記 No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
2	—	費玉工芸品	原石	緑色凝灰岩	4.8	3.74	2.11	50	
3	2	右端	砾石	砂岩	14.7	8.4	7.4	660.7	有溝砾石
4	—	右端	磨石	安山岩	18.6	9.6	5.3	1030	
5	1	右端	砾石	砂岩	17.0	6.6	6	754.5	有溝砾石
6	—	右端	磨石	砂岩	12.05	7	5.1	530	
7	3	右端	砾石	砂岩	10.8	9.45	5.65	616.7	有溝砾石
8	—	右端	砾石?	砂岩	14.9	6.45	5.5	550	有溝砾石
9	—	右端	磨石	安山岩	14.5	8.95	5.3	800	
10	—	右端	砾石	砂岩	5.18	1.97	1.66	17.5	
11	8	右端	砾石	砂岩	35.7	25.2	13	11810	有溝砾石
12	24	右端	砾石	砂岩	13.6	5.25	5.3	496.6	
13	—	右端	磨石	安山岩	14.05	8.05	6.5	820	
14	6	右端	砾石	砂岩	15.3	7	7.65	950	有溝砾石
15	4	右端	砾石	泥岩	18.5	9	5.6	1097.9	有溝砾石

下馬場遺跡 SI3 出土器物観察表

取引上記 No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	7	右端	砾石	砂岩	7.7	7.95	2.15	150	有溝砾石
2	—	右端	砾石	砂岩	3.58	2.04	1.26	9.5	
3	—	右端	砾石?	砂岩	8.14	5.31	2.95	9.2	
4	26	右端	砾石	シンワ	15.6	12.9	8.4	2380	
5	—	右端	砾石	安山岩	4.96	3.88	2.2	50.5	
6	—	費玉工芸品	月杵	鈍石英	1.94	1.83	1.42	4.72	
7	9	右端	砾石	砂岩	12.2	4.6	2.5	248.9	有溝砾石
8	17	右端	砾石	砂岩	24.05	9.1	5.6	1140.5	9と同一
9	17	右端	砾石	砂岩	—	—	—	—	8と同一
10	—	右端	砾石	砂岩	9	6.3	3.65	208	
11	10	右端	砾石	砂岩	26.41	32.95	17.71	1800	有溝砾石

## 観察表

下馬場遺跡 SI4出土石器観察表

取手上げ No.	発見 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	115	勾玉	—	ヒスイ	1.3	0.85	1.35	10.3	
2		菅玉工芸品	角柱	滑石英	1.16	0.98	0.42	0.62	
3		菅玉工芸品	角柱	滑石英	1.87	1.16	0.76	1.63	
4	25	石器	砥石	滑灰岩	11.65	3.65	4.05	230.1	
5	38	石器	磨石類	ヒン岩	7.3	6.75	3	279.48	
6	27	石器	台石	滑灰岩	68.8	33.8	15.5	2621.0	
7		菅玉工芸品	角柱	滑石英	1.72	1.24	1.07	1.34	
8		石器	磨石類	砂岩	9.1	8.9	5.5	44.5	
9	22	石器	砥石	滑灰岩	24.85	18.6	9.55	6850	
10		石器	砥石	滑灰岩	0.96	0.96	0.2	0.15	
11	31	石器	磨石類	滑灰岩	11.5	6.8	3.1	382.5	
12		石器	砥石	砂岩	44.2	29.4	23.6	37.8	
13		石器	砥石	滑灰岩	2.4	1.56	0.88	2.5	
14		石器	磨石類	砂岩	11.31	7.7	5.05	430	

下馬場遺跡 SI5出土石器観察表

取手上げ No.	発見 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	39	剥片石器	剥片	滑灰岩	12.8	12.3	7.8	1195.5	
2		石器	磨石類	砂岩	15.1	7.6	4.9	810	
3	33	石器	磨石類	砂岩	15.3	7.5	6.6	919.3	
4		石器	磨石類	砂岩	17.6	8.9	7.7	1420	
5	30	石器	磨石類	角閃石安山岩	14.4	6.25	5.1	649.3	
6	18	石器	砥石	砂岩	14.6	8.1	4.8	982.2	

下馬場遺跡 SI6出土石器観察表

取手上げ No.	発見 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
1	1	菅玉工芸品	剥片	緑色凝灰岩	0.34	0.29	0.14	0.08		
2	3	玉關係	原石	蛇紋岩	2.13	1.94	0.62	3.53		
3	3	43	石器	研磨具	4.2	3.7	2.55	7.2		
3	3	111	玉關係	原石	ヒスイ	2.7	1.55	1.5	8.38	
4	6	玉關係	原石	チャート	2.38	2.05	1.46	8.13		
5	7	菅玉工芸品	剥片	緑色凝灰岩	2	1.98	0.4	2.06		
6	8	玉關係	原石	チャート	1.8	1.61	0.83	3.04		
7	9	玉關係	原石	チャート	3.56	2.24	1.72	11.66		
8	10	玉關係	原石	チャート	1.48	1.04	0.87	1.73		
9	11	玉關係	原石	チャート	3.05	2.77	1.27	22.52		
10	12	97	菅玉工芸品	角柱	緑色凝灰岩	2.3	1.35	0.95	2.48	
11	13	92	菅玉工芸品	角柱	緑色凝灰岩	1.9	1.1	0.9	2.16	
12	14	玉關係	原石	チャート	1.92	1.58	0.96	3.61		
13	15	玉關係	原石	チャート	2.02	1.64	1.27	4.33		
14	16		剥片	ヒスイ	2.1	1.99	0.79	2.99		
15	17	玉關係	原石	チャート	1.28	0.93	0.74	1.19		
16	18	40	石器	原石	蛇紋岩	6.55	4.45	3.3	104.93	
17	19	玉關係	原石	チャート	3.5	1.95	1.6	11.31		
18	20	玉關係	原石	チャート	2.81	2.62	1.57	13.84		
19	21	玉關係	原石	チャート	2.16	1.03	0.83	2.76		
20	23	玉關係	原石	チャート	2.1	1.78	1.33	6.13		
21	24	玉關係	原石	チャート	1.62	1.38	0.91	3.42		
22	25	菅玉工芸品	剥片	緑色凝灰岩	1.4	1.12	0.38	0.44		
23	26	石器	原石	蛇紋岩	3.72	2.16	1.61	20.42		
24	27	玉關係	原石	チャート	2.28	2.05	1.56	11.75		
25	29	42	石器	研磨具	7	5.05	5.1	32.97		
26	30	19	石器	砥石	砂岩	14.8	10.9	7.3	1965.4	
27	31	34	石器	原石	99石	10.65	8.55	7.25	702.2	
28	32	21	石器	砥石	99石	44	19.25	16.1	2014.0	
29	33	28	石器	台石	99石	32.6	22.31	13.85	1110.0	
30	24		玉關係	原石	チャート	1.8	1.7	1.07	4.76	
31	35	108	玉關係	原石	ヒスイ	1.35	1.1	0.5	1.06	
32	36		玉關係	原石	チャート	1.49	1.16	0.66	1.61	

## 下馬場遺跡 SI7 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
1	55	費玉工芸品	両極端素材	鉄石英	3.1	1.6	0.6	3.13		
2	-	費玉工芸品	刃物	鉄石英	2.76	2.25	0.42	2.36		
3	-	費玉工芸品	両極端素材	鉄石英	2.36	1.4	0.77	1.94		
4	-	費玉工芸品	両極端素材	鉄石英	2.33	2.3	1.14	6.22		
5	-	費玉工芸品	角柱	鉄石英	2.6	1.87	1.54	7.98		
6	-	費玉工芸品	角柱	鉄石英	3.12	0.94	1.02	1.81		
7	-	石器	豆石	蛇紋岩?	3.19	1.92	1.94	18.93		
8	-	石器	豆石	蛇紋岩?	4.36	2.94	1.67	30.43		
9	53	費玉工芸品	両極端素材	鉄石英	3.5	3.85	2.1	29.27		
10	52	費玉工芸品	両極端素材	鉄石英	2.35	2.6	1.27	7.89		
11	-	費玉工芸品	刃物	鉄石英	2.43	1.43	1	3.31		
12	85	費玉欠損品	研磨・穿孔	鉄石英	1.42	0.4	0.38	0.38		
13	-	費玉工芸品	分離	鉄石英	2.3	1.78	0.86	3.29		
14	56	費玉工芸品	両極端素材	鉄石英	2.75	1.15	0.9	2.41		
14	62	費玉工芸品	角柱	鉄石英	3.07	1.2	1.35	4.49		
15	-	費玉工芸品	石核	鉄石英	1.93	1.85	1.55	5.85		
16	-	費玉工芸品	角柱	鉄石英	1.95	1.77	1.08	3.45		
17	-	費玉工芸品	分離	鉄石英	3.32	1.74	1.31	6.4		
18	-	費玉工芸品	石核	鉄石英	5.14	3.24	1.93	20.65		
19	20	費玉工芸品	分離	鉄石英	2.49	2.14	1.04	5.24		
20	21	-	費玉工芸品	石核	3.37	2.59	2.02	15.6		
21	22	76	費玉工芸品	研磨	2.4	0.9	0.65	1.75		
22	23	65	費玉工芸品	角柱	2.1	4.9	0.8	1.82		
23	24	-	費玉工芸品	分離	2.93	1.3	1.83	6.13		
24	25	72	費玉工芸品	角柱	2.15	0.8	0.6	1.19		
25	26	103	費玉	緑色擬灰岩	0.92	0.23	0.23	0.08		
26	27	50	費玉工芸品	石核	4.6	3	2.3	30.38		
27	28	51	費玉工芸品	両極端素材	鉄石英	3.25	3.9	2.75	38.39	
28	29	-	費玉工芸品	角柱	1.72	1.34	1.14	2.4		
29	30	11	石器	砾石	1.23	10.55	8.5	1188 有溝砾石		
30	31	-	費玉工芸品	石核	3.68	2.34	1.65	15.77		
31	32	100	費玉工芸品	研磨	1.95	0.69	0.65	0.92		

## 下馬場遺跡 SI8 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	49	費玉工芸品	石核	鉄石英	5.45	3	3.1	54.29	

## 下馬場遺跡 SI11 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	20	石器	砾石	砂岩	13.85	10.3	6.7	1150.6	
2	110	玉関係	原石	ヒスイ	6.65	4.5	3.9	147.58	
3	-	費玉工芸品	角柱	緑色凝灰岩	1.47	1.11	0.9	1.48	
4	-	費玉工芸品	刃物	緑色凝灰岩	1.31	0.83	0.29	0.19	
5	-	費玉工芸品	石核	鉄石英	2.87	2.42	2.35	10.38	
6	-	石器	磨石類	安山岩	7.1	6.5	4.7	302	
7	37	石器	磨石類	ビンゴ	3.6	5.1	3.95	99.8	
9	-	費玉工芸品	角柱	緑色凝灰岩	1.29	1.2	0.82	1.53	

## 下馬場遺跡 SI12 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	50	費玉工芸品	角柱	鉄石英	1.63	0.7	0.66	0.67	
2	-	石器	磨石類	砂岩	8.6	5.6	4.2	240.1	
3	104	費玉	-	緑色凝灰岩	1.16	0.27	0.27	0.12	
4	12	石器	砾石	砂岩	19.05	15.15	14.25	3630 有溝砾石	
6	114	玉関係	施溝	ヒスイ	3.26	3.2	4.2	24.24	

## 下馬場遺跡 SI13 出土石器観察表

取り上げ No.	報告 No.	種別	分類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	36	石器	磨石類	安山岩	9.3	10.65	5.65	750.6	
2	45	石器	研磨具	軽石	3.9	3.45	2.5	4.97	
3	151	石器	磨石類	安山岩	7.8	6.6	3.85	189.9	
4	14	石器	砾石	砂岩	29.1	17.5	17.75	11200 有溝砾石	
5	15	石器	砾石	泥岩	18.45	14.3	5	1239.6 有溝砾石	
6	16	石器	砾石	泥岩	17.3	11.8	10.5	2560 有溝砾石	
7	113	玉関係	原石	ヒスイ	3.3	2.8	1.75	28.81	



馬場遺跡 弥生土器觀察表 (2)

第三章 馬場遺跡  
旁生土器銀錠表 (3)

第四場遺跡 旁生土器觀察表 (4)

5. 旁生土器觀察表 (5)

第6章 土器遺跡

下馬場道路 宅生土器群解表(7)

番号	タリット	通称	形状	表面	断面	底面	分類	寸法 (cm)	寸法 (cm)	寸法 (cm)	底面	外周底面	底面	色調	外見
301 63 - 73	S312 C	3	5e	手付土器	直筒	底面	-	4.4	底、チヌ、白	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)
302 7311	S312 A	3	3	手付土器	直筒	底面	-	4.7	底、チヌ、白	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)
303 7311.8	S313 A	3	3	手付土器	直筒	底面	E2	12.8	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
304 5912.3	S313 B	3	3	手付土器	直筒	底面	E1	14.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
305 5911.8	S313 B	3	3	手付土器	直筒	底面	E2	12.8	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
306 5911	S313 B	3	3	手付土器	直筒	底面	E2	12.8	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
307 5911	S313 A	2	2	手付土器	直筒	底面	-	-	4.8	底、チヌ、白	-	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)
308 5911	S314	2	2	手付土器	直筒	底面	C4	15.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
309 5911	S314	2	2	手付土器	直筒	底面	A2	16.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
310 5911	S314	2	2	手付土器	直筒	底面	A3	16.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
311 5911	S314	2	2	手付土器	直筒	底面	B22	16.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
312 5911	S314	2	2	手付土器	直筒	底面	C2	21.0	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
313 5911	S314	2	3 - 4	手付土器	直筒	底面	C2	13.0	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
314 1003 - 4	S35	3	3	手付土器	直筒	底面	B	12.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
315 1008	S37	3	3	手付土器	直筒	底面	-	-	5.2	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
316 5917 - 8	S38	3	3	手付土器	直筒	底面	C4	14.0	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
317 5917 - 8	S38	3	3	手付土器	直筒	底面	C4	16.0	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
318 5917 - 8	S38	3	3	手付土器	直筒	底面	C4	16.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
319 5917 - 8	S38	3	3	手付土器	直筒	底面	-	-	5.1	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
320 5917 - 8	S38	3	3	手付土器	直筒	底面	B24	16.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
321 5917 - 8	S38	3	3	手付土器	直筒	底面	E	10.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
322 5917 - 8	S38	3	3	手付土器	直筒	底面	E	10.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
323 5917 - 8	S38	3	3	手付土器	直筒	底面	E	10.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
324 7319 - 24	S313	1	1	手付土器	直筒	底面	J	7.9	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
325 5917 - 8	S38	3	3	手付土器	直筒	底面	G	16.4	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
326 5917 - 8	S38	3	3	手付土器	直筒	底面	E	16.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
327 1005	S317	3	3	手付土器	直筒	底面	C4	16.0	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
328 7317	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	A1	14.0	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
329 48	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	H	9.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
330 48	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	H	17.0	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
331 48	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	A3	16.0	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
332 50	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	B	16.0	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
333 51	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	C2	14.0	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
334 51	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	A	13.0	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
335 5917	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	B	12.8	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
336 5917	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	E1	15.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
337 40	S316	3	3	手付土器	直筒	底面	H	9.6	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
338 5913	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	J	-	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
339 4013	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	A	-	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
340 50	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	A	-	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
341 40	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	A	-	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
342 46	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	C	19.8	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
343 46	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	C	19.8	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
344 46	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	A	-	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
345 4013	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	A	-	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
346 50	S319	3	3	手付土器	直筒	底面	A	-	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	
347 72	S312 D	3	3	手付土器	直筒	底面	A	-	-	チヌ	チヌ	チヌ	底、(底付)、(底化)	底、(底付)、(底化)	

## 下馬場遺跡 猛生時代石器觀察表

NO.	タグド	通緒	とりあげ	工具	部位	石材	砂岩	板岩	粘土	貝殻	骨	角	皮	毛
							(cm)							
1	10621	S12	SS	石刀	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
2	10621	S12	S3	D	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
3	10621	S12	S7	C	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
4	98735	S12	S15	D	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
5	911	S12	S15	C	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
6	98735	S12	S14	D	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
7	1073	S13	S1	C	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
8	98735	S12	S11	C	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
9	10724	S13	S7	D	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
10	10722	S13	S7	A	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
11	5024	S12	S29	D	N	砾石(有孔)	砂岩							
12	7117	S12	S4	雙	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
13	76	S13	S4	D	b	砾石(有孔)	砂岩							
14	50228	S13	S5	C	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
15	50228	S13	S5	C	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
16	76113	S13	S6	H	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
17	10723	S13	S8 * 9	C	刃上	砾石(有孔)	砂岩							
18	9613	S15	S6	A	刃上	砾石	砂岩							
19	7710	S16	S26	A	刃上	砾石	砂岩							
20	518	S11	S1	D	刃上	砾石	砂岩							
21	773	S11	S28	A	刃上	砾石	砂岩							
22	80025	S14	S9	C	刃上	砾石	砂岩							
23	AF	S12	S12	C	刃上	砾石	砂岩							
24	9G	S12	S12	C	刃上	砾石	砂岩							
25	81024	S14	S4	C	刃上	砾石	砂岩							
26	10718	S13	S4	C	刃上	砾石?	砂岩							
27	9865	S14	S6	A	刃上	砾石	砂岩							
28	7714	S16	(p13)	S19	C	刃上	砾石	砂岩						
29	911	S12	S2	C	刃上	砾石	砂岩							
30	9573	S15	S5	C	刃上	砾石	砂岩							
31	951	S14	S11	D	-	砾石	砂岩							
32	945	S15	S5	A	刃上	砾石	砂岩							
33	8039	S15	S3	D	刃上	砾石	砂岩							
34	7710	S16	S27	A	刃上	砾石	砂岩							
35	4E	S13	S1	A	刃上	砾石	砂岩							
36	518	S13	S1	B	刃上	砾石	砂岩							
37	6117	S11	S7	C	刃上	砾石	砂岩							
38	8024	S14	S5	D	刃上	砾石	砂岩							
39	8073	S15	S1	D	刃上	砾石?	砂岩							
40	795	S16	S16	D	4 - 5	砾石	砂岩							
41	11121	S11	S22	D	刃上	砾石	砂岩							
42	7874	S16	S25	A	刃上	砾石	砂岩							
43	759	S16	S3	B	刃上	砾石	砂岩							
44	51	S11	S1	A	刃上	砾石	砂岩							
45	6E	S13	S2	C	刃上	砾石	砂岩							
46	47	S1	S1	I	刃上	砾石?	砂岩							

下馬場遺跡 石製品（玉関係工品・ヒスイ・その他の）観察表

No.	番 No.	グリッド	遺構 とき おり	遺物内 区域	層位	種別	分類	石材	重量 (g)	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	備考
48	62	5C - SD - 6D	S17	C	1	管工工品	石核	铁石英	29.24	4.80	3.00	2.20	裏面は下利面。上下は分界面
49	67	4D24	S18	S1 A	1	管工工品	石核	铁石英	54.29	4.55	3.00	2.10	下は古玉材面。裏面は原石面
50	60	6D12	S17	S26 D	4	管工工品	石核	铁石英	30.38	4.60	3.00	2.30	
51	2	6D12	S17	S27 D	4	管工工品	打削・兩面状	铁石英	38.39	3.25	3.50	2.75	下は海綿打撃による平行な面をもつ
52	3	4D5	S17	S10 C	4	管工工品	打削・兩面状	铁石英	7.80	2.35	2.60	1.77	裏面は海綿打撃による平行な面をもつ
53	4	5D5	S17	S9 C	4	管工工品	打削・兩面状	铁石英	29.27	2.50	3.85	2.10	裏面は海綿打撃による西面。裏面は鉄石を有す
54	65	6D	S17	D	3	管工工品	打削・兩面状	铁石英	3.10	2.70	1.80	1.00	裏面は海綿打撃による西面
55	7	9C25	S17	S1 C	4	管工工品	打削・兩面状	铁石英	3.13	3.10	1.60	0.60	裏面は海綿打撃による北面。裏面は正面をもつ
56	5	6D1	S17	S14 D	4	管工工品	打削・兩面状	铁石英	2.41	2.75	1.15	0.90	裏面は海綿打撃による北面
57	10D	7I			II	管工工品	打削・兩面状	铁石英	3.27	2.15	1.60	1.00	裏面は海綿打撃による西面
58	101	7I			II	管工工品	打削・兩面状	铁石英	2.48	2.65	1.20	0.65	裏面は原石面を残す。裏面は分界面
59	57	6D	S17	D 3	管工工品	打削・兩面状	铁石英	1.92	2.40	1.20	0.85	裏面は山系を残す。裏面に斜面工による	
60	79	11I18	S11 (pa9)	B 地上	管工工品	角粒状素材	石核	石核	5.70	1.75	1.80	1.50	ピット9出土
61	69	11I18	S11 (pa9)	B 地上	管工工品	内粒状素材	铁石英	3.76	2.20	1.20	1.40	ピット9出土	
62	6	6D1	S17	S14 D	4	管工工品	角粒状素材	铁石英	4.49	2.25	1.20	1.35	
63	58	6D	S17	D 1	管工工品	角粒状素材	铁石英	2.46	2.40	0.90	0.90		
64	61	6D	S17	D 3	管工工品	角粒状素材	铁石英	2.36	1.60	1.15	1.10		
65	64	6D	S17	D 1	管工工品	角粒状素材	铁石英	1.80	2.45	0.85	0.80		
66	13	6D	S17	D 1	管工工品	角粒状素材	铁石英	3.30	3.00	1.30	0.95		
67	12	6D	S17	D 1	管工工品	角粒状素材	铁石英	1.93	2.45	0.80	0.80		
68	8	6D7	S17	S22 D	4	管工工品	側面削離	铁石英	1.82	2.10	0.90	0.80	
69	24	5D	S17	B 1	管工工品	側面削離	铁石英	1.85	2.22	0.80	0.80	側面に細かい凹面	
70	65	6D	S17	D 3	管工工品	側面削離	铁石英	1.63	2.50	0.90	0.75	側面に進出した細かい凹面	
71	34	10E	S12	D 2	管工工品	側面削離	铁石英	1.13	1.90	0.65	0.75	側面に細かい凹面	
72	9	6D12	S17	S24 D	4	管工工品	側面削離	铁石英	1.19	2.15	0.80	0.60	側面に細かい凹面
73	1	6D	S17	D 1	管工工品	側面削離	铁石英	5.17	2.45	1.85	1.55		
74	15	5D	S17	B 4	管工工品	研磨	铁石英	1.45	2.15	0.90	0.75	裏面は滑面。裏面には細かい凹面	
75	59	5D - 6D	S17	C サブレシンド	管工工品	研磨	铁石英	1.80	1.80	0.95	0.90		
76	10	6D7	S17	S21 D	4	管工工品	研磨	铁石英	1.75	2.40	0.80	0.65	
77	39	11I	S11	B 織作土	管工工品	研磨	铁石英	5.27	3.30	1.60	0.90		
78	33	11I9	S11	S7 D	4	管工工品	研磨	铁石英	0.31	0.80	0.43	0.48	西面欠損
79	43	11I7	S11	S24 C	1	管工工品	研磨	铁石英	0.30	0.80	0.50	0.40	多角柱状
80	16	6D	S17	D 4	管工工品	研磨	铁石英	0.57	1.22	0.61	0.51	多角柱状	
81	35	10E	S13	C 5	管工工品	研磨	铁石英	0.63	1.40	2.60	0.40	多角柱状	
82	17	5D - 6D	S17	A 4	管工工品	穿孔	铁石英	0.35	0.85	0.53	0.60	多角柱状	
83	25	13G		1 b	管工工品	研磨	铁石英	1.00	0.80	0.40	0.10	両端に深さ0.05mmの穴孔。多角柱状	
84	19	5D	S17	B 1	管工工品	研磨・穿孔	铁石英	0.08	0.51	0.20	0.17		
85	11	5D10	S17	S27 S12 C	4	管工工品	研磨	铁石英	0.38	1.42	0.40	0.38	
86	18	6D	S17	D 4	管工工品	研磨	铁石英	0.02	0.44	0.41	0.01	穿孔をもつ洞穴	
87	68	11I3	S11	S26 D	3	管工工品	洞穴	铁石英	2.16	1.40	2.40	0.70	
88	63	6D	S17	D 1	管工工品	洞穴	铁石英	3.94	2.70	3.79	0.75		
89	73	5F24		0	管工工品	石核	褐色石英	55.33	0.35	4.20	2.40		
90	54	5H	S113	A 3	管工工品	石核	褐色石英	8.13	2.25	2.00	1.45		
91	56	5H	S113	C 3	管工工品	形削	褐色石英	0.91	1.35	0.80	0.75		
92	53	7F14	S16	S11 B 4 ~ 5	管工工品	研磨	褐色石英	2.16	1.80	1.10	0.90		
93	51	7F	S16	D 3	管工工品	形削	褐色石英	3.79	1.85	1.80	1.30		
94	22	6D	S17	D 4	管工工品	形削	褐色石英	0.75	1.40	0.90	0.60		
95	20	5D - 6D	S17	C サブレシンド	管工工品	形削	褐色石英	0.79	1.85	0.90	0.45	サブトレ	
96	42	11I4	S11	S23 D 3	2	管工工品	形削	褐色石英	1.31	2.45	1.05	0.55	
97	52	7F14	S16	S10 B 4 ~ 5	管工工品	形削	褐色石英	2.48	2.30	1.35	0.95		
98	27	11I7	S11	S58 B 1	1	管工工品	研磨	褐色石英	0.54	1.70	0.60	0.50	
99	21	6D	S17	D 4	管工工品	側面削離	褐色石英	0.44	1.20	0.75	0.65		
100	31	6D11	S17	S31 D 4	1	管工工品	研磨	褐色石英	0.92	1.95	0.59	0.55	
101	26	11I	S11	B 織作土	管工工品	研磨	褐色石英	0.40	1.48	0.40	0.38		
102	28	11I	S11	B 製作土洗	管工工品	研磨・穿孔	褐色石英	0.40	1.48	0.40	0.38		
103	29	6D12	S17	S25 D 4	1	管工	—	褐色石英	0.08	0.92	0.23	0.23	
104	30	7I12	S112	S3 D 5a	管工	—	褐色石英	0.12	1.16	0.27	0.27		
105	37	5H	S113	C	管工工品	—	褐色石英	0.04	0.89	0.28	0.28		
106	40	11I	S11	C 面×4.5~水洗	管工	—	褐色石英	0.06	0.50	0.31	0.31		
107	23	6D	S17	D 4	管工工品	側面削離	褐色石英	0.02	0.48	0.25	0.25		
108	48	7F14	S16	S51 B 5	1	管工工品	—	七石	1.06	1.25	1.10	0.50	
109	66			II	聚石	—	七石	25.04	4.10	2.50	2.35		
110	71	5I11	S111	S2 C 3	聚石	—	七石	147.58	6.65	4.50	3.90		
111	49	7I9	S16	S3 B 4	聚石	—	七石	8.38	2.70	1.85	1.50		
112	186	6I16		B 1	玉珠体	抛磨	七石	247.76	8.20	6.20	4.10	施溝分層(透空)	
113	55	5H11	S113	S7 B 剥土	聚石	—	七石	28.81	3.30	2.80	1.75		
114	45	7I22	S112	S5 A 9	玉珠体	抛磨	七石	24.24	3.25	3.20	2.40	施溝分層(透空)	
115	98	9I4	S11	A 剥土	玉珠	—	七石	19.30	1.30	0.85	1.35		
116	36	5H	S113	C 剥土	玉珠	—	七石	0.44	0.70	0.75	0.75		
117	86			I	玉器	—	玉器	3.60	1.95	1.40	0.70		
118	503	9G		1 b	不明石製品	—	元石	21.96	3.00	5.70	1.30	左右両側が取りか?	

## 下馬場遺跡 鉄製品観察表

No.	グリッド	遺構	堅穴地区	層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
119	I31	SH1	ベルト面	3b	鉄頭	(2.1)	1.2	0.2	1.4	
120	9・10H	SE2	A	褐色土	板状鉄製品	(2.9)	1.4	0.1	3.53	表面に木質が付着
121	7F	SE6	D	4・5	板状鉄製品	(3.0)	1.0	0.2	4.32	
122	6D	SE7	D	黒褐色土	板状鉄製品	(2.1)	0.5	0.15	1.06	木質が付着
123	5F・G	SE9	B	—	鉄	(3.0)	0.65～0.8	0.2～0.3	3.7	先端部にかけて両刃。劈切する 鋸化によりり木質が付着。大き約1mmと 2mmがあり、断面方形。2mmのものは長 く上下破壊している。
124	5H	SH13	D	周溝覆土	針状鉄製品	(7.5)	-	-	10.79	

## 下馬場遺跡構文・その他の土器観察表

No.	出土地点	層位	時相	種別	残存部位	調査・瓶文	胎土	備考	
348	5F	II	早期前業	深溝	口縁部	内外面に密接施文しない山形文	織維・石英・角閃石・白色粒子・ 小穢	3本1単位	
349	8E	I b	早期前業	深溝	体部	外面に山形文	織維・石英・白色粒子	3本1単位	
350	6I	II b	早期前業	深溝	体部	外面に山形文	織維・石英・白色粒子		
351	5E	II b	早期前業	深溝	体部	外面密接しない菱日文	織維・石英・白色粒子		
352	5E	II	早期前業	深溝	体部	外面密接しない菱日文	織維・石英・黑色粒子		
353	5E	II b	早期前業	深溝	体部	外面密接しない菱日文	織維・石英・白色粒子・黑色粒子		
354	4E	II b	早期前業	深溝	体部	外面密接しない菱日文	織維・石英・白色粒子		
355	5H	—	早期前業	深溝	体部	横円文	織維・石英・白色粒子・赤色粒子	共生のSH13 A区出土	
356	4D	II	早期前業	深溝	口縁部	山形状に網状突起(貝殻か)、具烟 腹壁	織維・石英・角閃石・白色粒子・ 小穢		
357	5E	II	前期前業?	深溝	体部	羽状網文	織維・石英・雲母・白色粒子・赤 色粒子	357・358と同一	
358	5E	II	前期前業?	深溝	体部	羽状網文	織維・石英・雲母・白色粒子・赤 色粒子	356・358と同一	
359	5E	II	前期前業?	深溝	体部	羽状網文	織維・石英・雲母・白色粒子・赤 色粒子	356・357と同一	
360	4E	II	前期後業	深溝	体部	粘膜浮線(山形・横位)、粘土貼 付(斜格子状)	石英・角閃石・雲母・白色粒子・ 小穢	十三書式	
361	7J	—	前期?	深溝	底部	絞条体付直文	石英・角閃石・雲母・白色粒子・ 小穢	共生のSH12 A区出土	
362	4D	II	中期前業	深溝	口縁部	口縫間連続横直文、口縫部小突 起?、穴空起?から垂下する棒帶、 跳帶上部竪筋爪形文、平行横区画 (手跡起?)	石英・雲母・白色粒子		
363	8J	I b	中期初頭	深溝	口縁部	口縫間連続横爪形文、(縫部平行 横区画(平行手跡起線)、新方向 の集合)合流線	石英・白色粒子・小穢		
364	4E	II	晚期	要	口縁部	口縫部無文帯	石英・長石・雲母・白色粒子・小 穢		
365	4E	I	晚期	要	口縁部	口縫部無文帯	石英・長石・雲母・白色粒子・小 穢		
366	4E	II	晚期	要	口縁部	口縫部無文帯	石英・長石・雲母・白色粒子・小 穢		
367	4E	II	晚期	深溝	口縫部	口縫部に横円状突起	石英・白色粒子(多い)	368と同一か	
368	4E	II	晚期	深溝	体部上位	浮線文	石英・白色粒子(多い)	367と同一か	
369	7J	II	後期	要	体部上位	滑消、沈線、RL純文	石英・雲母・白色粒子	加曾利B・C式	
370	6I	I b	後・晚期?	要	体部上位	滑消、沈線、RL純文	角閃石・雲母		
371	5D	I	晚期	深溝	口縫部	滑消	石英・雲母・白色粒子・赤色粒子		
372	4D10	II	晚期	要	口縫部	口縫部山形の突起	石英・角閃石・雲母		
373	4D10・ 6J	II	晚期	要	口縫部	純文(地文不明)	石英・角閃石・雲母	6JはI層出土。複数か	
374	5I	II	不明	不明	底部	外側面に沈線1条	雲母・小穢		
375	5H	I b	不明	主添	内盤	—	外側面に沈線	石英・雲母・小穢	
376	7I	II	共生中期?	要	体部	外側斜方に向かいハケ、内面横方 向ハケ	石英・白色粒子(多い)	外面に炭化物付着	
377	6I	I	共生中期?	要?	体部	外側斜方に向かいハケ、内面横方 向ハケ	石英・白色粒子(多い)	外面に炭化物付着	
378	15G	—	共生中期?	要?	体部	地文純文・離瓣状工具による山形 の沈線	石英・白色粒子・赤色粒子		

## 観察表

下馬場遺跡 純文時代石器觀察表

No.	グリット	通構	遺構内 [西面]	層位	種別	分類	石材	砂岩 粒度	重量(g)	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	備考
125	6J	SI14		覆土	石刀		安山岩		10.83	7.15	2.45	1.00	刮石器 左右側縁に圓錐剥離
126	6J	SI14		3	石刀		安山岩		3.72	4.60	1.50	0.56	刮石器 黒化のため細孔の微細剥離不明
127	5F - 5G	SI9	B	床上	尖頭器		頁岩		0.36	2.45	0.80	0.20	早期か
128	5H	SI13	D		石鏟		黑曜石		0.43	1.45	1.40	0.35	早期か
129	4I		II		石鏟		黑曜石		0.78	1.25	1.15	0.25	早期か
130	5E		II		石鏟木製品		安山岩		6.85	3.20	2.30	0.95	
131	6H		I - II		磨製石斧		蛇紋岩		30.03	5.50	2.75	1.00	
132	4D25		II		磨製石斧		蛇紋岩		25.63	6.50	3.20	1.00	
133	5H	SI13	B		磨製石斧		鰐肝岩		85.33	8.20	4.10	1.50	
134	8E		I b		磨製石斧		蛇紋岩		121.20	8.80	5.00	1.80	
135	5E		II		磨製石斧		凝灰岩		51.27	8.10	2.90	1.40	両側縁平坦な面を持つ
136	14G		II		打製石斧		凝灰岩		352.23	14.70	6.40	2.90	
137	4F		I		兩極石器			チャート	4.34	3.10	2.20	0.50	
138	4F3		II		兩極石器			チャート	6.28	3.40	2.65	1.10	
139	4E		I		不定形石器		安山岩		1.47	1.20	2.45	0.40	
140	10E		I b		不定形石器		安山岩		150.57	9.00	7.90	1.90	
141	5F	SI9	C	5	不定形石器		安山岩		17.20	5.10	3.40	1.10	打製石斧の調節剝片?
142	胡蝶土				不定形石器		安山岩		21.23	3.50	5.60	1.40	
143	6J		I		磨石類	A	安山岩		761.10	13.90	6.60	5.75	特殊磨石
144	4E		I		磨石類	A	安山岩		572.90	14.20	7.30	5.20	特殊磨石
145	4E9		II		磨石類	A	安山岩		973.50	15.80	6.50	6.80	特殊磨石
146	6I25		II		磨石類	A	安山岩		472.64	11.70	5.90	5.20	特殊磨石
147	6G		II		磨石類	A	安山岩		167.10	6.35	6.05	3.00	
148	5E		II		磨石類	A	安山岩		693.80	11.65	9.25	4.55	
149	4F		II		磨石類	A	安山岩		226.80	9.40	8.70	2.50	
150	4G		I		磨石類	B	安山岩		255.10	8.10	7.00	3.50	
151	5H1				磨石類	B	安山岩		189.90	7.80	6.60	3.85	
152	9F		I b		磨石類	B	砂岩	細	504.50	12.45	7.55	4.75	
153	6I4		II		磨石類	B	安山岩		247.00	9.25	6.40	3.60	
154	6G21		II		磨石類	B	安山岩		175.40	8.00	7.40	2.50	
155	4H		I - II		磨石類	B	安山岩		386.00	10.40	8.90	3.40	
156	6J		II		磨石類	B	砂岩	粗	390.60	11.30	8.00	4.75	
157	4F3		II		磨石類	B	砂岩	中	254.30	10.40	6.50	3.45	
158	6I25		II		磨石類	B	砂岩	中	244.60	10.70	6.25	3.20	
159	5D		II		磨石類	B	砂岩	細	303.70	7.85	7.00	4.20	
160	5H		I - II		磨石類	B	安山岩		248.20	9.00	7.40	3.40	
161	5F		II		磨石類	B	砂岩	中	310.00	9.50	5.20	4.75	
162	6I9		II		磨石類	B	凝灰岩		404.30	10.25	9.00	3.20	
163	4D		II		磨石類	C?	安山岩?		54.60	5.85	4.20	1.65	
164	6J		I		磨石類	D	砂岩	細	287.10	7.35	7.00	4.30	
165	5D18		II		磨石類	D	安山岩		218.00	6.80	5.85	3.95	
166	5F		II		磨石類	E	砂岩	中	214.40	13.00	5.30	2.90	
167	4H		II		磨石類	E	砂岩	中	214.00	6.95	9.10	2.90	
168	8K12		II		磨石類	E	砂岩		340.70	9.20	7.05	4.15	
169	5I		I - II		磨石類	E	安山岩		207.10	10.45	7.50	3.10	
170	4H		I - II		磨石類	E	凝灰岩		363.20	9.50	7.95	4.05	
171	4E25		II		磨石類	E	安山岩		384.70	9.60	8.40	4.00	
172	17D		II		磨石類	E	安山岩		516.60	10.30	10.20	3.90	
173	4D		II		磨石類	F	砂岩	粗~中	320.60	9.60	7.50	4.50	
174	5E22		II		磨石類	G	安山岩		571.80	10.50	7.55	5.20	
175	5E		I		磨石類	G	砂岩	中	219.70	9.10	4.50	3.90	

## 細田遺跡 振立柱建物觀察表

遺構名	グリッド	断面 及び 寸法	横行 (間)	梁間 (間)	長さ (m)	幅 (m)	構造	主軸方向	面積 (m <sup>2</sup> )	ピット 平面形	備考
SB21	13C'10 - 15 - 20, 14C'6 - 11 - 12 - 16	2 - 2	3.8	3.2	標柱	N - 71° - W	8.4	円・楕円			
SB22	13C'14 - 15 - 19 - 20 - 25, 14C'11 - 12 - 16 - 17 - 21	3 - 2	4.8	2.95	標柱	N - 20° - W	14.1	円・楕円	SB26と軸を同じか?		
SB20	14C'16 - 21 - 22, 14D'2 - 7 - 12	4+ -	-	-	標柱	N - 70° - E	-	円・楕円	SB26と軸を同じにする		
SB26	13C'18 - 19 - 23 - 24, 13D'9 - 9 - 14 - 15 - 18~20 - 23~25	(5) 2+ (10) 3+	6.0	1.6	標柱	N - 66° - E	-	椭丸方形	SB20と軸を同じにする		

## 細田遺跡 遺構觀察表

遺構名	グリッド	断面 及び 寸法	断面形	断面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	時期	出土遺物	遺構前後関連	備考
SD6	14L'2 - 3 - 7 - 8 - 13 - 14 - 19	G -	一	楕状	- 220	15	吉代	153~161	SD4との切り合いは不明		
SK39	13A'4 - 9	A	円	台形	- 139	34	中世	349~351			
Pt28	13B'4	B	円	台形	74	70	52	古代?	-		
Pt24	13A'25, 13B'5	C	円	台形	68	68	52	古代?	-		
Pt29	13B'9 - 14	D	円	台形	82	80	66	古代	138		
Pt30	13B'10, 14B'6	E	円	台形	80	72	54	古代?	-		
Pt31	13B'19	F	円	台形	40	36	27	古代?	-		
SD27	13C'2 - 5 - 8 - 9	G	-	楕状	- 100	12	吉代	-	振立柱建物と軸を同じにする		
Pt33	13C'9	H	円	台形	48	44	57	吉代	-		
Pt9	13C'8 - 9	I	円	U字状	38	34	43	吉代	-		
Pt13	14C'1	J	円	U字状	30	26	38	吉代	-		
SK36	14C'7 - 8	K	円	U字状	63	-	85	中世	324		
Pt18	14C'11	L	円	U字状	28	26	39	吉代	-	振立柱建物の柱穴の可能性あり	
SK12	13C'19	M	梢円	台形	74	38	35	吉代	-		
Pt19	13C'24	N	円	台形	30	22	28	吉代	-		
SE37	14C'17	O	円	U字状	104	110	185	吉代	139~140	SB21P6に切られる	
SX23	14D'1 - 2 - 6 - 7	P	梢円	楕状	310	180	30	吉代	141~144	SB25P3, SB25P4の土壙を要る	
Pt25	14D'6	Q	円	U字状	30	26	42	吉代	-		
Pt8	13D'15	R	円	台形	45	40	37	吉代	-		
SD38	13D'8	S	-	楕状	- 255	46	吉代	-	近年の水田跡に切られる		
Pt32	13D'13	T	円	U字状	46	38	45	吉代	-		
SK34	13E'3	U	円	台形	52	46	17	吉代	-		
Pt2	13E'13	V	円	台形	56	47	35	吉代	-		
Pt15	13E'18	W	円	U字状	28	24	32	吉代	-		
SK35	13E'18	X	梢円	楕状	82	64	21	吉代	SB25P3, SB25P4		
Pt16	13E'23	Y	円	方形	54	51	52	吉代	-		
SX10	13E'2 - 3 - 7 - 8 - 12	Z - a	梢円	楕状	- 286	55	吉代	-		地形の複数?	
SK1	13G'9 - 14	b	円	楕状	244	208	91	吉代	SD5を切る		
Sd5	13G'10 - 16 - 18	c -	円	楕状	-	16	13	吉代	SK1に切られる		
SX3	13K'5, 13K'9 - 10 - 14 - 15, 14J'2 - 1	d - e	長楕円	扁斗状	- 224	81	吉代	148~151		鰐文, 古墳後期の遺物混入	
SK7	13I'14	f	円	楕状	94	37	10	吉代	-		
Sd4	14C'12 - 13 - 17 - 18 - 23	g -	-	楕状	- 112	10	吉代	162~222	Sd6との切り合いは不明		
SK14	14N'14 - 15	h	梢円	台形	-	81	48	不明	-		
Pt11	14N'23	i	円	台形	-	34	40	不明	-		

## 細田遺跡 純文土器觀察表

No.	仮	出土地点	層位	神別	残存部位	調整・施文	出土	備考
1	329	13D'20	B	深鉢	体部	壁板剥離, 脊等上連結文剥離, 斜削痕	石英: 小穂	中期前葉
2	320	14P'10	B	深鉢	体部	斜削痕, 壁等上刺突文	石英: 小穂・小穂・白色粒子(特に多い)	中期前葉
3	504	14O'19	B	深鉢	体部	沈線, 壁等上刺突文	石英: チャート・白色粒子・赤色粒子	中期前葉, 製成之内式
4	321	14P'5	B	深鉢	体部	沈線, 壁等上刺突文	石英: チャート・白色粒子・赤色粒子	後期
5	602	14P'10	B	深鉢	1縦部	沈線, 施消文	石英: チャート・白色粒子	後期
6	322	14P'10	B	深鉢	体部	沈線, 施消文	石英: チャート・白色粒子	後期
7	327	15P'6	B	深鉢	体部	沈線, 施消文	石英: チャート・白色粒子	後期
8	325	15P'1	B	深鉢	体部	施消文	石英: 黒母・チャート	中期前葉, 製成之内式
9	323	15N'12	B	深鉢	体部	沈線	黒母・小穂・白色粒子	後期?
10	328	15P'12	B	深鉢	体部	施消文, 多条網状施文?	円形刻文	後期後半?
11	503	14N'19	B	深鉢	体部	施消文, 沈線	角閃石・黒母・白色粒子	後期
12	326	15P'12	B	深鉢	1縦部	沈線	石英: 黒母(以上2種多い)	後期
13	500	14P'10, 15P'16	B	深鉢	体部	羽状刻文(範囲)	石英: 小穂・白色粒子(特に多い)	後期後半
14	324	15P'21	B	深鉢	底部	底部敷物瓦痕(範囲)	角閃石・黒母・白色粒子	後期不明

## 細田遺跡 檻文時代石器・中世石製品觀察表

No.	グリッド	遺構	層位	種別	石材	重量(g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
15	13F' - K', 14J' - K'	SX3		不定形石器?	泥岩	13.33	7.6	2.9	1.0	
16	13J'25			磨製石器	蛇紋岩	47.06	7.9	3.8	1.1	
17	13G'25			磨製石器	凝灰岩	47.92	5.45	4.4	2.0	
18	13D'20			磨製石器	蛇紋岩	23.27	5.75	3.35	0.8	
19	14D'9			磨製石器	蛇紋岩	137.29	6.6	6.2	2.4	
20	14O'			磨製石器	蛇紋岩	131.76	9.7	4.1	2.1	
21	15P'11			打製石器	凝灰岩	1.07.38	11.8	5.4	1.6	
349	13A'4 - 9	SK39	2	五輪塔(空風鈴)	凝灰岩	37.00.00	23.5	14.05	-	角閃石多く含む
350	13A'3 - 9	SK39	2	五輪塔(透輪)	凝灰岩	29.63.00	22.3	26.7	26.6	角閃石多く含む
351	13A'4 - 9	SK39	2	五輪塔(水輪)	凝灰岩	6.47.00	18.5	18.1	14.1	

〔第四章〕

弥生終末～古墳時代の土器観察表 (2)

弥生終末～古墳時代の土器観察表 (3)

古代・中世土器觀察表 (2)

中世土器觀察表 (3)

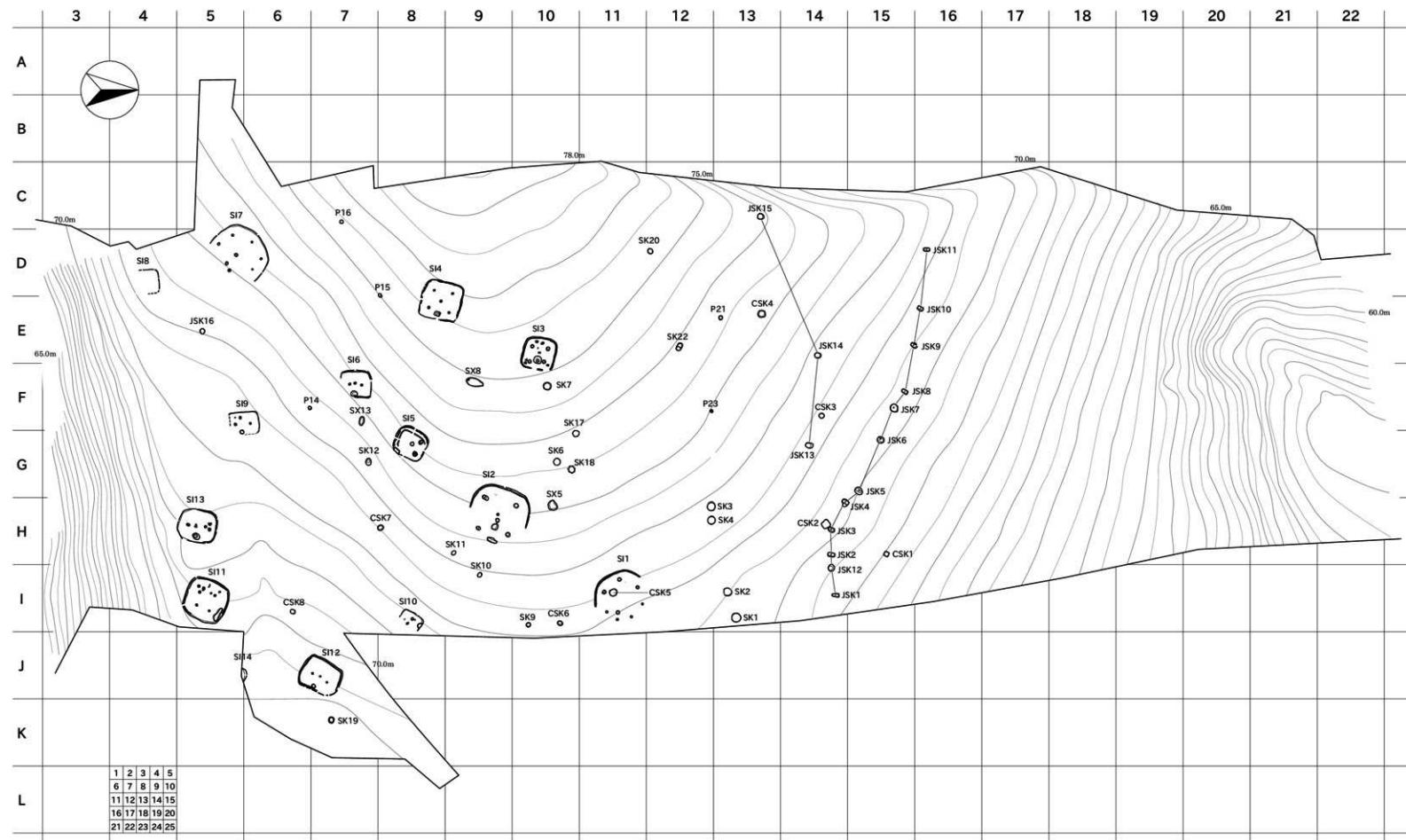
## 編田遺跡古代・中世土器觀察表(4)

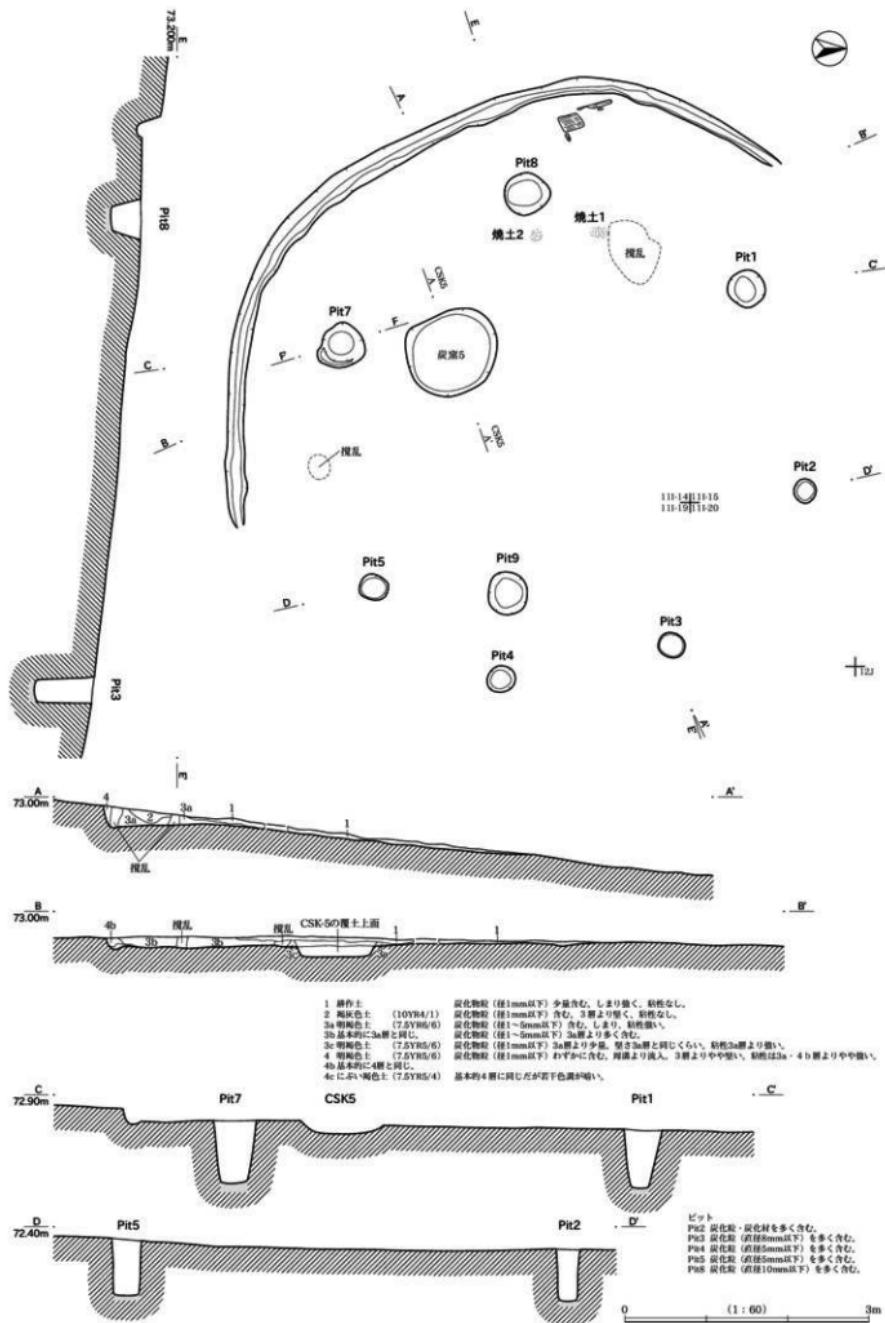
No.	遺跡	グリッド	種類	形態	分類	目次	形状	質地	断面	底面	表面	底面跡
291	編田	130720	直筒罐	棒脚	A	-	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
292	編田	130720	直筒罐	棒脚	A	-	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
293	編田	807	直筒罐	A/F	A	-	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
294	130715-16・14	直筒罐	棒脚	A	17.6	4.5	2.1 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
295	130715,13X1	直筒罐	棒脚	B	-	4.3	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
296	14P25	直筒罐	棒脚	A	-	8.6	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
297	14J16	直筒罐	棒脚	C	14.4	3.7	0.6 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
298	131721	直筒罐	棒脚	B	11.4	-	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
299	編田	807	直筒罐	B	-	9.8	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
300	編田	807	直筒罐	B	13.4	4.0	0.6 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
301	131721	直筒罐	棒脚	B	12.0	3.2	0.6 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
302	131714	直筒罐	棒脚	D	-	6.1	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
303	130720	直筒罐	棒脚	D	-	7.0	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
304	131725	直筒罐	棒脚	B	9.4	4.8	0.5 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
305	14N19	直筒罐	棒脚	A	12.2	2.8	0.6 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
306	14N17	直筒罐	棒脚	A	13.0	3.0	0.6 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
307	277	直筒罐	棒脚	B	-	8.0	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
308	278	直筒罐	棒脚	B	14.0	-	0.6 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
309	279	直筒罐	棒脚	B	11.8	2.5	0.6 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
310	280	直筒罐	棒脚	B	13.0	3.8	0.2 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
311	281	直筒罐	棒脚	B	12.2	2.3	0.5 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
312	282	直筒罐	棒脚	B	-	7.4	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
313	283	直筒罐	棒脚	B	-	7.0	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
314	284	直筒罐	棒脚	C	12.0	-	0.6 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
315	285	直筒罐	棒脚	C	12.0	-	0.6 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
316	14J11-16	直筒罐	棒脚	C	12.0	2.8	7.4 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
317	286	直筒罐	棒脚	C	-	11.0	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
318	287	直筒罐	棒脚	C	5.0	5.0	0.6 直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
319	288	小瓶	-	5.0	-	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
320	289	小瓶	-	5.0	-	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
321	290	小瓶	-	6.3	-	直筒 棒脚	白灰 灰	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	直筒 棒脚	-
322	291	130719-25	直筒罐	直筒	9.1	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
323	292	14J14	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
324	293	130720-24	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
325	294	1317,14P25	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
326	295	14J17,14M2	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
327	296	14J22	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
328	297	1317,13	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
329	298	14J11	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
330	299	14J12	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
331	300	1317,15	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
332	301	14N17	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
333	302	14N18	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
334	303	14N19	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-
335	304	14J20	直筒罐	直筒	-	直筒 直筒	白灰 灰	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	直筒 直筒	-

卷之三 九〇年十一月—一九〇一年四月

近世翻譯學研究

# 図 版





版 3

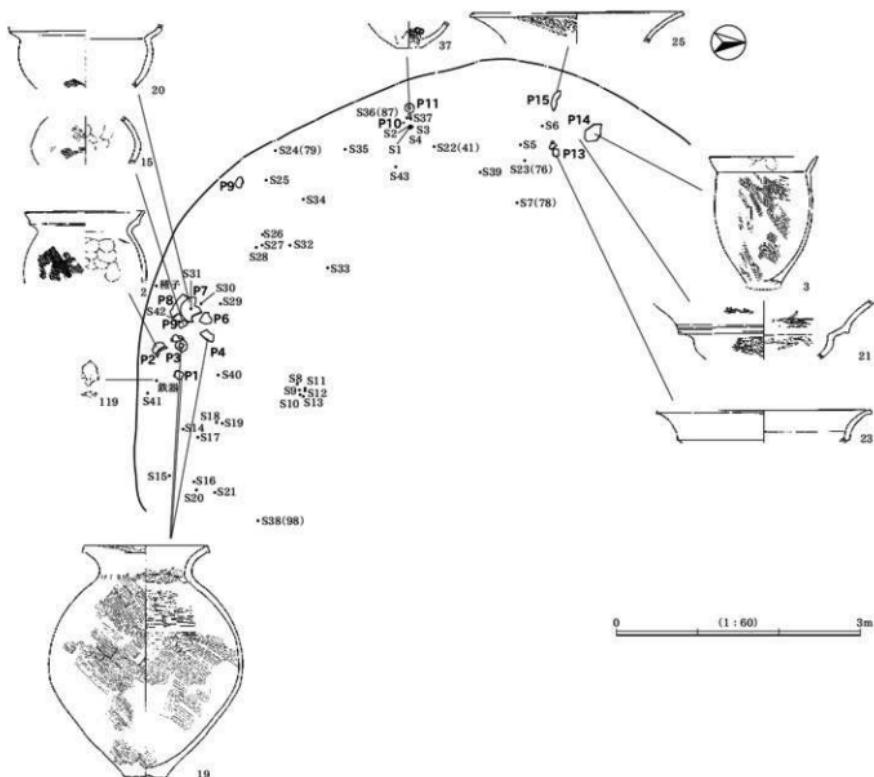
1号竪穴実測図(2) 1号竪穴遺物出土位置図

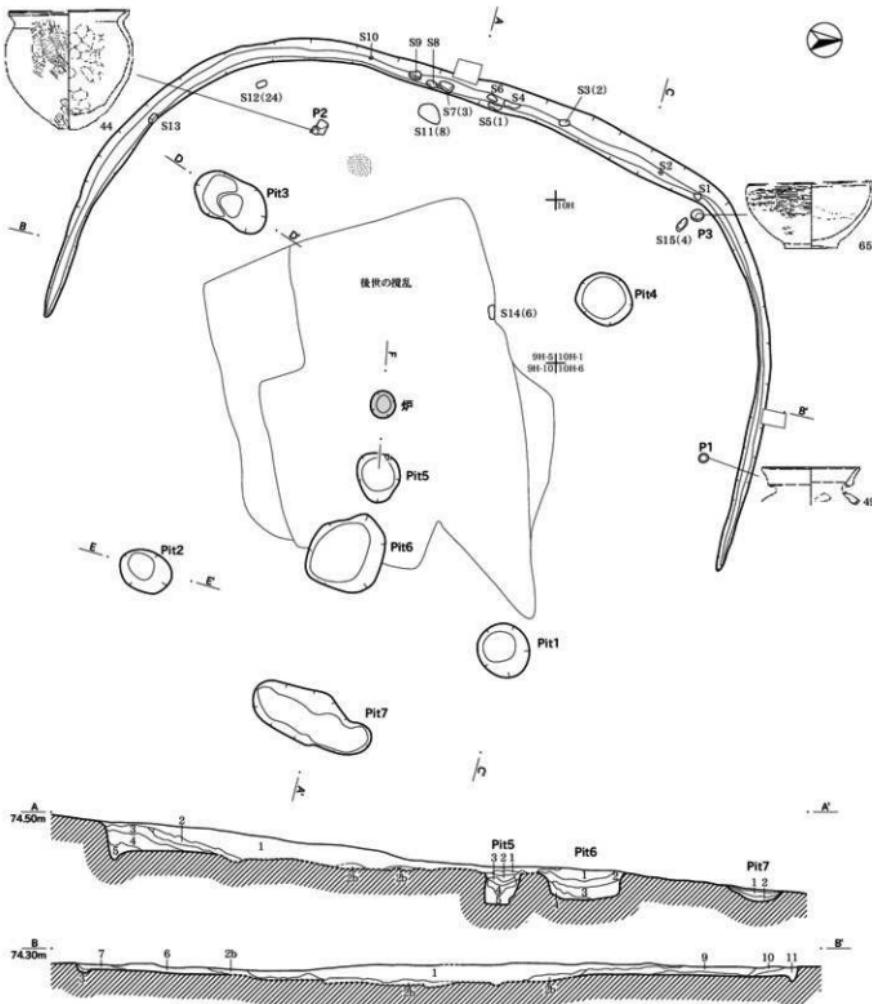


Pie7	
1 黄褐色土 (7.5YR4/6)	柱状の炭化物 (長さ10mm以下)特に多く含む。層下部はしまりなし。
2 明褐色土 (7.5YR5/6)	炭化物粒 (径3mm以下) 少量含む。
3 明褐色土 (7.5YR5/8)	炭化物粒 (径1mm以下) 極少量含む。

0 (1 : 40) 2m

1号竖穴遗物出土位置图





## A-Bライン

- 1 明黄色土 (7SYR5/6) 鹿骨柱。陶片上と陶片下がまだらに混じる。炭化物類 (径1~2mm程度) 少量含む。
- 2 海色土 (7SYR4/4) 燃焼物に上り混じ、細粒のものたる土。炭化物類 (径3mm以下) 多く含む。鐵土粒 (径3mm以下) 少量含む。
- 3 黒褐色土 (7SYR5/6) 1回目 (初期段階) が確認。細粒のものたる土層。
- 4 明黄色土 (7SYR5/6) 燃焼物類 (径5mm以下) 少量含む。鐵土粒 (径5mm以下) 稀少含む。しまり弱い。
- 5 海色土 (7SYR4/6) 炭化物類 (径8mm以下) 多く含む。鐵土粒 (径2mm以下) 稀少含む。しまり弱い。
- 6 黑褐色土 (7SYR4/4) 炭化物類 (径2mm以下) 多く含む。鐵土粒 (径2mm以下) 多く含む。
- 7 明黄色土 (7SYR5/6) 燃焼物類 (径5mm以下) 多く含む。鐵土粒 (径2mm以下) 少量含む。
- 8 海色土 (7SYR4/6) 燃焼物類 (径8mm以下) 多く含む。鐵土粒 (径2mm以下) 稀少含む。
- 9 海色土 (7SYR4/4) 基礎部に3段と同上層。炭化物類 (径4mm以下) 多く含む。炭化材 (径6mm程度) まばらに含む。
- 10 明黄色土 (7SYR5/6) 燃焼物類 (径2mm以下) 少量含む。鐵土粒 (径2mm以下) 少量含む。
- 11 黑褐色土 (7SYR4/6) 燃焼物類 (径6mm以下) 多く含む。鐵土粒 (径2mm以下) 稀少含む。

## Pit7

- 1 黄褐色土 (10YR5/6) 炭化物類 (径1mm以下) まばらに含む。
- 2 明黄色土 (10YR8/6) 地山土を主とする。炭化物類 (径1mm以下) まばらに含む。

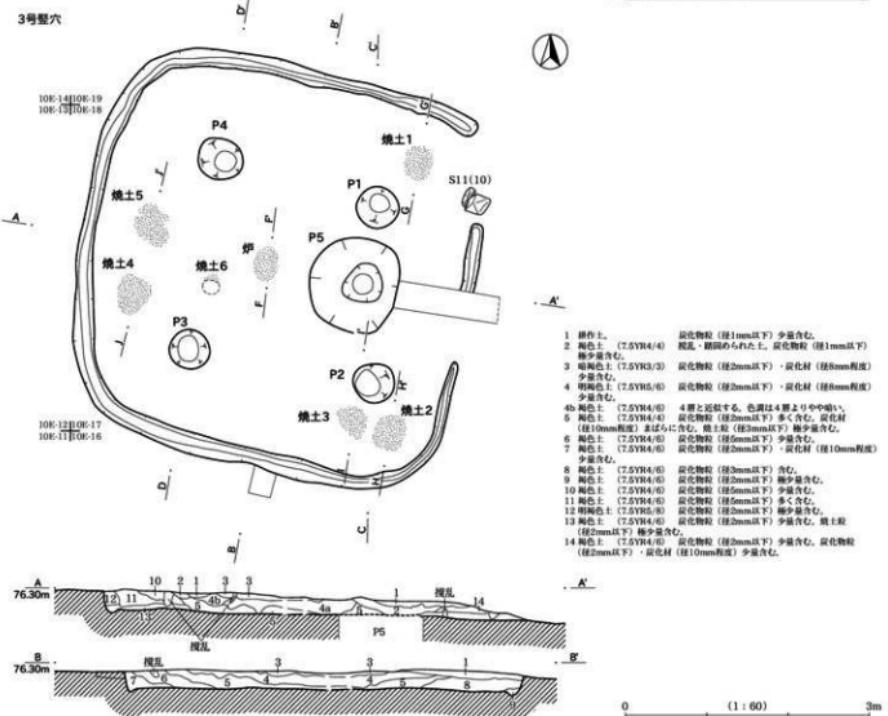
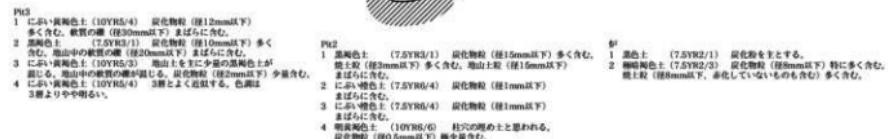
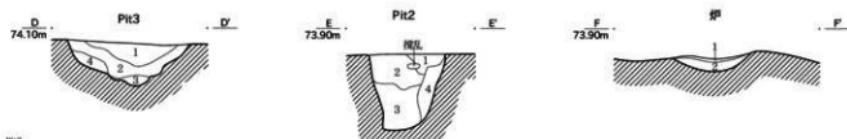
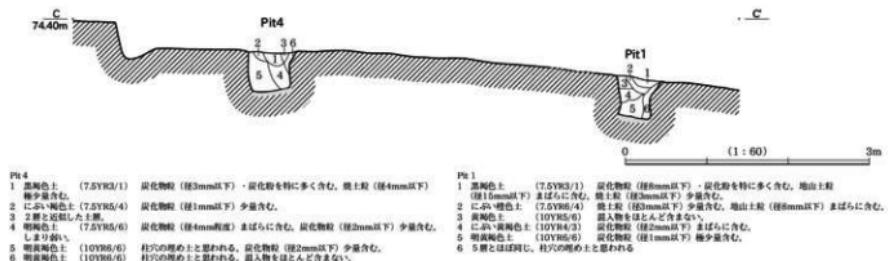
## Pit5

- 1 明黄色土 (10YR5/6) 炭化物類 (径1mm以下) まばらに含む。
- 2 明黄色土 (10YR6/6) 炭化物類 (径1mm以下) まばらに含む。炭化物類 (径2mm以下) 多く含む。
- 3 微黃褐色土 (10YR4/2) 炭化物類 (径1mm以下) 多く含む。鐵土粒 (径2mm以下) 少量含む。堅く緻まる。
- 4 黑褐色土 (7SYR2/1) 炭化物類 (径1mm以下) 多く含む。地山土粒 (径8mm以下) まばらに含む。

## Pit6

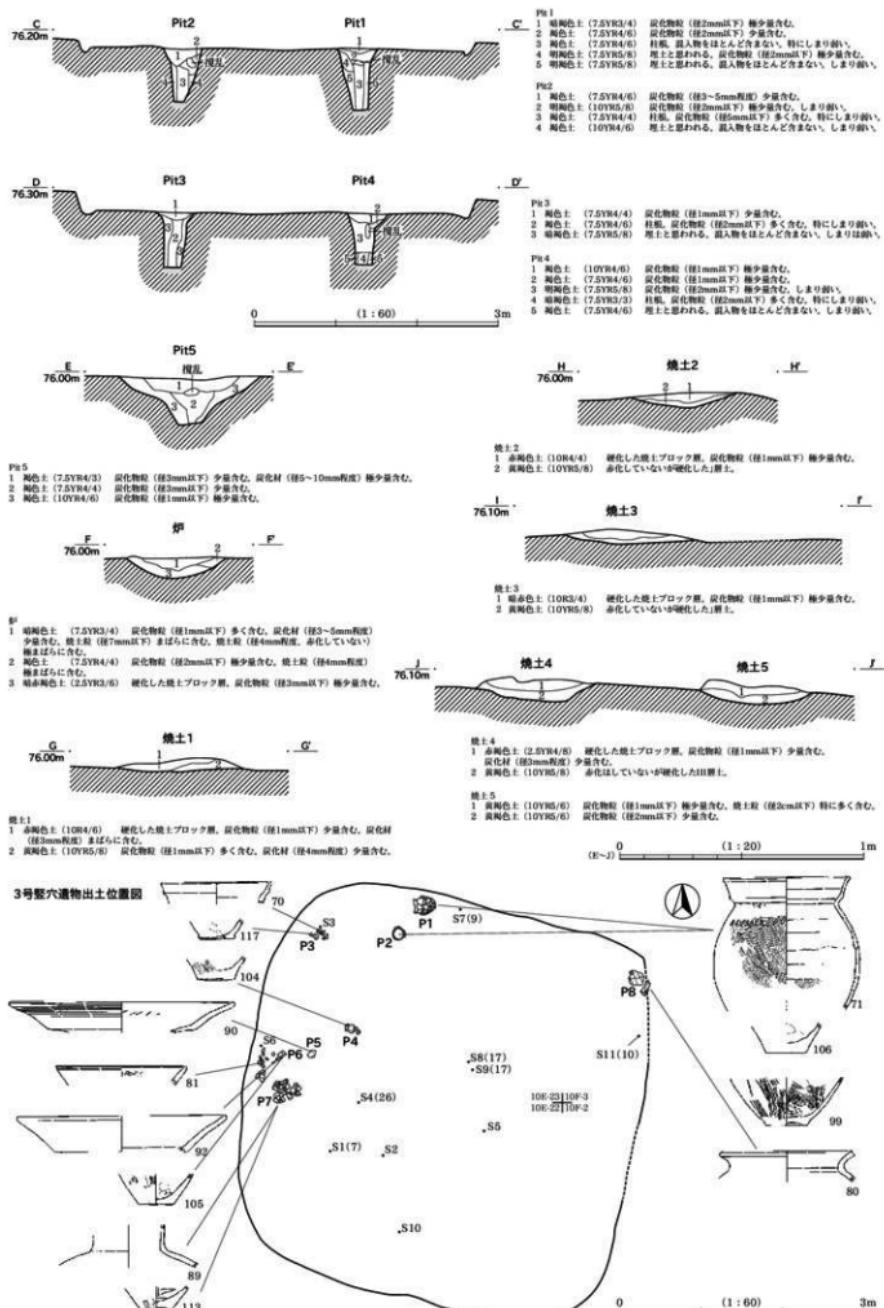
- 1 黑褐色土 (7SYR2/2) 炭化物類 (径1mm以下) 多く含む。堅く緻まる。
- 2 褐色土 (10YR5/6) 炭化物類 (径3~5mm程度) まばらに含む。炭化物類 (径2mm以下) 多く含む。
- 3 黑褐色土 (10YR5/2) 炭化物類 (径3~5mm程度) まばらに含む。炭化物類 (径3mm以下) 多く含む。地山土粒 (径15mm以下) まばらに多く混じる。
- 4 明黄色土 (10YR7/6) 地山土を主とする。炭化物類 (径2mm以下) 稀少含む。

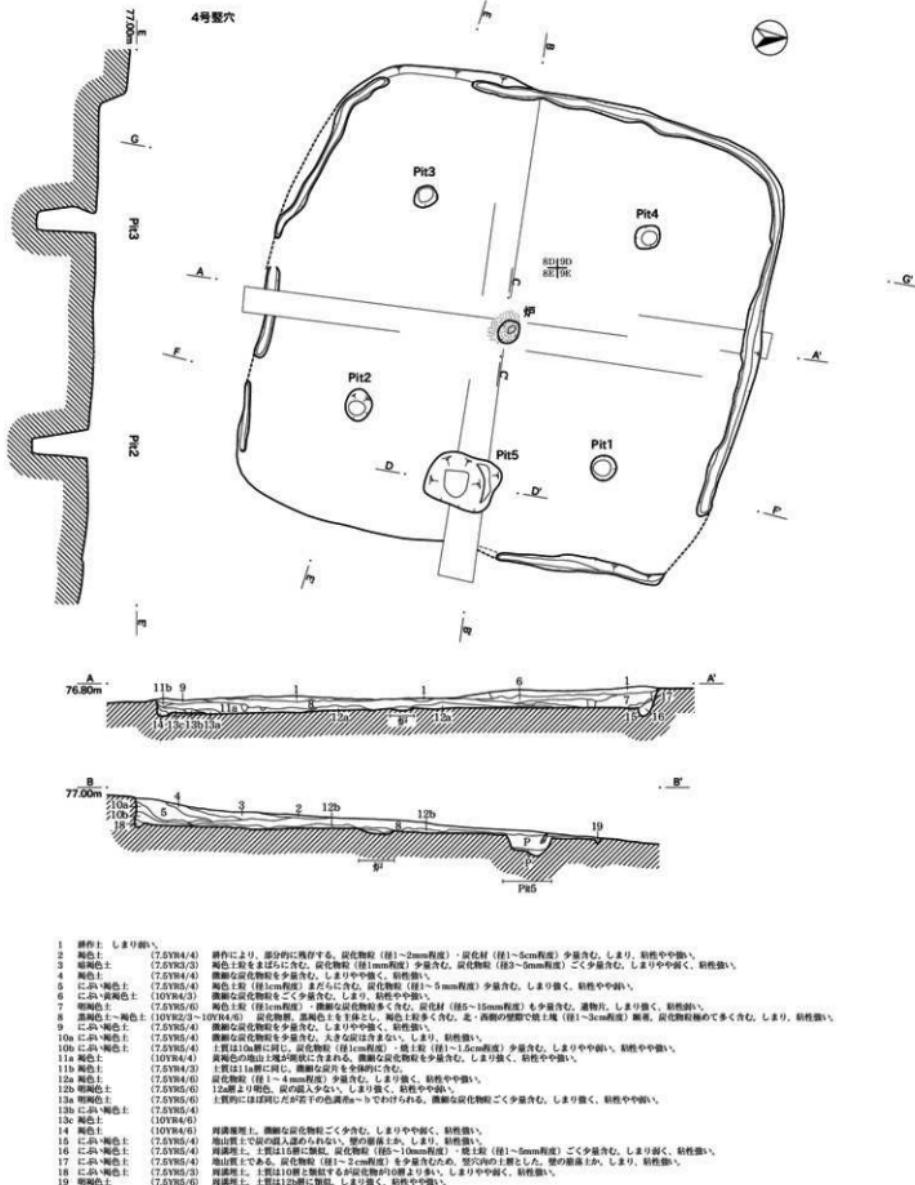
0 (1:60) 3m

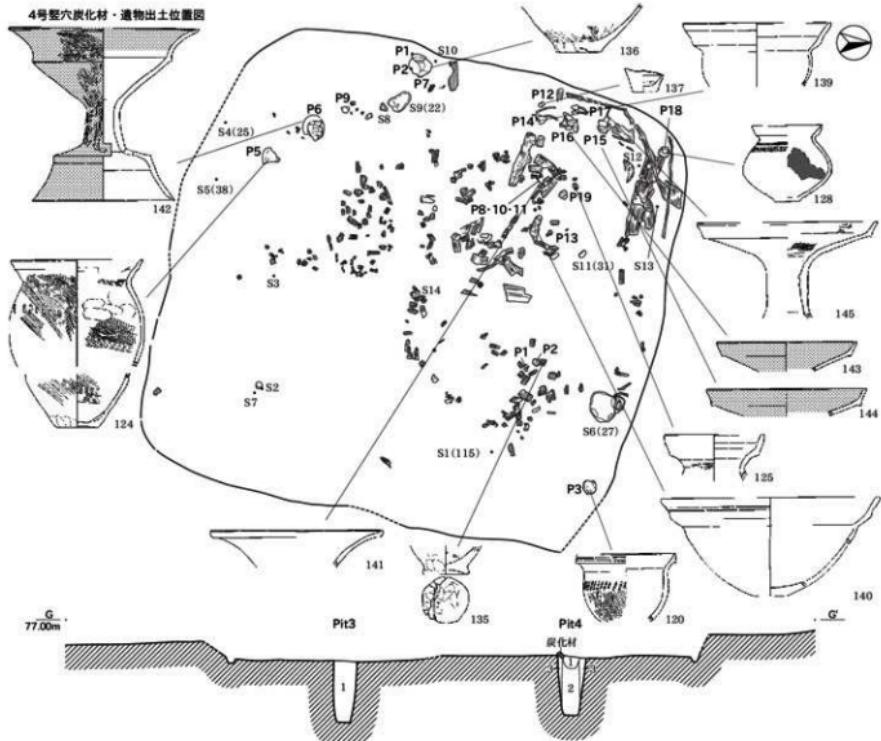


3号竪穴実測図(2) 3号竪穴遺物出土位置図

図版 6







Pit 3  
1 黄褐色土 (10YR4/6) 砂上部に炭化物粒 (径1~3mm程度、径1cm程度) 少量含む。  
2 黄褐色土 (10YR4/6) 少量含む。しまり上方微く、下方微く、粘性低い。

Pit 4  
1 暗褐色土 (10YR4/4) 炭化物粒 (径1~2mm程度) 多く含む。炭化材 (径5cm長15cm) が斜めに落ち込む。  
2 黄褐色土 (10YR4/6) 炭化物粒 (径1~2mm程度) 多く含む。しまり微く、粘性高い。  
3 黄褐色土 (10YR4/6) 炭化物粒 (径1~2mm程度) 多く含む。しまり微く、粘性高い。  
4 明褐色土 (7.5YR5/6) 炭化物粒少量含む。しまり、粘性高い。

Pit 2  
1 黄褐色土 (10YR4/4) 炭化物粒 (径1~15mm程度) 多く含む。焼土粒少量含む。しまり微く、粘性やや高い。  
2 黄褐色土 (10YR4/6) 炭化物粒 (長1~30mm程度) 少量含む (無機質)。しまり弱く、粘性ややあり。

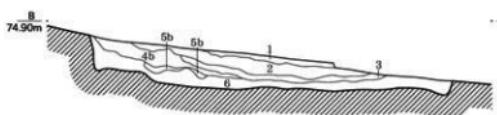
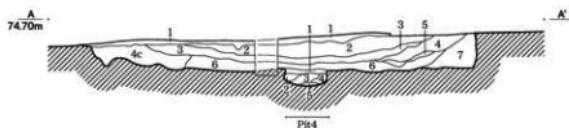
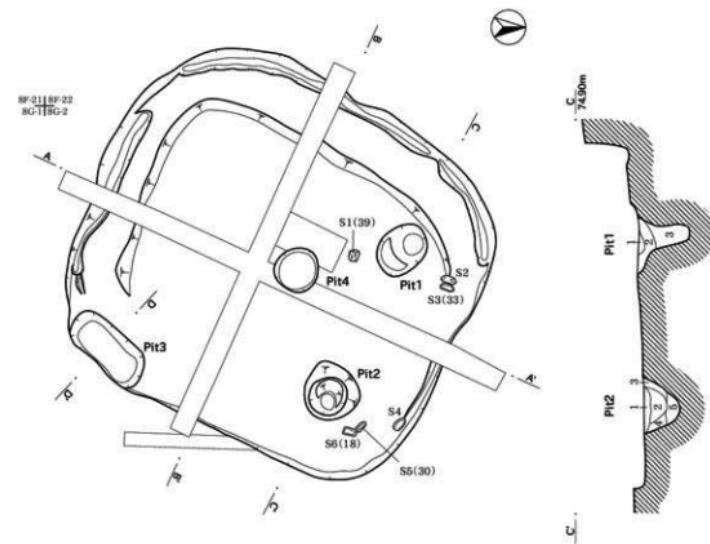
Pit 1  
1 暗褐色土 (10YR5/6) 炭化物粒 (径1~3mm程度) 多く含む。炭化材 (径3~5cm程度) 多く含む。  
2 黄褐色土 (10YR4/6) 烧土粒少量含む。しまり微く、粘性高い。  
3 黄褐色土 (10YR4/6) 烧土粒は1層に比べ少量。大きさも材ではなく焼土。土層含む。

Pit C  
1 褐色土 (7.5YR4/3) 炭化物粒 (径1~3mm程度) 多く含む。焼土粒 (径1mm程度) 少量含む。  
2 褐色土 (2.5YR3/8) 一に於く赤褐色土 (5YR4/4)。しまり微く、粘性やや高い。  
3 炭化物粒 (径1~10mm程度) まばらに含む。しまり、粘性高い。  
4 黄褐色土 (7.5YR4/6) 熟然による硬化的結果。赤化は認められない。しまり弱く、粘性低い。

Pit D  
1 明褐色土 (7.5YR5/6) 炭化物粒 (径1mm以下) ごく少量含む。  
2 黄褐色土 (10YR4/6) 炭化物粒 (径2mm以下) ごく少量含む。炭化材 (径10mm程度) 少量含む。焼土粒 (径10mm以下) ごく少量含む。  
3 黄褐色土 (7.5YR4/6) 炭化物粒 (径2mm以下)、炭化材 (径20mm程度) 多く含む。焼土粒 (径10mm以下) 少量含む。

0 (1:60) 3m  
0 (1:20) 1m  
(C-D)

5号竖穴



- 1 黄褐色土: (7.5YR4/6)  
2 暗褐色土: (7.5YR4/5)  
3 暗褐色土: (10YR3/4)  
4 黄褐色土: (7.5YR4/4)  
4b 黄褐色土: (7.5YR4/4)  
5 黄褐色土: (7.5YR4/5)  
5b 黄褐色土: (10YR4/4)  
5b 黄褐色土: (10YR4/4)  
6 明褐色土: (7.5YR6/6)  
7 黄褐色土: (7.5YR4/4)
- 1 黄褐色土と2層の暗褐色土とに混じる。微細な炭化物粒を少含む。  
2 黄褐色土と3層の暗褐色土とに混じる。微細な炭化物粒を少含む。しまり強い。  
3 暗褐色土  
4 黄褐色土  
4b 黄褐色土  
5 黄褐色土  
5b 黄褐色土  
5b 黄褐色土  
6 明褐色土  
7 黄褐色土
- 微細な炭化物粒を少含む。  
微細な炭化物粒を少含む。  
微細な炭化物粒を多く含む。  
微細な炭化物粒を多く含む。

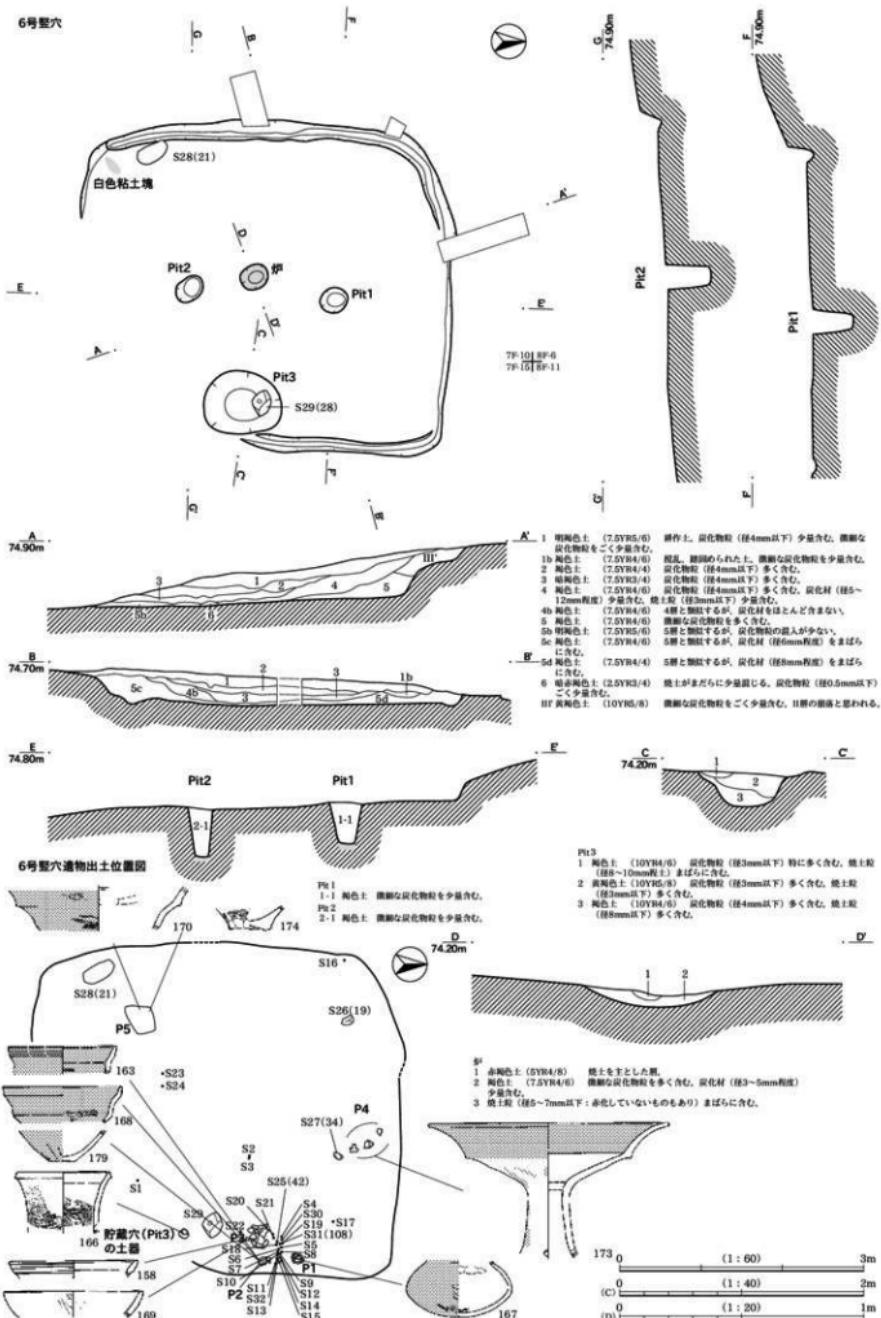
- Pit 4  
1 黄褐色土: (7.5YR4/6)  
2 明褐色土: (7.5YR6/6)  
3 黄褐色土: (7.5YR4/6)  
4 黄褐色土: (7.5YR6/6)
- 1 黄褐色土に近似する。混入物は見られない。  
2 明褐色土  
3 黄褐色土  
4 黄褐色土
- 微細な炭化物粒を少含む。堆土粒 (径4mm以下) 多く含む。  
微細な炭化物粒を少含む。堆土粒 (径3mm以下) 多く含む。  
微細な炭化物粒を少含む。堆土粒 (径3mm以下) 多く含む。  
微細な炭化物粒を少含む。

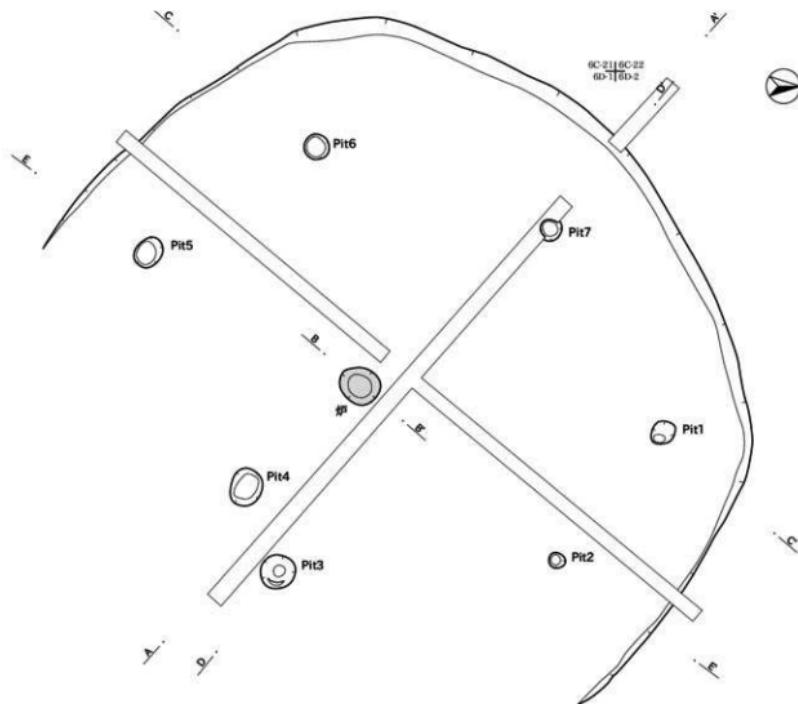


- Pit 5  
1 黄褐色土: (7.5YR4/4)  
2 二にじめ黄褐色土: (7.5YR4/4)  
3 黄褐色土: (7.5YR4/4)  
4 黄褐色土: (7.5YR6/6)
- 1 黄褐色土  
2 二にじめ黄褐色土  
3 黄褐色土  
4 黄褐色土
- 微細な炭化物粒を多く含む。堆土粒 (径5mm以下、油化していない)特に多く含む。  
微細な炭化物粒を少含む。堆土粒 (径5mm以下、油化していない)多く含む。  
2層にぐらべて色調はやや暗い。腐熟物は2層に近似する。  
地山質土を主とする。微細な炭化物粒を多く含む。

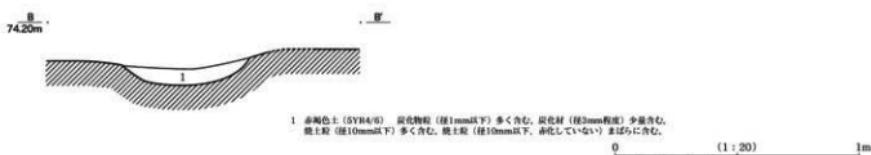
- Pit 1  
1 黄褐色土 (7.5YR4/6)  
2 暗褐色土 (7.5YR4/5)  
3 暗褐色土 (7.5YR4/4)
- 1 黄褐色土  
2 暗褐色土  
3 暗褐色土
- 微細な炭化物粒を多く含む。堆土粒 (径5mm以下)多く含む。しまり強い。  
微細な炭化物粒を少含む。堆土粒 (径5mm以下)多く含む。しまり弱い。  
微細な炭化物粒を少含む。堆土粒 (径5mm以下)多く含む。しまり弱い。
- Pit 2  
1 黄褐色土 (7.5YR4/4)  
2 明褐色土 (7.5YR6/3)  
3 暗褐色土 (7.5YR4/4)
- 1 黄褐色土  
2 明褐色土  
3 暗褐色土
- 微細な炭化物粒を少含む。堆土粒 (径5mm以下)多く含む。油化していない。しまり弱い。  
堆土粒 (径5mm以下)少含む。堆土粒 (径5mm以下)多く含む。油化していない。しまり弱い。  
堆土粒 (径5mm以下)少含む。堆土粒 (径5mm以下)多く含む。油化していない。しまり弱い。
- Pit 3  
1 黄褐色土 (7.5YR4/4)  
2 黄褐色土 (7.5YR4/4)
- 1 黄褐色土  
2 黄褐色土
- 堆土粒 (径5mm以下、油化していない)特に多く含む。  
堆土粒 (径5mm以下、油化していない)多く含む。

6号竖穴実測図 6号竖穴遺物出土位置図



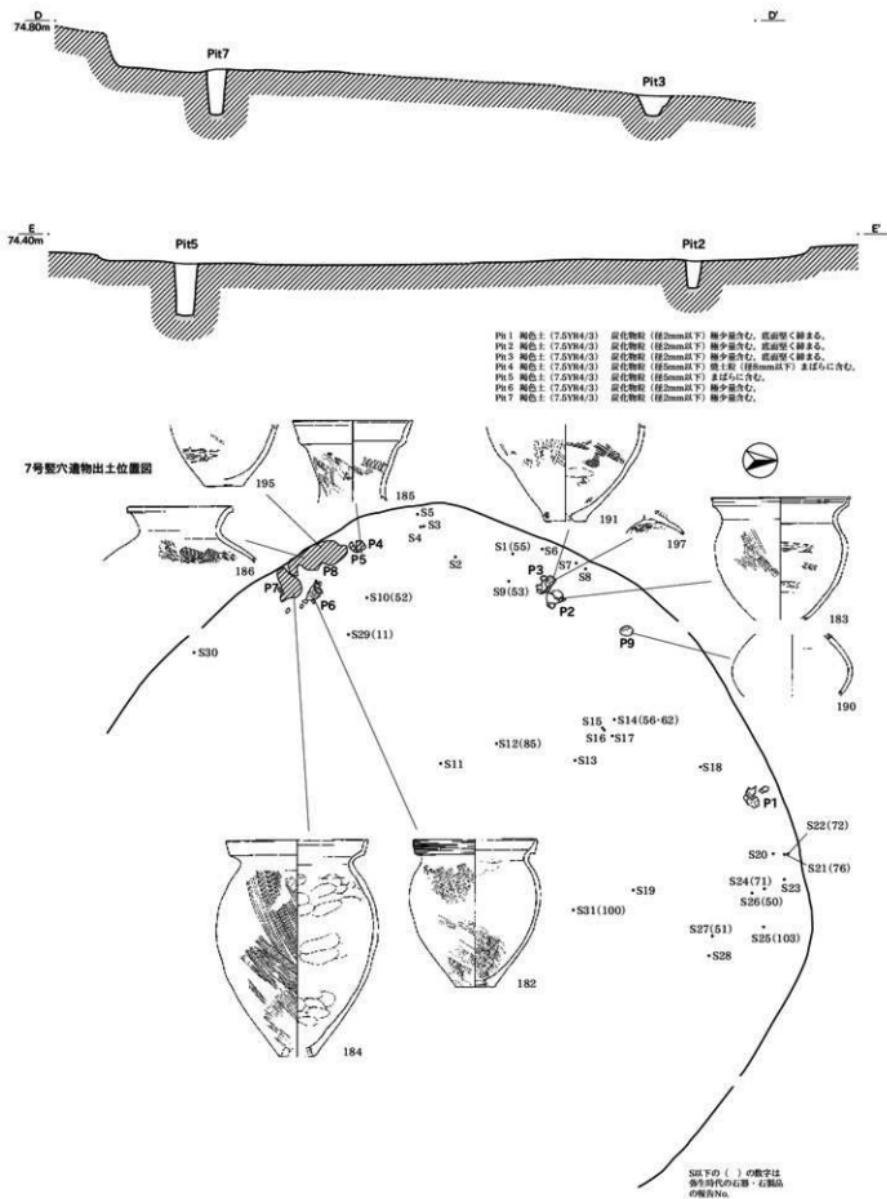


- 1 明褐色土 (7.5YR5/6) 繊作土。地山土ブロックがまだらに多く混じる。炭化物粒 (径8mm以下) 少量含む。  
 2 明褐色土 (7.5YR5/6) 繊作土により搅乱・調合された土質。炭化物粒 (径8mm以下) 少量含む。しまり悪い。  
 3 明褐色土 (7.5YR5/6) 繊作土により搅乱・調合された土質。しまり悪い。  
 4 明褐色土 (7.5YR5/6) 炭化物粒 (径5mm以下) 少量含む。炭化材 (径5~12mm程度) まばらに含む。III層との区別 (表面) は明確ではない。



- 1 赤褐色土 (5YR4/6) 炭化物粒 (径1mm以下) 多く含む。炭化材 (径3mm程度) 少量含む。粘土粒 (径10mm以下) 多く含む。燒土粒 (径10mm以下) 焼成している。まばらに含む。

0 (1:20) 1m



圖版 13

8号豎穴実測図 9号豎穴実測図(1)

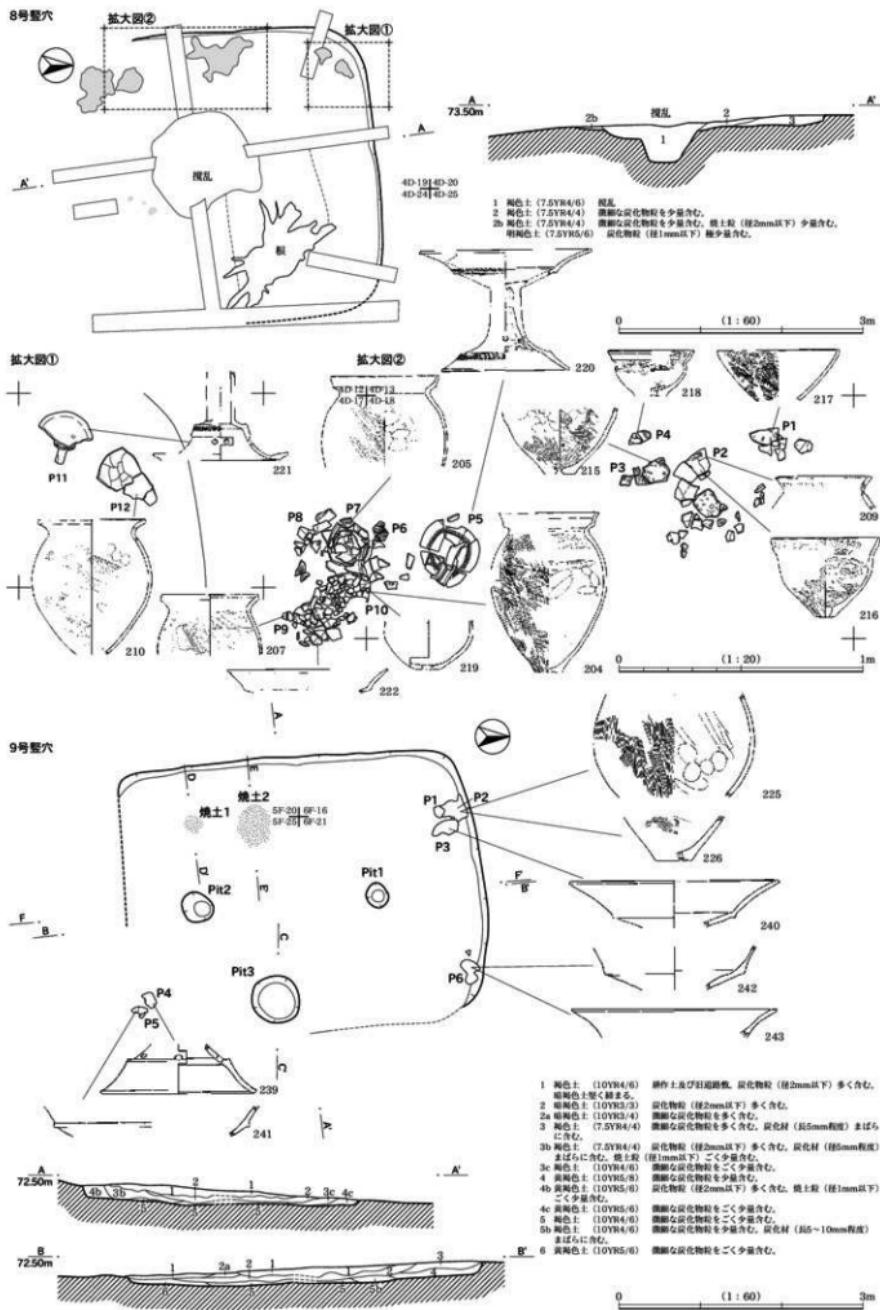
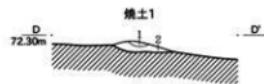


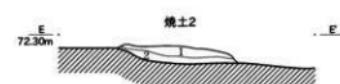


図3  
1 両色土(7.5YR4/6)：微細な炭化物粒を多く含む。炭化材(長5mm程度)まばらに含む。

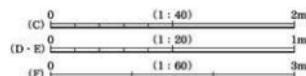
Pit  
Pit1 深色土 岩化物粒（径3mm以下）少量含む。  
Pit2 深色土 主要鉱物を多く含む。炭化物粒（径5mm以下）多く含む。底面型くねまる。



1 赤色土 (10R4/8) 硬化した飼土粒群。  
2 明褐色土 (7.5YR5/8) 赤化していないが、硬化した田耕土。

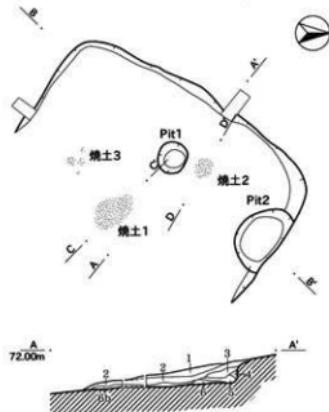


燒土2  
1 噪赤色土 (10R3/6) 硬化した焼土粒。炭化物粒(径2mm以下) まばらに含む。  
2 赤色土 (10YR4/6) 硬化はしていないが、硬化した日照土。



19号腎穴

88-131 88-14  
88-181 88-19



1 開色土 (10YR4/6) 繊維状の炭化物粒を多く含む。

2 基岩土 (10YR3/4) 炭化物粒 (直径2mm以下) 多く含む。炭化系を含む。

3 開色土 (7.5YR4/6) 繊維状の炭化物粒を含む。

4 開色土 (7.5YR4/6) 繊維状の炭化物粒を少く含む。

5 開色土 (10YR3/4) 炭化物粒 (直径2mm以下) 多く含む。炭化系 (直径5mm程度) ごく少く含む。

6 明褐色土 (7.5YR6/8) 繊維状の炭化物粒を少く含む。

7 明褐色土 (7.5YR6/8) 繊維状の炭化物粒を少く少含む。

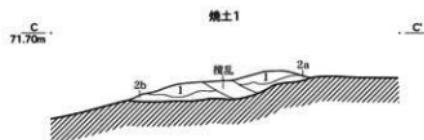
Pt.1  
 1 黄褐色土 (7.5YR4/4) 深褐色炭化物を少数含む。

Pt.2  
 1 黄褐色土 (7.5YR4/3) 炭化物塊 (径2mm以下) 多く含む。炭化材 (径10mm程度) ごく少量含む。  
 2 黄褐色土 (7.5YR4/6) 深褐色炭化物塊をごく少量含む。

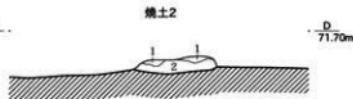


Pt. I

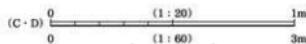
PI12  
1褐色土(7.5YR4/3) 硬化物粒(径2mm以下)多く含む。

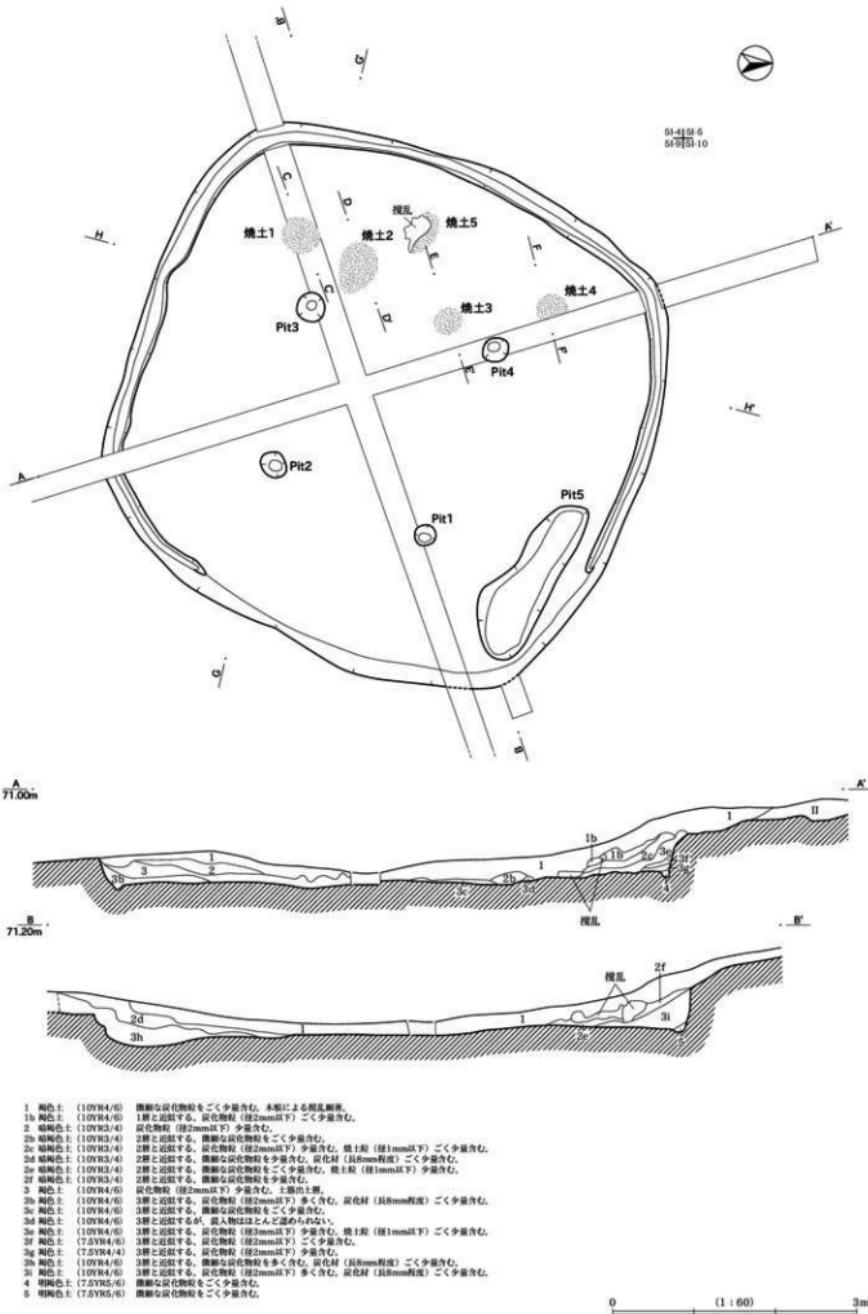


桃色土  
 1 桃色土 (SYR4/8) 硬化物質(径2mm以下) 多く含む。硬化材(長3mm程度) 少量まばらに含む。  
 粉土(徑3.5以下) を主とし、暗褐色が混じる。  
 2a 桃色土 (7.5YR4/6) 硬化した地山土。  
 2b 四川色土 (7.5YR5/6) 硬化した地山土。



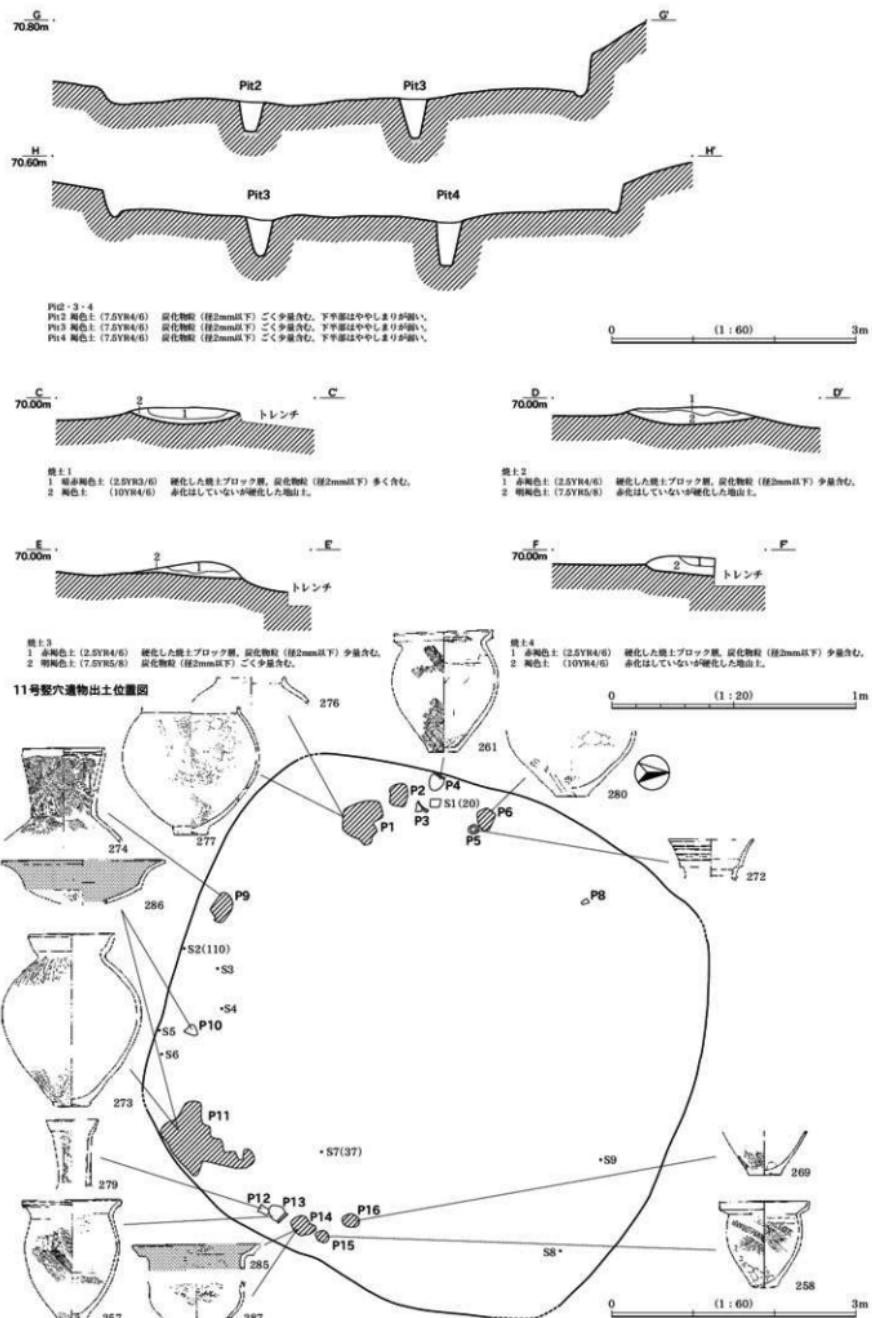
焼土:2  
 1 黄褐色土 (2.5YR4/6) 硬化物粒 (径2mm以下) 少量含む。硬化材 (長4mm程度) まばらに含む。  
     粒状土 (径10mm以下) を下とし暗褐色土が混じる。  
 2 黄褐色土 (10YR4/6) 硬化した地山上土。



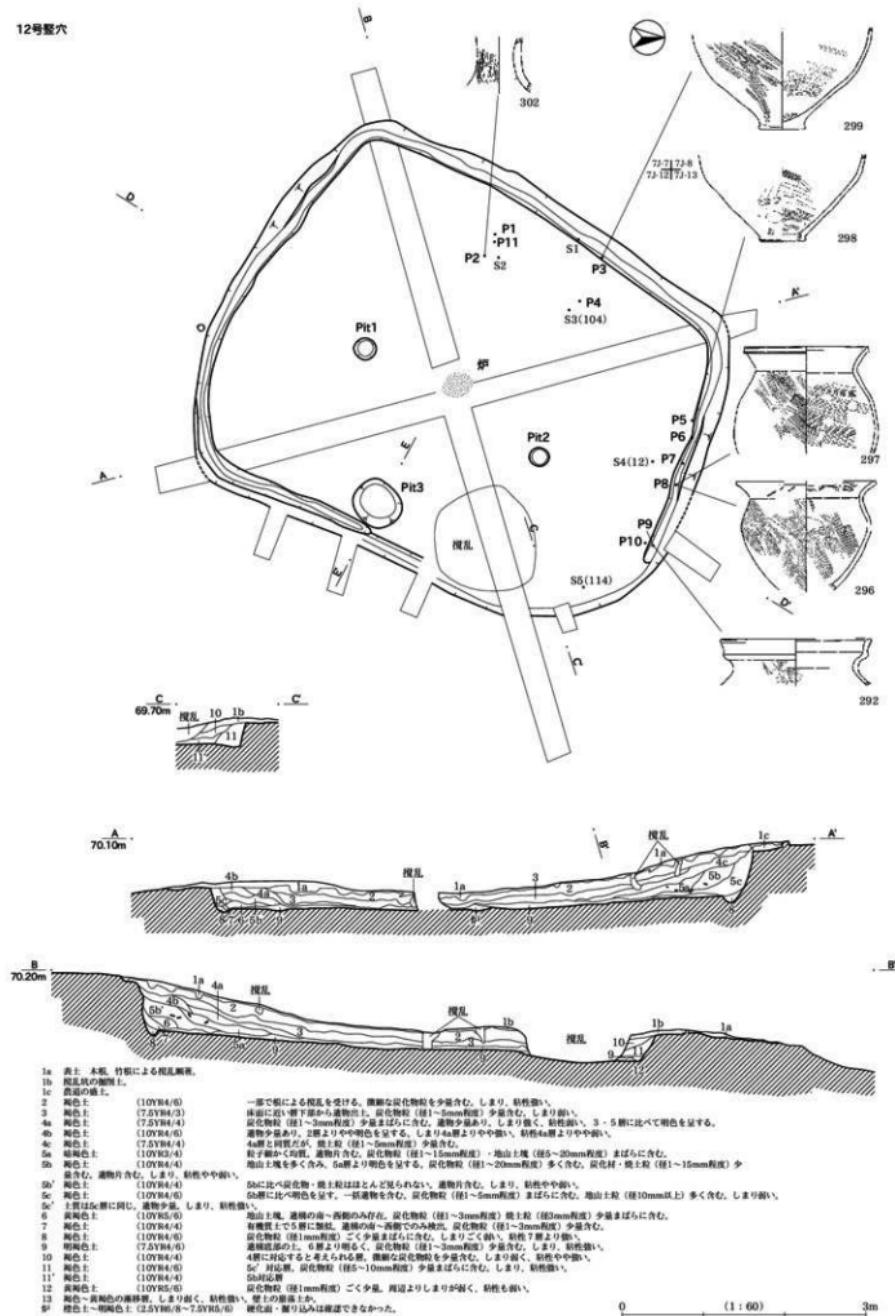


11号竪穴実測図(2) 11号竪穴遺物出土位置図

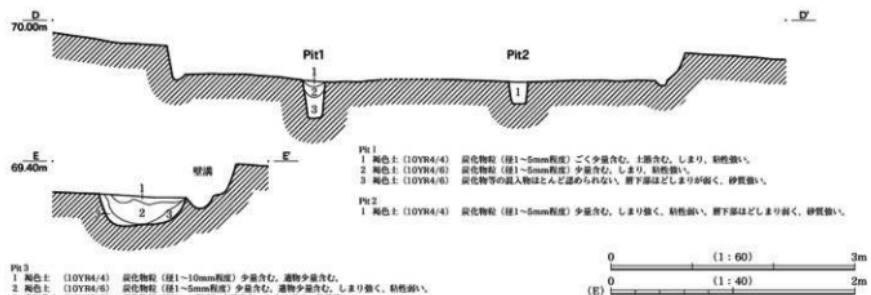
図版 16



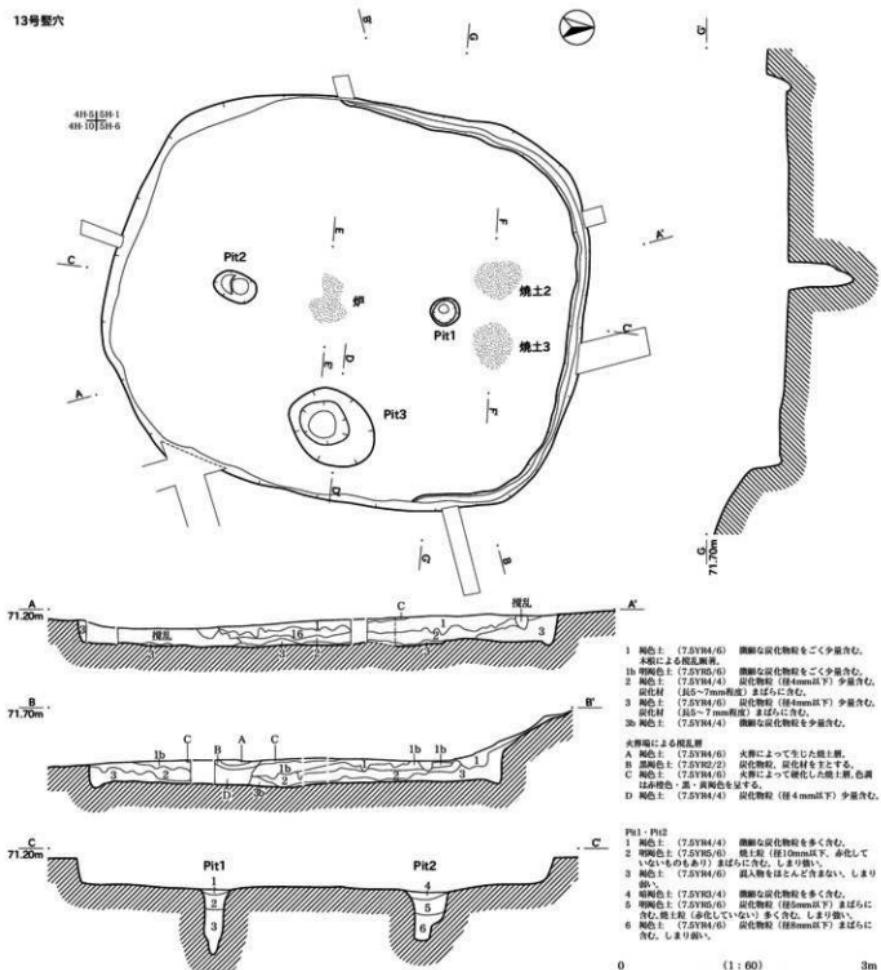
### 12号腧穴



12号豊穴実測図 (2) 13号豊穴実測図 (1)



13号豊穴

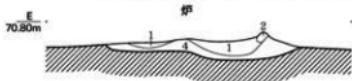


図版 19

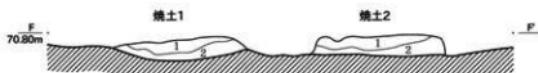
13号竪穴実測図(2) 13号竪穴遺物出土位置図



Pit 3  
1 濃褐色土 (2.5YR4/4) 圆錐な炭化物粒を少量含む。燒土層 (径5mm以下、赤化していない) 多く含む。  
2 黄色土 (10YR4/6) 煙灰化物粒を少量含む。炭化材 (径5~10mm程度)・燒土層 (径5mm以下、赤化していない) まばらに含む。



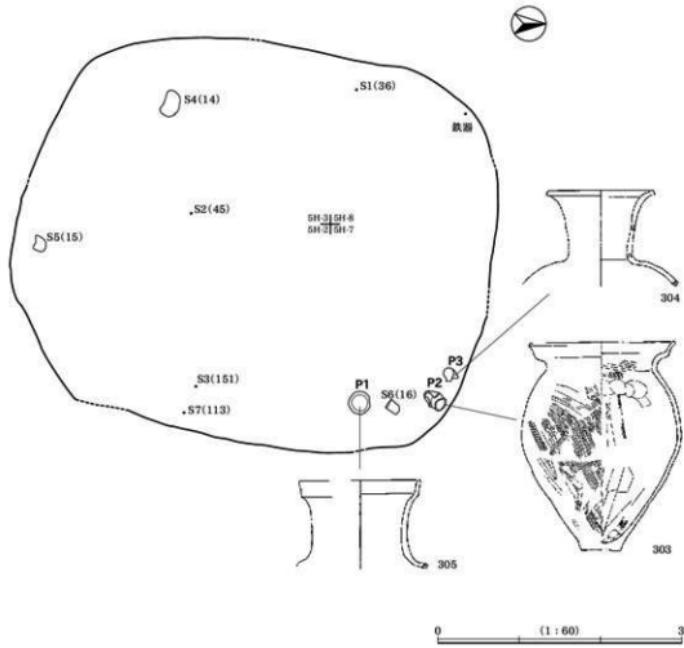
1 濃褐色土 (2.5YR4/8) 硬化した燒土塊層。  
2 黄色土 (10YR4/6) 煙灰化物粒を少量含む。  
3 濃褐色土 (2.5YR4/8) 硬化した燒土粒を多く含む。  
4 黄色土 (10YR4/6) 赤化はしていないが熱による変質硬化層。

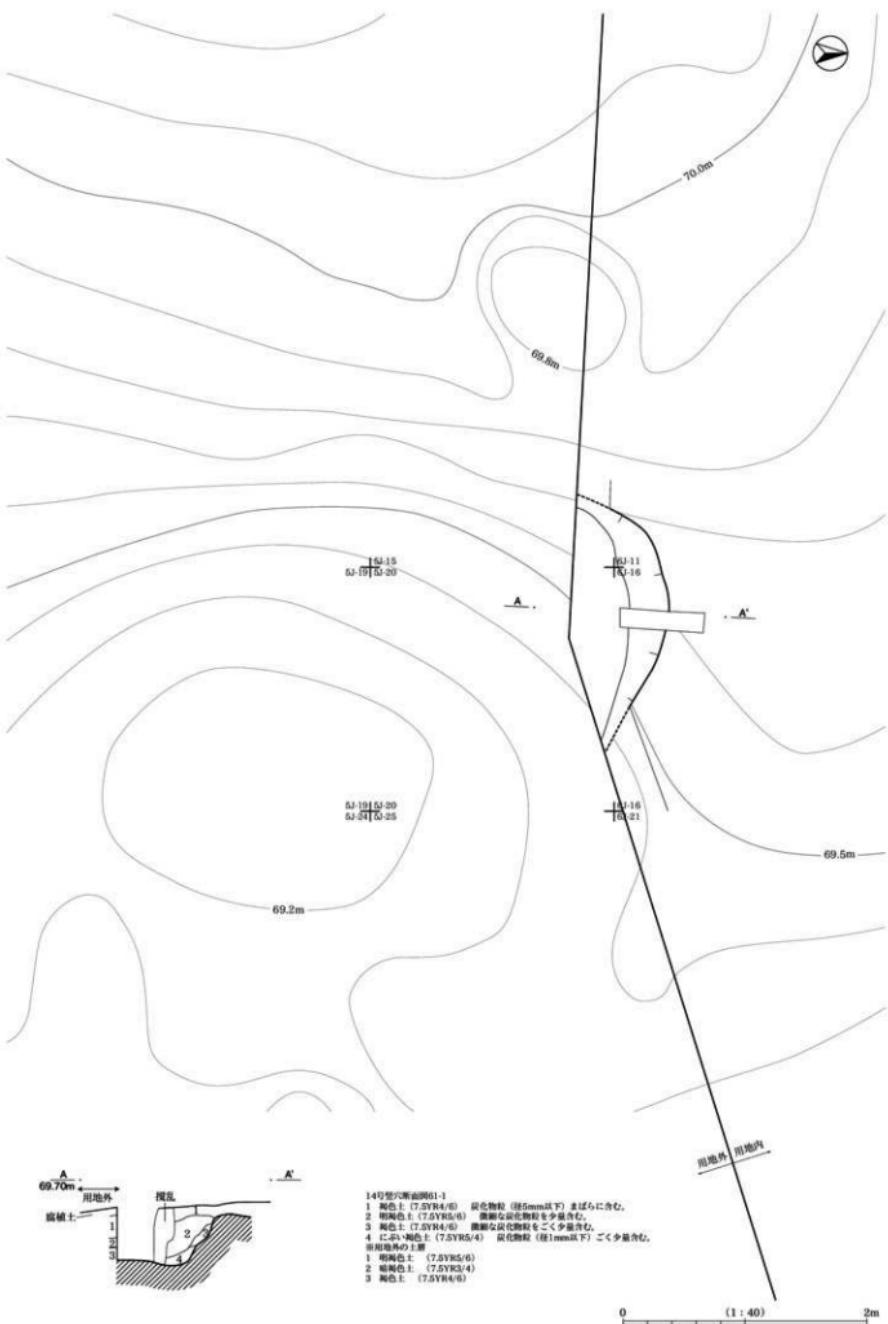


1:2・3  
1:1 濃褐色土 (2.5YR4/6) 硬化した燒土塊層。  
1:2 黄色土 (10YR4/8) 赤化はしていないが熱による変質硬化層。  
2:1 濃褐色土 (2.5YR4/8) 硬化した燒土塊層。  
2:2 黄色土 (10YR4/6) 赤化はしていないが熱による変質硬化層。

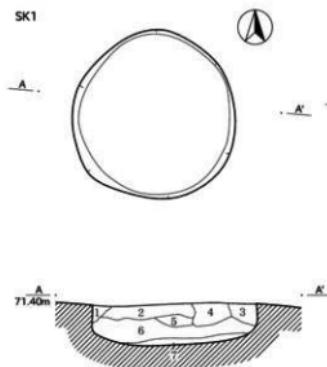
(D) 0 (1:40) 2m  
(E - F) 0 (1:20) 1m

13号竪穴遺物出土位置図



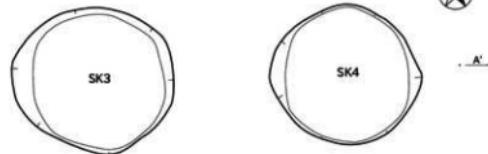


SK1



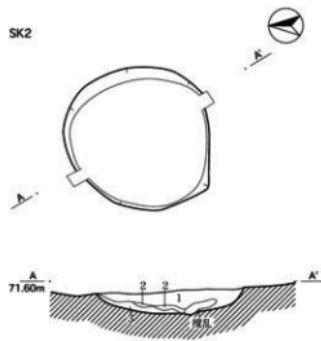
- SK1  
 1 埋蔵色土 (10YR3/4) 濃褐色な炭化物粒をごく少含む。  
 2 黒褐色土 (10YR2/2) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径6mm以下) 多く含む。  
 3 褐色土 (10YR4/4) 濃褐色な炭化物粒をごく少含む。燒土粒 (径6mm以下) が散らばる。  
 4 黑褐色土 (10YR2/2) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径6mm以下) 多く含む。  
 5 黑褐色土 (7.5YR2/2) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径4mm以下) 少少含む。  
 6 黑褐色土 (10YR5/2) 炭化物 (径5mm程度) 少少含む。濃褐色な炭化物粒・燒土粒 (径5mm以下) 多く含む。  
 7 褐色土 (7.5YR4/6) 濃褐色な炭化物粒をごく少含む。

SK3・4



- SK3  
 1 埋蔵色土 (10YR2/2) 濃褐色な炭化物粒・燒土粒 (径2mm以下) を多く含む。炭化材 (径5mm程度) 少量含む。  
 2 黑褐色土 (10YR3/4) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径2mm以下) 多く含む。  
 3 褐色土 (10YR3/4) 濃褐色な炭化物粒をごく少含む。燒土粒 (径2mm以下) 多く含む。  
 4 黑褐色土 (10YR2/2) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径2mm以下) 多く含む。  
 5 褐色土 (10YR4/4) 濃褐色な炭化物粒をごく少含む。  
 6 黑褐色土 (10YR2/2) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径3mm以下) 多く含む。  
 7 黑褐色土 (10YR2/1) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径2mm以下) 少少含む。  
 8 褐色土 (10YR3/3) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径2mm以下) 多く含む。  
 9 褐色土 (10YR4/4) 濃褐色な炭化物粒・燒土粒 (径2mm以下) を多く含む。炭化材 (径5mm程度) ごく少含む。  
 10 黑褐色土 (10YR4/4) 濃褐色な炭化物粒・燒土粒 (径2mm以下) を多く含む。炭化材 (径5mm程度) ごく少含む。  
 11 黑褐色土 (10YR4/4) 燃褐色土まだらに見じる。濃褐色な炭化物・炭化材 (径5mm程度) ごく少含む。しまり低い。  
 12 黑褐色土 (10YR3/3) 燃褐色土まだらに見じる。燒土粒 (径5~10mm) 少少含む。しまり高い。  
 13 褐色土 (10YR4/6) 炭化物 (径10mm程度) ごく少含む。燒土粒 (径2mm以下) ごく少含む。  
 14 黑褐色土 (10YR5/4) 炭化物 (径2mm以下) ごく少含む。しまり高い。

SK2

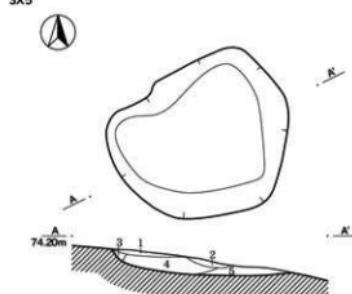


- SK2  
 1 埋蔵色土 (10YR2/3) 炭化材 (径5mm程度) ごく少含む。濃褐色な炭化物粒・燒土粒 (径5mm以下) 多く含む。  
 2 黑褐色土 (10YR2/2) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径5mm以下) 多く含む。  
 3 褐色土 (10YR3/3) 炭化材 (径5mm程度) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径5mm以下) 多く含む。

SK4

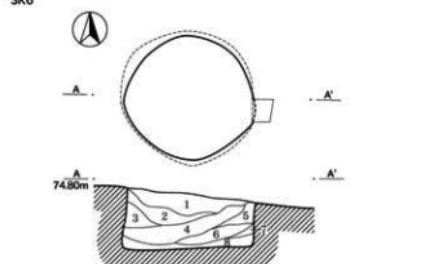
- SK4  
 1 褐色土 (10YR4/5) 濃褐色な炭化物粒・燒土粒 (径2mm以下) 少少含む。  
 2 黑褐色土 (10YR3/3) 炭化材 (径5mm程度) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径2mm以下) 多く含む。  
 3 褐色土 (10YR3/3) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径2mm以下) 多く含む。  
 4 黑褐色土 (10YR2/2) 濃褐色な炭化物粒・炭化材 (径5mm程度) 少少含む。燒土粒 (径2mm以下) 多く含む。  
 5 褐色土 (10YR4/4) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径2mm以下) 多く含む。  
 6 黑褐色土 (10YR3/3) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径2mm以下) 多く含む。炭化材 (径5mm程度) まばらに含む。  
 7 黑褐色土 (10YR2/3) 濃褐色な炭化物粒を多く含む。燒土粒 (径2mm以下) ごく少含む。  
 8 褐色土 (10YR4/4) 濃褐色な炭化物粒・炭化材 (径5mm程度) ごく少含む。燒土粒 (径2mm以下) 少少含む。  
 9 褐色土 (10YR4/4) 濃褐色な炭化物粒・炭化材 (径5mm程度) ごく少含む。燒土粒 (径2mm以下) 多く含む。  
 10 黑褐色土 (10YR5/6) 濃褐色な炭化物粒・炭化材 (径5mm程度) ごく少含む。燒土粒 (径2mm以下) 多く含む。  
 11 金屬色土 (5BYR8/6) 燃土粒を主とする。濃褐色な炭化物粒を少含む。炭化材 (径5~10mm) 多く含む。  
 12 黑褐色土 (10YR5/6) 濃褐色な炭化物粒をごく少含む。

SK5



- SK5 上標記記 Y6  
 1 褐色土 (10YR4/6) 燃土上・褐色土まだらに見じる。濃褐色な炭化物粒を多く含む。燒土粒 (径1mm以下) ごく少含む。  
 2 黑褐色土 (10YR2/3) 濃褐色な炭化物粒を多く含む。燒土粒 (径2mm程度) 少少含む。  
 3 褐色土 (10YR4/4) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径2mm以下) 多く含む。  
 4 黑褐色土 (10YR2/2) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径4mm以下) 多く含む。

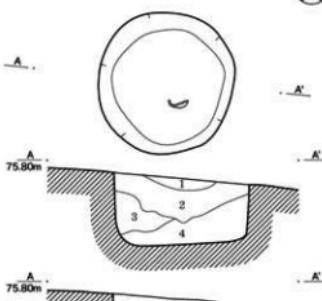
SK6



- SK6 上標記記 Y6  
 1 褐色土 (7.5YR4/4) 濃褐色な炭化物粒を少含む。炭化材 (径4~7mm程度)・燒土粒 (径4mm以下) 少量含む。  
 2 褐色土 (7.5YR4/6) 濃褐色な炭化物粒を少含む。炭化材 (径5mm程度) まばらに含む。濃褐色な炭化物粒・燒土粒 (径4mm以下) 多く含む。  
 3 褐色土 (7.5YR2/3) 濃褐色な炭化物粒を少含む。燒土粒 (径4mm以下) 多く含む。  
 4 褐色土 (7.5YR4/6) 地山の兩側面。濃褐色な炭化物粒をごく少含む。  
 5 褐色土 (7.5YR4/6) 濃褐色な炭化物粒を多く含む。炭化材 (径3~5mm程度) 少少含む。  
 6 褐色土 (7.5YR4/6) 地山の兩側面。濃褐色な炭化物粒を少含む。  
 7 褐色土 (7.5YR4/6) 地山の兩側面。濃褐色な炭化物粒を少含む。  
 8 褐色土 (7.5YR4/6) 濃褐色な炭化物粒・炭化材 (径4mm程度) をごく少含む。

## 弥生時代の土坑・その他 (2)

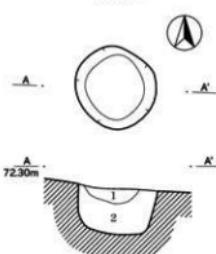
SK7



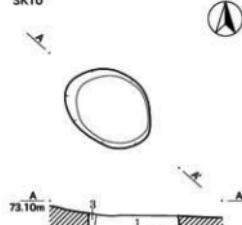
SX8



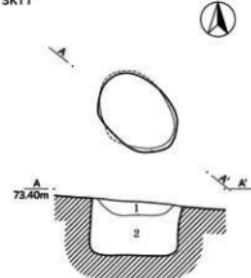
SK9



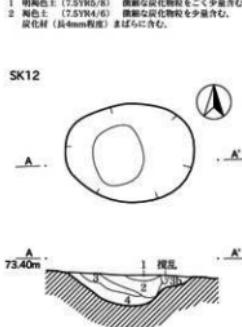
SK10



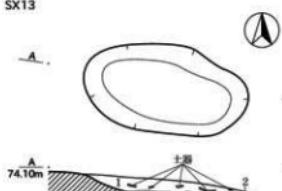
SK11



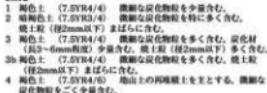
SK12



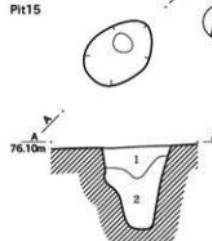
SK13



SK14



Pit15



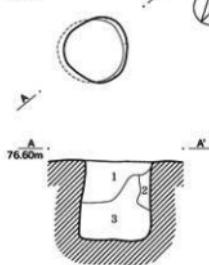
Pit14

1 黄褐色土 (7.5YR4/4) 酸化物質を多く含む。  
2 咸褐色土 (7.5YR3/3) 酸化物質を多く含む。  
地土粒 (径4mm以下) まばらに含む。

Pit15

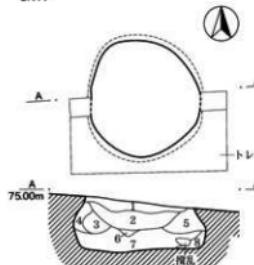
1 明褐色土 (7.5YR5/6) 酸化物質を多く含む。炭化材 (長4mm程度)  
少量含む。  
2 咸褐色土 (7.5YR4/4) 酸化物質を多く含む。炭化材 (長4mm程度)  
少量含む。地土粒 (径3mm以下) 少量含む。

Pit16



- Pit16  
1 淡色土 (7.5YR4/6) 微細な炭化物粒を多く含む。  
2 明褐色土 (7.5YR5/6) 微細な炭化物粒を少額含む。  
3 淡色土 (7.5YR4/4) 微細な炭化物粒を多く含む。炭化材 (長4mm程度) まばらに含む。粘土粒 (径3mm以下) まばらに含む。

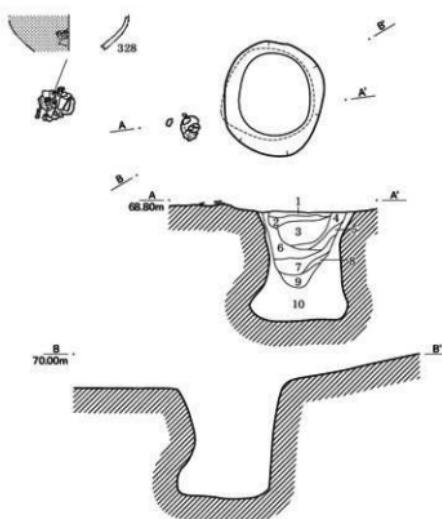
SK17



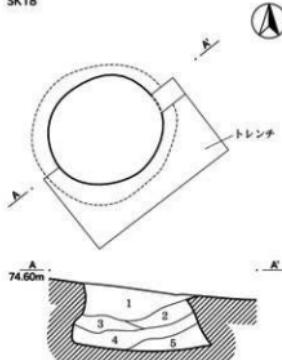
SK17

- 1 淡色土 (7.5YH4/6) 微細な炭化物粒多く含む。炭化材 (長3mm程度) 少量含む。
- 2 明褐色土 (7.5YR5/6) 微細な炭化物粒多く含む。炭化材 (長5mm程度) 少量含む。
- 3 明褐色土 (7.5YR5/6) 微細な炭化物粒をごく少量含む。
- 4 淡色土 (7.5YR4/6) 微細な炭化物粒を多く含む。炭化材 (長1~7mm程度) ごく少量含む。
- 5 淡色土 (7.5YR4/6) 微細な炭化物粒を多く含む。炭化材 (長1~7mm程度) ごく少量含む。
- 6 淡色土 (7.5YR4/6) 炭化物粒 (径1mm以下) 少量含む。
- 7 にぶく褐色土 (7.5YR5/6) 炭化物粒 (径1mm以下) 多く含む。
- 8 明褐色土 (7.5YR5/6) 微細な炭化物粒をごく少量含む。
- 9 明褐色土 (7.5YR5/6) 木の根による搅乱層。微細な炭化物粒をごく少量含む。

SK19

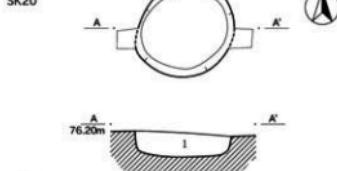


SK18

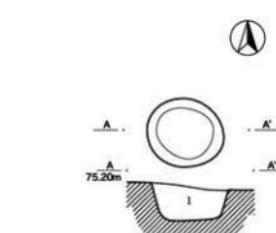


- SK18  
1 淡色土 (7.5YR4/4) 微細な炭化物粒・炭化材 (径5~10mm程度)・粘土粒 (径2mm以下) 少量含む。地表上 (径2mm以下) 多く含む。
- 2 明褐色土 (7.5YR6/6) 微細な炭化物粒・炭化材 (径5~10mm程度) を少額含む。
- 3 淡色土 (10YR6/6) 炭化物粒・炭化材 (径5~15mm程度) を少額含む。
- 4 淡色土 (7.5YR4/6) 炭化物粒・炭化材 (径5~10mm程度) 多く含む。
- 5 明褐色土 (7.5YR5/6) 炭化物粒・炭化材 (径5~10mm程度) を少額含む。

SK20



Pit21



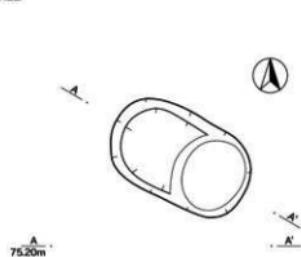
- SK19  
1 淡色土 (7.5YR4/4) 明褐色土をまだらに含む。炭化物粒 (径1~5mm程度) 少量含む。しまり弱く、粘性強い。
- 2 淡色土 (7.5YR4/3) 地表上 (径2mm以下) 多く含む。明褐色土を含む。しまり弱く、粘性強い。
- 3 明褐色土 (SYR5/3) 繋つた明褐色土を含む (径1~5mm程度) 多く含む。炭化物粒 (径1~3mm) 少量含む。しまり弱く、粘性強い。
- 4 明褐色土 (7.5YR4/2) 地表上 (径2mm以下) 多く含む。しまり弱く、粘性強い。
- 5 淡色土 (7.5YR4/4) 地表上 (径2mm以下) 多く含む。しまり弱く、粘性強い。
- 6 淡色土 (10YR6/6) 地表上 (径2mm以下) 多く含む。炭化物粒 (径1~3mm程度) 少量含む。しまり弱く、粘性やや強い。
- 7 淡色土 (10YR4/4) 炭化物粒を量多く含む。しまり弱く、粘性強い。
- 8 淡色土 (7.5YR4/6) 炭化物粒を量多く含む。しまり弱く、粘性強い。
- 9 明褐色土 (10YR5/6) 明褐色土を多く混じる。炭化物粒を少額含む。しまり弱く、粘性やや強い。
- 10 淡色土 (7.5YR4/4) 土質的に泥と同じ。しまり弱く粘性やや強い。

- SK20  
1 淡色土 (7.5YR3/4) 炭化物粒 (径4mm以下) 多く含む。

- Pit21  
1 淡色土 (7.5YR4/6) 微細な炭化物粒を少額含む。

## 弥生時代の土坑・その他 (4) 時期不明炭窯

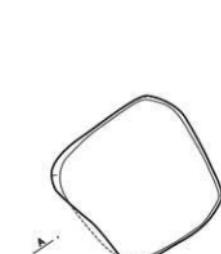
SK22



SK22

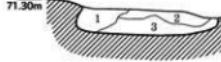
- 1 始褐色土 (10YR3/4) 硫化物鉱 (径8mm以下) 少なく含む。  
2 黄褐色土 (10YR4/6) 硫化物鉱 (径3mm以下) 少量含む。土壌化不含む。

CSK (炭窯) 2



- CSK (炭窯) 3  
1 海色土 (10YR4/2) 硫化物鉱 (径5mm程度) をまばらに、微細な硫化物鉱を多く含む。  
2 黄褐色土 (10YR4/6) 硫化物鉱 (径10mm程度) をまばらに、微細な硫化物鉱を多く含む。  
3 海色土 (10YR4/4) 硫化物鉱 (径5~10mm程度) - 微細な硫化物鉱を多く含む。  
4 黄褐色土 (10YR4/6) 硫化物鉱 (径5~10mm程度) 少量含む。硫化物鉱 (径40mm程度) まばらに含む。硫土鉱 (径2mm程度) 少量含む。  
5 硫化物鉱 (7.5YR2/3) 硫化物鉱 (径5mm程度) まばらに含む。微細な硫化物鉱を極めて多く含む。  
6 黄褐色土 (10YR4/4) 微細な硫化物鉱を多く含む。硫土鉱 (径2mm以下) ごく少  
量含む。

CSK (炭窯) 4



CSK (炭窯) 5



JSK3

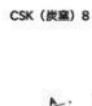
CSK (炭窯) 6

- CSK (炭窯) 6  
1 黄褐色土 (7.5YR2/2) 微細な硫化物鉱を生ずる層。  
2 黄褐色土 (10YR2/2) 多く含む。柱状の炭化材 (径長  
5cm程度) 特に多く含む。

CSK (炭窯) 7



CSK (炭窯) 8



JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

CSK (炭窯) 5

CSK (炭窯) 6

CSK (炭窯) 7

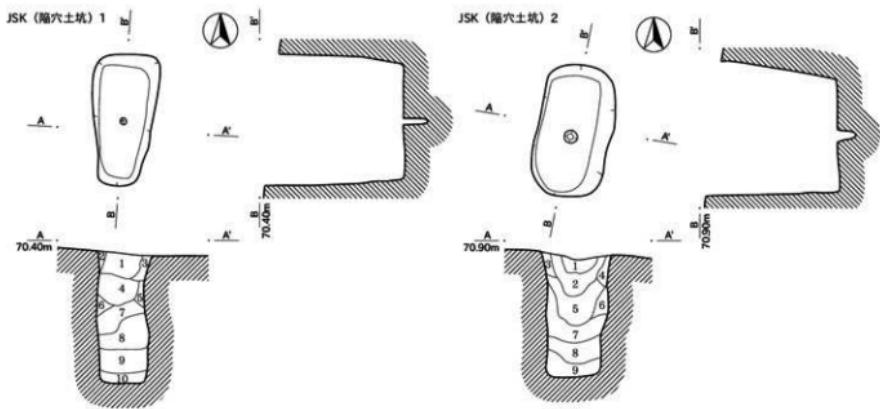
CSK (炭窯) 8

JSK3

CSK (炭窯) 4

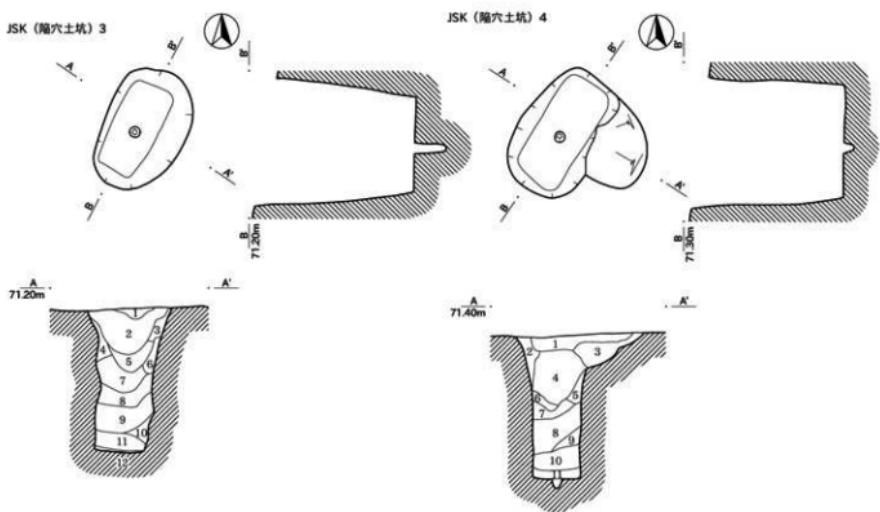
圖版 25

縄文時代の遺構（1）



- | JSK (植物学大系) | 学名   | 説明                           |
|-------------|--|------------------------------|
| 1 黒毛草       | (7) <i>Oryzopsis trichodes</i> (Griseb.)   | 圓錐花序に伸長枝 - 雄蕊上部 (葯莢以下) 多く含む。 |
| 2 黒穂草       | (8) <i>Oryzopsis glauca</i> (L.)           | 圓錐花序に伸長枝 - 雄蕊上部 (葯莢以下) 少く含む。 |
| 3 にじ草 (東洋草) | (9) <i>Oryzopsis heterolepis</i> (Griseb.) | 圓錐花序に伸長枝 - 雄蕊上部 (葯莢以下) 多く含む。 |
| 4 黒葉草       | (10) <i>Oryzopsis virgata</i> (L.)         | 圓錐花序に伸長枝 - 雄蕊上部 (葯莢以下) 多く含む。 |
| 5 黒馬唐       | (11) <i>Oryzopsis latifolia</i> (L.)       | 圓錐花序に伸長枝 - 雄蕊上部 (葯莢以下) 多く含む。 |
| 6 黒葉草       | (12) <i>Oryzopsis glauca</i> (L.)          | 圓錐花序に伸長枝 - 雄蕊上部 (葯莢以下) 多く含む。 |
| 7 黒葉草       | (13) <i>Oryzopsis glauca</i> (L.)          | 圓錐花序に伸長枝 - 雄蕊上部 (葯莢以下) 多く含む。 |
| 8 黒葉草       | (14) <i>Oryzopsis glauca</i> (L.)          | 圓錐花序に伸長枝 - 雄蕊上部 (葯莢以下) 多く含む。 |
| 9 黒葉草       | (15) <i>Oryzopsis glauca</i> (L.)          | 圓錐花序に伸長枝 - 雄蕊上部 (葯莢以下) 多く含む。 |

- | JSK (英語訳文) 2 | 成化物類 (約5mm程度) - 濃黒な成化物類を多く含む。斑点類<br>(約2mm以下) 少量含む。 |
|--------------|--|
| 2 黒色         | (約1mm/4)   |
| 2 黒褐色        | (約1mm/4)   |
| 2 深褐色        | (約1mm/4)   |
| 4 黄褐色        | (約1mm/4)   |
| 4 黄褐色        | (約1mm/4)   |
| 5 暗褐色        | (約1mm/3)   |
| 5 暗褐色        | (約1mm/3)   |
| 6 白色         | (約1mm/4)   |
| 7 白色         | (約1mm/4)   |
| 7 白色         | (約1mm/4)   |
| 8 淡褐色        | (約1mm/3)   |
| 8 淡褐色        | (約1mm/3)   |
| 9 黄褐色        | (約1mm/3)   |
| 9 黄褐色        | (約1mm/3)   |

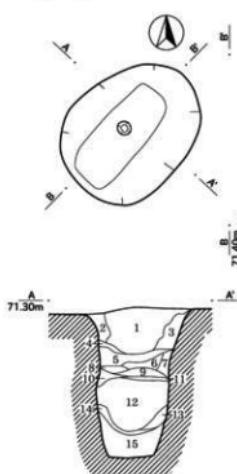


- | JHK (原文本文) 3       | 山地化粒 (約3mm以下) 多く含む。                   |
|--------------------|---------------------------------------|
| 2 硫酸化物 (7.5HgK3)   | 硫酸化物 (約3~8mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。   |
| 3 鉛化物 (7.5HgPb3)   | 鉛化物 (約3~8mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。    |
| 4 銅化物 (7.5HgCu3)   | 銅化物 (約3~8mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。    |
| 5 鎌化物 (7.5HgMn3)   | 鎌化物 (約3~8mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。    |
| 6 明礬化物 (7.5HgAl3)  | 明礬化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。 |
| 7 鉄化物 (7.5HgFe3)   | 鉄化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。  |
| 8 鋼化物 (7.5HgCr3)   | 鋼化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。  |
| 9 鐵化物 (7.5HgFe2)   | 鐵化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。  |
| 10 鋼化物 (7.5HgCr2)  | 鋼化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。  |
| 11 鎌化物 (7.5HgMn2)  | 鎌化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。  |
| 12 鉛化物 (7.5HgPb2)  | 鉛化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。  |
| 13 鉻化物 (7.5HgAs3)  | 鉻化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。  |
| 14 明礬化物 (7.5HgAl2) | 明礬化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。 |
| 15 鐵化物 (7.5HgFe1)  | 鐵化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。  |
| 16 鋼化物 (7.5HgCr1)  | 鋼化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。  |
| 17 鎌化物 (7.5HgMn1)  | 鎌化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。  |
| 18 鉻化物 (7.5HgAs1)  | 鉻化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。  |
| 19 鐵化物 (7.5HgFe0)  | 鐵化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。  |
| 20 明礬化物 (7.5HgAl0) | 明礬化物 (約1.5~5mm程度) を少し含む。微細な硫化物粒を多く含む。 |

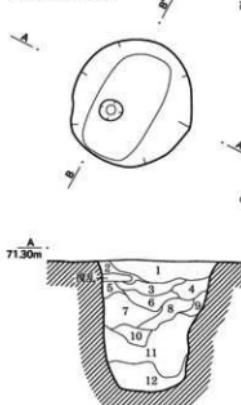
- |            |            |                                 |
|------------|------------|---------------------------------|
| JSK (黄土) 4 | (7.0YR2/2) | 難燃性化物を多く含む。炭化物鉱 (3~5mm程度) 少量含む。 |
| 2 黄褐色土     | (10YR6/6)  | 難燃性化物を少し含む。                     |
| 3 黄褐色土     | (10YR4/6)  | 難燃性化物を少し含む。                     |
| 4 黄褐色土     | (10YR2/6)  | 難燃性化物を少し含む。                     |
| 5 黄褐色土     | (10YR0/6)  | 難燃性化物を多く含む。しまり無い。               |
| 6 黄褐色土     | (10YR0/5)  | 難燃性化物を多く含む。しまり無い。               |
| 7 極褐色土     | (7.0YR2/3) | 難燃性化物を多く含む。しまり無い。               |
| 8 極褐色土     | (7.0YR2/2) | 難燃性化物を多く含む。しまり無い。               |
| 9 黄褐色土     | (10YR4/2)  | 難燃性化物を多く含む。しまり無い。               |
| 10 黄褐色土    | (10YR4/1)  | 難燃性化物を多く含む。しまり無い。               |
| 11 黄褐色土    | (10YR3/2)  | 難燃性化物を多く含む。                     |

## 縄文時代の遺構 (2)

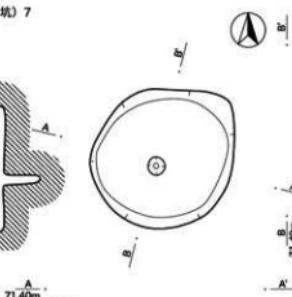
JSK (竪穴土坑) 5



JSK (竪穴土坑) 6



JSK (竪穴土坑) 7



JSK (竪穴土坑) 8



JSK (竪穴土坑) 9

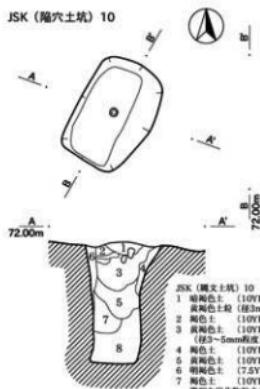


JSK (竪穴土坑) 6

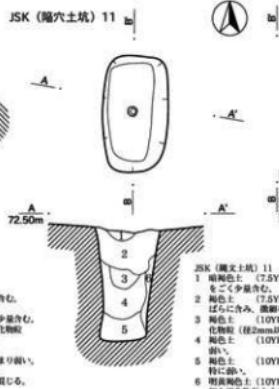
- JSK (竪穴土坑) 6  
1 黒褐色土 (7.5YR2/2) 微細な炭化物粒をまばらに含む。黄褐色土粒 (径3mm以下) 多く含む。  
2 黄褐色土 (7.5YR2/3) 微細な炭化物粒を含む。黒褐色土粒をごく少しあむ。  
3 黄褐色土 (7.5YR2/2) 廃文化物粒 (径3mm以下) 多く含む。  
4 黄褐色土 (7.5YR4/4) 廃文化物粒 (径3mm以下) 多く含む。  
5 黄褐色土 (7.5YR5/8) 微細な炭化物粒をごく少しあむ。  
6 黄褐色土 (7.5YR4/6) 黑褐色土 (II層土) を主とする。微細な炭化物粒を多く含む。しまり無い。  
7 黄褐色土 (7.5YR4/4) 微細な炭化物粒を多く含む。  
8 黄褐色土 (7.5YR4/4) 黑褐色土 (II層土) を主とする。微細な炭化物粒を多く含む。しまり無い。  
9 黄褐色土 (7.5YR4/6) 廃文化物粒 (径3mm以下) ごく少しあむ。  
10 黄褐色土 (1.0YR5/6) 微細な炭化物粒を多量含む。しまり無い。  
11 黄褐色土 (1.0YR5/6) 黑褐色土 (II層土) を主とする。微細な炭化物粒を多く含む。  
12 黄褐色土 (1.0YR5/6) 黑褐色土 (II層土) を主とする。微細な炭化物粒を多く含む。しまり無い。

0 (1:40) 2m

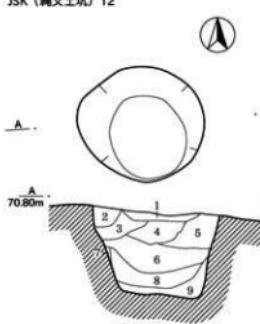
JSK (竪穴土坑) 10



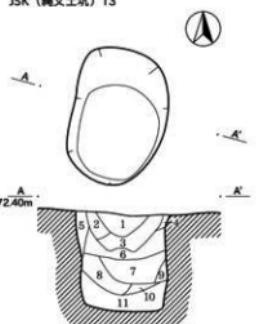
JSK (竪穴土坑) 11



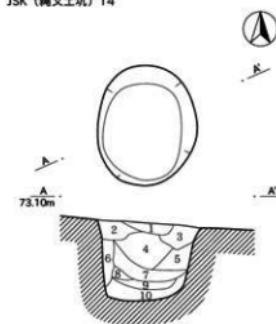
JSK (縄文土坑) 12



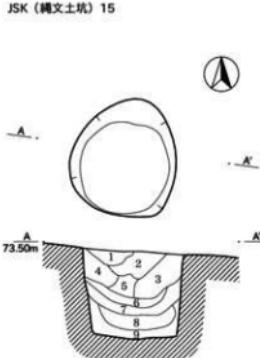
JSK (縄文土坑) 13



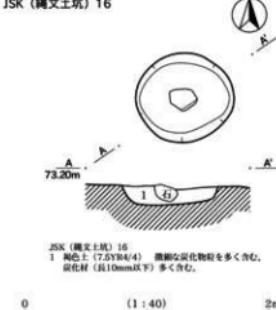
JSK (縄文土坑) 14



JSK (縄文土坑) 15

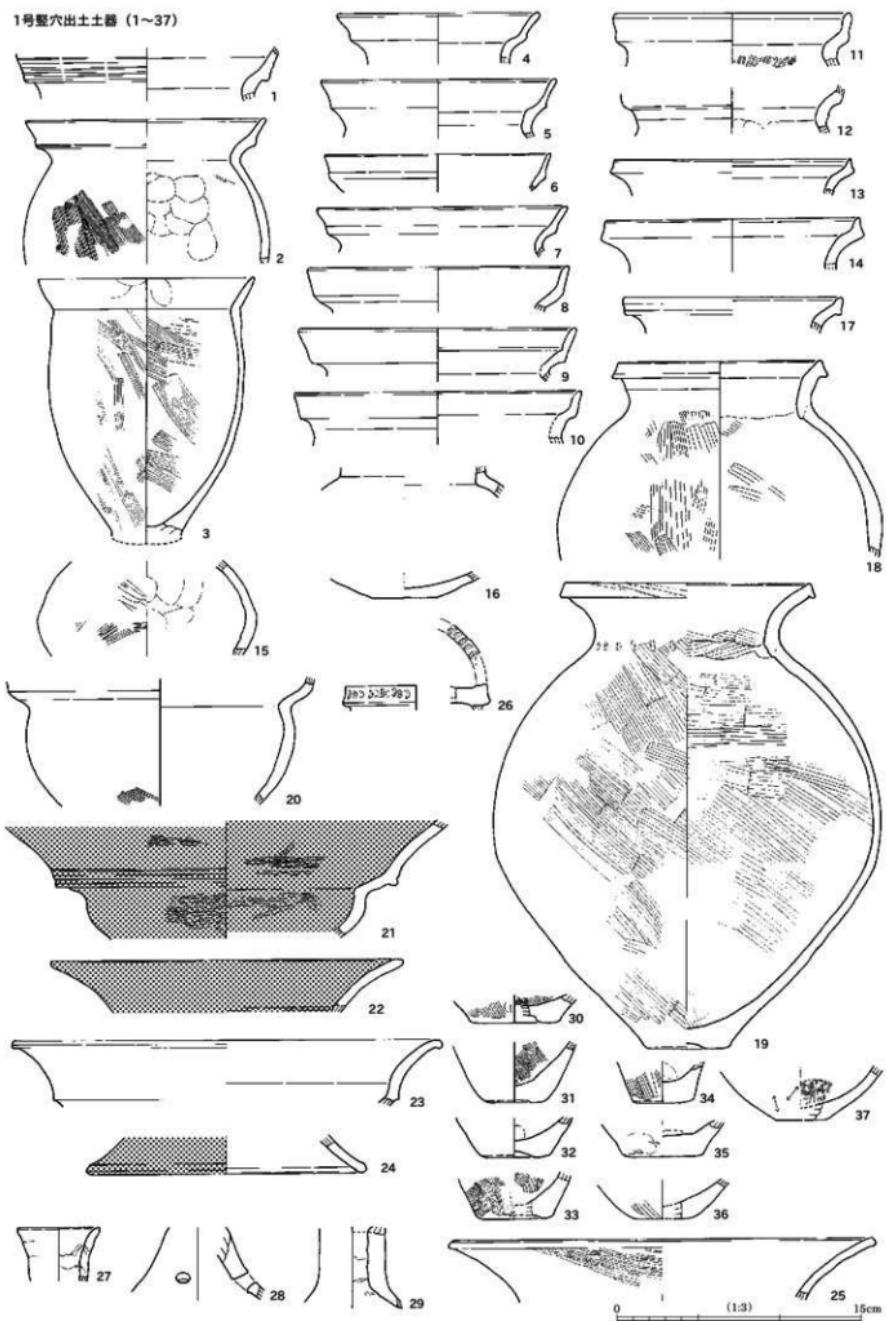


JSK (縄文土坑) 16

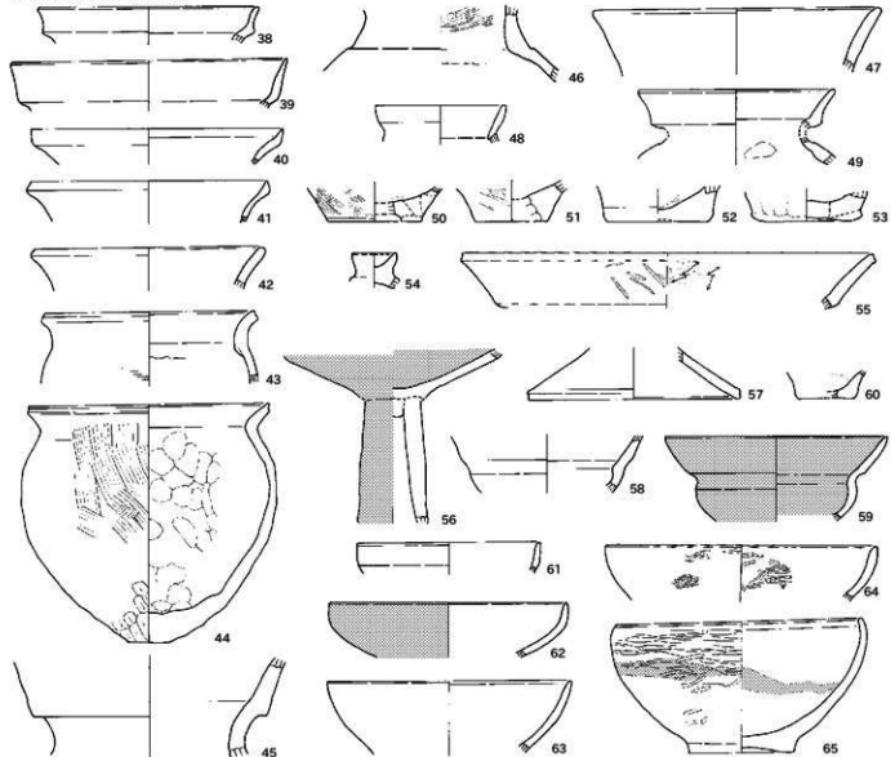


0 (1:40) 2m

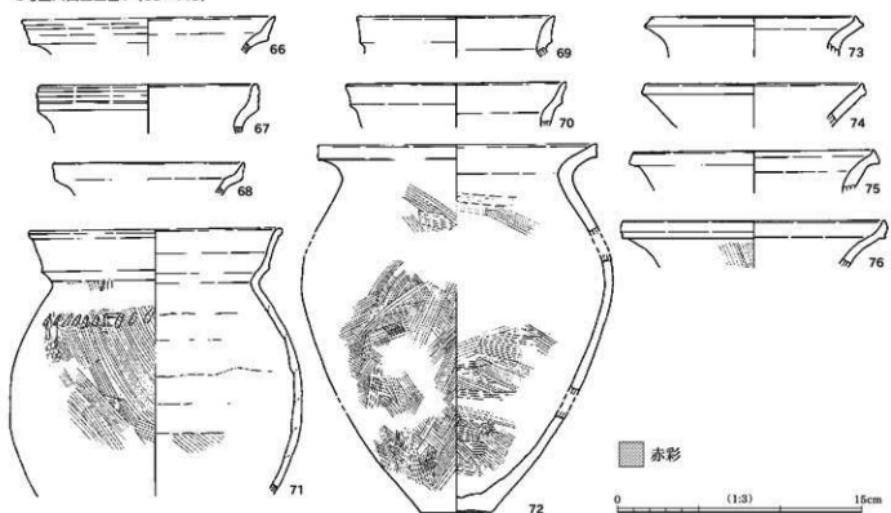
## 1号墳出土土器 (1~37)



## 2号墳穴出土土器 (38~65)



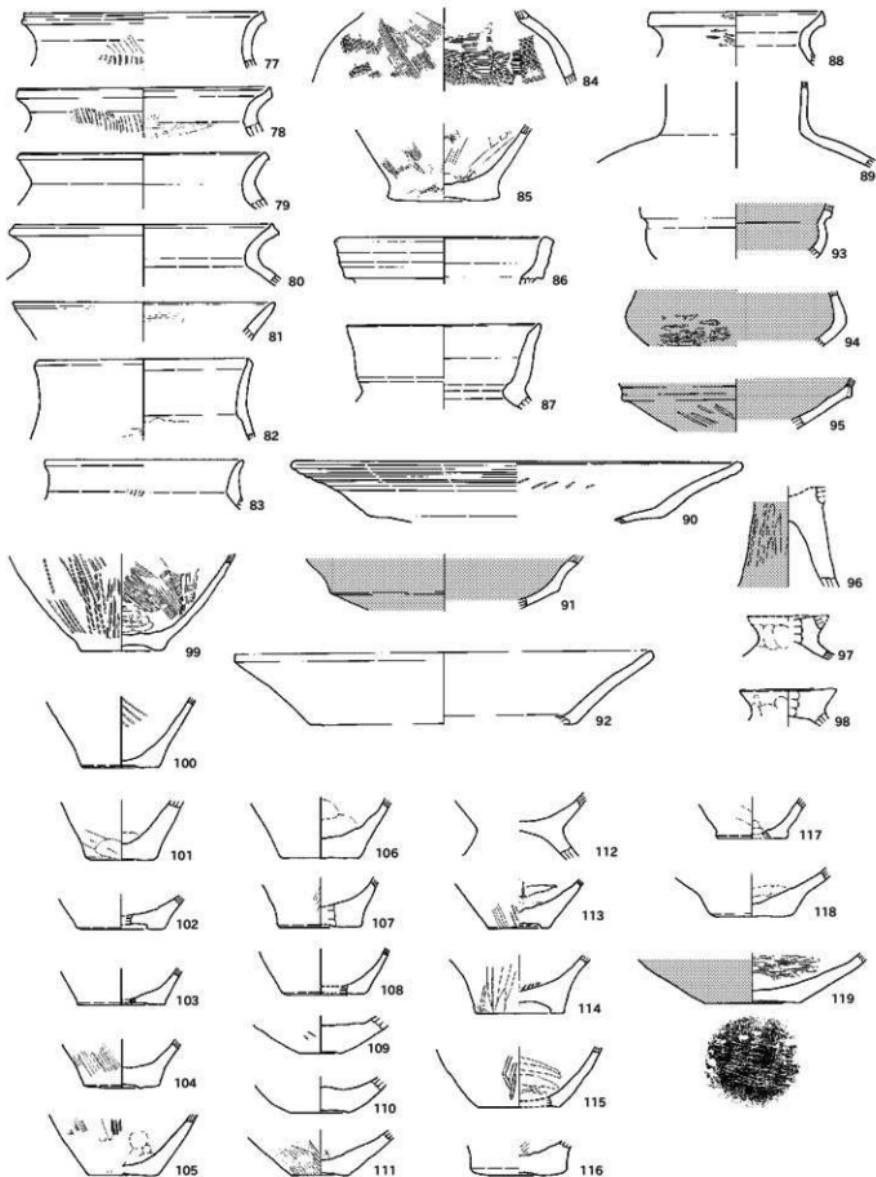
## 3号墳穴出土土器1 (66~119)



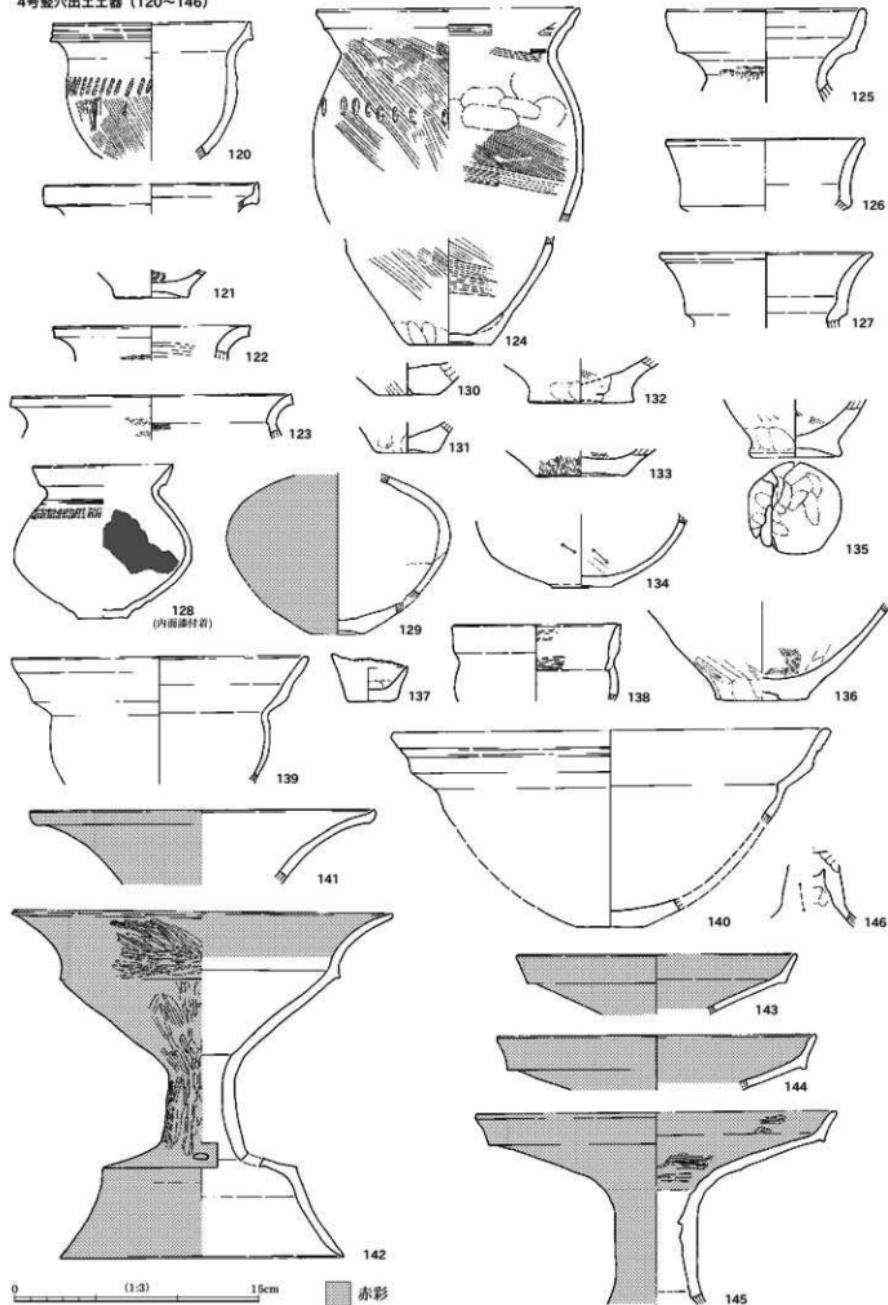
■ 赤彩

0 (1:3) 15cm

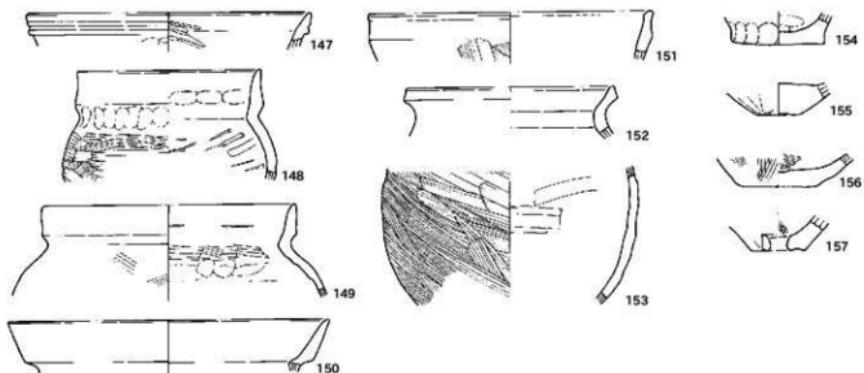
## 3号墳出土土器2 (66~119)



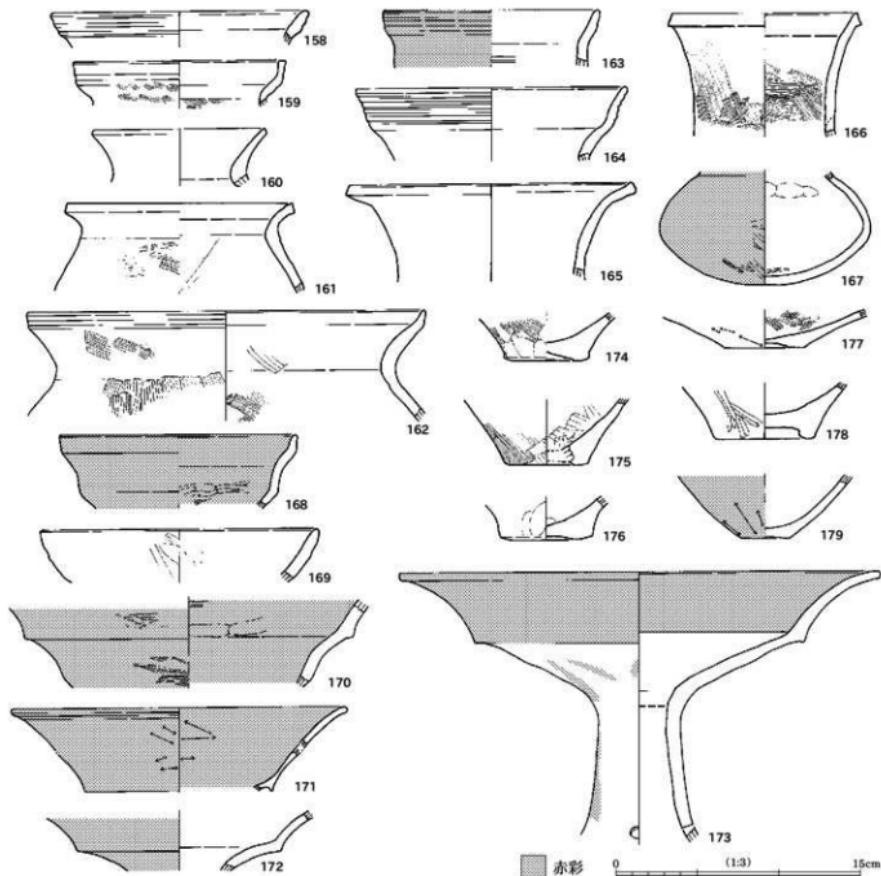
## 4号墳出土土器 (120~146)



## 5号整穴出土土器 (147~157)



## 6号整穴出土土器 (158~179)



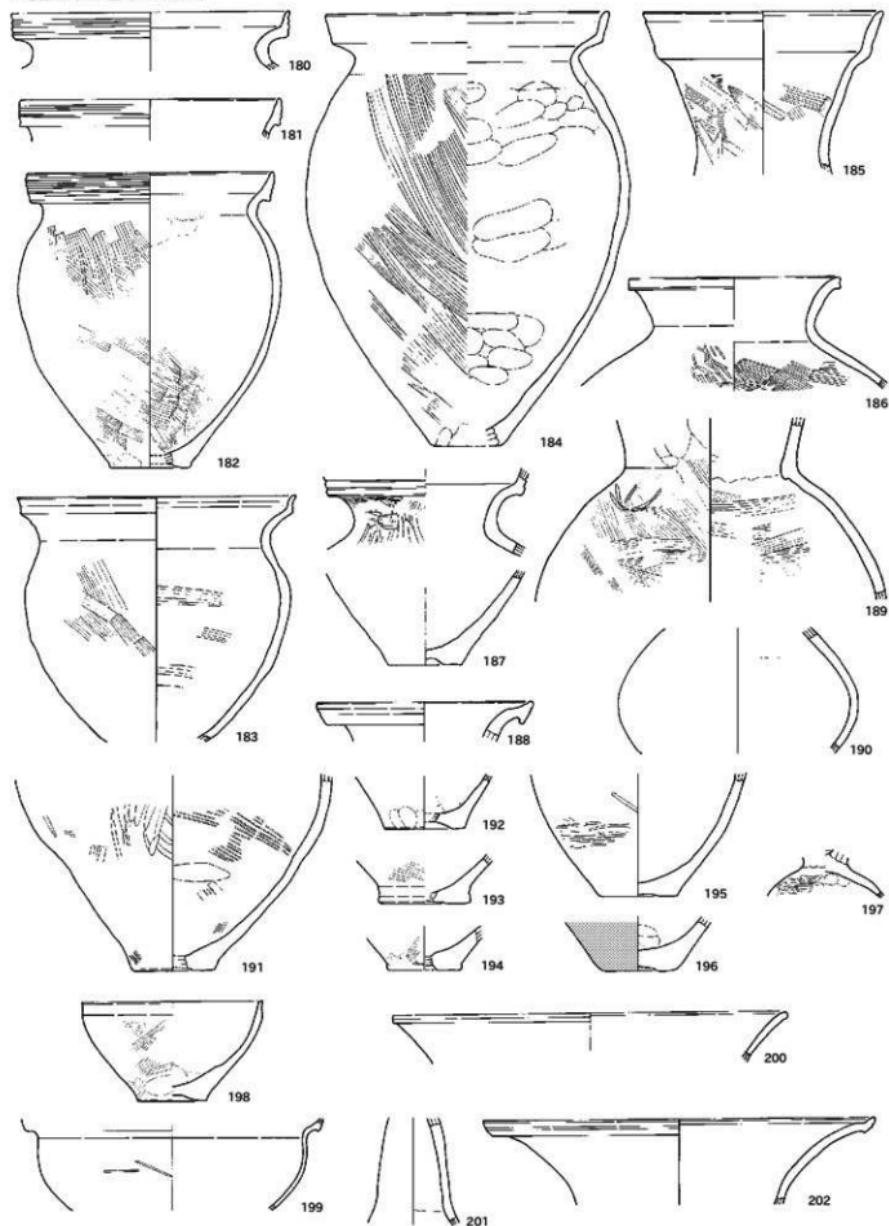
赤影

0

(1:3)

15cm

## 7号墳穴出土土器 (180~202)



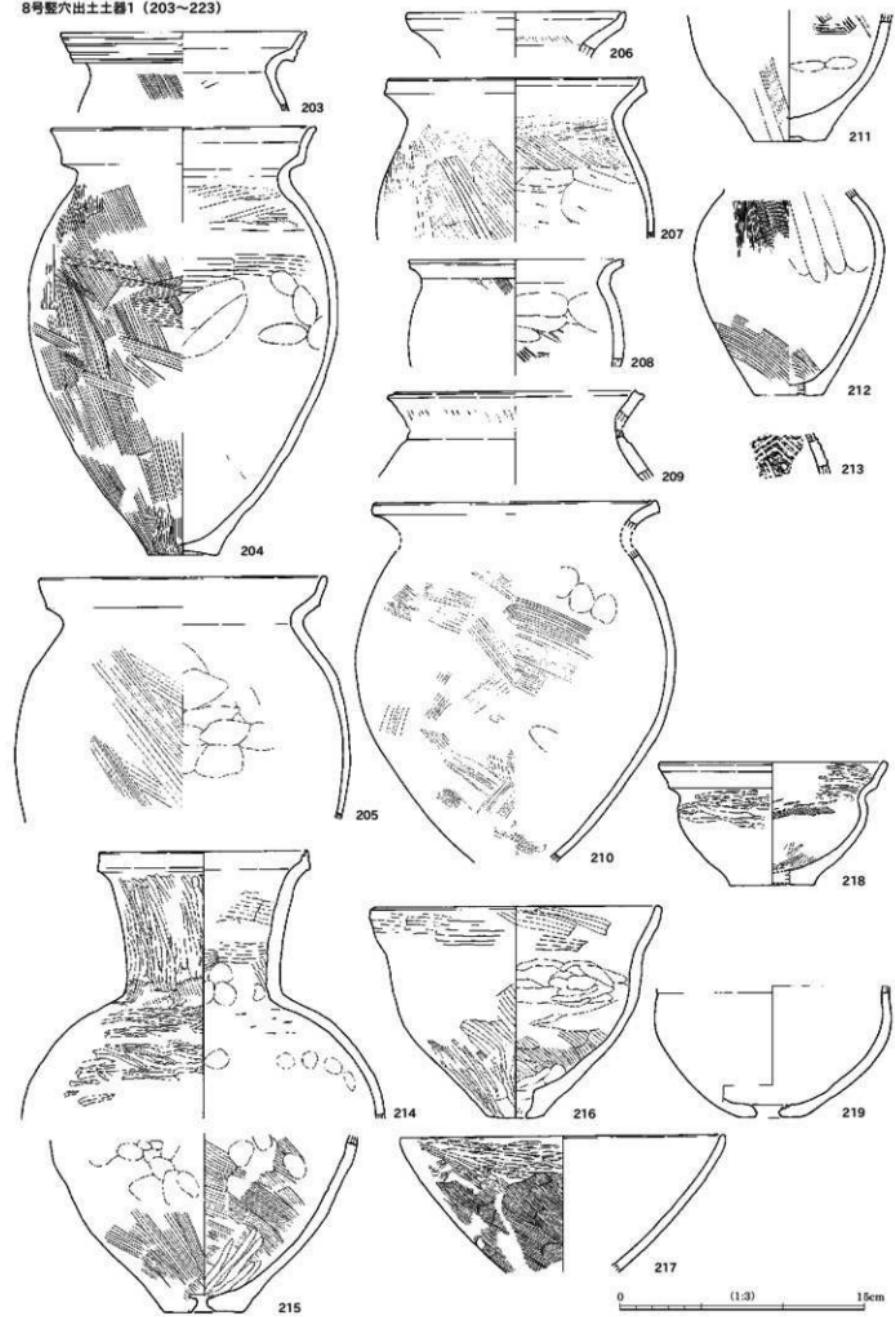
■ 赤影

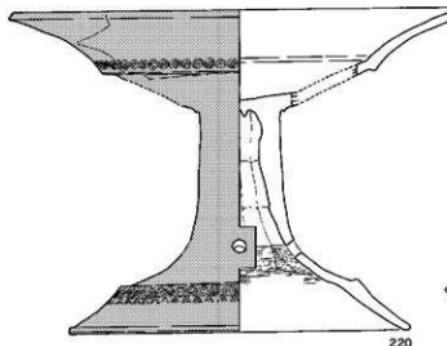
0

(1:3)

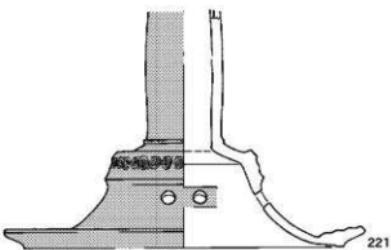
15cm

## 8号墳出土土器1 (203~223)

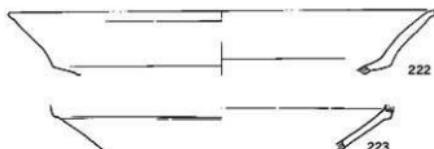




220



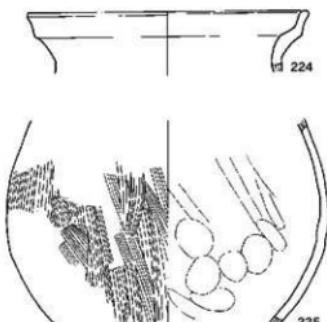
221



222

223

9号整穴出土土器 (224~244)



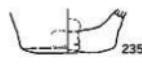
224



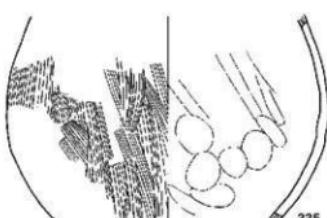
227



231



235



225



228



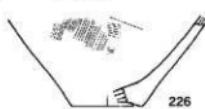
232



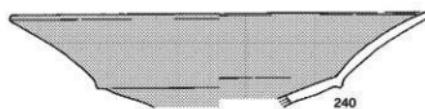
233



234



226



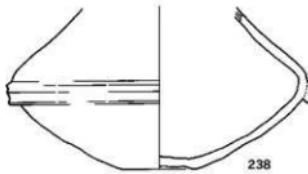
240



237



241



238



242



243



239

赤影

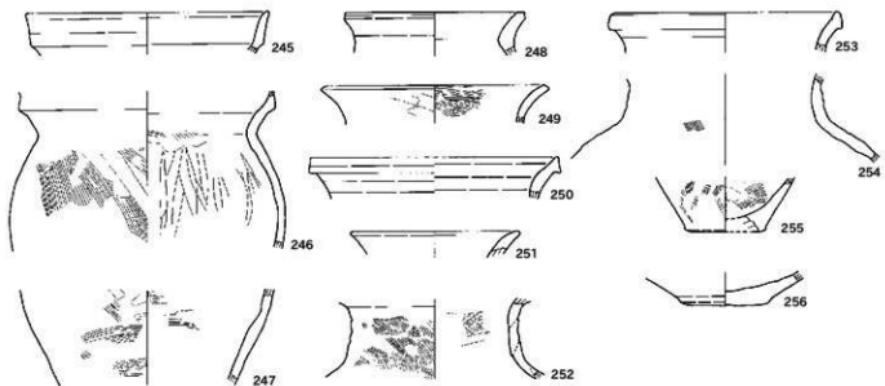


0

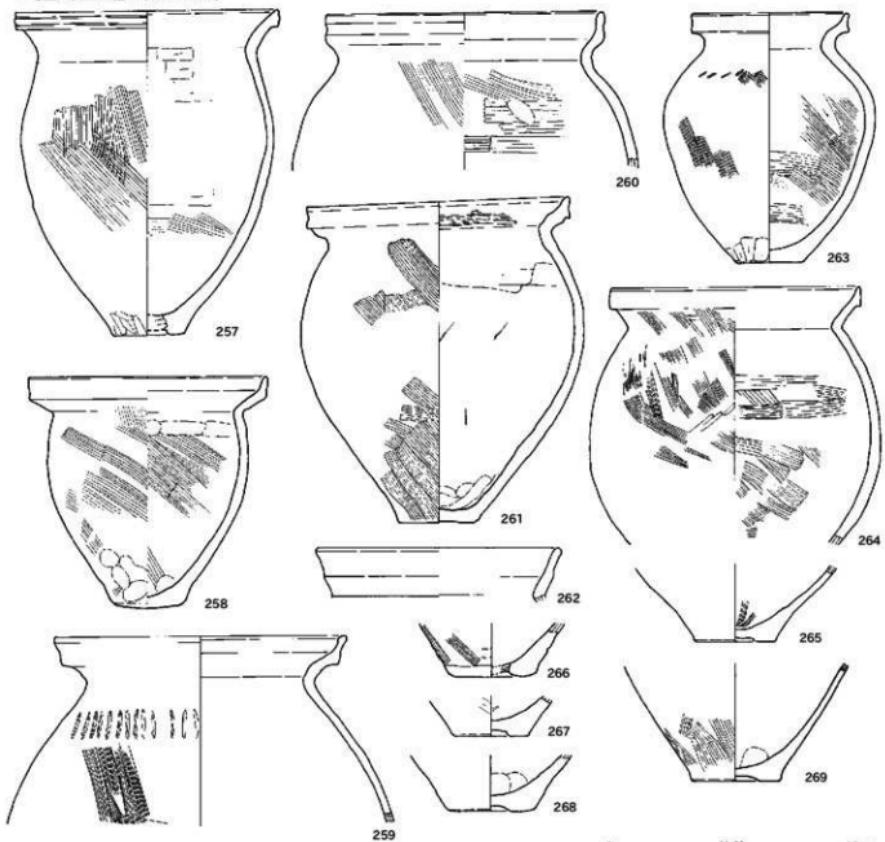
(1:3)

15cm

## 10号整穴出土土器 (245~256)

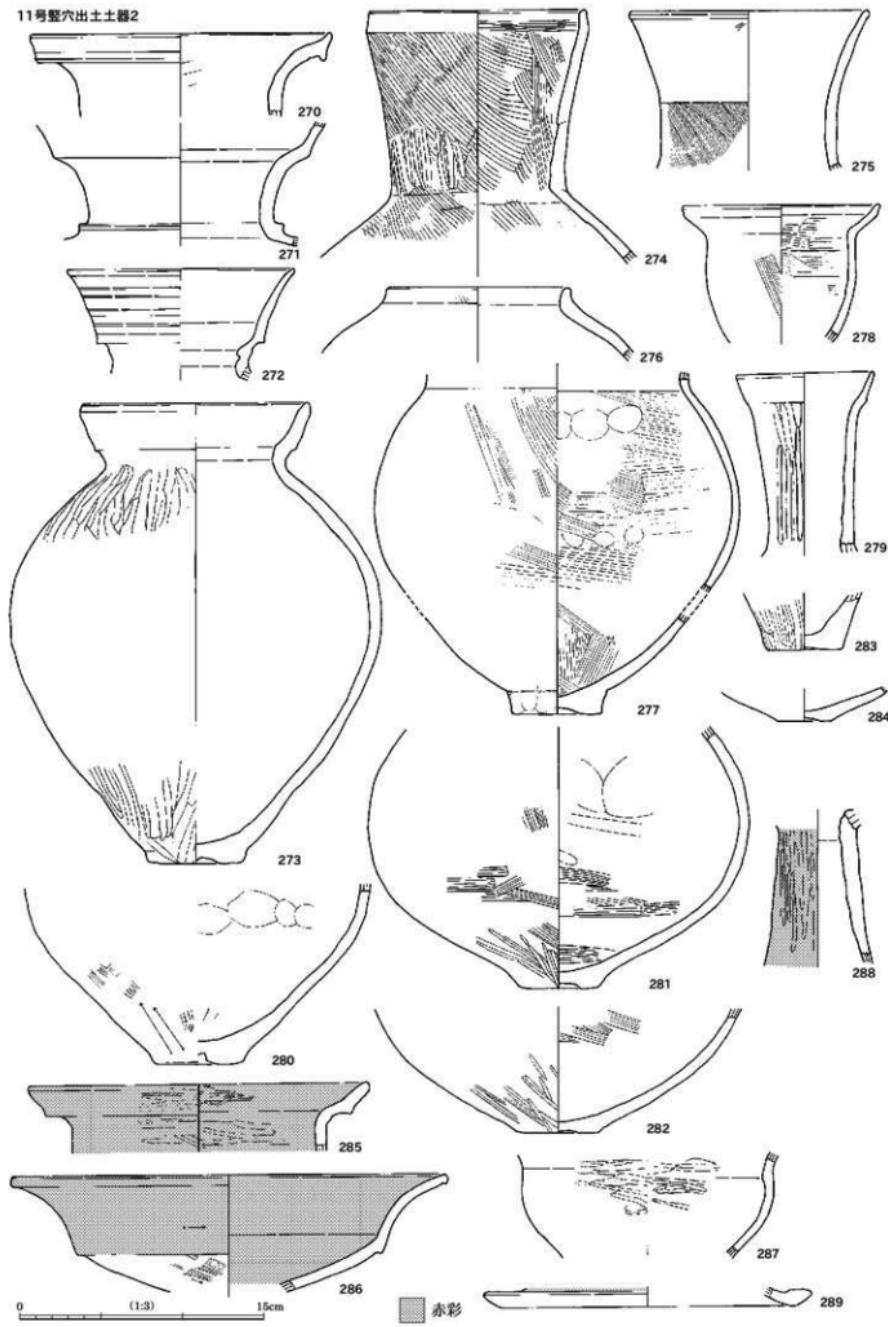


## 11号整穴出土土器1 (257~289)

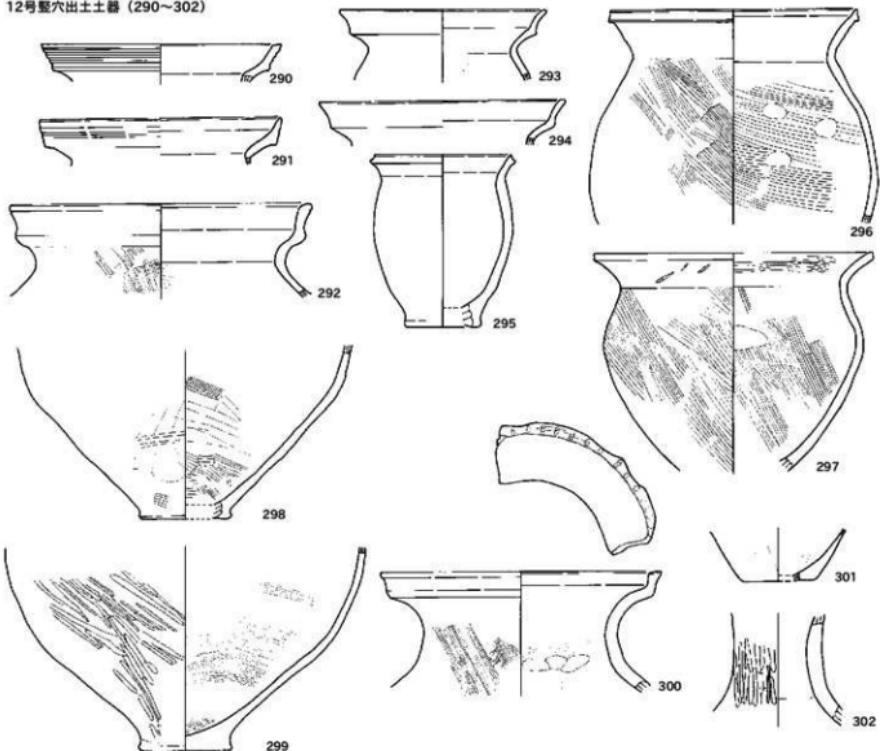


0 (1:3) 15cm

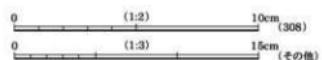
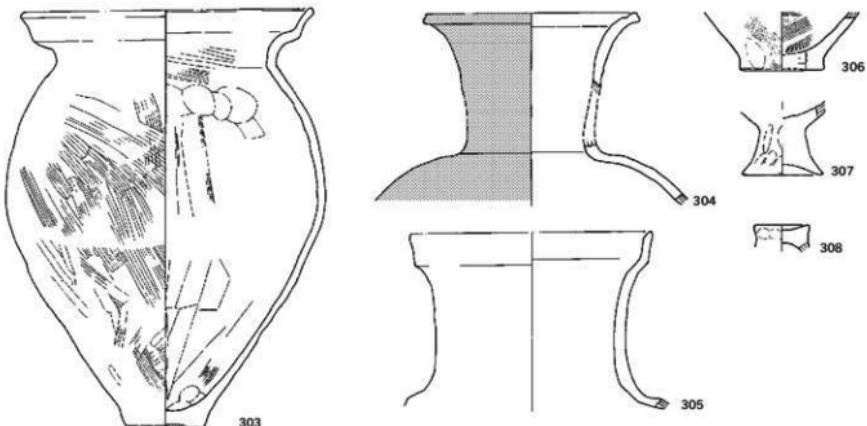
11号竪穴出土土器2



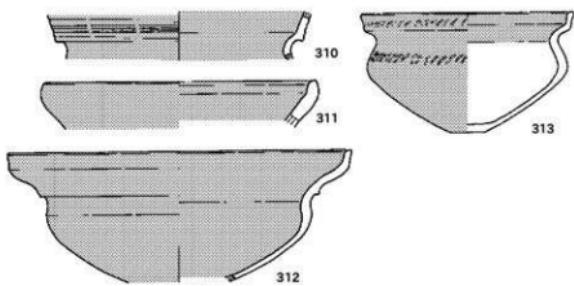
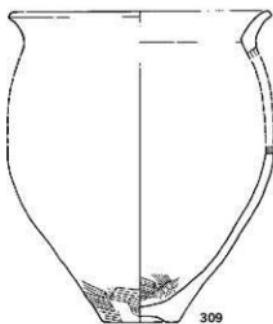
## 12号整穴出土土器 (290~302)



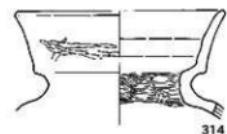
## 13号整穴出土土器 (303~308)



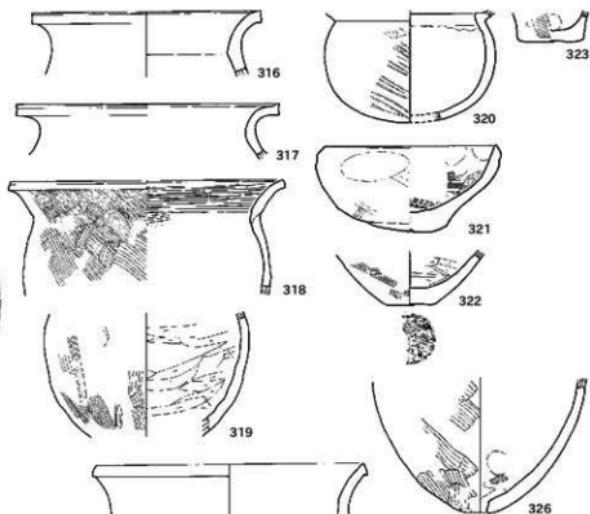
## 14号整穴出土土器 (309~313)



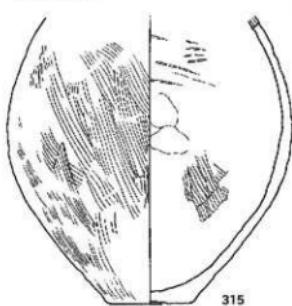
## SX5出土土器



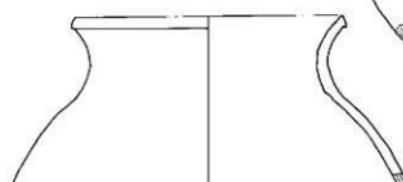
## SX8出土土器 (316~326)



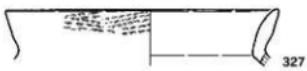
## SX7出土土器



## SX13出土土器



## SX17出土土器

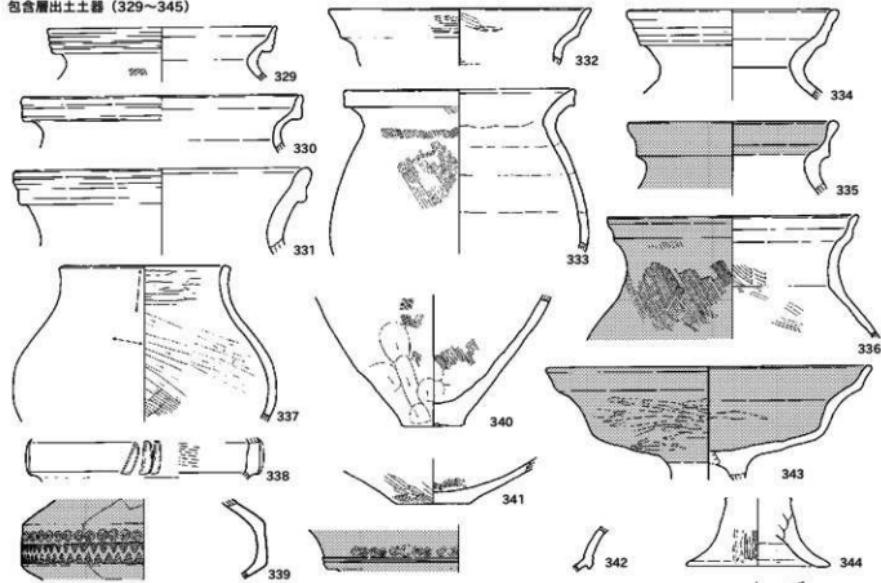


## SK19出土土器



■ 赤彩 0 (1:3) 15cm

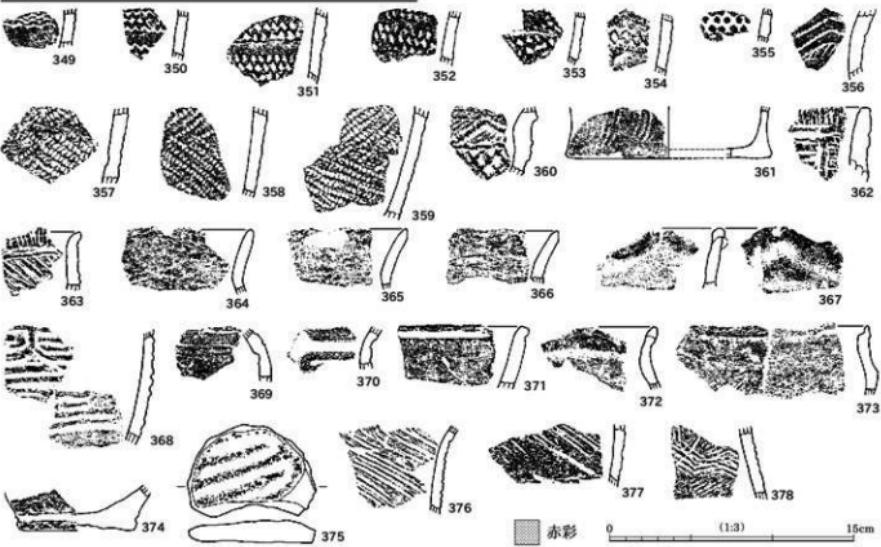
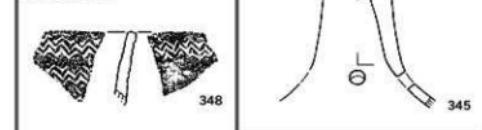
## 包含層出土器 (329~345)



## 縄繩文土器



## 縄文時代の土器

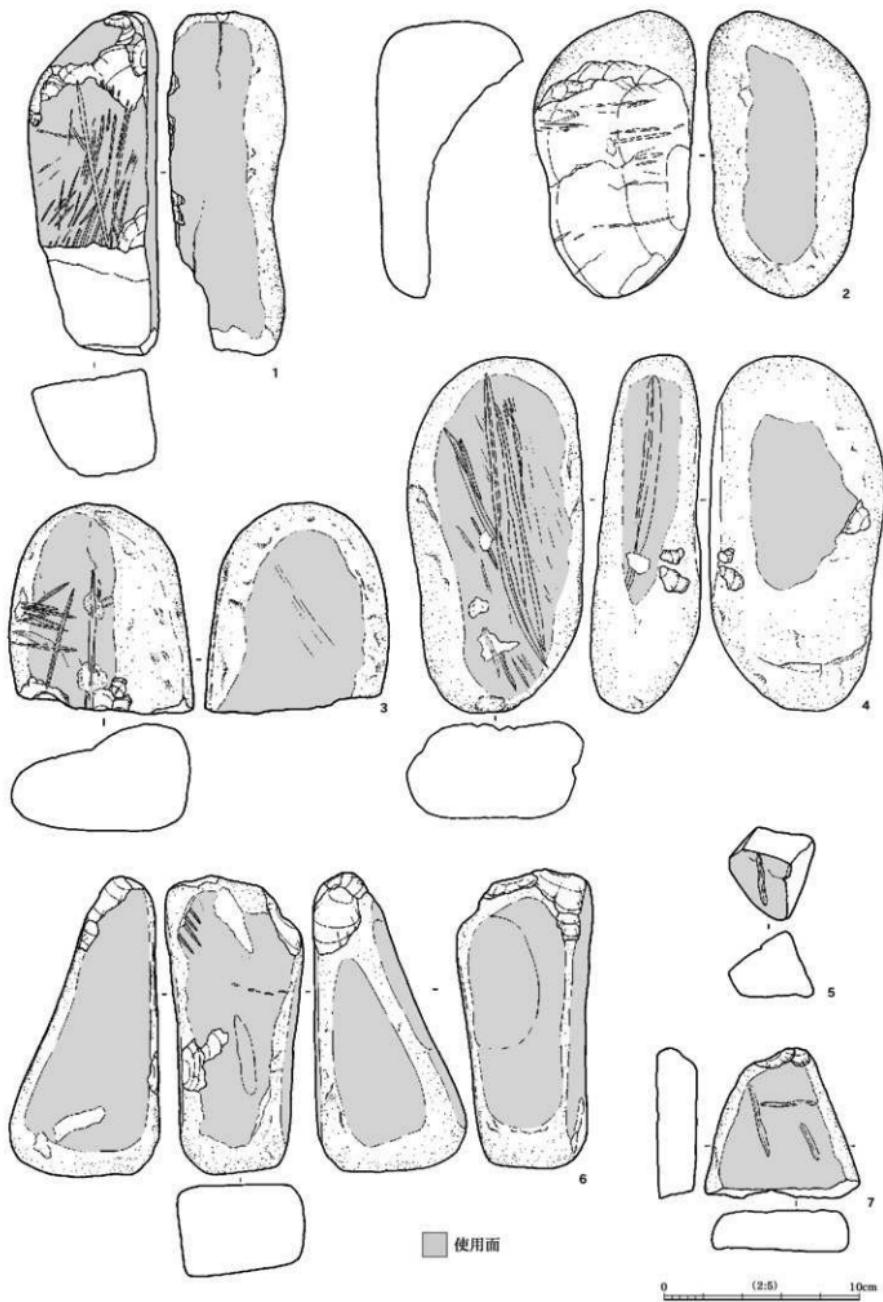


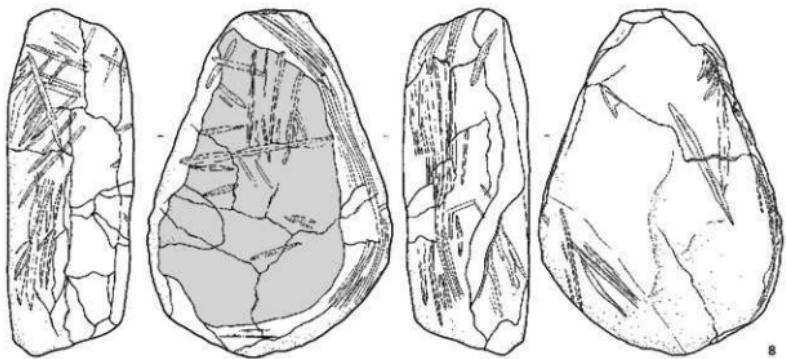
赤影

0

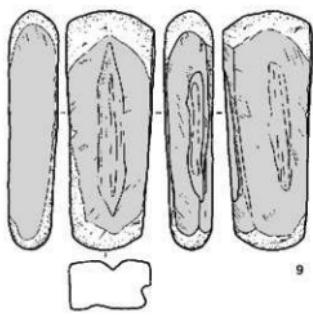
(1:3)

15cm

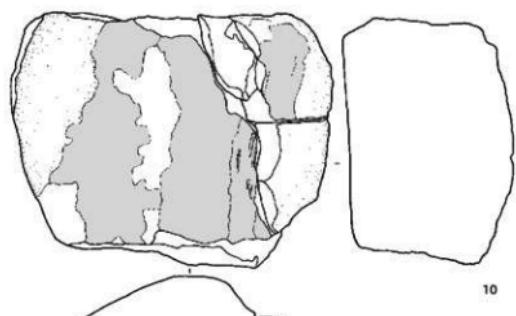




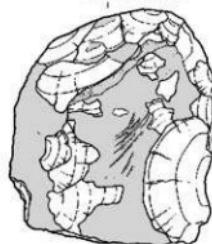
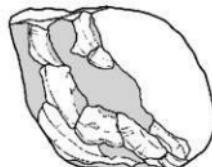
8



9



10



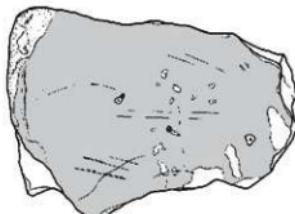
11



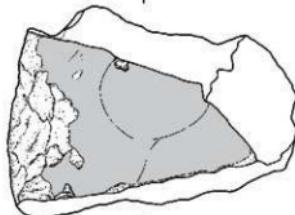
■ 使用面  
 0 (1:5) 20cm (8.10~12)  
 0 (2:5) 10cm (9)



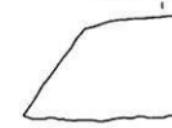
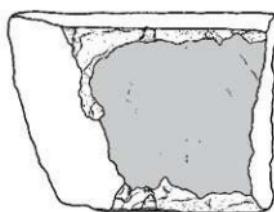
19



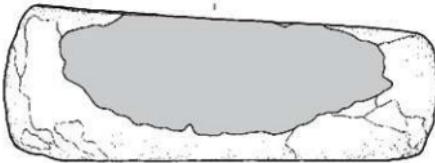
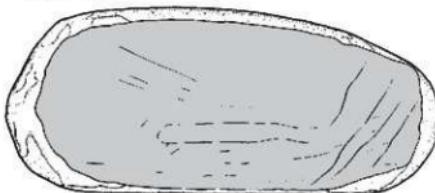
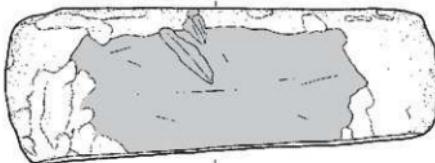
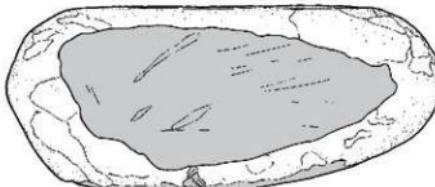
19



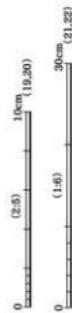
20

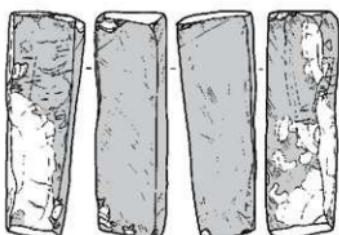
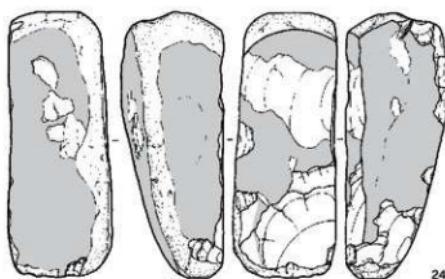
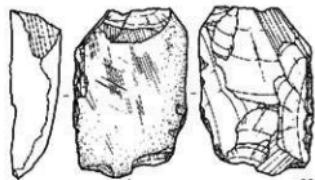


21

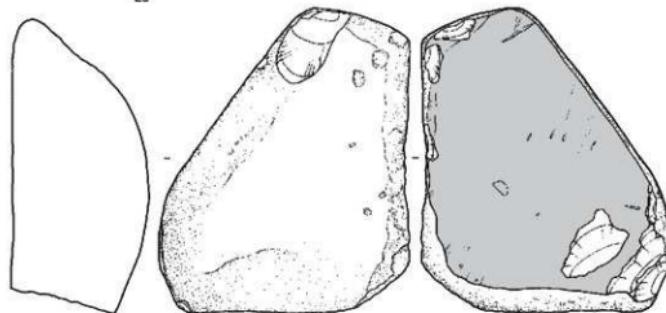


使用面

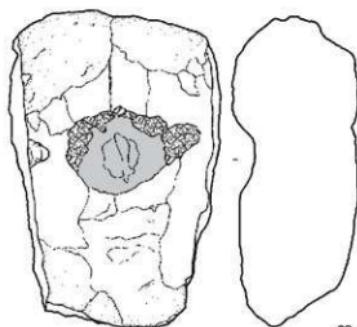




25

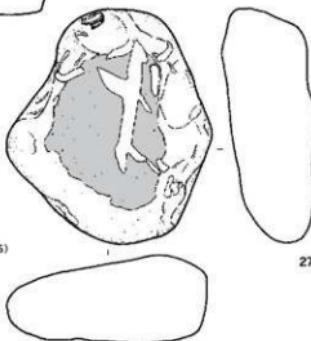
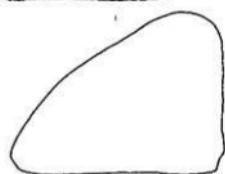


26



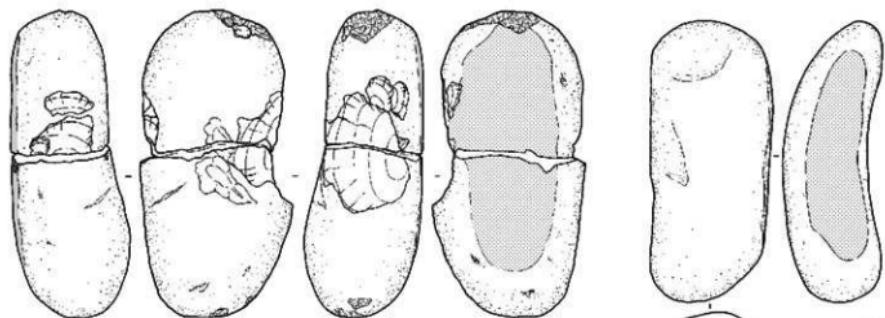
28

■ 使用面  
■ 敲打痕



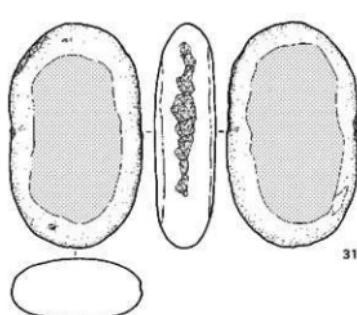
27

0 (1:2) 10cm (23,25)  
0 (2:5) 10cm (24,26)  
0 (1:6) 30cm (27)  
0 (1:5) 20cm (28)



29

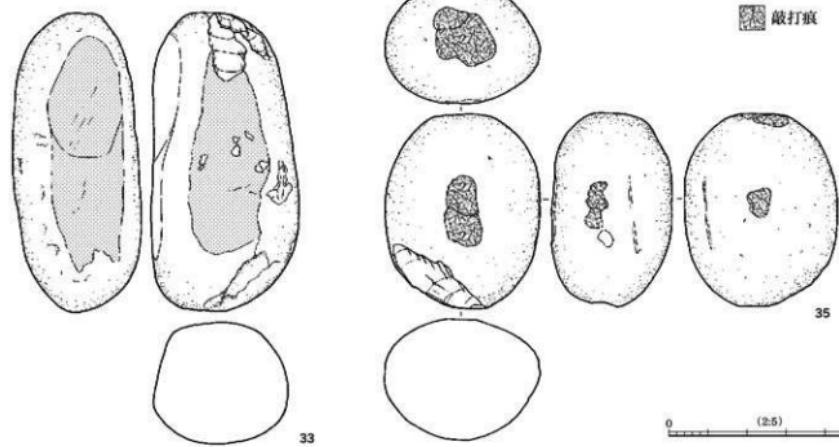
30



31

32

34

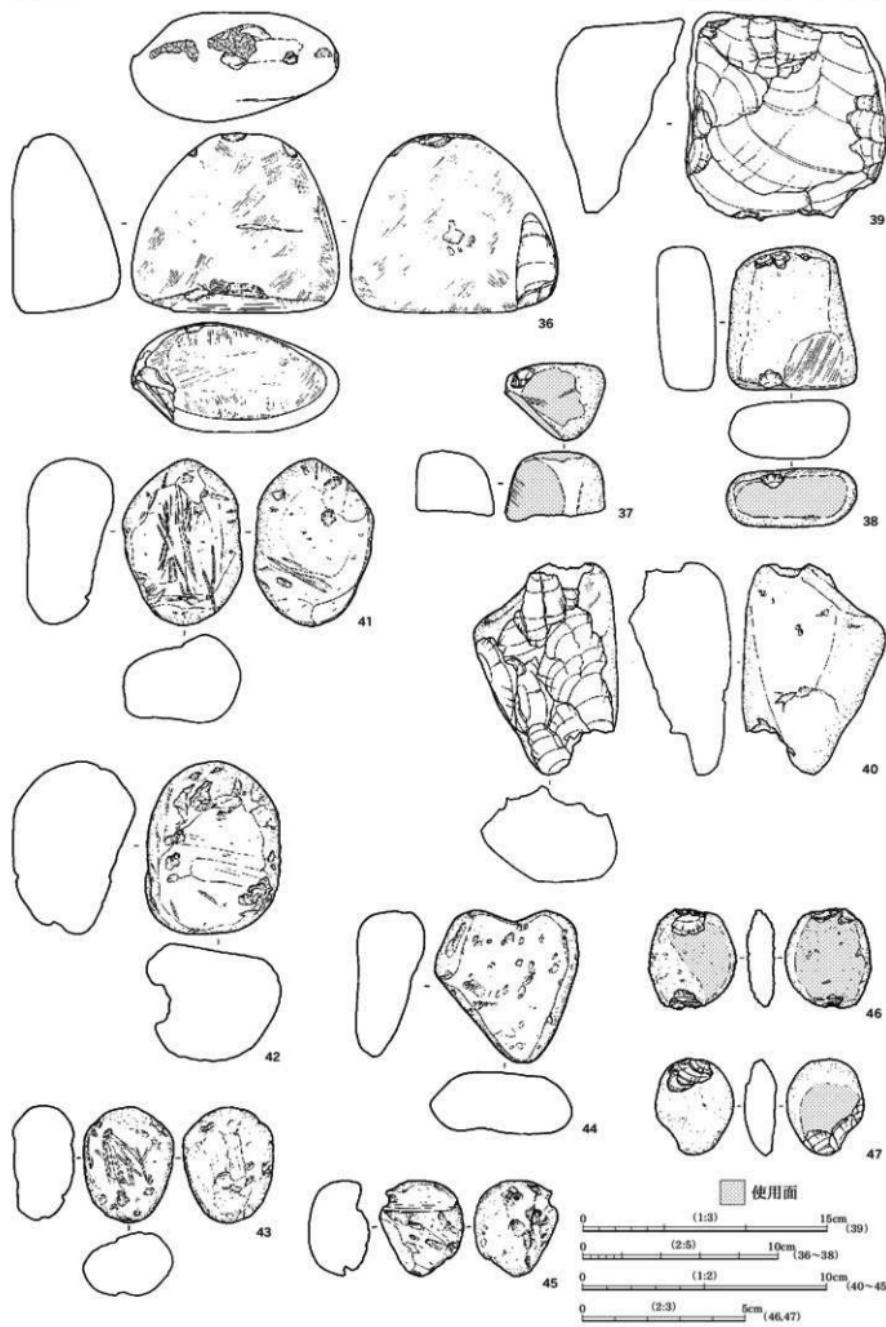


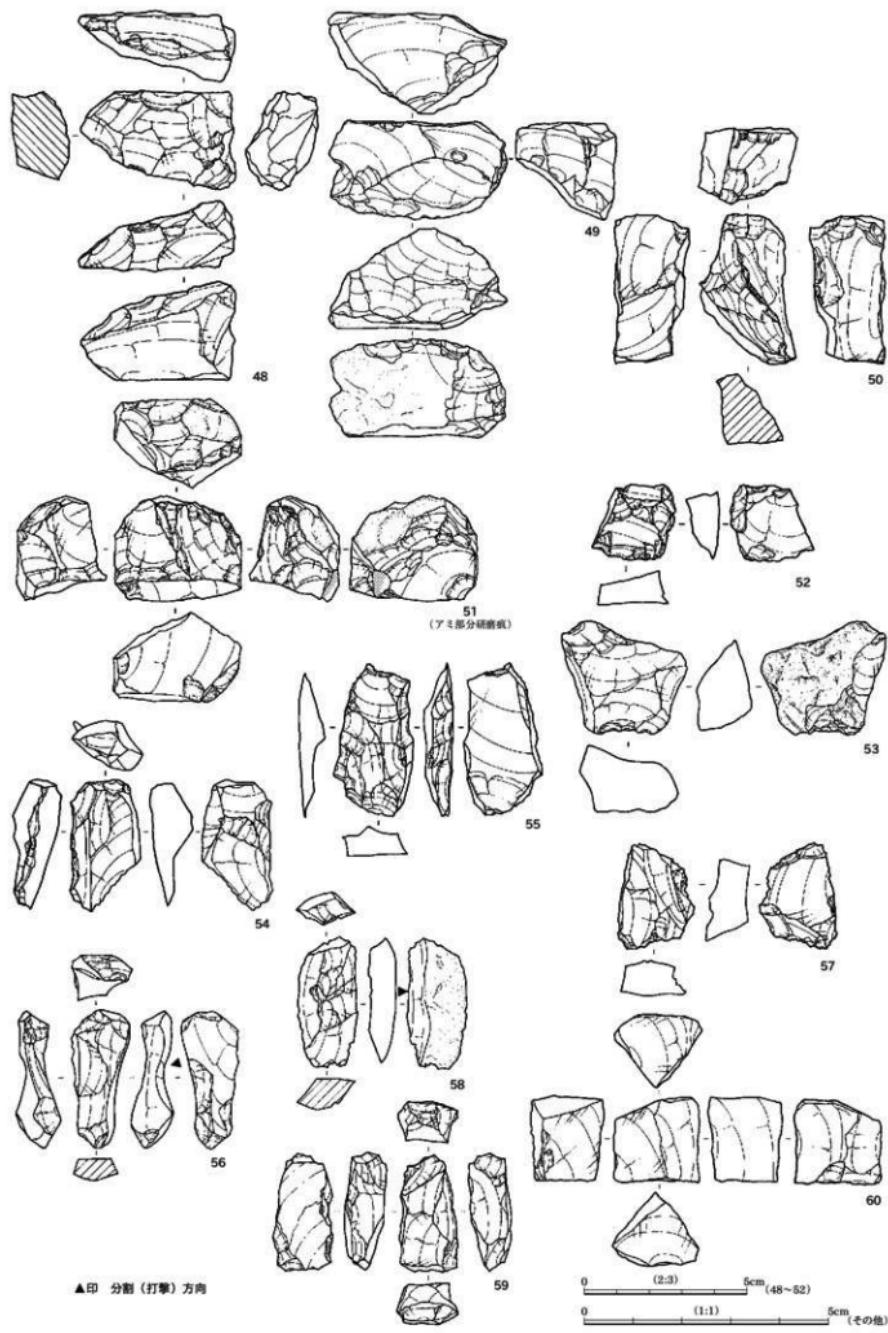
33

35

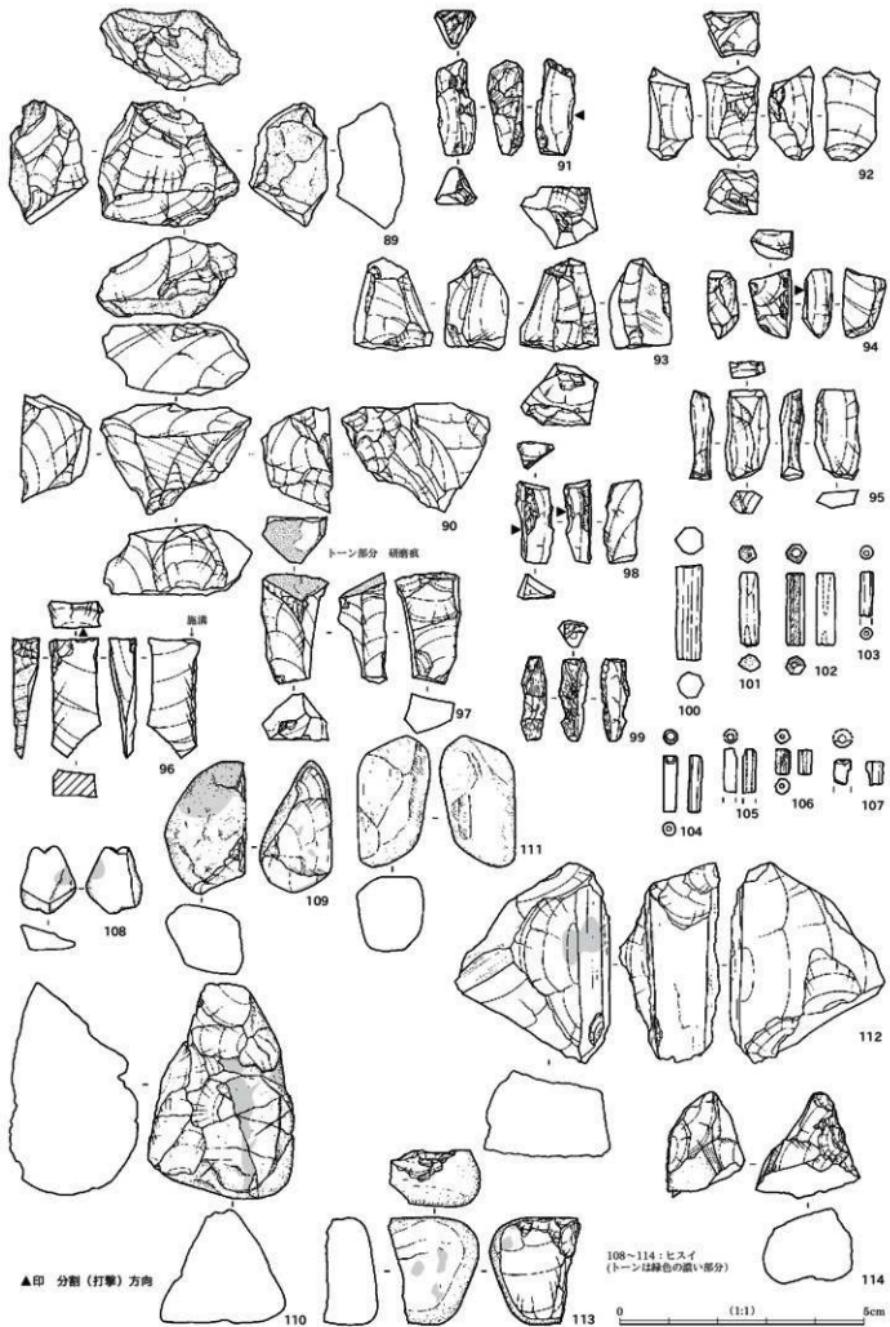
■ 使用面  
■ 敲打痕

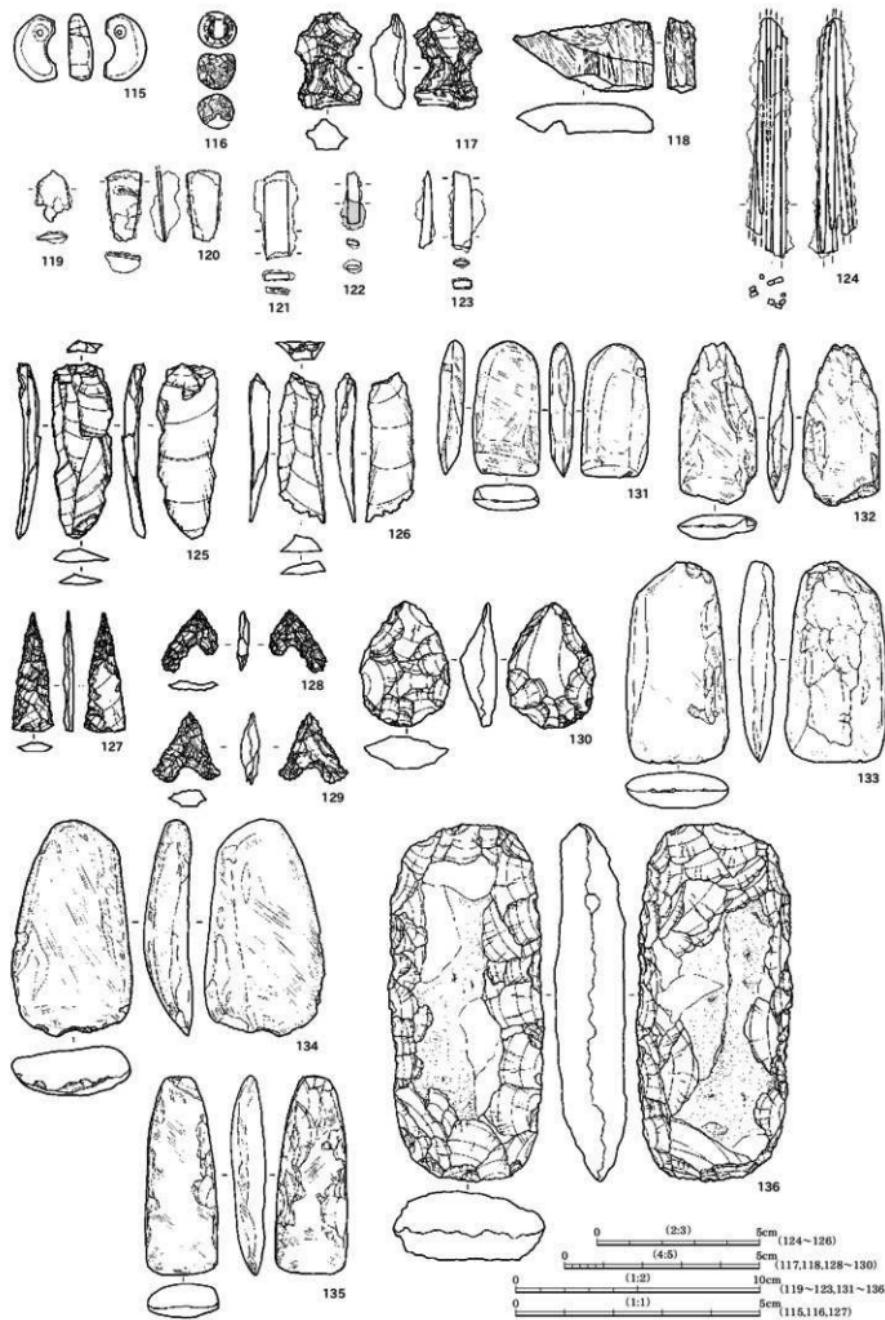
0 (2:5) 10cm

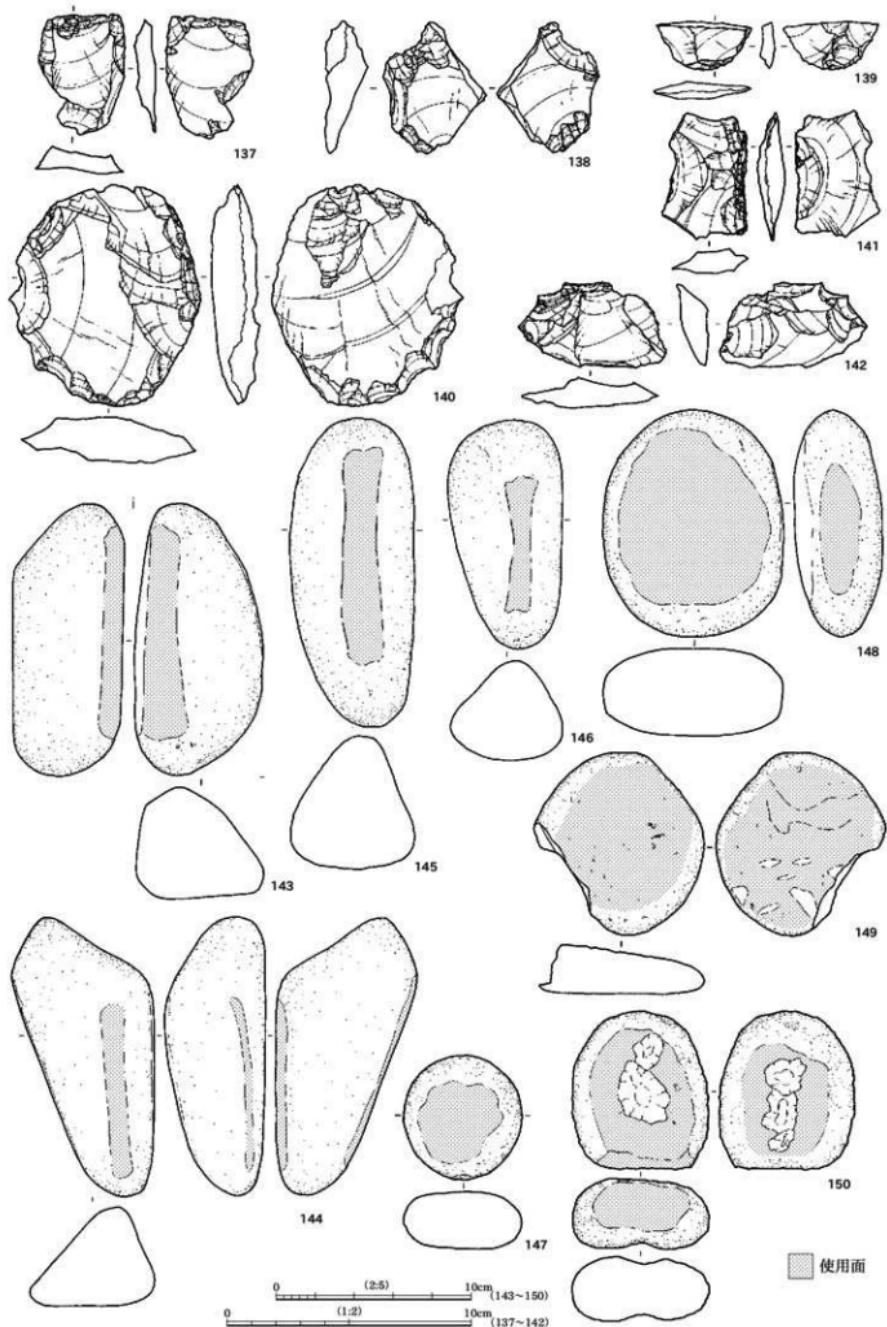


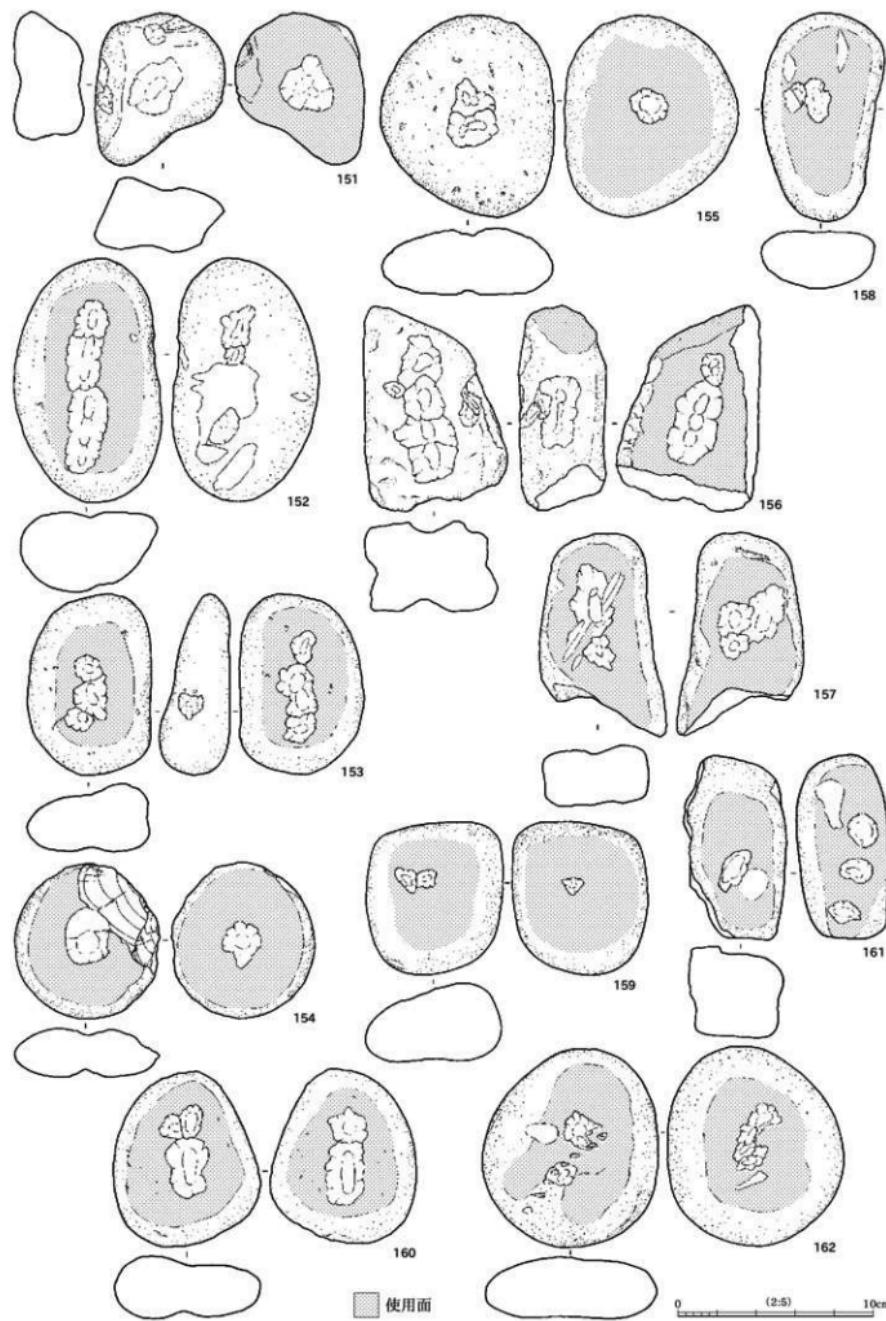


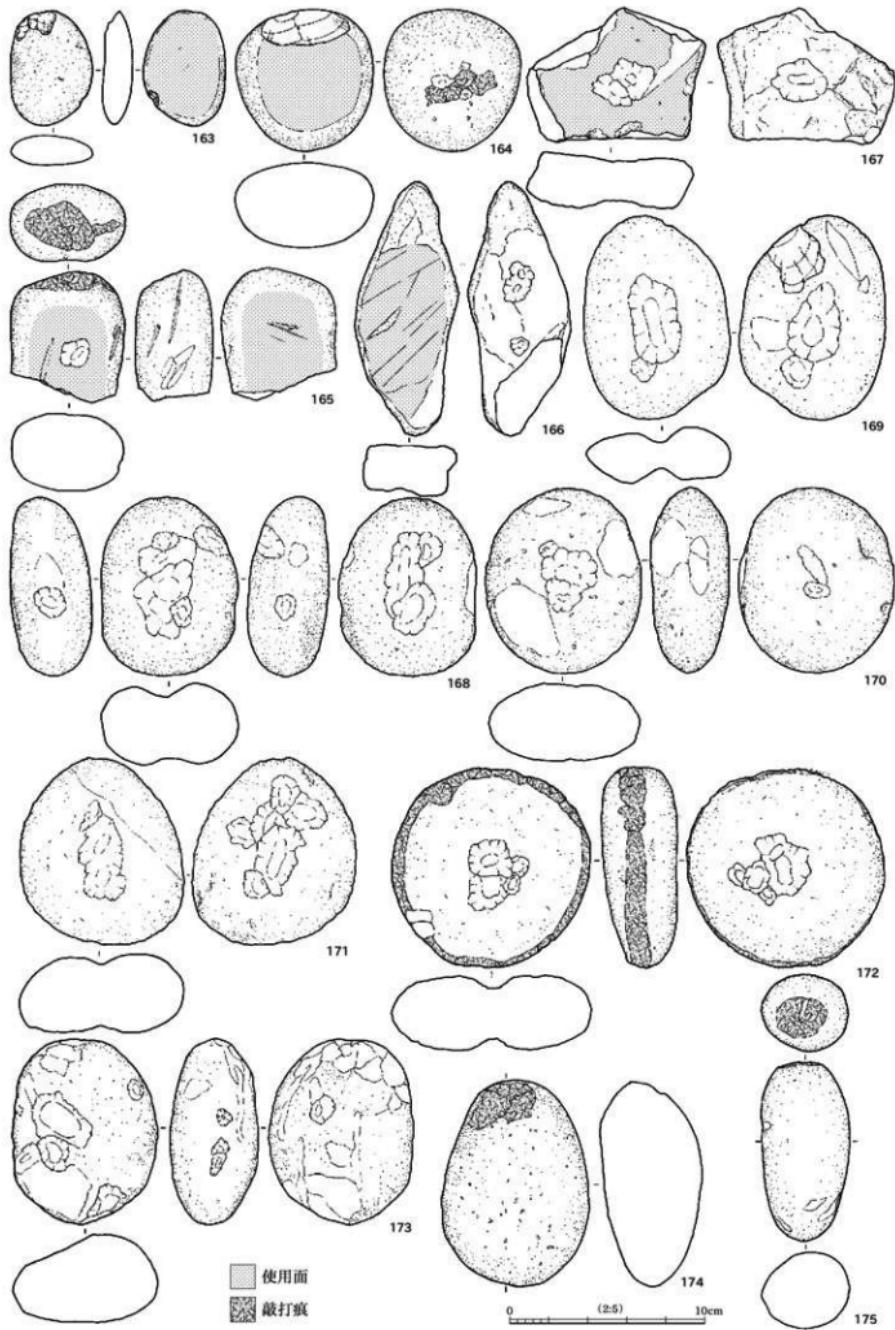


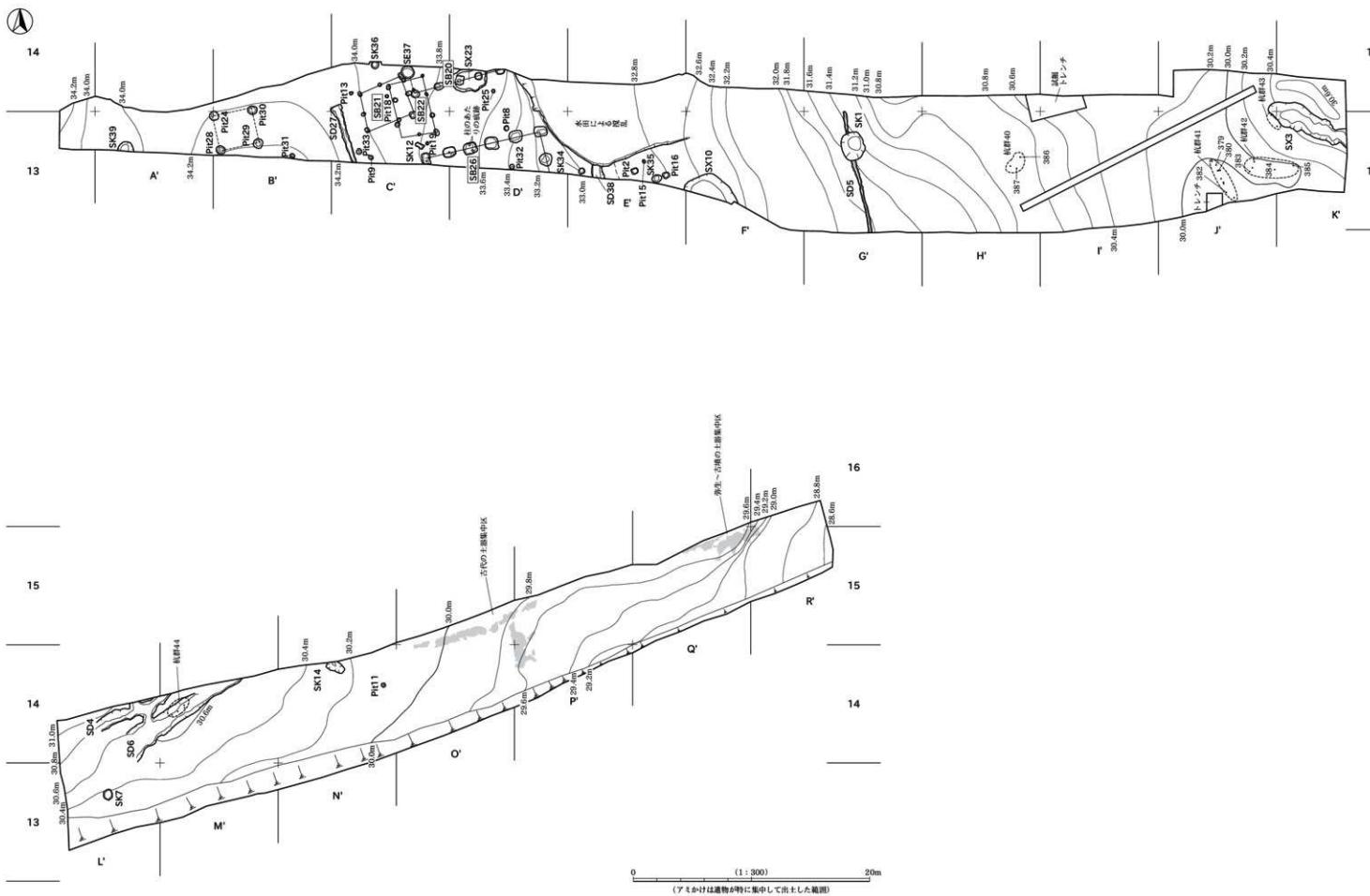


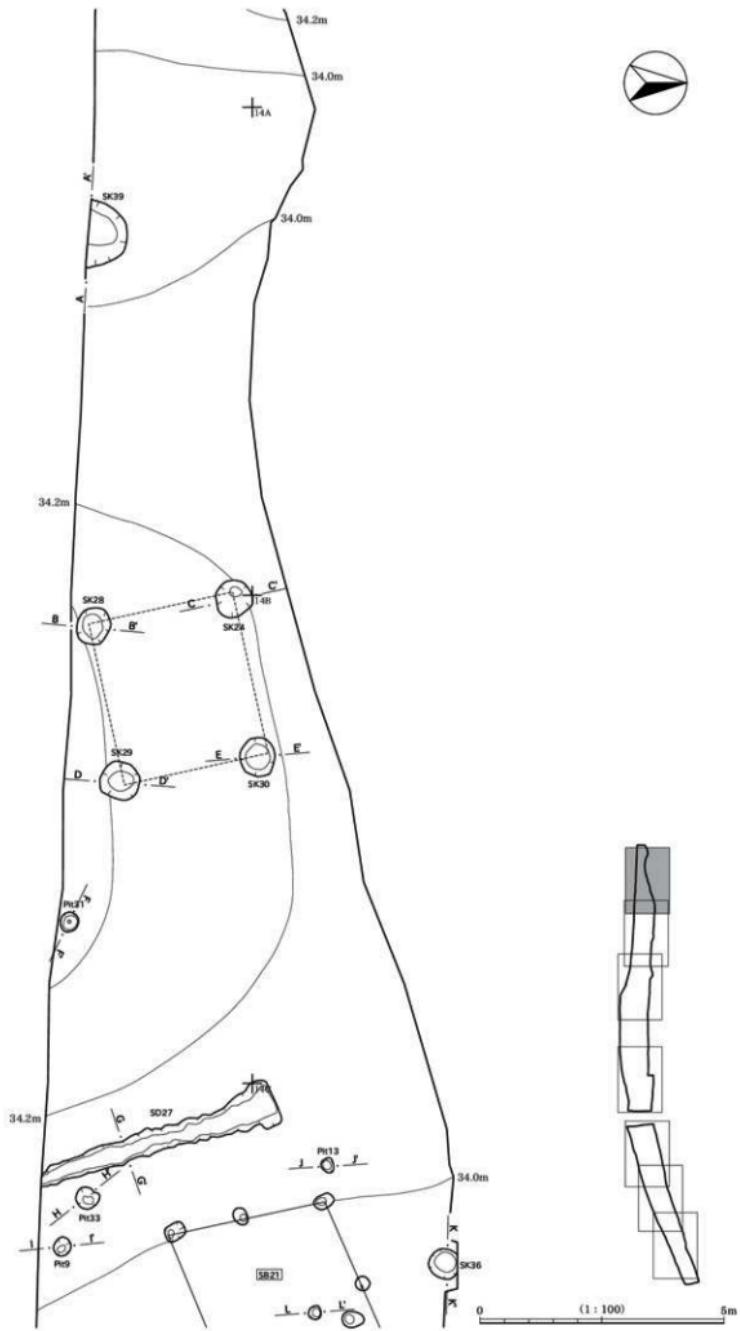


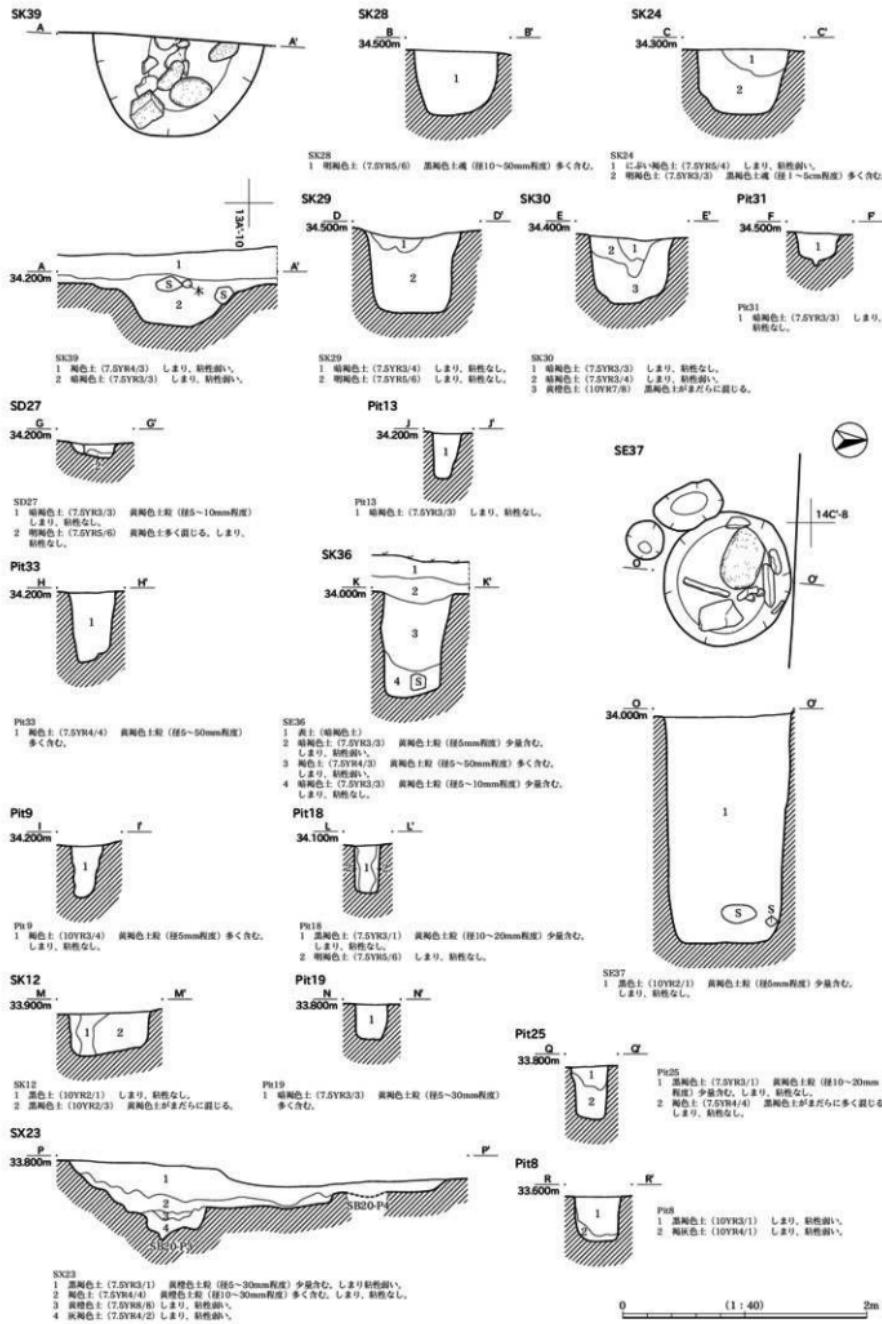


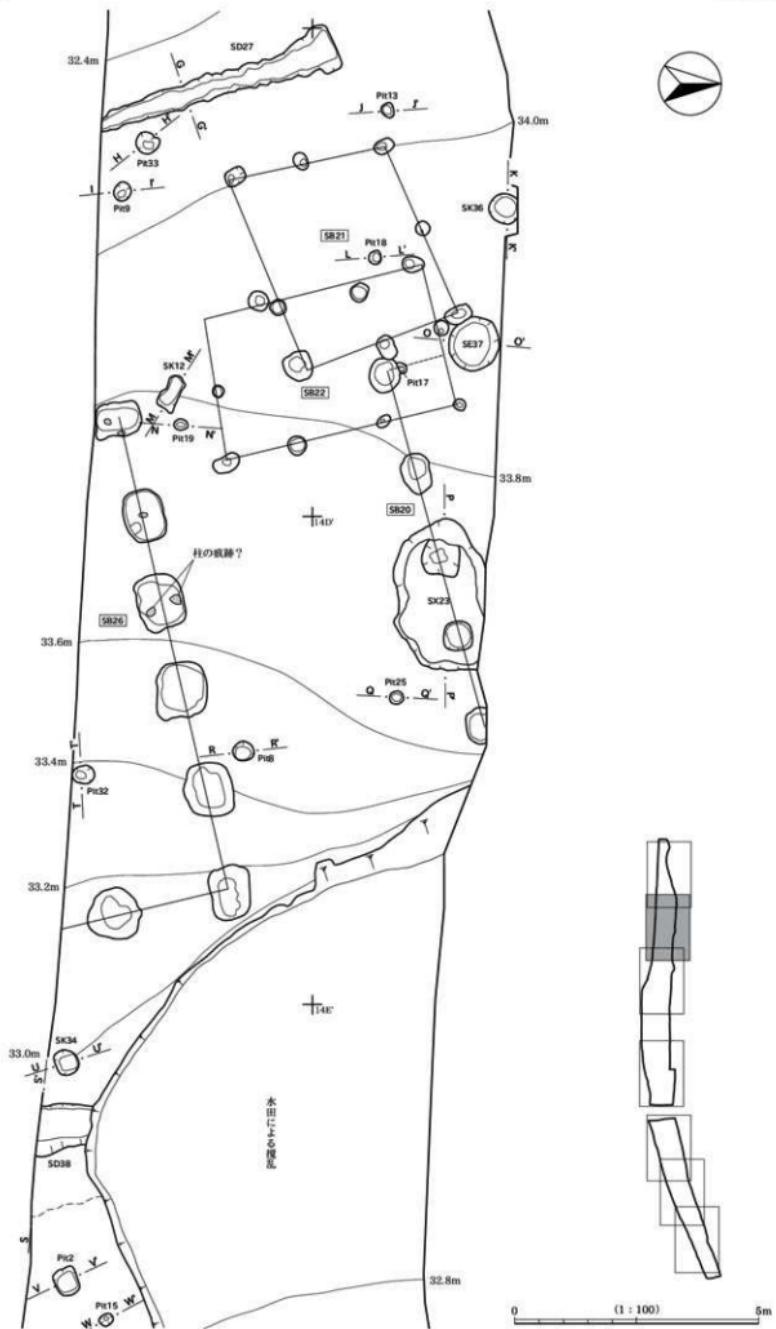




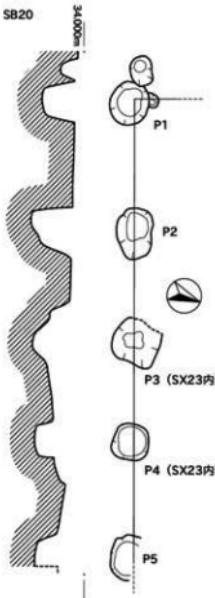




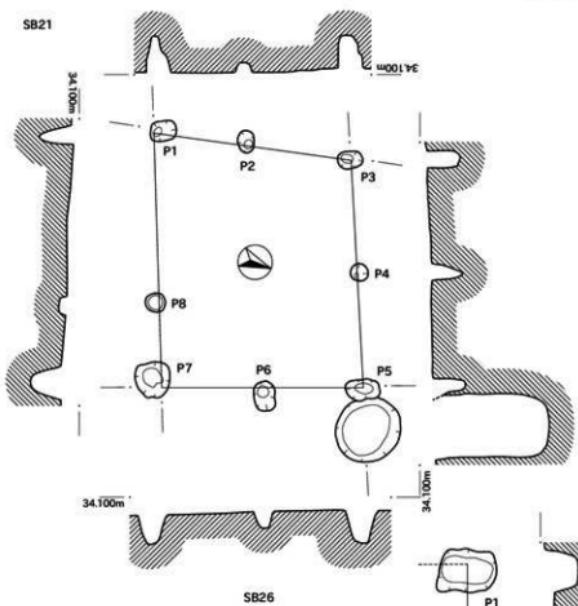




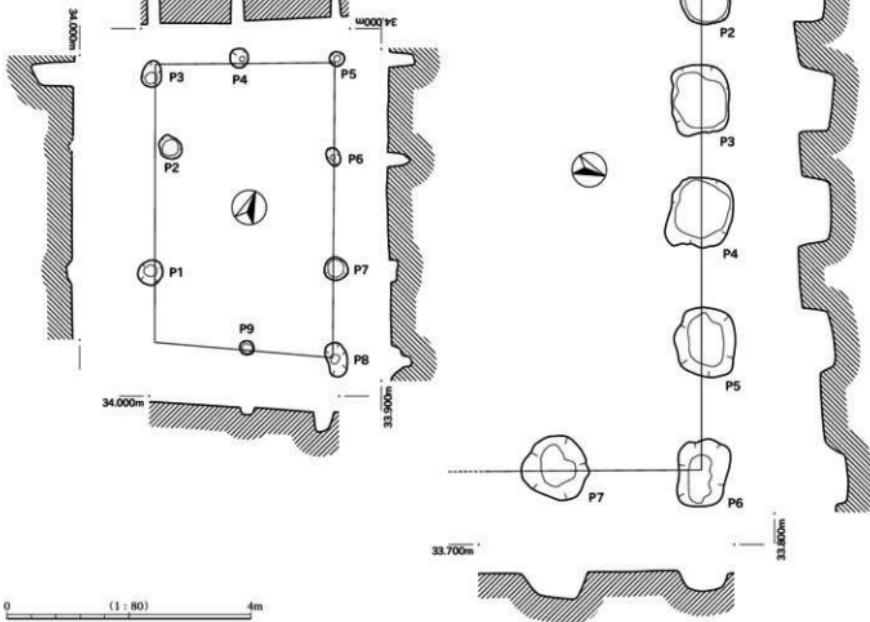
SB20

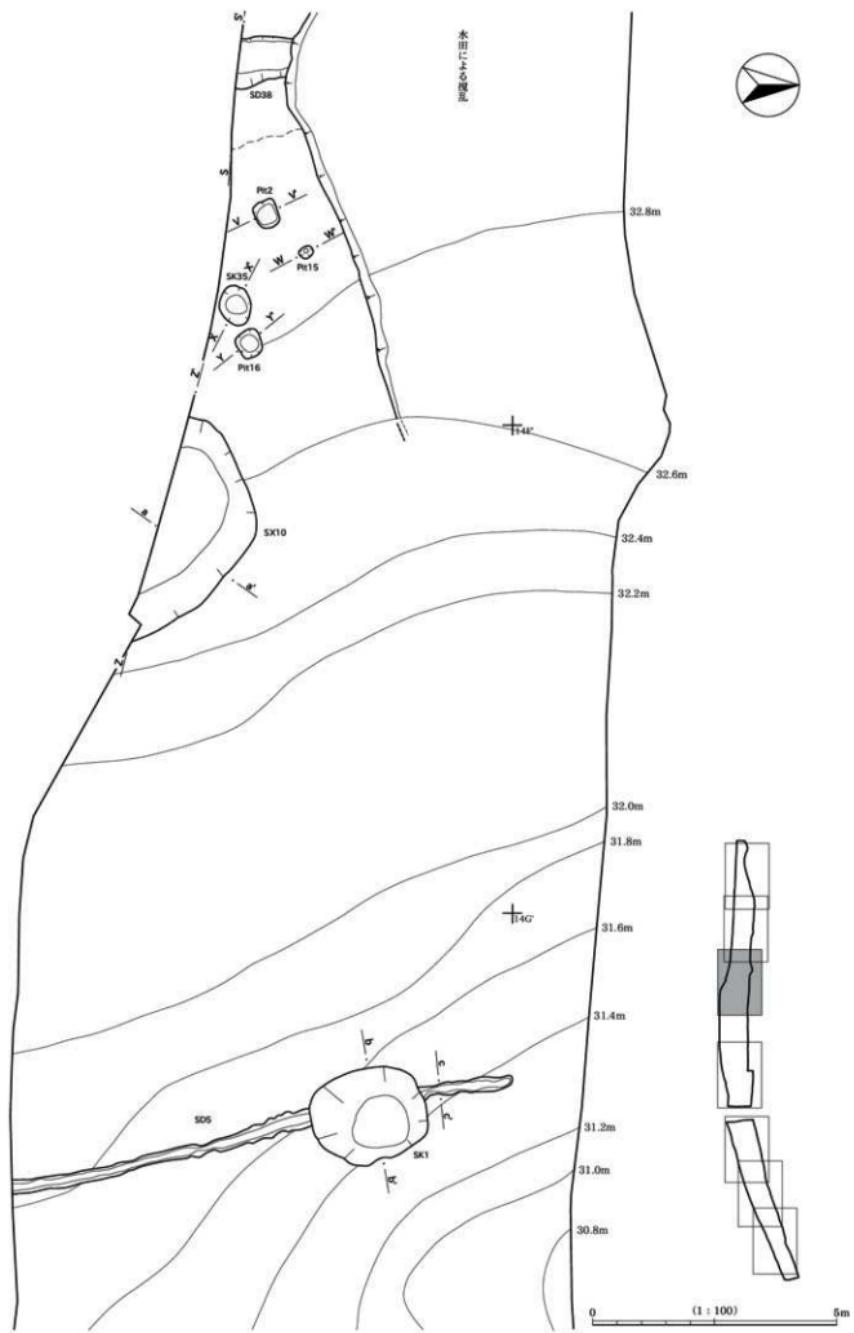


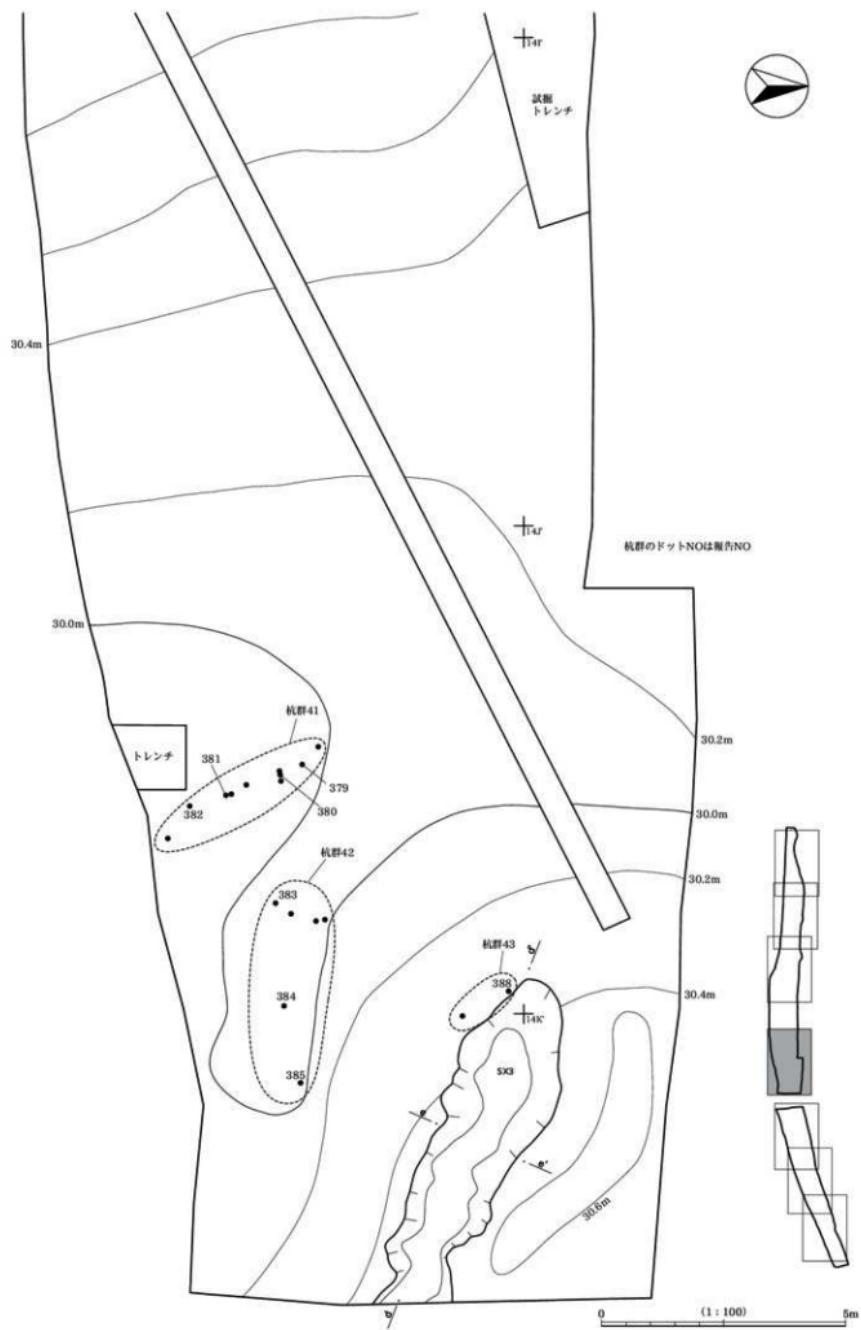
SB21



SB22



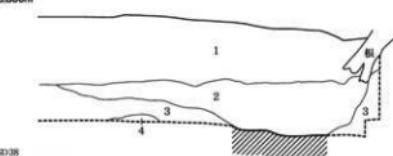




土層断面図 (2)

SK38

33.800m



Pit32

33.500m



SK34

33.100m



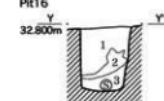
SK35

33.000m



Pit16

32.800m



Pit2

33.000m



Pit15

33.000m



SK34

33.000m

1 黄褐色土 (7.SYR4/3) しまり、粘性高い。

2 棕褐色土 (7.SYR7/6) しまり、粘性高い。

Pit16

32.800m

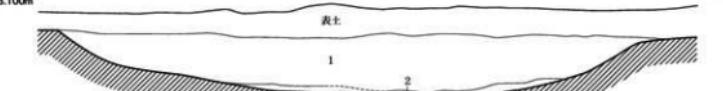
1 黄褐色土 (7.SYR5/2) 黄褐色土上 (径10mm程度)  
多く含む。しまり、粘性高い。

2 棕褐色土 (7.SYR4/3) 黄褐色土がまだらに多く混じる。

3 黑褐色土 (7.SYR5/2) 黄褐色土が少量混じる。  
しまり、粘性高い。

SK10

33.100m



Pit2

33.000m

1 黄褐色土 (7.SYR5/3) 黄褐色土上 (径5~30mm程度)

多く含む。しまり、粘性高い。

Pit15

33.000m

1 黄褐色土 (7.SYR4/3) しまり、粘性高い。

2 にじみ色土 (7.SYR5/4) しまり、粘性高い。

SK10

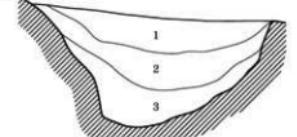
32.700m



SK10  
1 黄褐色土 (7.SYR3/2) しまり、粘性高い。  
2 黄褐色土 (7.SYR5/3) 黄褐色土上 (径10~30mm程度) 多く含む。

SK1

31.700m



SK1

31.700m

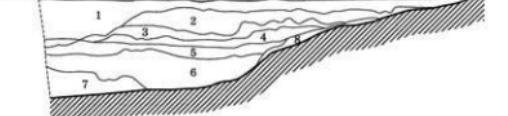
1 棕褐色土 (SYR6.7/1) しまりやや弱く、粘性高い。

2 黄褐色土 (7.SYR6/1) しまり強く、粘性高い。

3 黄褐色土 (2.SY3/1) 厚 (径3~5cm程度) 少量含む。多く含む。  
しまり弱く、粘性高い。

SX3

30.200m



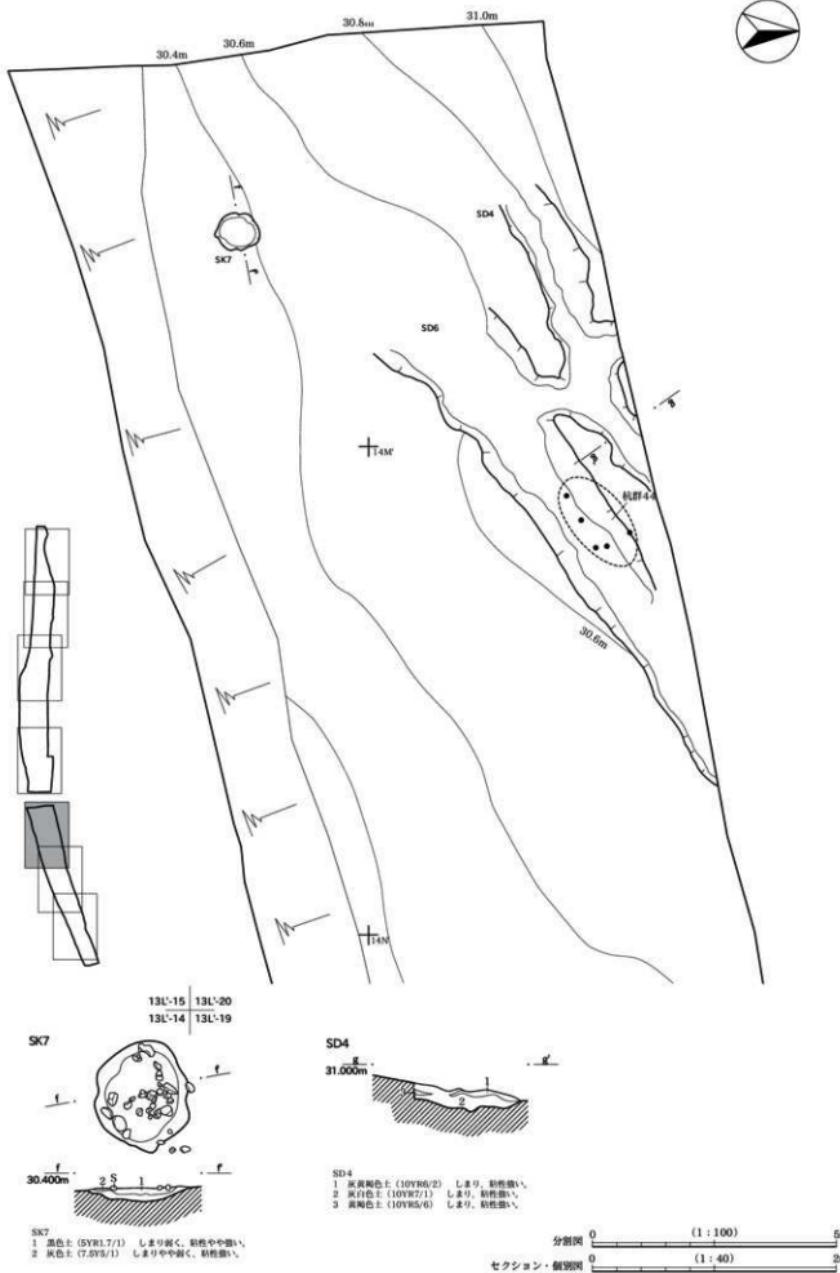
SX3  
1 オーダーブルト土 (SY3/2) しまりやや強く、粘性高い。  
2 オーダーブルト土 (SY6/4) しまりやや弱く、粘性高い。  
3 オーダーブルト土 (SY6/2) 砂多く含む。しまり、粘性高い。  
4 黄褐色土 (SY4/1) しまり、粘性やや高い。  
5 黄褐色土 (SY6/1) 砂多く含む。しまり、粘性なし。  
6 黄褐色土 (SY6/1) ショットランジ。シオランジ。しまり、粘性やや高い。  
7 黄褐色土 (SY9/2) 砂強烈。砂 (径10~10mm程度) 多く含む。  
しまり、粘性なし。  
8 黄褐色土 (SY7/1) しまり弱く、粘性高い。

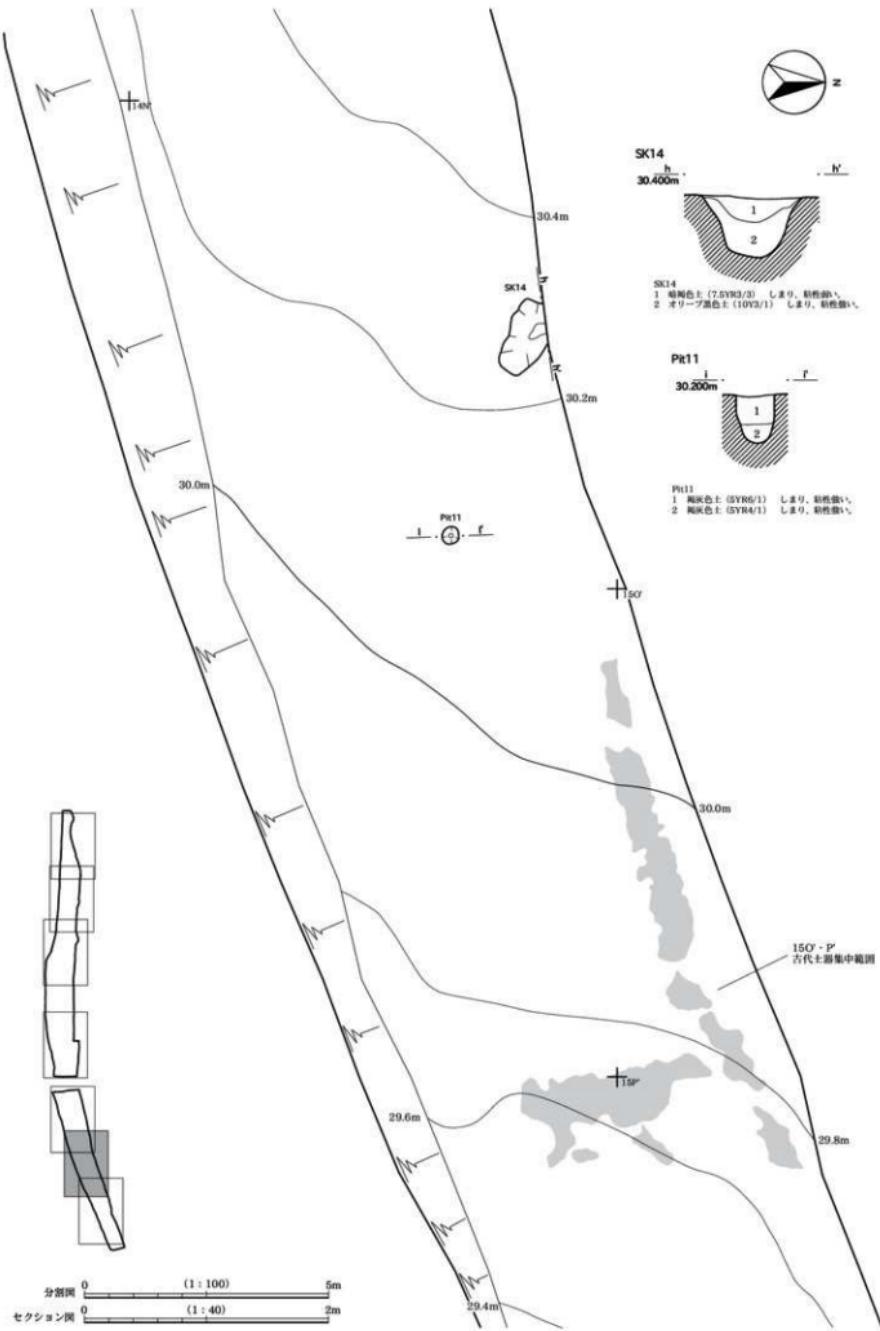
SX3

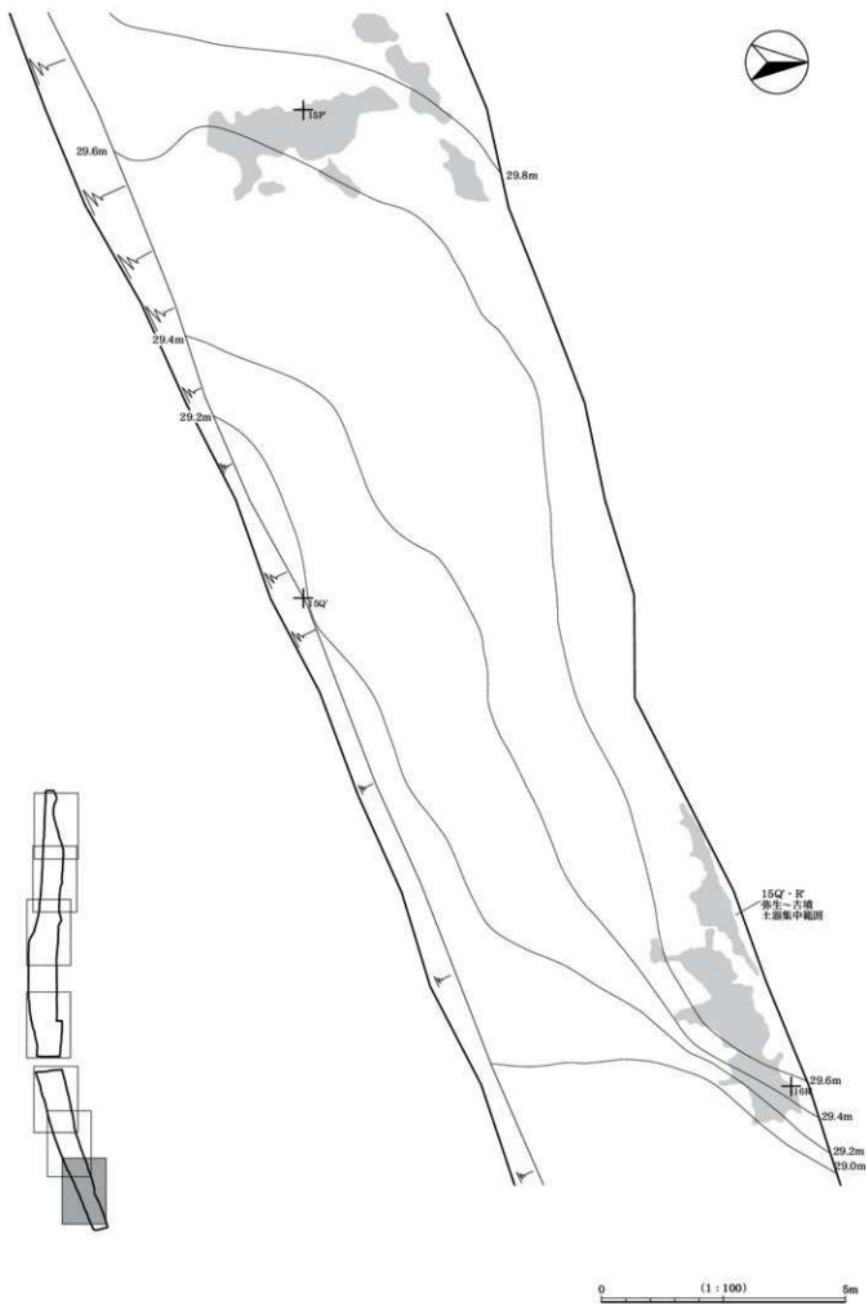
30.500m

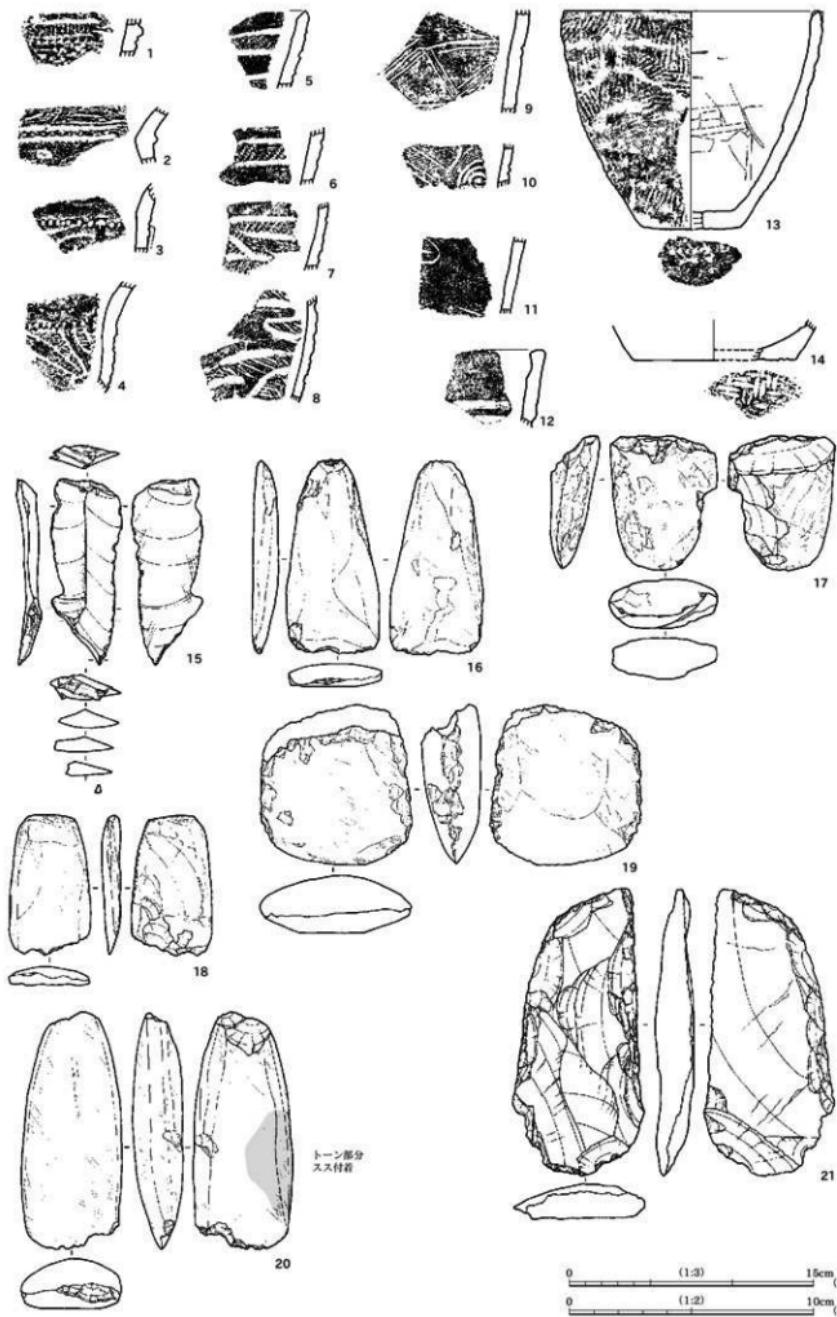


0 (I : 40) 2m

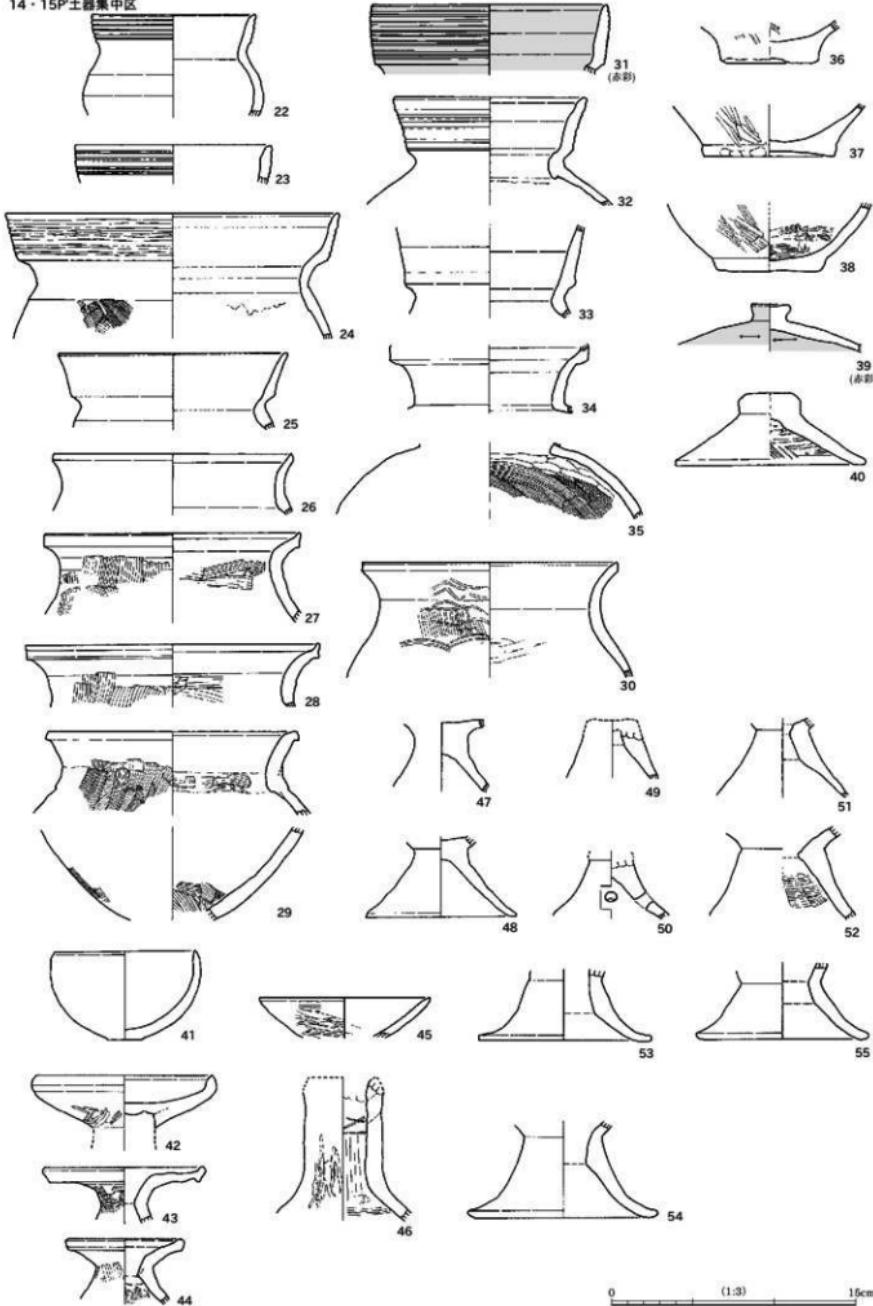




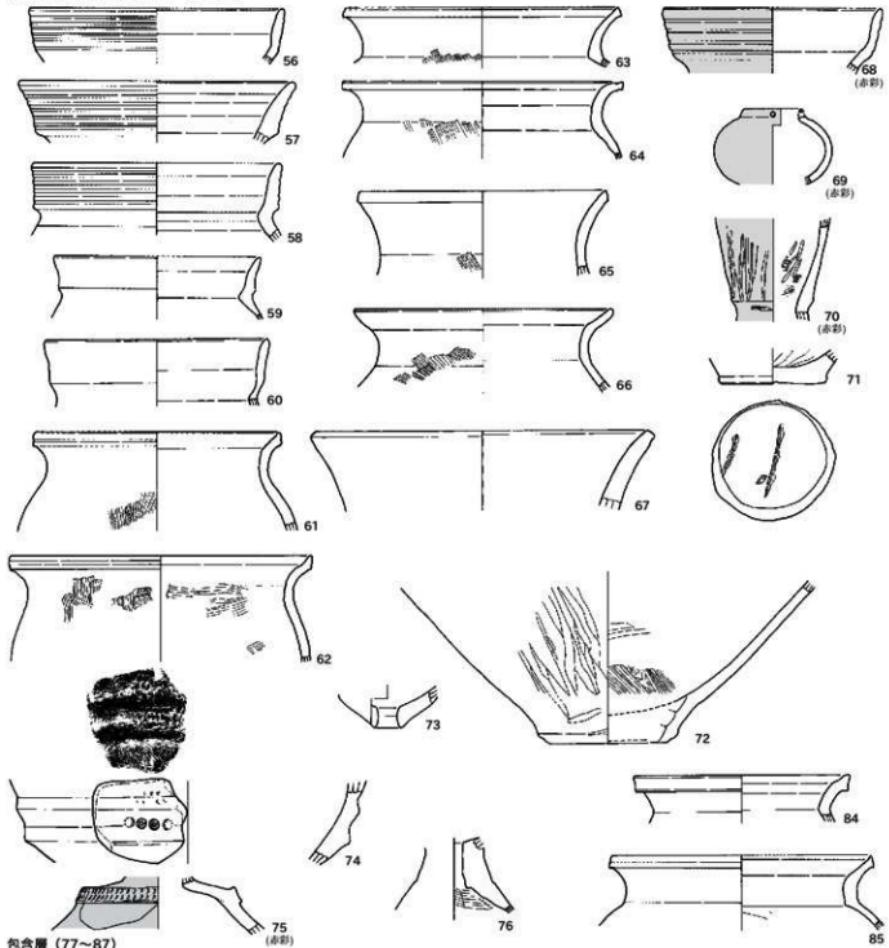




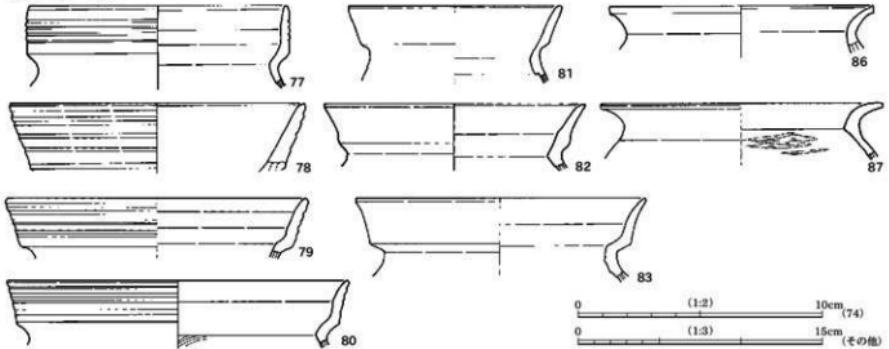
## 14・15P'土器集中区



## 15Q'-25, 15R'-1土器集中区 (56~76)

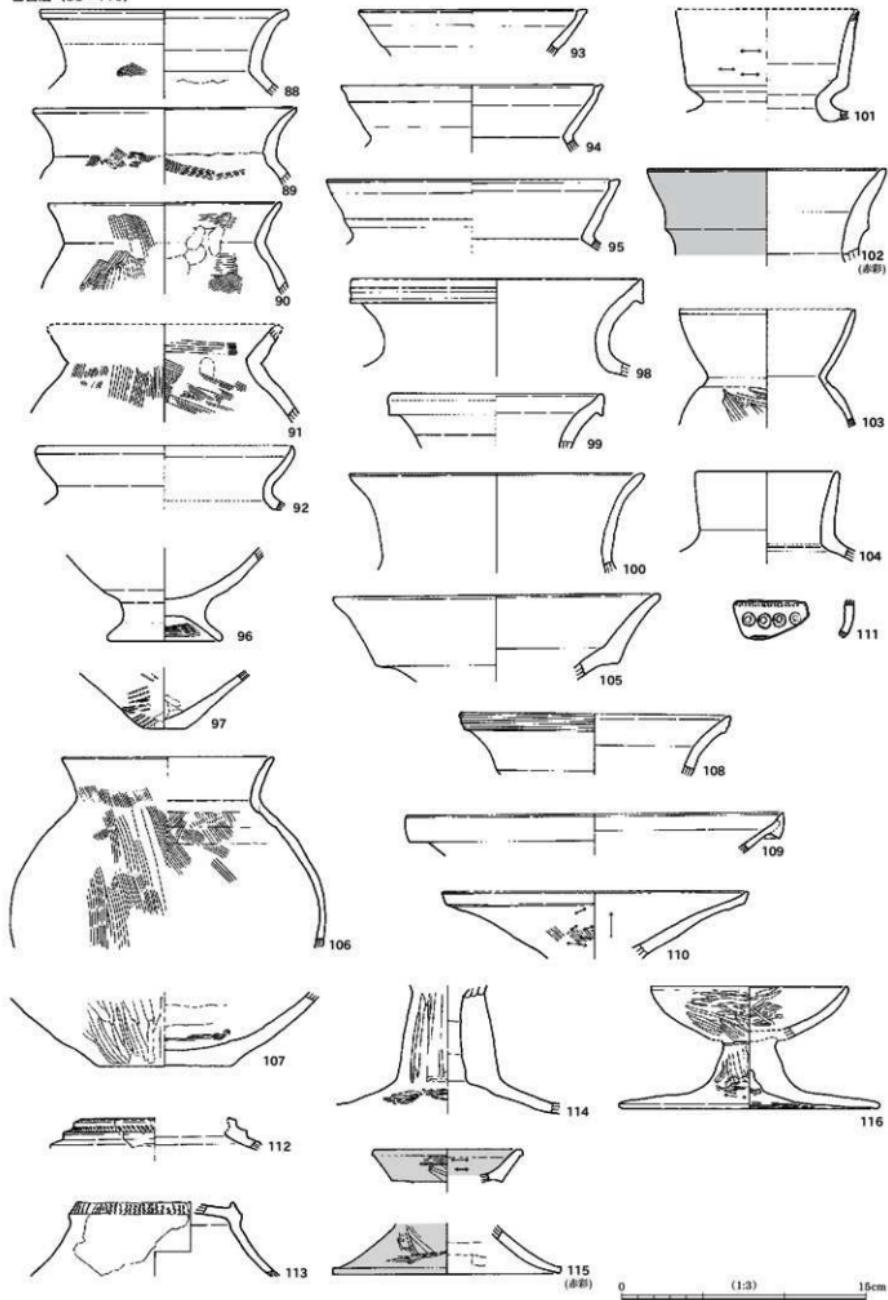


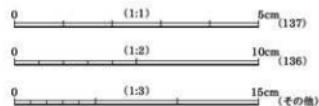
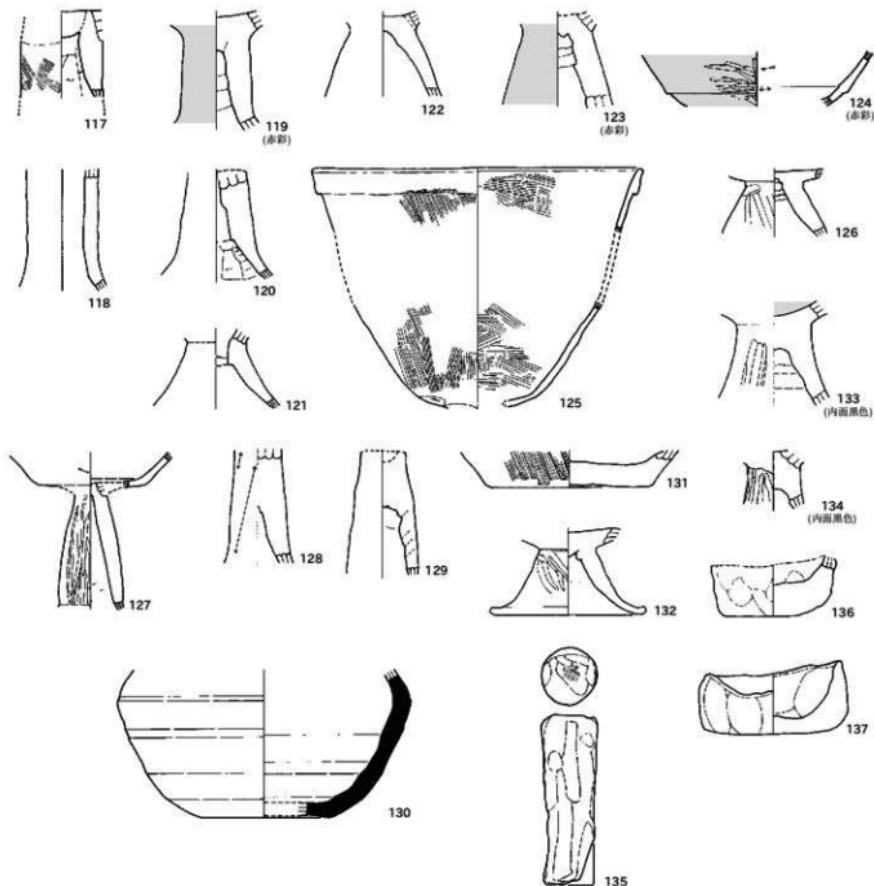
## 包含層 (77~87)



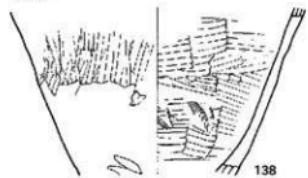
0 (1:2) 10cm (74)  
0 (1:3) 15cm (その他)

## 包含層 (88～116)





SK29



138

SK37



139

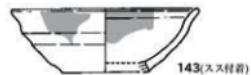
SK23



141



142



143(スス付器)



144

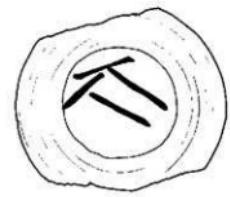
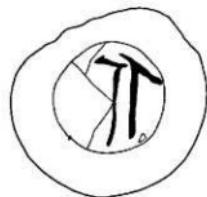
SK35



145



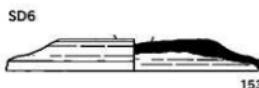
146



SX3



148



153



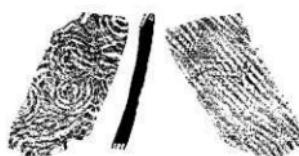
158



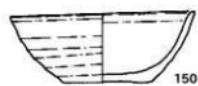
149



154



159



150



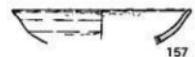
155



160



151



157



161

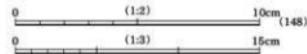
SD5



152



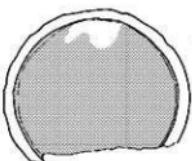
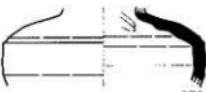
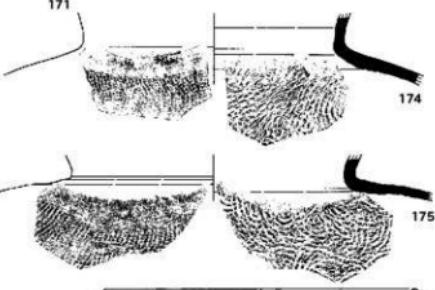
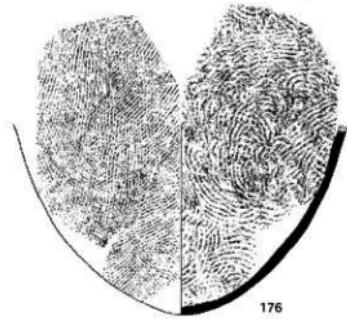
161



SD4(1)



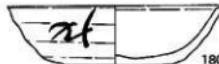
166

トーン部分  
墨痕あり

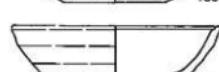
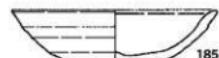
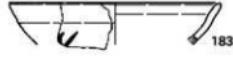
176



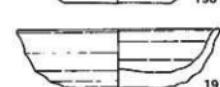
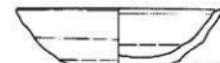
タール状付着物



スヌ状付着物

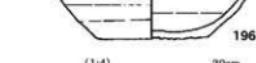
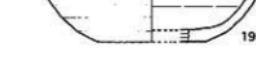
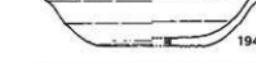


186



191

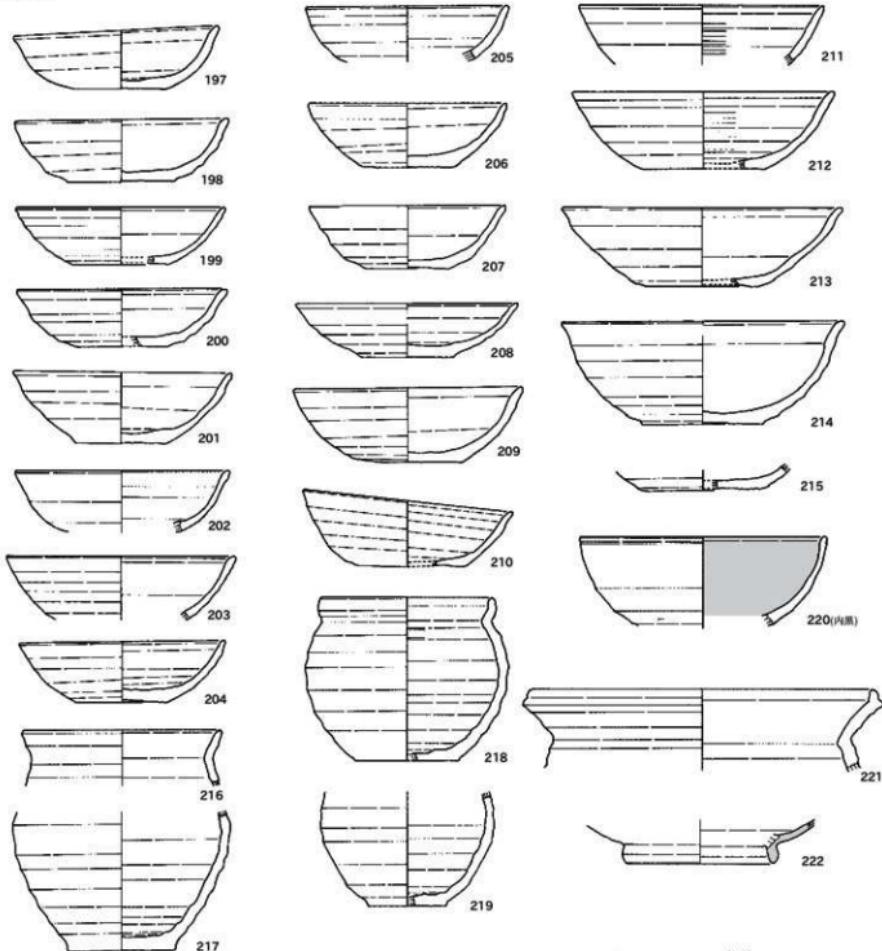
0 (1:4) 20cm (174~176)  
0 (1:3) 15cm (その他)



196

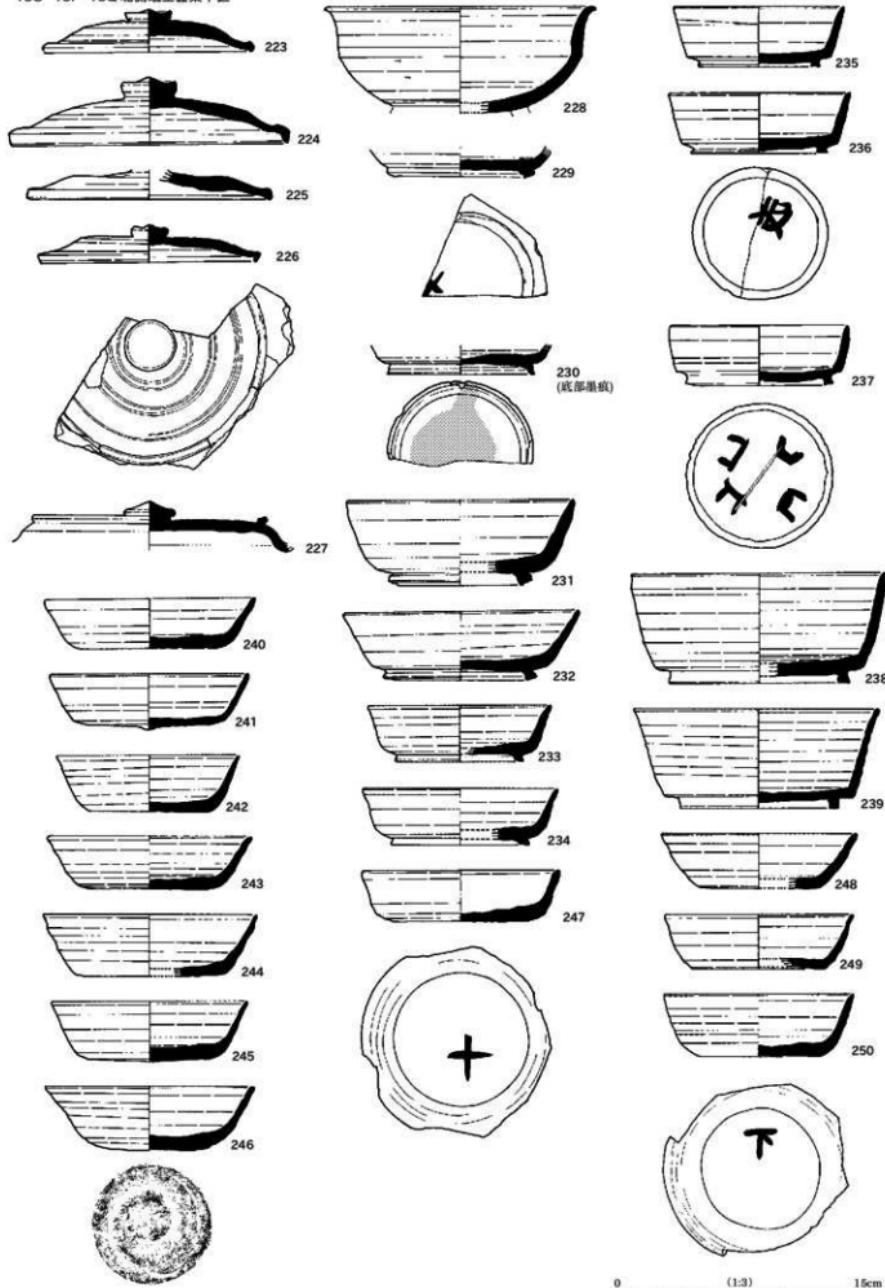
(その他)

SD4(2)



0 (1:3) 15cm

15Q・15P・15Q'北側出土器集中区





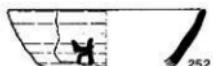
251



255



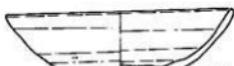
258



252



256



259



253



257



260



254



包含層 (261~318)



261



266



273



262



267



274



263



268



275



264



269



276



270



271



277



278



272



284



279



281



285



280



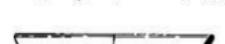
282



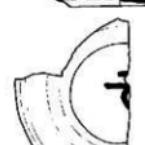
286



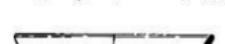
283



285



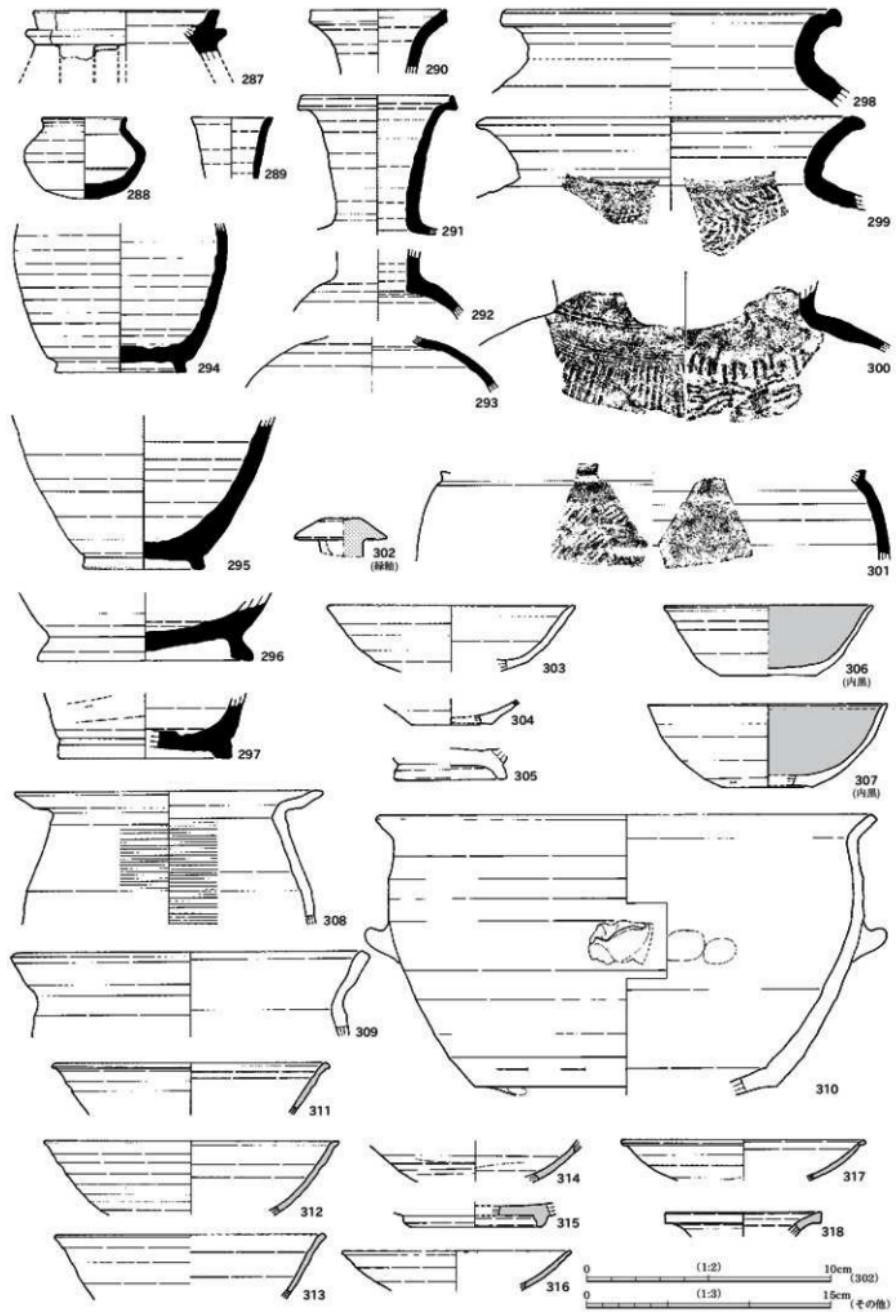
287

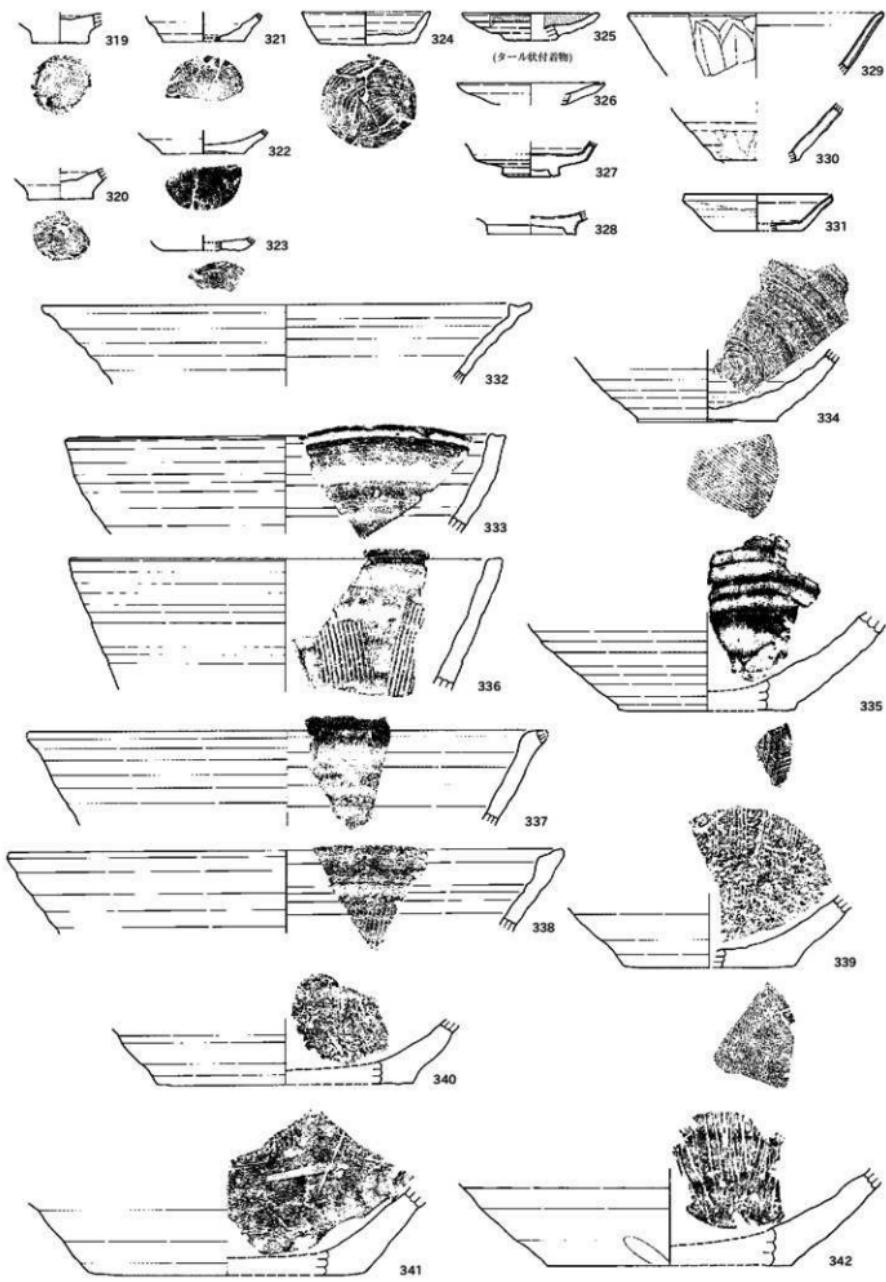


286

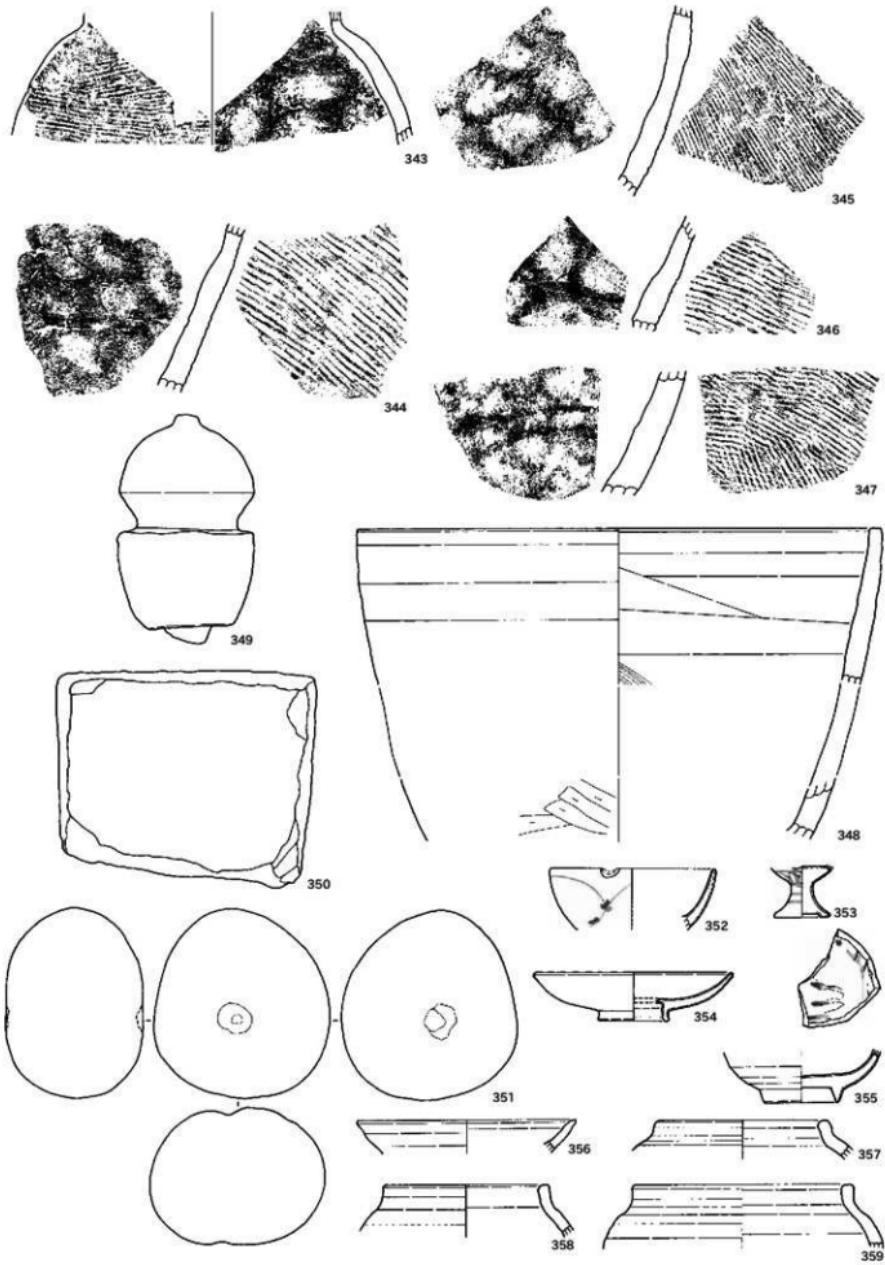


0 (1:3) 15cm

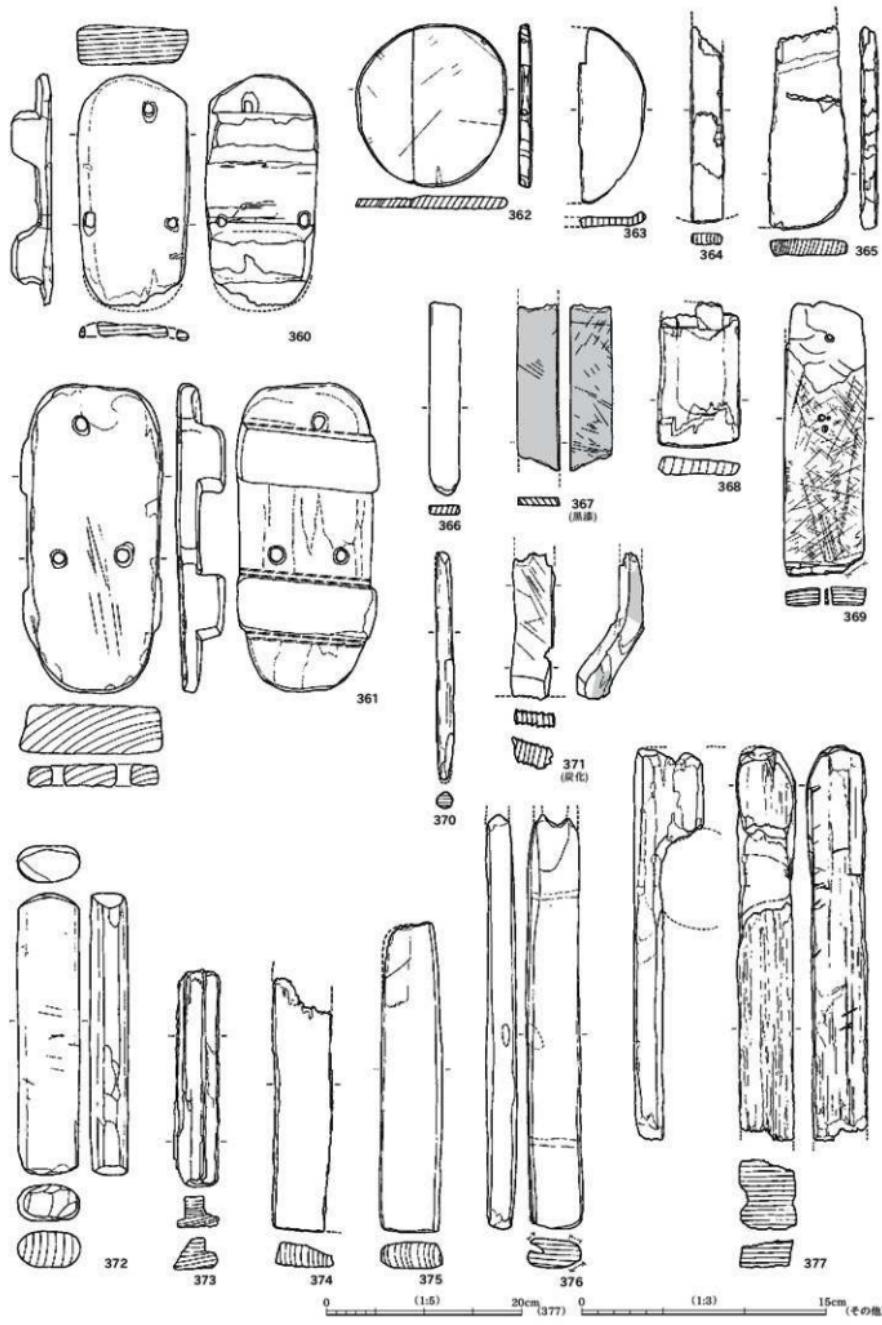


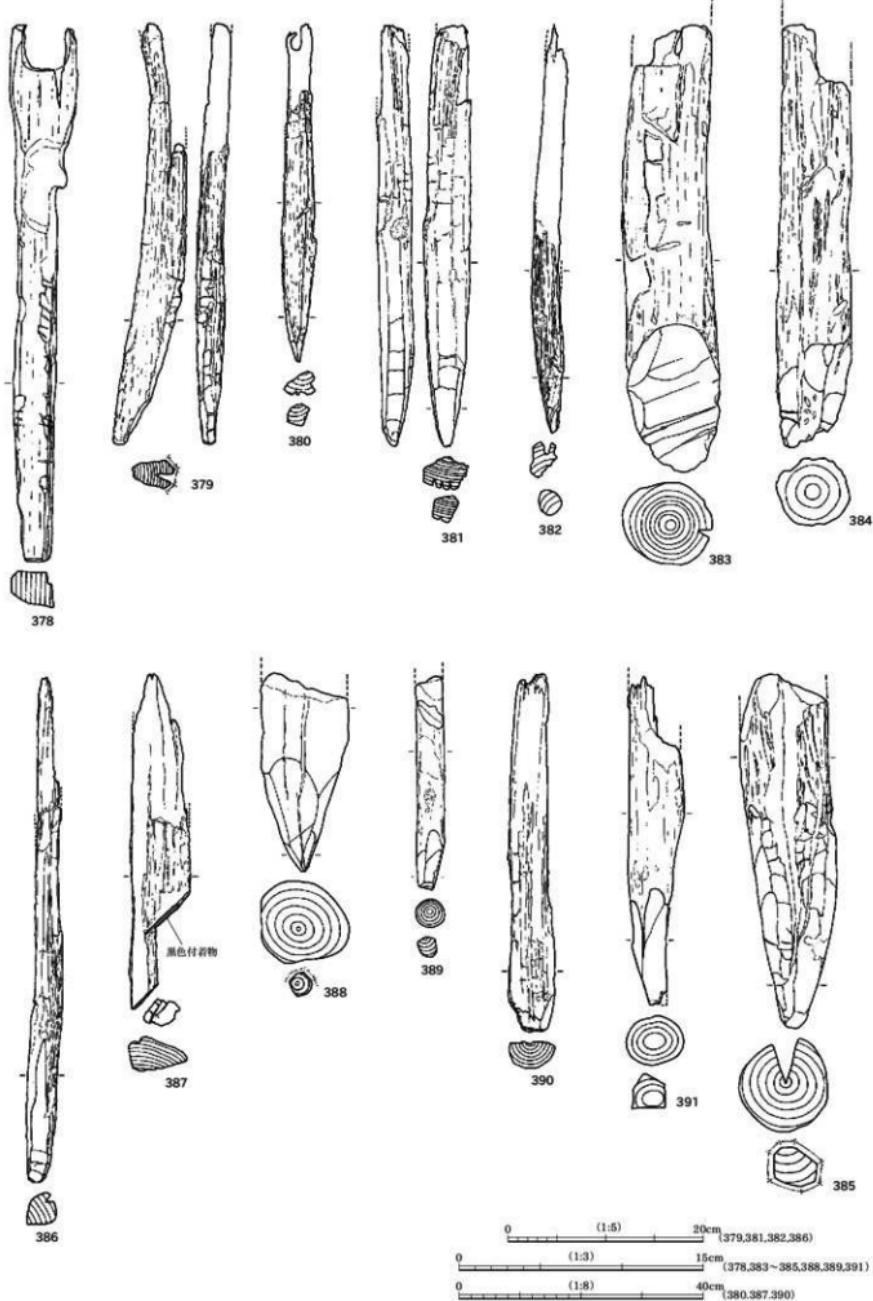


0 (1:3) 15cm



0 (1:5) 20cm (349~351) 0 (1:3) 15cm (その他)







遺跡周辺の景観（南から）



遺跡周辺の景観2（遺跡から北東方向をのぞむ）



遺跡全景 1（北から）



遺跡全景 2（東上空から）



遺跡全景3（北東から）



4号竪穴建物（東から）



6号窓穴建物 出土土器（南から）



8号窓穴建物 出土土器（西から）



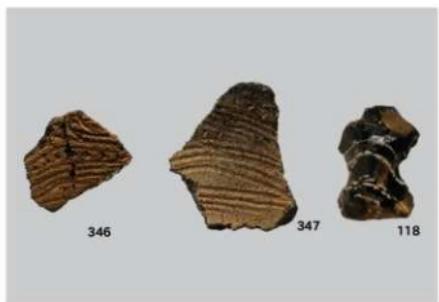
11号・14号窓穴付近調査前現況（西から）



基本層序（南東から）



管玉製作工程品・ヒサイ勾玉



続縄文類似土器・石器



6号窓穴土器（167）内原石



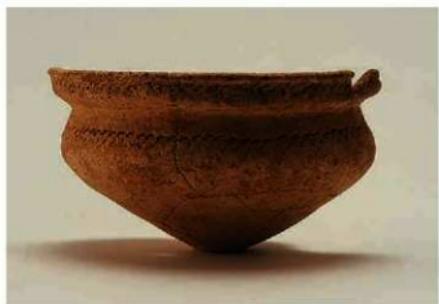
竪穴出土鉄製品



スタンプ文（器台：土器 220）



スタンプ文（器台：土器 221）



刺突文（鉢：313）



10号竪穴出土炭化米



1号竪穴建物（東から）



2号竪穴建物（東から）



3号竪穴建物（東から）



4号竪穴建物（南から）



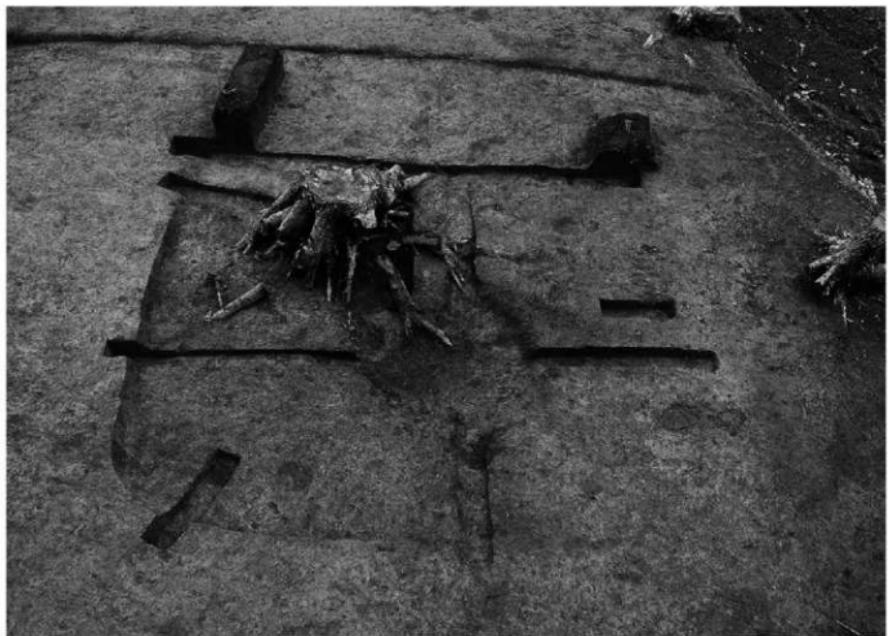
5号竪穴建物（南から）



6号竪穴建物（南から）



7号竪穴建物（東から）



8号竪穴建物（西から）



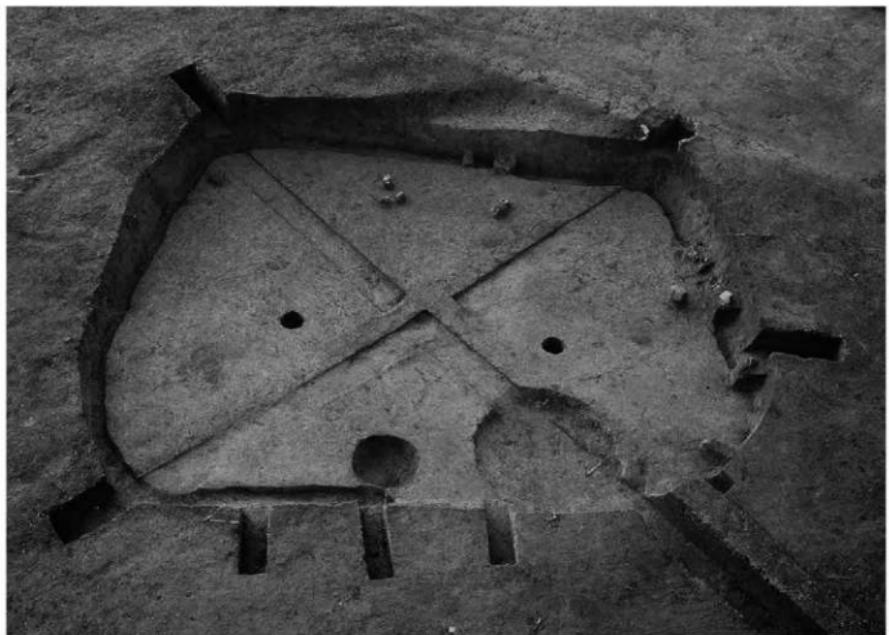
9号竪穴建物（南から）



10号竪穴建物（南から）



11号竪穴建物（北から）



12号竪穴建物（南から）



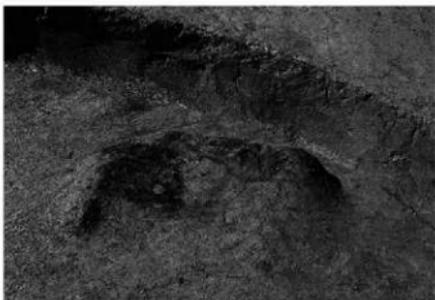
13号竪穴建物（北から）



14号竪穴建物（東から）



1号竪穴 土層断面（南から）



1号竪穴 D区 炭化材出土状況（東から）



2号竪穴 土層断面（東から）



2号竪穴 西側土層断面、遺物出土状況（南から）



2号竪穴 東側土層断面（南から）



2号竪穴 炉 断面（東から）



3号竪穴 土層断面（東から）



3号竪穴 Pit15 断面（東から）



3号竪穴 烧土1 断面（東から）



3号竪穴 烧土2・3 断面（東から）



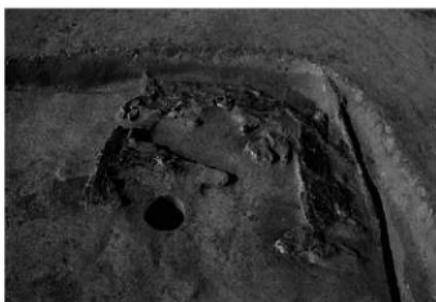
3号竪穴 烧土4・5 断面（東から）



3号竪穴 炉 断面（東から）



4号竪穴 土層断面（東から）



4号竪穴 D区 淡化材出土状況（東から）



4号竪穴 炉 断面（北から）



4号竪穴 Pit5 断面（東から）



5号竪穴 土層断面（南から）



5号竪穴 Pit3 土層断面（南から）



5号竪穴 Pit4 土層断面（東から）



6号竪穴 遺物出土状況（南から）



6号竪穴 土層断面（東から）



6号竪穴 炉 断面（南から）



6号竪穴 Pit3 断面（南から）



7号竪穴 断面（東から）



7号竪穴 新面、遺物出土状況（東から）



7号竪穴 炉 断面（南から）



8号竪穴 遺物出土状況（器台）（南から）



8号竪穴（4D18） 遺物出土状況（東から）



9号竪穴 土層断面



9号竪穴 Pit3 断面



9号竪穴 烧土2 断面



10号竪穴 断面（東から）



10号竪穴 完掘状況（東から）



10号竪穴 焼土 1（西から）



11号竪穴 土層断面（南から）



11号竪穴（南東：B区） 遺物出土状況（北西から）



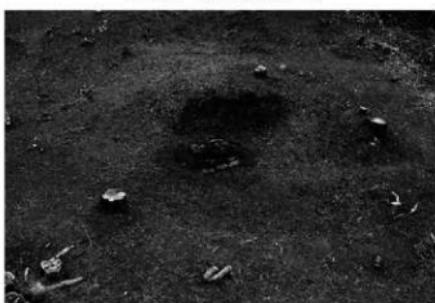
11号竪穴 焼土 1・2 断面（南から）



12号竪穴 土層断面（南東から）



12号竪穴 Pit3 断面（南西から）



13号竪穴上の火葬場跡（西から）



13号竪穴周辺の状況（西から）（手前13号、中11号）



13号竪穴 土層断面（南東から）



13号竪穴 烧土2・3 断面（南から）



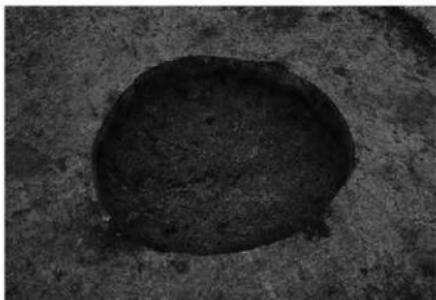
14号竪穴 土層断面（東から）



竪穴群（東から）



SK1 断面（南から）



SK1 完掘（南から）



SK2 断面（南から）



SK2 完掘（東から）



SK3 土層断面（南から）



SK3 完掘（南から）



SK4 断面（南から）



SK4 完掘（南から）



SX5 断面（南から）



SK6 完掘（南から）



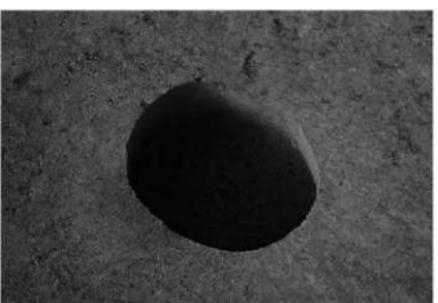
SK7 完掘（南から）



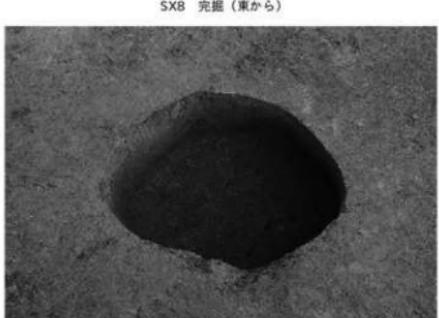
SX8 断面（東から）



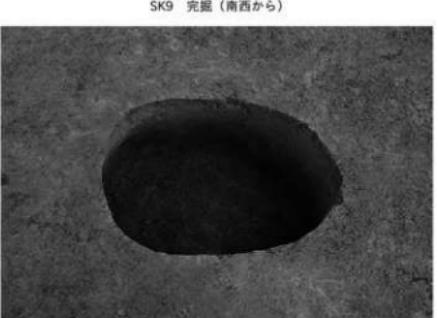
SX8 完掘（東から）



SK9 完掘（南西から）



SK10 完掘（南西から）



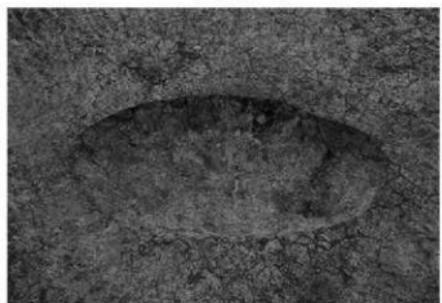
SK11 完掘（南西から）



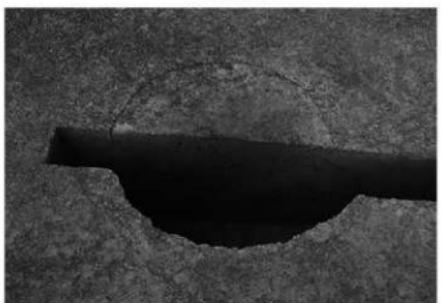
SK12 完掘（南から）



SX13 断面（南から）



SK17 完掘（南から）



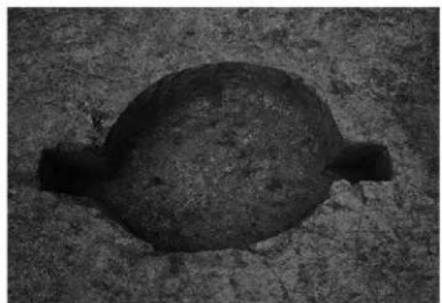
SK18 断面（南から）



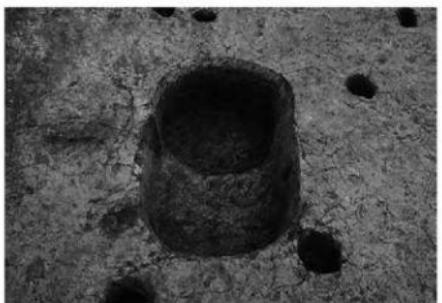
SK18 完掘（南から）



SK19 完掘（東から）



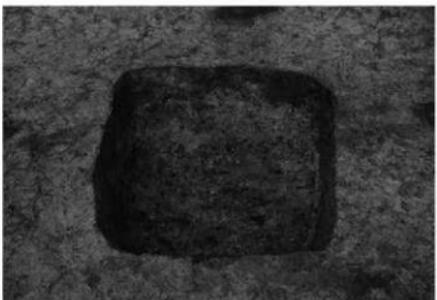
SK20 完掘（南から）



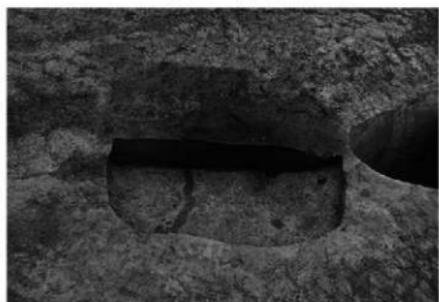
SK22 完掘（北西）



CSK(炭窯) 1 断面(南から)



CSK(炭窯) 1 完掘(南から)



CSK(炭窯) 2 断面(南東から)



CSK(炭窯) 2 完掘(南東から)



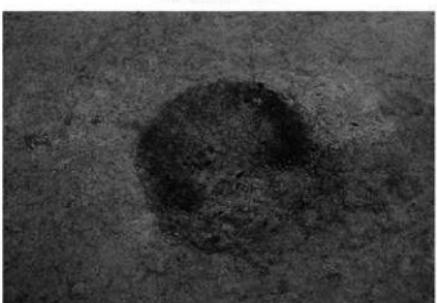
CSK(炭窯) 3 断面(南西から)



CSK(炭窯) 4 断面



CSK(炭窯) 5 断面(南から)



CSK(炭窯) 6 完掘(南から)



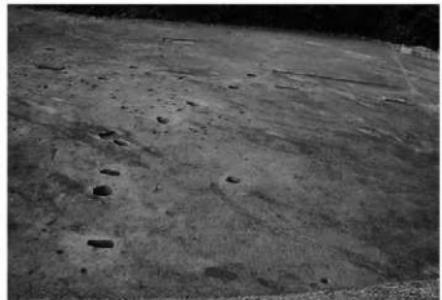
CSK(炭窯)7 断面(南から)



CSK(炭窯)8 完掘(南から)



縄文陥穴状土坑列(1)(北から)



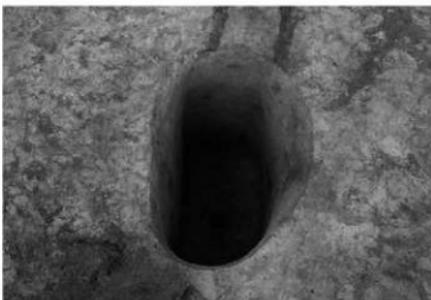
▲ 縄文陥穴状土坑列(2)(東から)



JSK(陥穴土坑)1 完掘(南から)



JSK (陰穴土坑) 2 完掘 (南から)



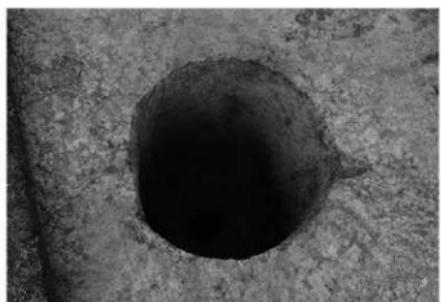
JSK (陰穴土坑) 3 完掘 (南から)



JSK (陰穴土坑) 4 完掘 (南から)



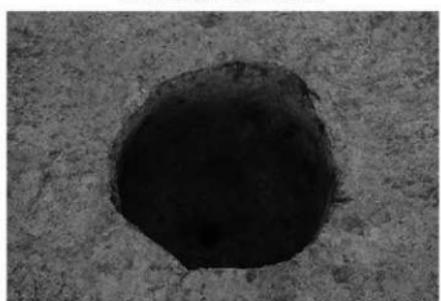
JSK (陰穴土坑) 5 完掘 (南から)



JSK (陰穴土坑) 6 完掘 (南から)



JSK (陰穴土坑) 7 完掘 (南から)



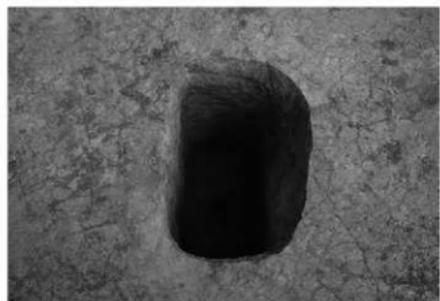
JSK (陰穴土坑) 7 完掘 (南から)



JSK (陰穴土坑) 8 完掘 (南から)



JSK（陰穴土坑）9 完掘（南から）



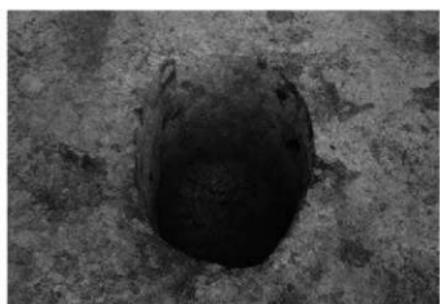
JSK（陰穴土坑）10 完掘（南から）



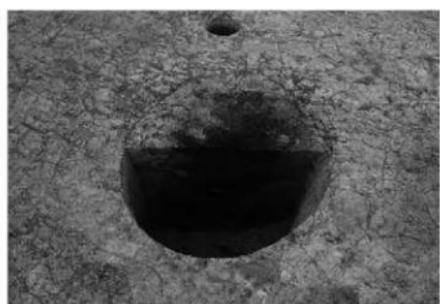
JSK（陰穴土坑）11 完掘（南から）



JSK（縄文土坑）12 完掘（南から）



JSK（縄文土坑）13 完掘（南から）



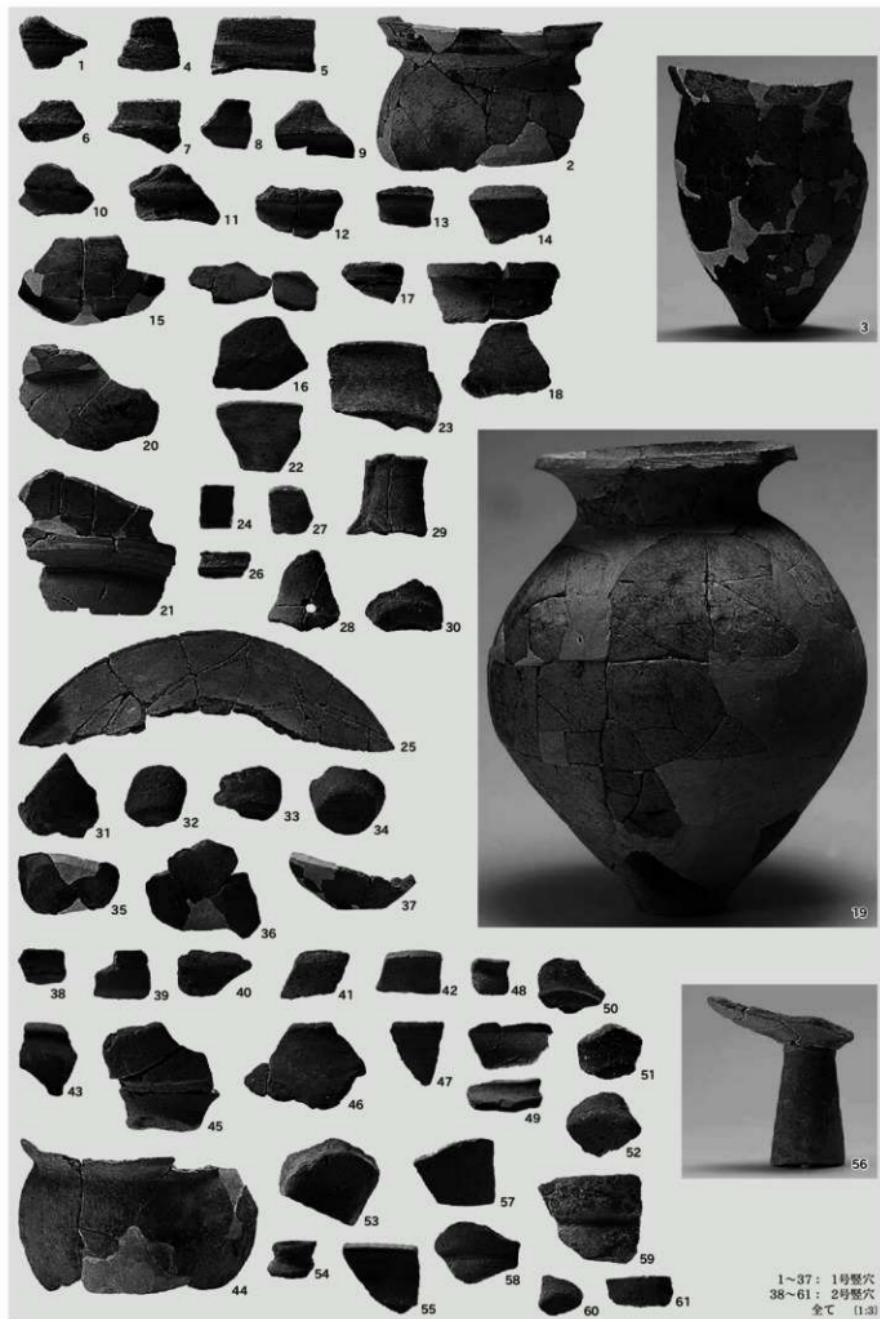
JSK（縄文土坑）14 断面（南から）

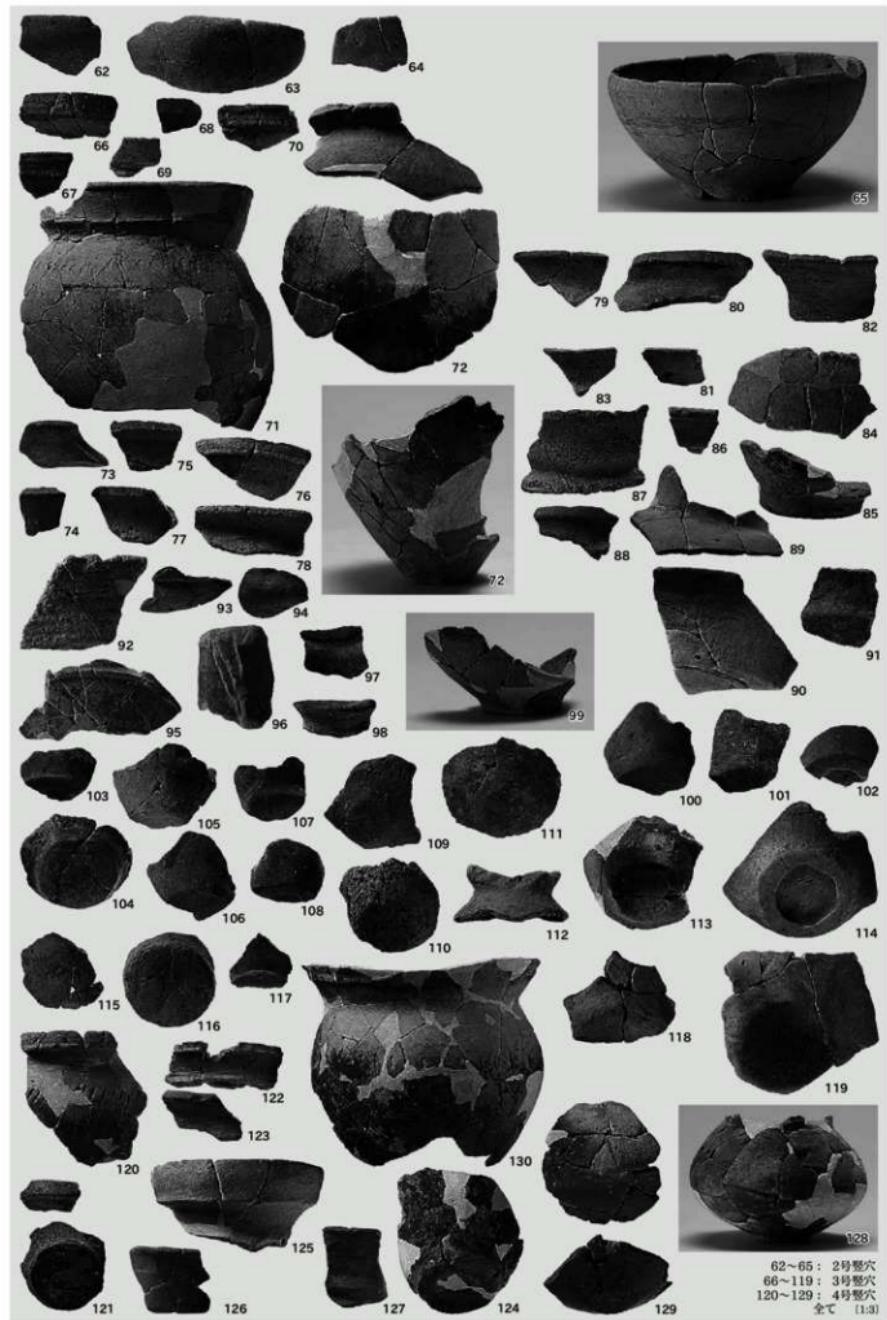


JSK（縄文土坑）15 断面（南から）

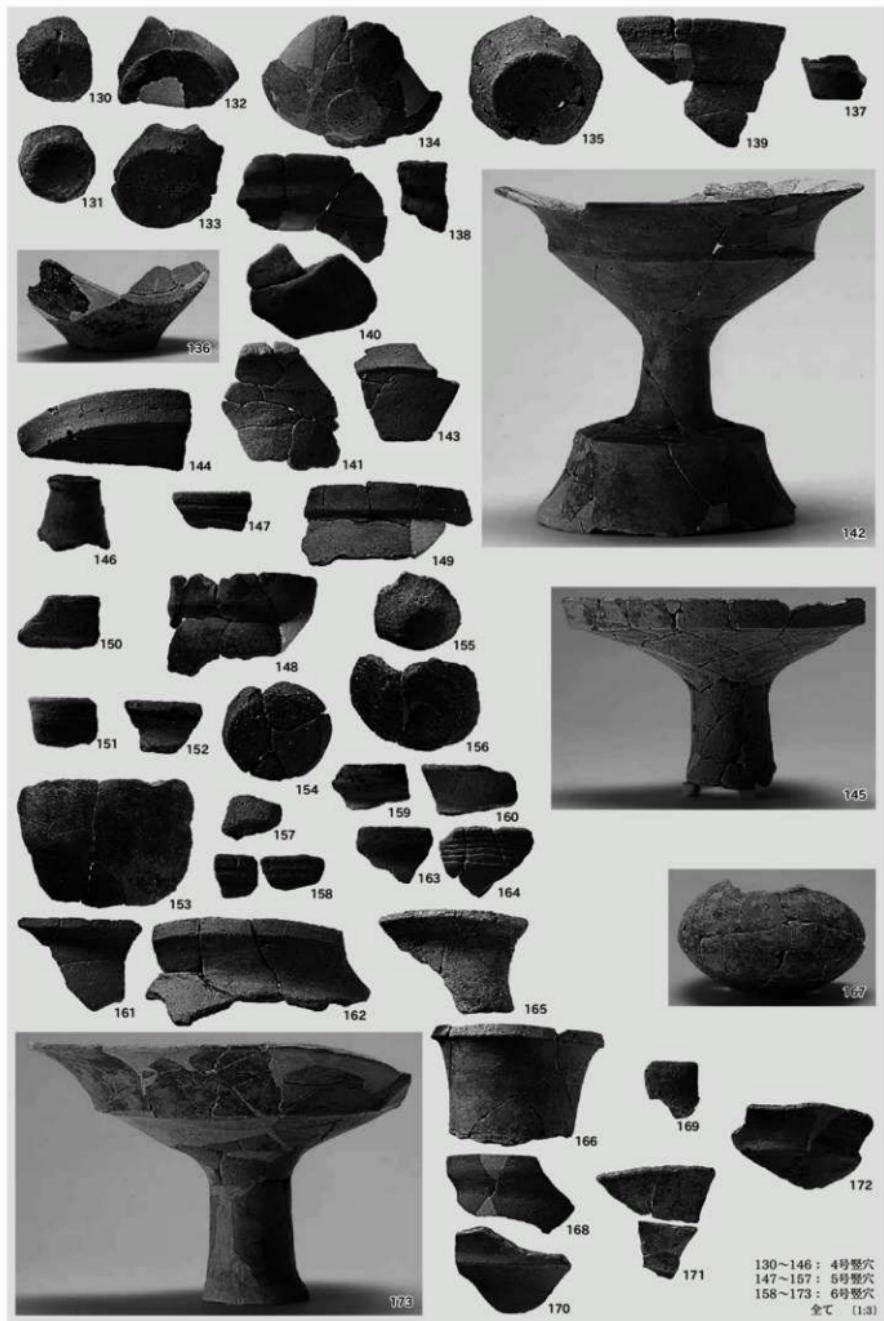


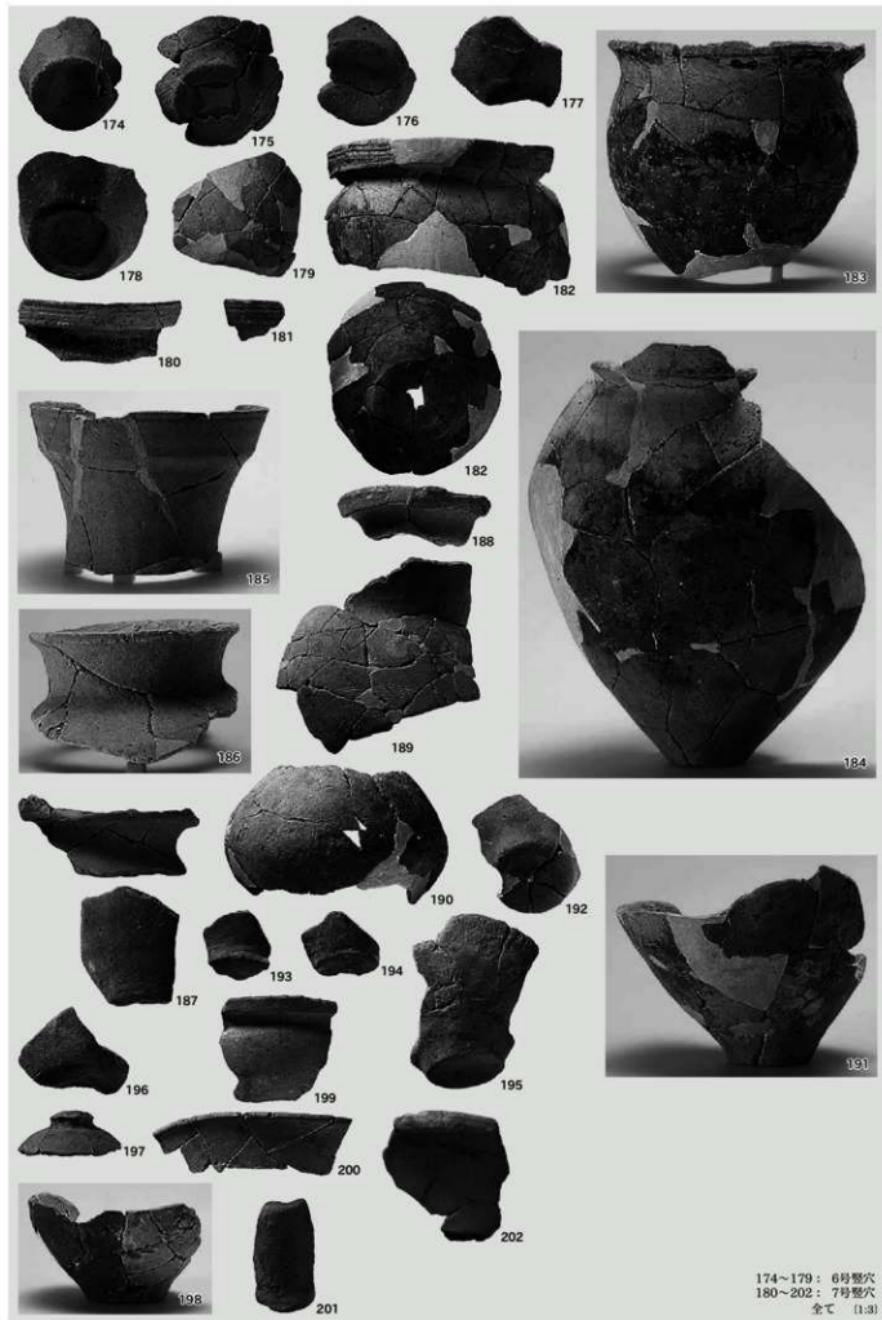
JSK（縄文土坑）16 断面（南から）





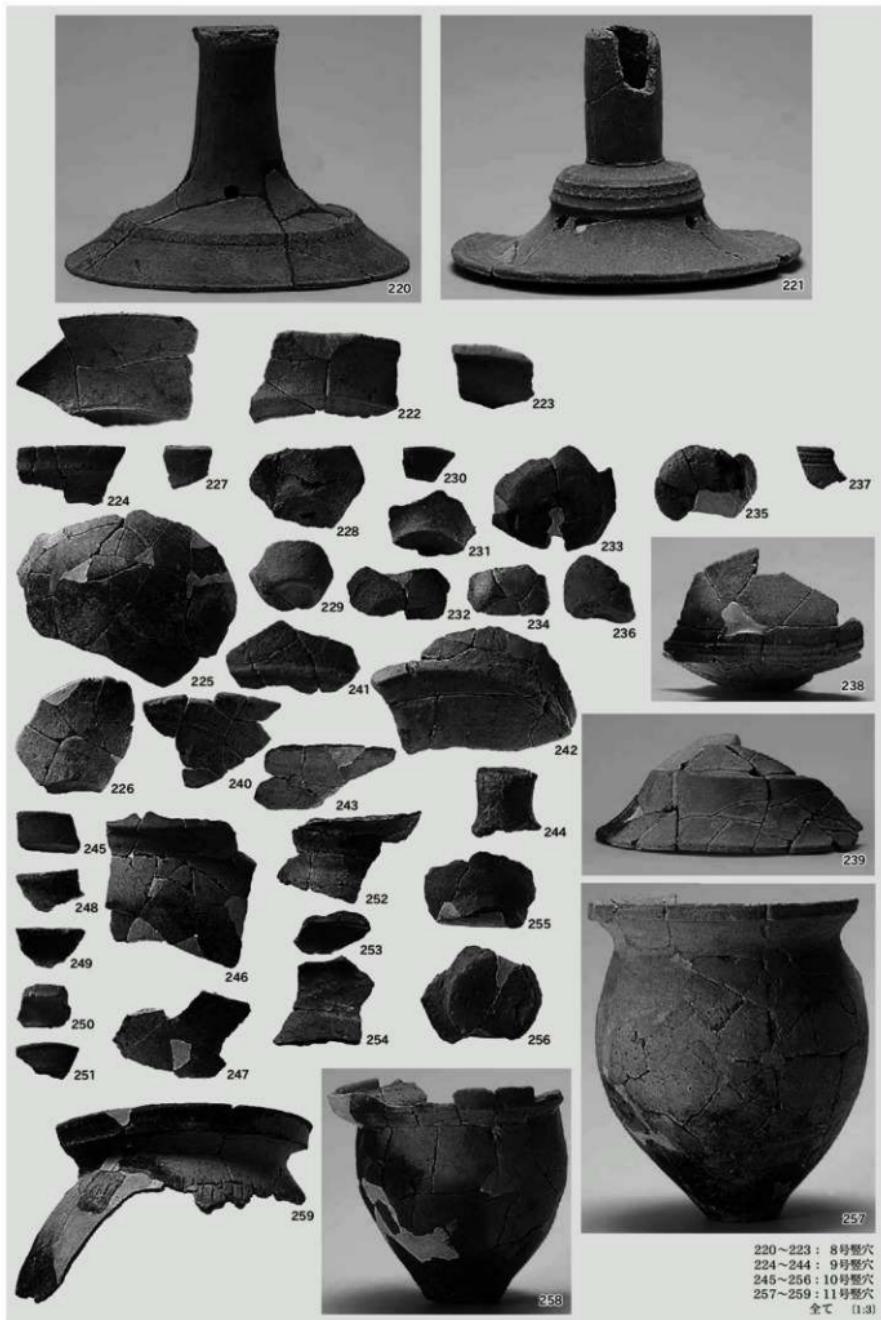
62~65：2号竪穴  
66~119：3号竪穴  
120~129：4号竪穴  
全て [1:3]





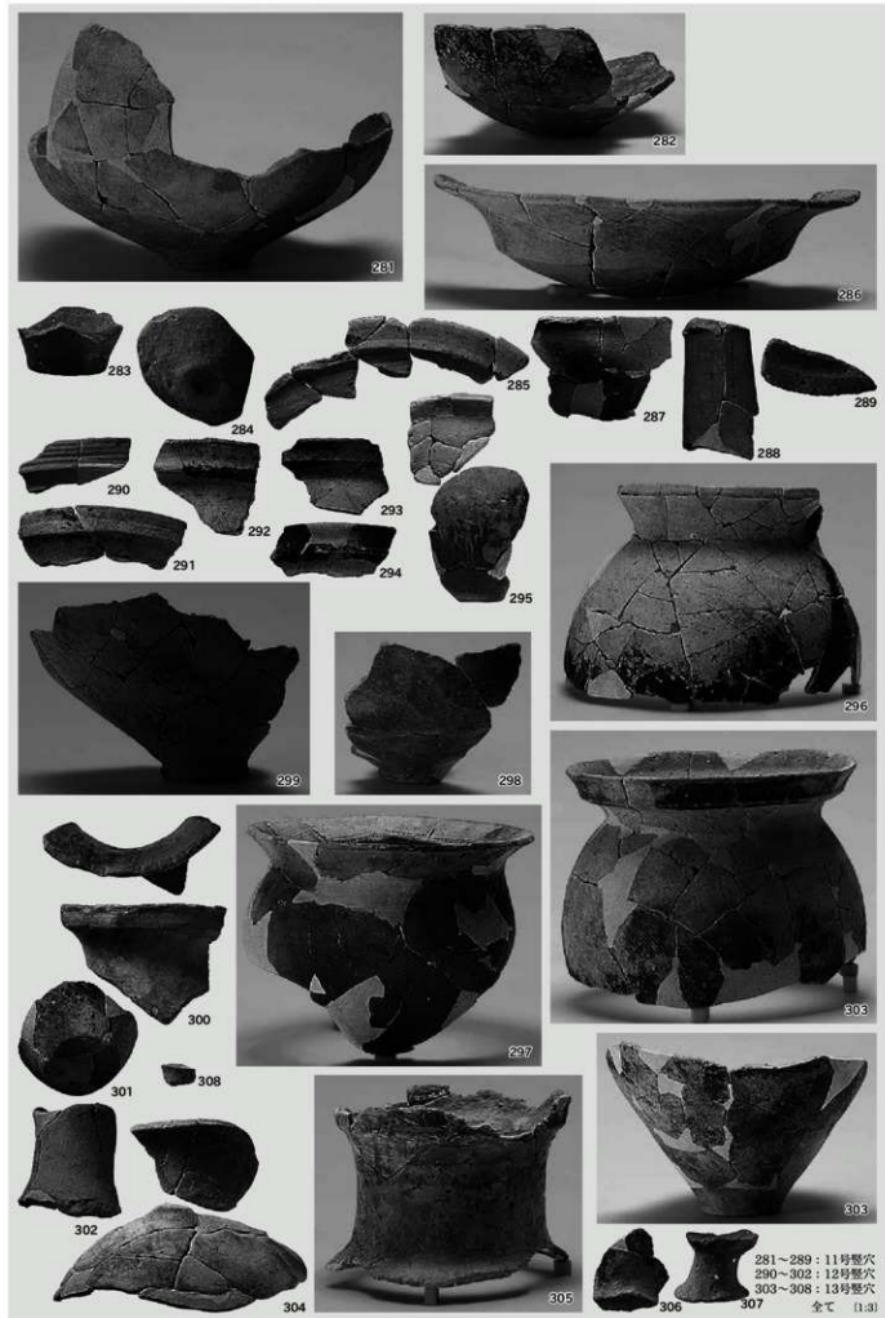
174~179: 6号整穴  
180~202: 7号整穴  
全て 1:3

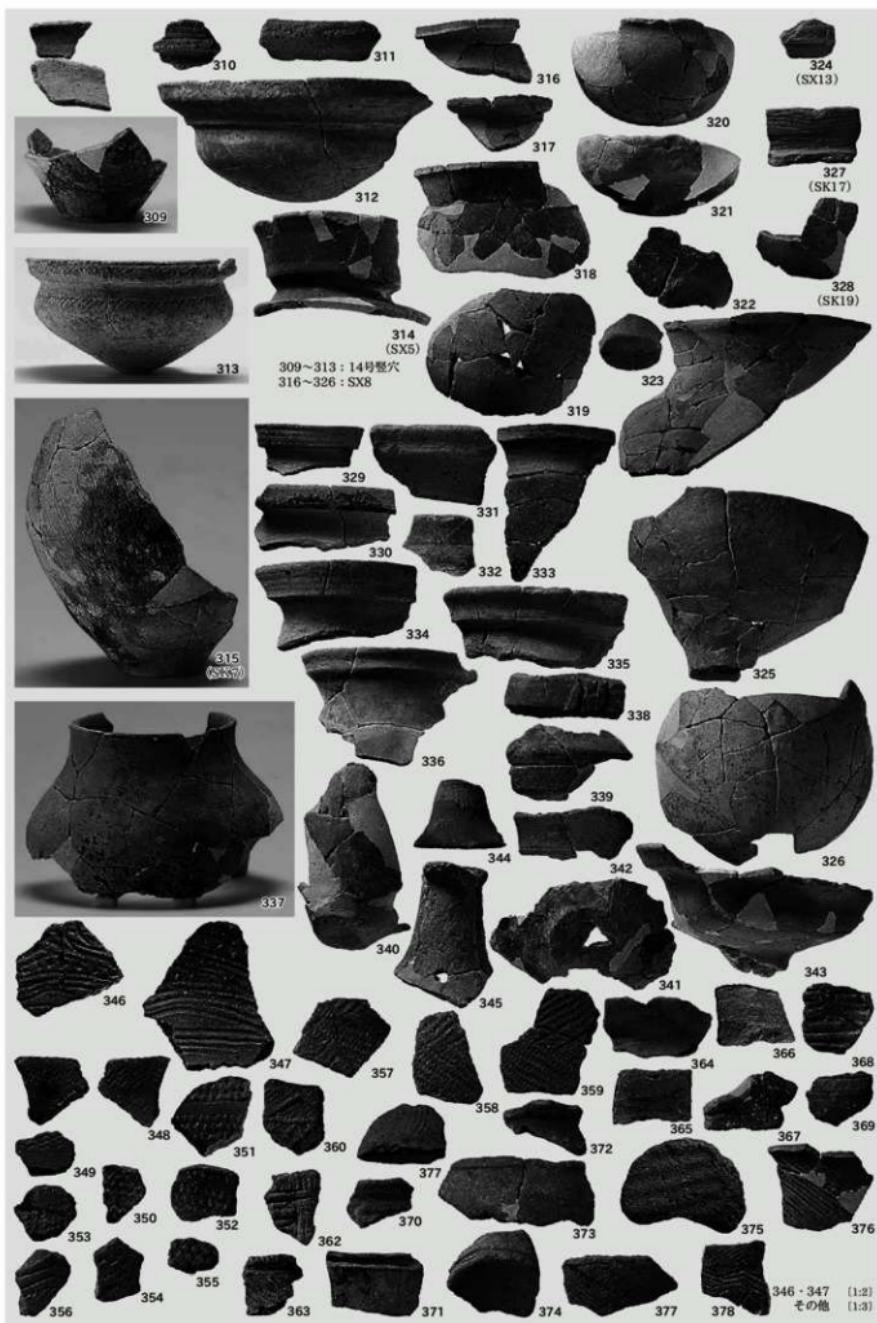


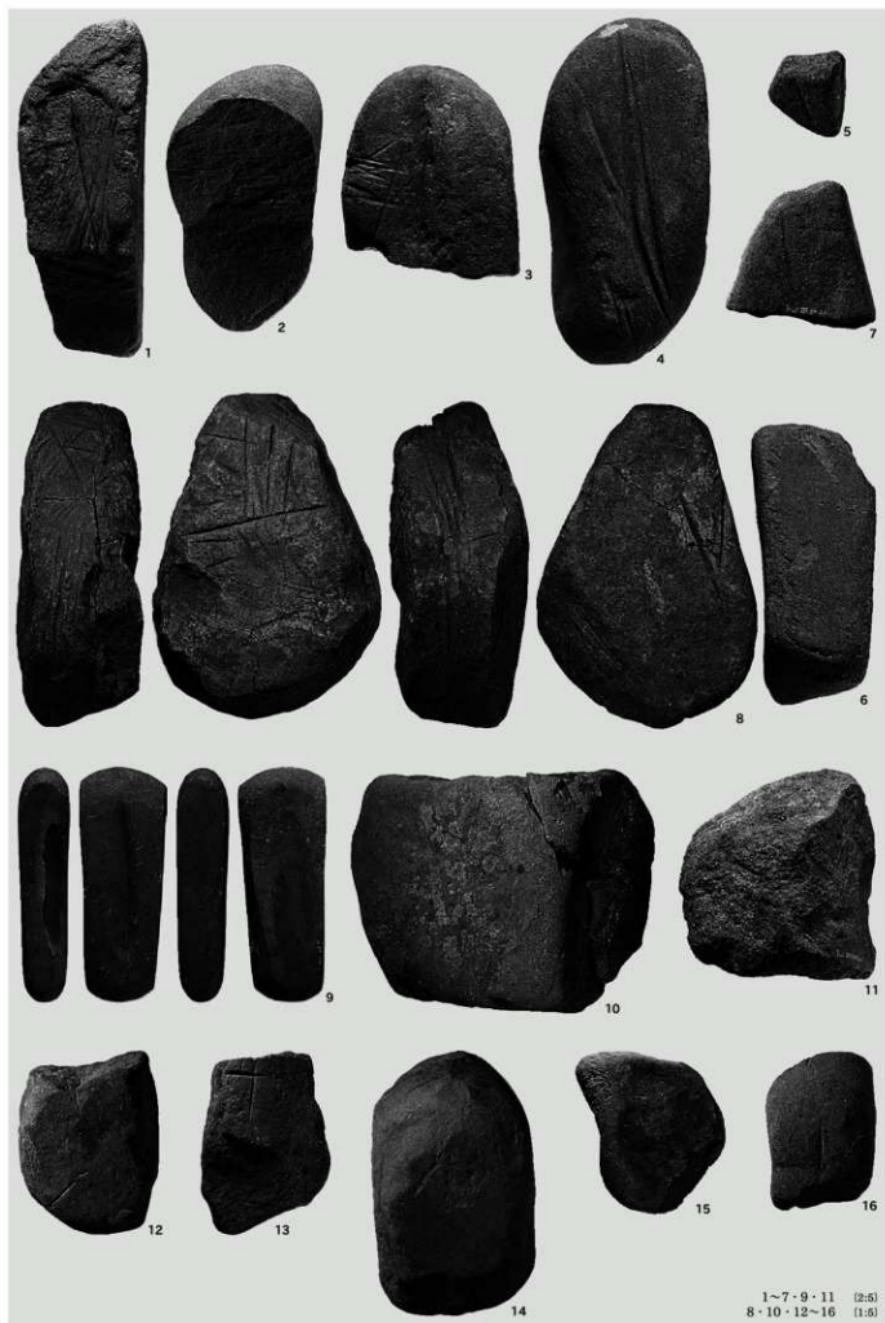


220～223：8号整穴  
224～244：9号整穴  
245～256：10号整穴  
257～259：11号整穴  
全て (1:3)

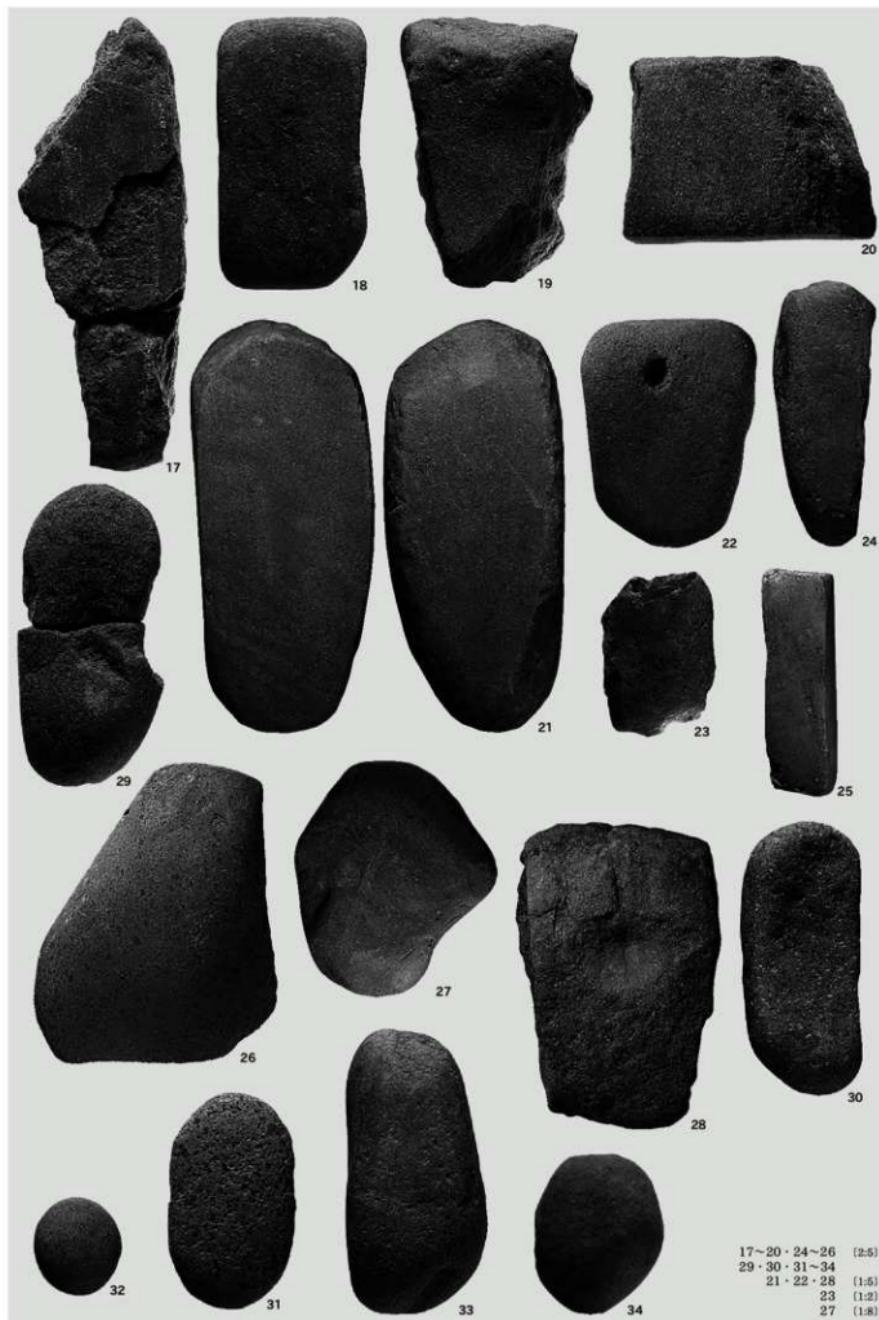


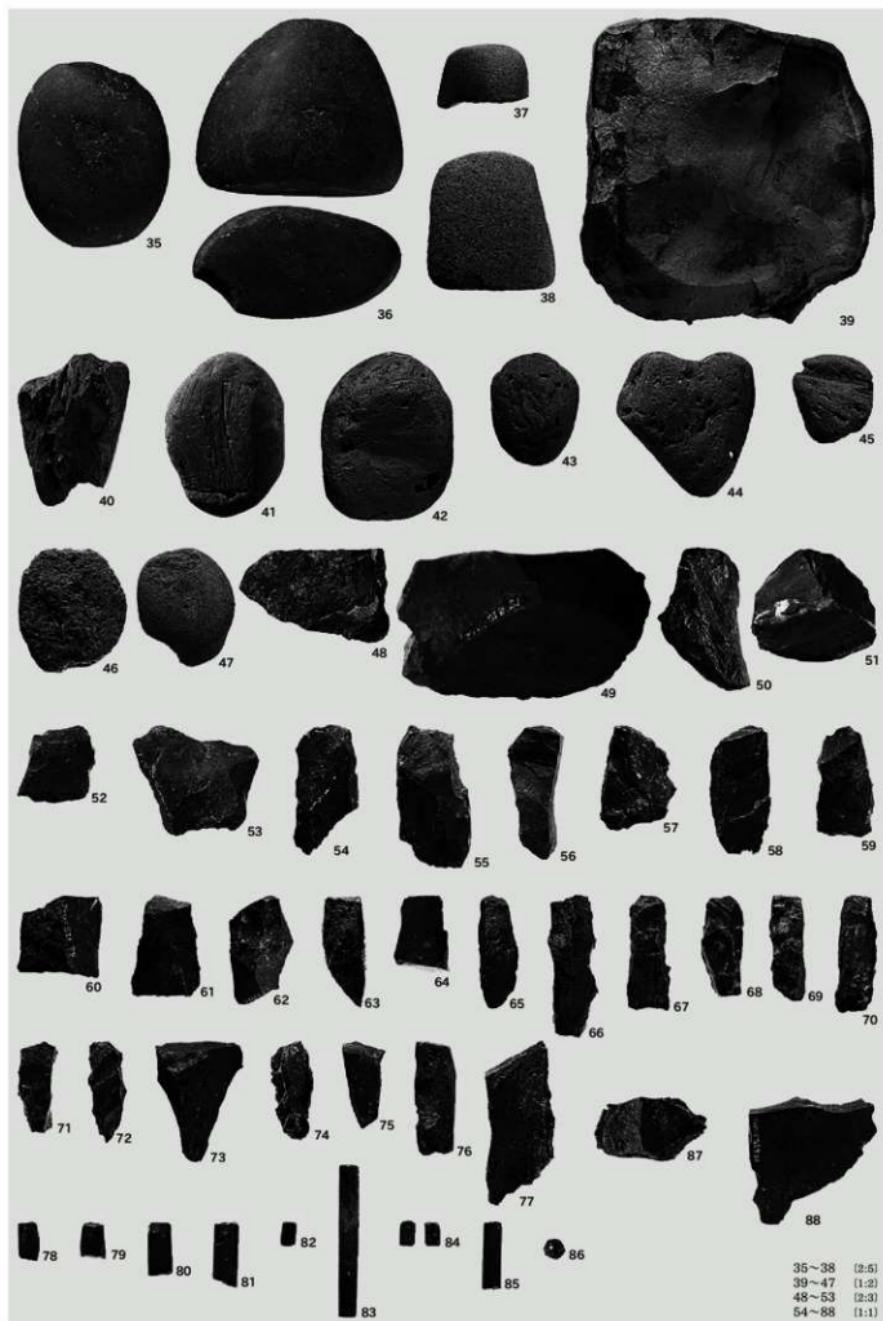




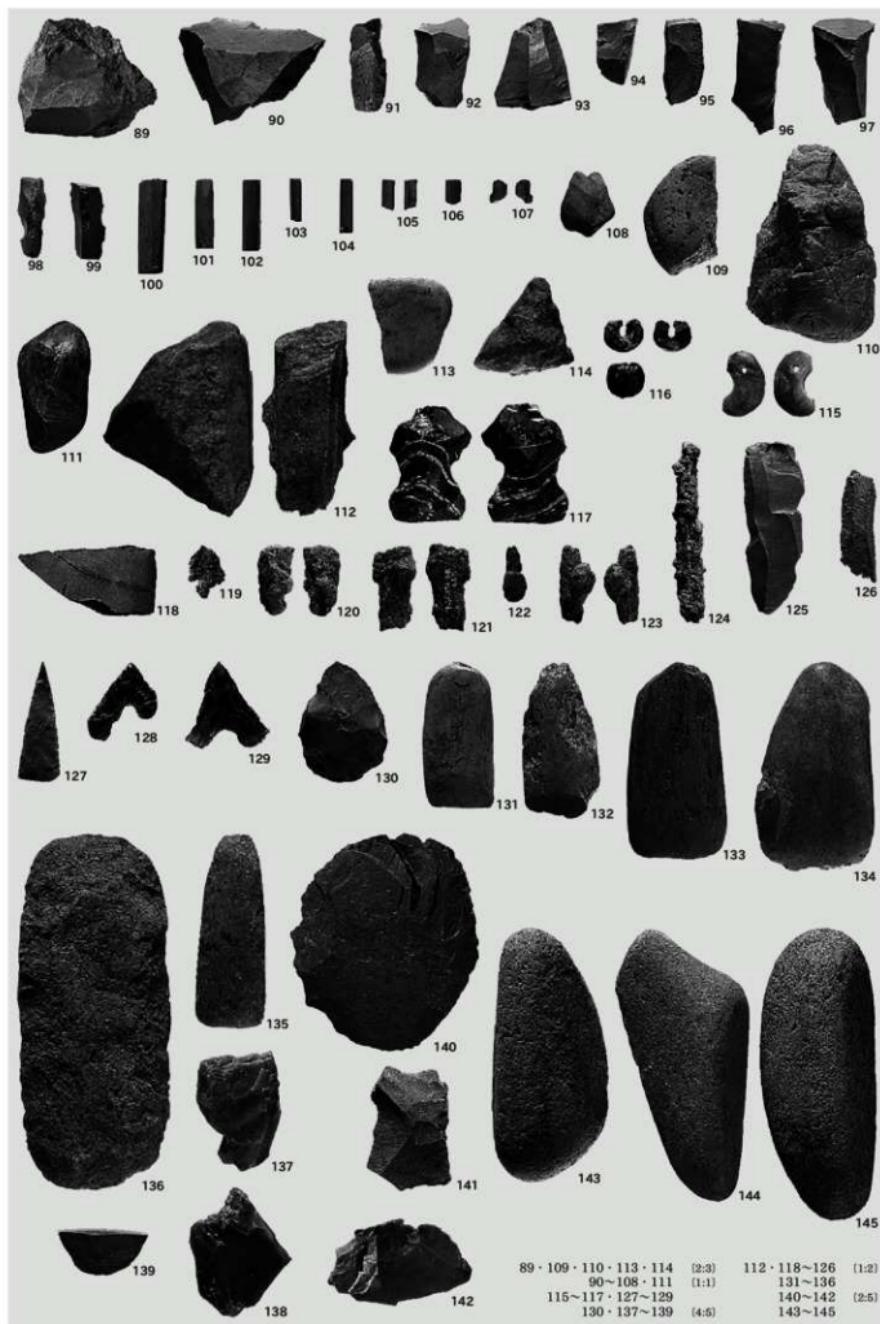


1~7・9・11 (2:5)  
8・10・12~16 (1:6)

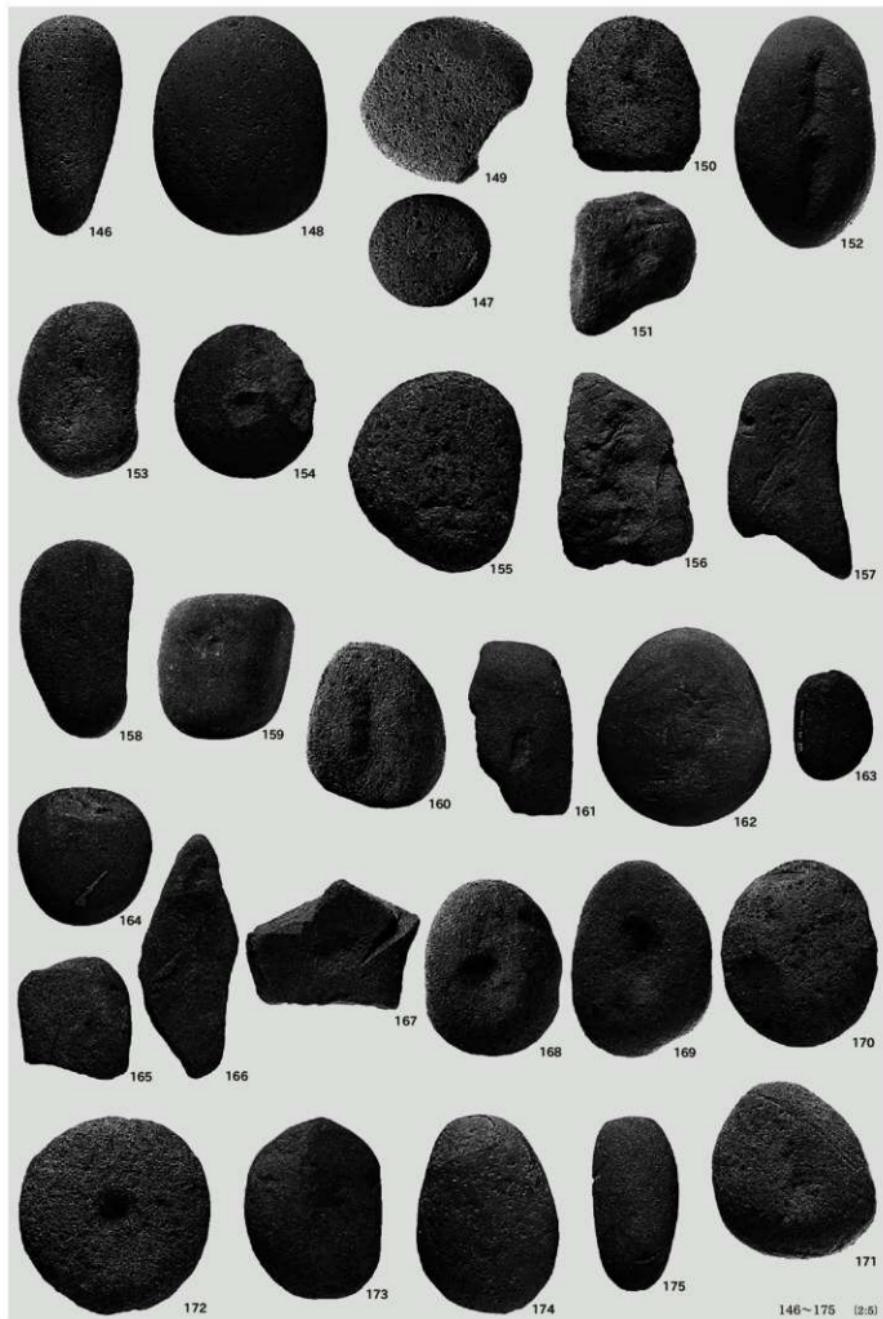




35~38 [2:6]  
39~47 [1:2]  
48~53 [2:3]  
54~88 [1:1]



89・109・110・113・114 [2:3] 112・118~126 [1:2]  
 90~108・111 [1:1] 131~136  
 115~117・127~129 140~142 [2:5]  
 130・137~139 [4:6] 143~145





L'~N'付近 完掘（西から）



D'~F'付近 完掘（西から）



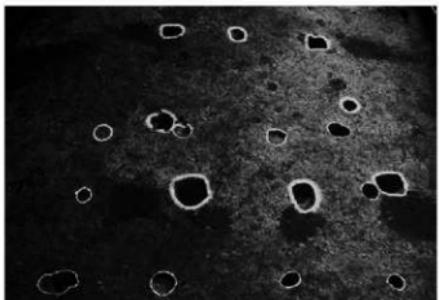
G'~I'付近 完掘（西から）



140'付近 基本層序



SB20 完掘（東から）



SB21・22 完掘（東から）



SB26 検出状況（東から）



SB26 Pit5 セクション（東から）



SK39 確出土状況（東から）



SK28 断面（東から）



SK24 断面（東から）



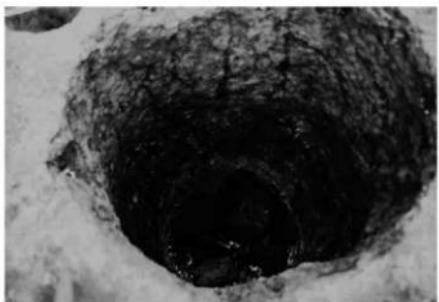
SK30 断面（東から）



SD27 完掘 (南から)



SK36 断面 (南から)



SE37 完掘 (東から)



SK23 断面 (南から)



SD38 断面 (北から)



SX10 断面 (西から)



SK1 断面 (南から)



SK1 完掘 (南東から)



SK3 断面（南から）



SK3 断面（西から）



SK3 完掘（北から）



SK7 掘出状況（北から）



SK7 完掘（南から）



SD4 遺物出土状況（西から）



SD4 遺物出土状況（東から）



SK14 断面（南から）



杭2・3 断面（東から）



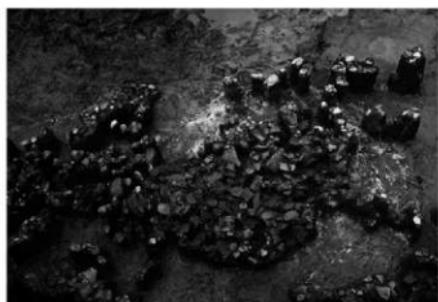
杭26 断面（東から）



150' 遺物出土状況（東から）



150'-17 遺物出土状況（南から）



150'-20 遺物出土状況（南から）



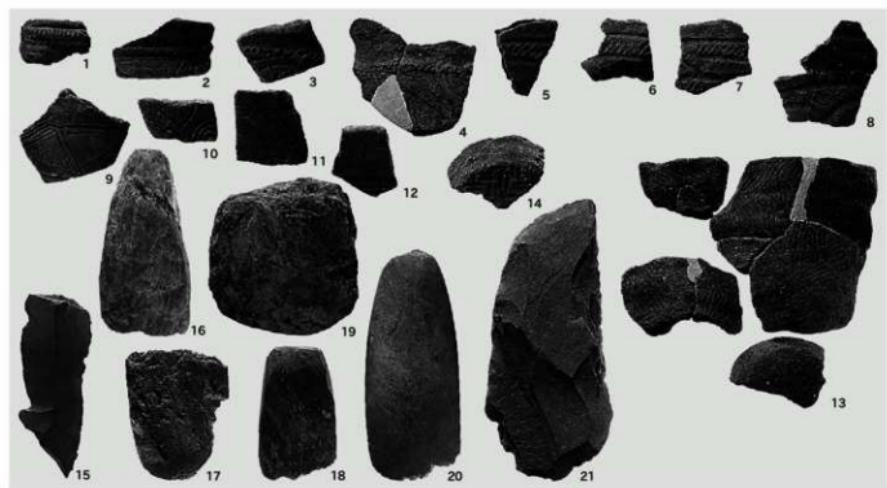
150'-25 遺物出土状況（南から）



15P' 遺物出土状況（南から）

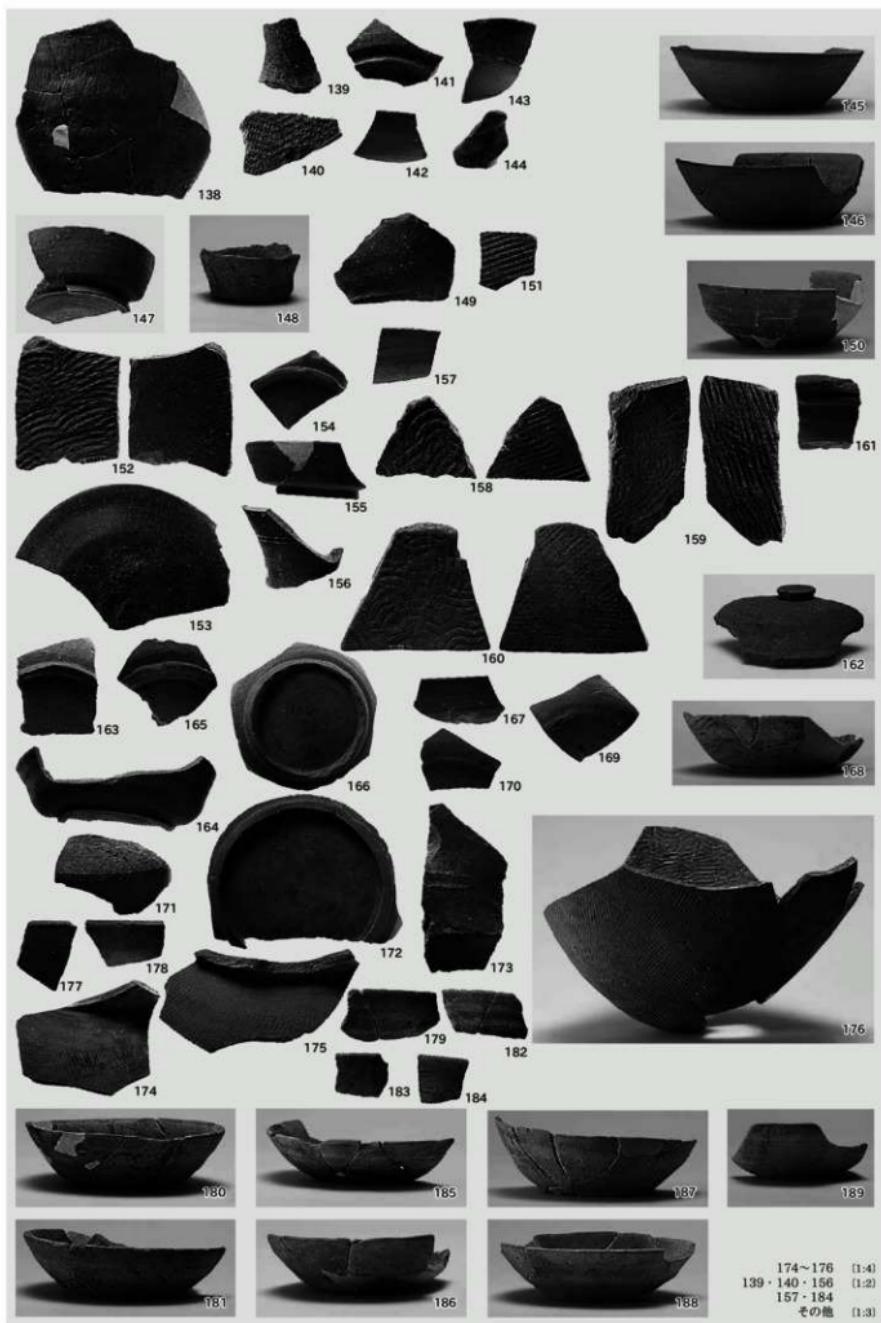


N'~P'付近 完掘（東から）

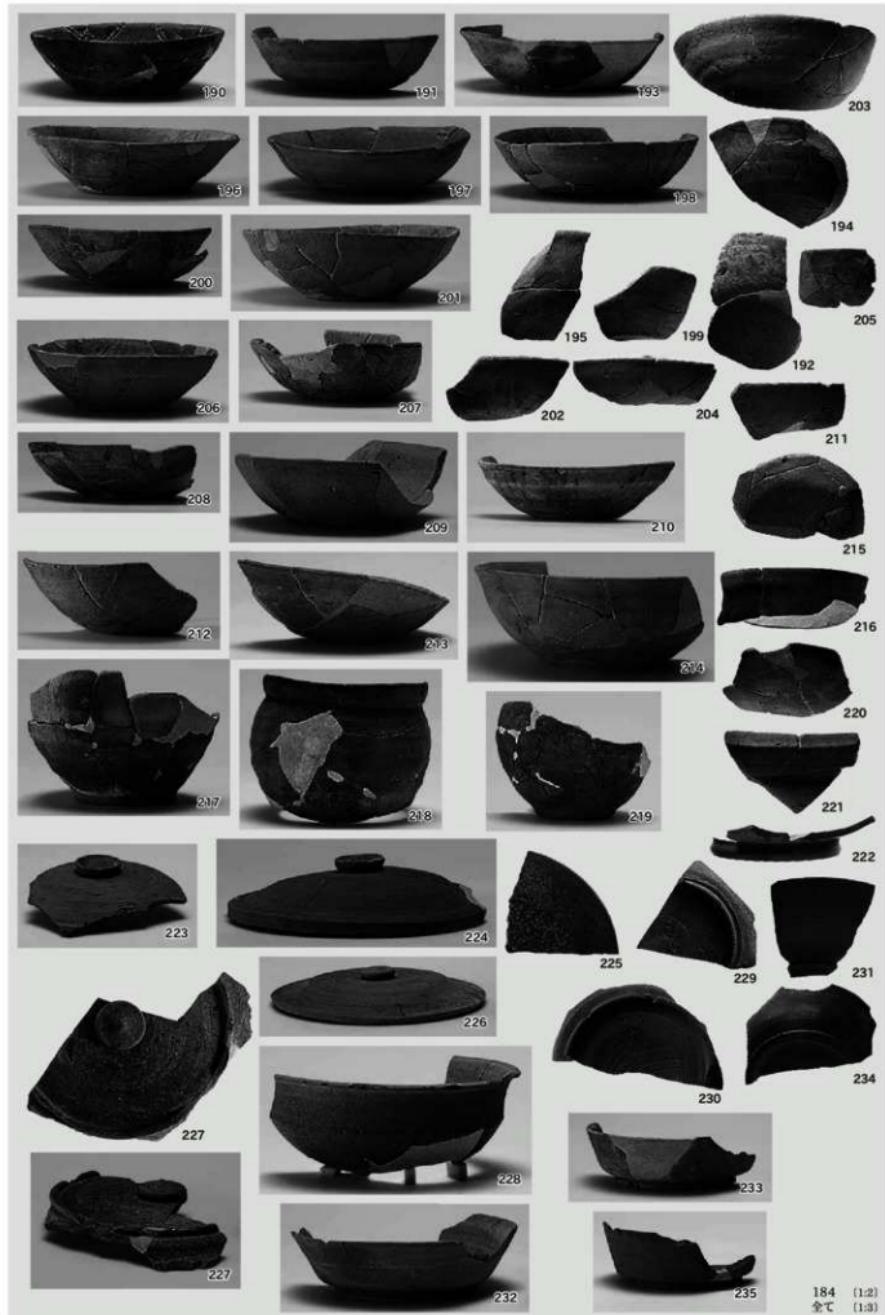


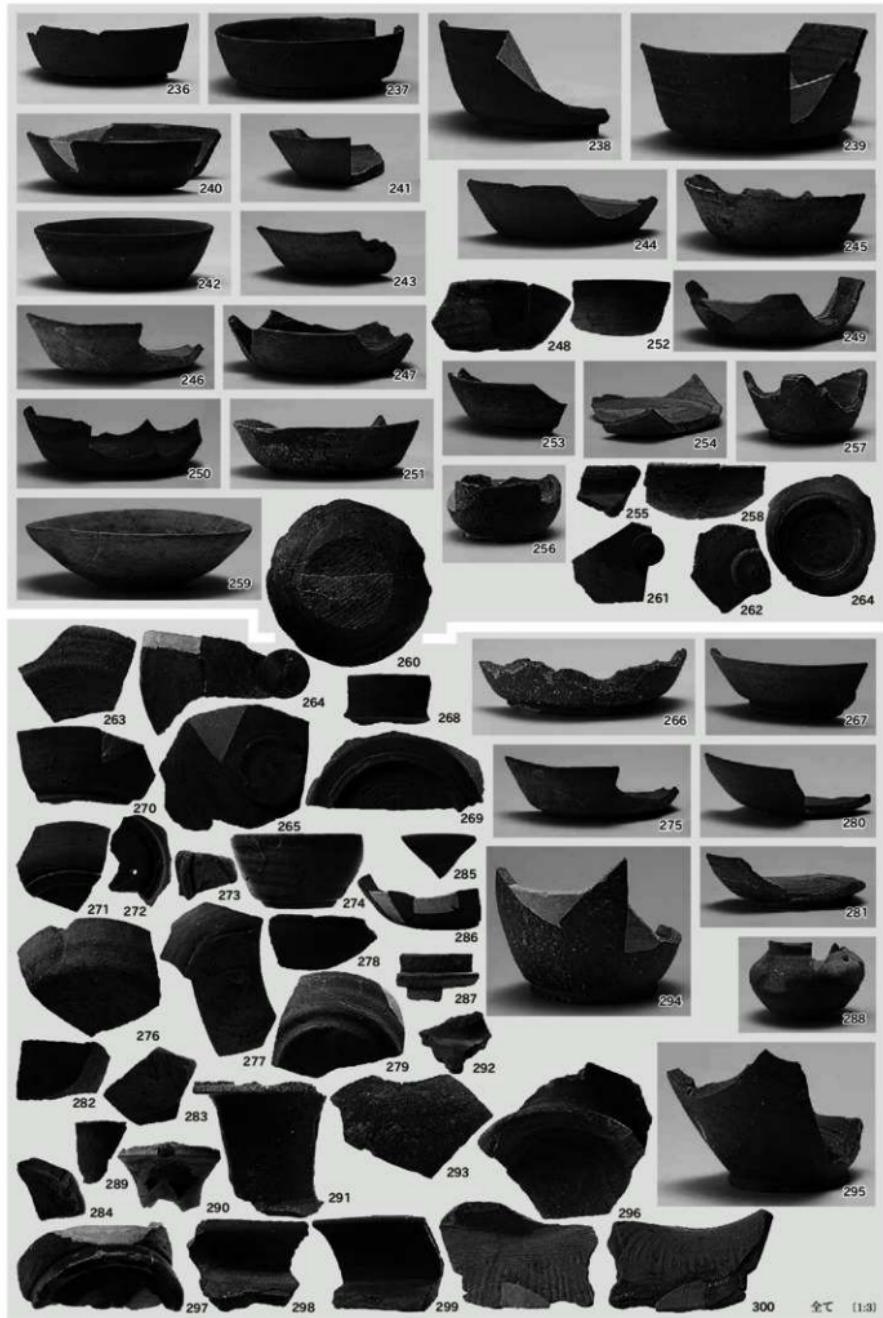
1~14・22~65 (1:3)  
15~21 (1:2)

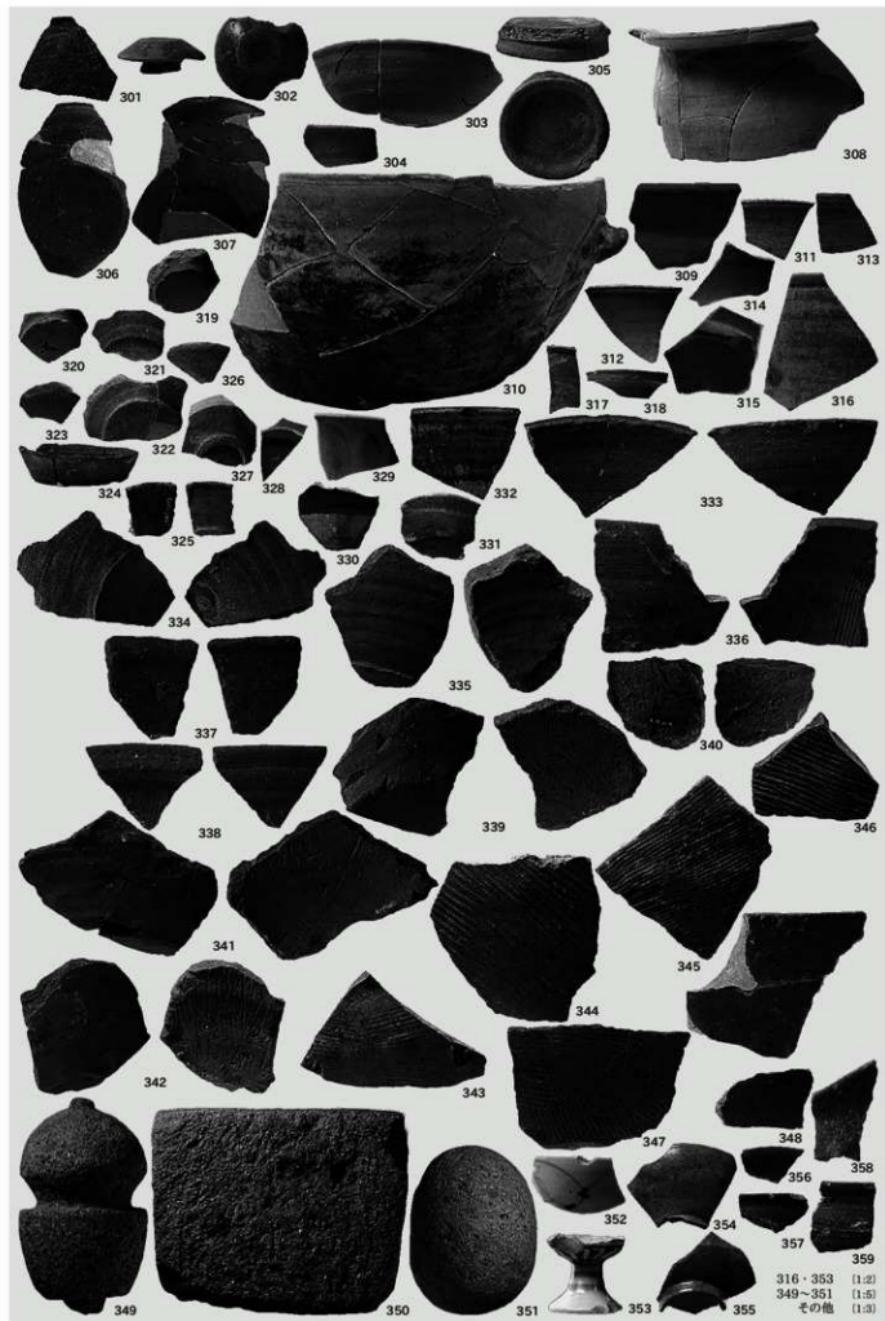




174~176 (1:4)  
139・140・156 (1:2)  
157・184  
その他 (1:3)









360~376・378・383~385・388・389・391 (1:3)  
 377・378・381・382・386 (1:5)  
 387・390 (1:8)



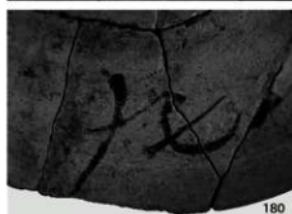
145



146



179



180



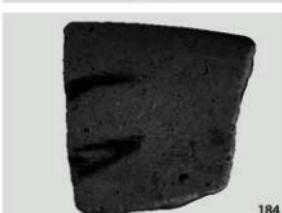
181



182



183



184



185



286



287



288



289



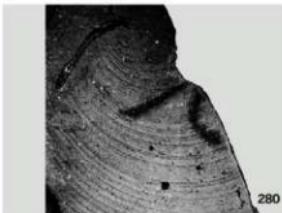
252



258



273



280



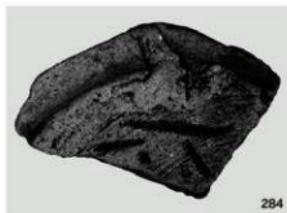
286



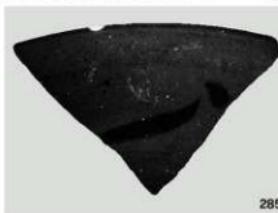
282



283



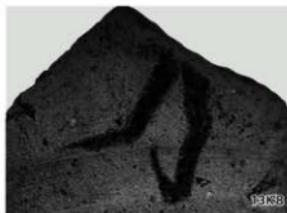
284



285



13H13



13K8

## 報告書抄録

ふりがな	しもばはいせき・ほそだいせき						
書名	下馬場遺跡・細田遺跡						
副書名	上信越自動車道関係発掘調査報告書XIX						
卷次							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第152集						
編著者名	尾崎高宏						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市大字金津93番地1 TEL 0250(25)3981						
発行年月日	西暦2005(平成17)年5月31日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
下馬場遺跡	新潟県上越市大字下馬場字浦山836番地ほか	152226 253	37度04分28秒	138度13分27秒	19961202 ~19961213 19970421 ~1114	16,300 m <sup>2</sup>	上信越自動車道建設工事
細田遺跡	新潟県上越市大字黒田字細田305番地1ほか	152226 254	37度04分49秒	138度13分28秒	19961224 ~1225 19970414 ~0826	2,670 m <sup>2</sup>	上信越自動車道建設工事
所取遺跡名	種別	時期	主な遺構		主な遺物		特記事項
下馬場遺跡	集落跡	弥生時代後期	竪穴建物14、土坑16、 ピット4。性格不明遺構3		弥生土器、石器(砥石・磨石類)、石製品(勾玉・丸玉)、 玉作闇造物、鐵製品		管玉製作 関連資料
	生産跡	古代・中世?	炭窯(伏焼窯)8				
	散布地	旧石器時代			石器		
細田遺跡	散布地	縄文時代 (早期・前期・中期・後期・晚期)	竪穴土坑15、土坑1		縄文土器、石器		
		縄文時代 (中・後・晚期)			縄文土器、石器		
	集落跡	弥生時代終末期～古墳時代前期			土器		土器の集中範囲2か所
		古墳時代後期	性格不明遺構1		須恵器、土師器、土製品		
	散布地	奈良～平安時代	掘立柱建物4、井戸1、 土坑・ピット17、溝5、 性格不明遺構2		須恵器、土師器、灰釉陶器、 綠釉陶器		
		中世 (12～15世紀)	土坑1		青磁・白磁・土師器・珠洲燒・五輪塔		
	江戸時代				肥前系陶磁器・越中瀬戸焼		
	時期不明				本製品(下駄・曲物底板・板状木製品・棒状木製品・杭)		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第152集  
上信越自動車道関係発掘調査報告書XIX  
下馬場遺跡・細田遺跡

平成17年4月29日印刷  
平成17年4月30日発行

編集・発行 新潟県教育委員会  
〒950-8570 新潟市新光町4番地1  
電話 025 (285) 5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒956-0845 新潟市大字金津93番地1  
電話 0250 (25) 3981  
FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 新高速印刷株式会社  
〒950-0963 新潟市南出来島2丁目1番25号  
電話 025 (285) 3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第152集「下馬場遺跡 細田遺跡」 正誤表追加

2023年6月追加

頁	位置	誤	正
図版107	写真中央下から2列目	遺物番号: 1 3 0	遺物番号: 1 2 4
図版129	写真右端上から5列目	遺物番号: 2 6 4	遺物番号: 2 5 7
図版129	写真左端上から4列目	遺物番号: 2 4 6	遺物番号: 2 7 5

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第152集「下馬場遺跡 細田遺跡」正誤表追加 2018年11月追加

頁	位置	製	正
抄錄	下馬場遺跡 北緯	37度04分28秒	37度04分32秒
抄錄	細田遺跡 東経	138度13分28秒	138度13分38秒

『新潟県埋蔵文化財調査報告書第152集 細田遺跡・下馬場遺跡』 正誤表  
H25.11.5追加

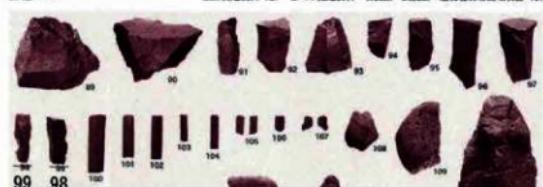


微觀文學研究

中華書局影印

卷二十一

• 亂世傳奇 (上) • 亂世傳奇 (中) • 亂世傳奇 (下) • 亂世傳奇 (全三冊) • 亂世傳奇 (全三冊) (平裝)



新潟県埋蔵文化財報告書第152集「下馬場遺跡・細田遺跡」正誤表

行	題	主	行	題	主	
62	当初は法皇天皇の御跡とされ ていたトトロ天皇跡から見記 式を含むことがわかった。	最初は法皇天皇の御跡とされ ていたトトロ天皇跡から見記 式を含むことがわかった。	63	17	御跡124	御跡124
63		70	1	御跡104~108	御跡57~70	
64		72	19	御跡109	御跡42	
65	8 第19回	第24回	73	10	御跡102	御跡58
66	29 (12)ページ…	(12)ページ…	73	19	御跡108~110	御跡68~88
67	10 御跡92~98	御跡98~98	74	19	御跡109	御跡70
68	31 御跡97	御跡98	75	1	御跡104~104	御跡1~76
69	御跡92~97~98~102	御跡98~98~98~93	76	8	御跡110~112	御跡11~73
70	12 御跡92~96, 181~193	御跡97~92, 62~84	79	9	御跡113~114	御跡74~75
71	18 御跡96~101	御跡97~98	80	17	御跡114~115	御跡75~76
72	26 御跡92~98	御跡98~98	81	4	御跡116~117	御跡77~78
73	34 御跡94~100~102	御跡93~91~93	82	10	御跡118~119	御跡79~80